
魔剣カタナとそのセカイ

石座木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣カタナとそのセカイ

【Nコード】

N7951T

【作者名】

石座木

【あらすじ】

魔剣と呼ばれた異質な男と、その周りの歪な世界。怠惰に過ごしたい彼と、それを許さないその周囲。最弱と最強、魔法と魔術、人と魔人、地上と魔界。綻びだらけのその世界で、人は彼に何を望むのか。

ブローグ・ゼロ セカイとかつて

かつて戦争があった。

人間が暮らす大陸の世界と、別次元に存在する魔人が暮らす魔界との戦争が。

事の発端は人が行った実験の失敗。

それによって今まで存在しなかった別次元という概念が生まれてしまったばかりか、人間にとって新たな脅威を生むことになった。

それが魔人。人より強靱な肉体と超常の事象を引き起こせる魔術を駆使し、大陸に侵攻した。

当時大陸は北のバステイト王国と南のガンドリス帝国で二分されていたが。魔人の侵攻により、西部の三分の一を奪われることになった。

元々長い間大陸の覇権をかけて争ってきたバステイト王国とガンドリス帝国は、初めの内こそ魔人の侵攻に対しても各々で対応するべきと思っていたが、魔人の侵攻が苛烈になるにつれて同盟を結ぶことになり。戦争は大陸の全人類対魔人の構図をはっきりと描き出した。

個人の能力は魔人側に軍配が上がったが、兵数は大陸側が百倍以上を持っていて決着は容易ではなく、それによる戦争の長期化は多くの血を流れさせる結果となった。

混乱を極めた大陸だったが、それは人の業か、果ては神の気まぐれなのか、一人の勇者を異界より呼び寄せる。

勇者は聖剣とともに人々の希望となり、疲弊し始めていた魔人側にとってまさに脅威となった。

そして勇者の名の元に行われた大陸側の最後の反攻は、見事魔人の王の討伐を成功させ。勇者自身はその身を犠牲にして、魔界やその他の別次元へと繋がる異界門を聖剣によって封印し、大陸全土を巻き込んだ未曾有の戦乱は終結した。

人々は取り戻した平和を喜び、亡き勇者の偉業を誰もが称えた。
そして魔人によって荒れた西部を開拓する内に新たな一つの国が
生まれる。

『ミルド共和国』

亡き勇者の名を冠するその国には王も帝もない。それは勇者に対
する信仰の表れでもあると同時に、疲れ果てた大地に必要なのは一
人一人の確固たる意志であつたから。

そして戦乱の世から五十年。

半世紀にも渡る平穏は何かの前触れであるかのように、少しずつ
世界を歪ませていた。

プロローグ

カトリ・デアトリスは大きな歓声の中心にいた。

特設された闘技場の舞台の上に静かに佇み、剣を携え、誰もが見惚れる凜とした表情ではやる気持ちを押さえつけて待つ。

その心根に余裕はなく、昨日までは緊張や高揚を与えてくれた声援も、今日は少しだけ煩わしく思う。

それだけ今日のこの時この一戦は意味がある。

数多の戦いを勝ち抜き、この場に立つただ一人の挑戦者となるために幾百の夢を打ち砕いてここまで来たのだから。

「我らが勇者にして、戦いと希望の神よ……」

その日何度目になるか分からない祈りの所作、心の内ではなく言葉にして祈るのはその方がより良く祈りが届くと信じられているから。

「……どうか、我が手に勝利を。その為に我は全てを捧ぐ」

それはある意味で儀式でもあった。文字通り、培った全てをこの一戦に捧げるための。

胸に手を当て、瞳を閉じ、数秒の後にまた目を開ける。

鳴り止まないと思われるような歓声が一時止まるのも同時だった。カトリの正面の門戸が開かれ、一人の男が舞台に向かって歩いてくる。

長身にその全身を覆う黒い外套、反対に髪は白に近い灰色で、肌の色も驚くほど病的に白い。顔立ちは整っているが、濁った灰色の瞳はどこか異質で、見る者を魅了するよりも忌避を感じさせる印象だ。

誰もがその見た目のインパクトに息を呑む中、カトリは別の理由で目を細めていた。

「どういうおつもりですか？」

男がゆったりとした歩調で舞台上がるのを待ってから、カトリ

は一目見たときに感じた疑問を口にする。

「どういうおつもり、とは？」

灰色の髪と白い肌の男は、その灰色の瞳を真っ直ぐカトリに向け、平然と問いかえず。

「聖騎士殿のその装束は見たところ戦いに向くものではないものですし、何より武器を持ち合わせていない様子。とても一戦望むようには見えませんが？」

カトリは失礼にならないように指摘した。

ちなみにカトリの方は軽鎧に手甲という自身の動きに支障が出ない範囲で、できうる限りの重装備で臨んでいる。

対する男は黒い平服の上に外套を羽織っているだけという、普段着といっても差し支えないであろう装備、疑問に思うのももつともである。

しかし男は一息笑い飛ばして言った。

「こんな余興のために重くて金臭い鎧を着ると？ 馬鹿言つなよ」

「は！？」

「お前程度を相手にするのに武器も必要ない。くだらないことを言っている暇があるならさっさとかかってこい」

「なっ！？」

なるべく失礼にならないように気をつけた言葉の返答が、あろうことか耳を疑うような暴言の数々だった。

「俺はさっさと終わらせて帰って寝たい。ホラ審判、何をぼさつとしてる、さっさと開始の号令を出せ」

更に勝手なことを言いつつ、男はカトリとの間に立つ審判員に命令を下す。

「え？ いや、しかし、よろしいので？」

当然審判員の目から見ても男の格好はその場に似つかわしくないもので、正直どうしたものか困り果てていた。

「……いいからさっさと始めろ」

「は、はいい！」

静かながら恐ろしい気迫で睨まれた審判員は、冷や汗を流しながら口上を挙げる。

『それでは、騎士選抜武芸祭・最終戦！ 聖騎士カタナ 対 挑戦者カトリ・デアトリスの試合を開始する！』

審判の高らかな号令とともに歓声も最高潮となった。

カトリは納得できない思いを抱きつつ、剣を抜く。両手で正眼に構えた長剣は、無駄な装飾など一切無いが、刀身だけは普通の剣とは違い真っ白に輝く。

『エーデルワイス』と銘がついているそれは、魔法による付加により強度と切れ味の強化がなされた剣であり、一般的に魔法剣と呼ばれる優れた武器であった。

「なるほど剣は良いものを使っているみたいだな」

そんな呑気な声が聞こえて、カトリの奥歯が怒りでギリリと軋む。「そちらも早く武器を構えたらどうです？ 後で言い訳されても困りますのでその間は斬り込むような真似はいたしません」

「ハッ、そりやありがたい騎士道精神だな。だが武器は必要ないと既に言ったはずだ。もう忘れたのか？ だとすれば技を磨く前に、もう少しお頭つむの方も鍛えた方がいいぞ」

ブチッ、と何かが切れるような音がした。それはきつとカトリにしか聞こえなかった音だろう。

完膚なきまでに叩きのめす。今まで誰に対しても思わなかったその感情を心の底に置き、一呼吸をおいたあと、「いきます」

カトリの周囲に霊光があがる、魔力によって自身の体の周囲へ付加をかけ、動きを加速させる法式。いわゆる付加魔法を発動する。カトリ自身の白き霊光と、構えるエーデルワイスの白く輝く刀身の美しさに会場は熱気を取り戻す。

そしてカトリはわずかに剣を引き、姿勢を落として一気に踏み込

んだ。

「ハアア！」

一瞬で間合いを詰めたカトリはその速さを存分に生かす刺突を繰り出す。肩口を狙ったそれは最小限、命までは奪わない程度の配慮だった。

その時まではその余裕があった。

「――！」

カトリの最速の剣である刺突は、カタナが上体を逸らしたただけで回避された。

会場にどよめきが走る、騎士選抜武競祭において圧倒的实力で勝ち上がったカトリの剣が完璧に回避されたのはこの時が始めてであったからだ。

そしてそれだけに留まらず、二の太刀を繰り出そうとしたカトリは腕を掴みあげられ、動きを封じられていた。それは完璧と言つて良いほどに、間合いを見切った洗練された動きだった。

（う、うそ）

そして一番その事実を信じられなかったは当事者のカトリに他ならない。彼女は自分の実力というものを知っていた。幼いころから剣を振り続け、若くしてすでに命の遣り取りの経験もある、この武競祭を勝ち上がる中で実感もした。

それが一瞬で崩れていく。

足を蹴り上げられ、身体が重力から解放されたようにふわりと浮き上がり、次の瞬間には背中から地面に叩き付けられる衝撃を鎧越しに感じた。

決定的なのは自分の手にあつたはずのエーデルワイスがいつの間にかカタナの手にあり、更に剣刃を鼻先に突きつけられていること。この状態を言葉で表すのは一つしかないだろう。

悔しいが認めるしかない、敗北を。

「……参りました。私の負けです」

「ハッ、見れば分かる」

潔く敗北を宣言したカトリを、こともあろうにカタナは鼻で笑った。カトリはその屈辱と怒りに耐え、肩を震わせる。

「……今日は負けても、いつかは超えて見せます」

カトリは純然たる決意を突きつけた。それは負け惜しみでしかなかったが、カタナの失礼千万な態度に押され、言わずにはいれなかった。

それに対してカタナは鼻を鳴らし、

「お前には一生無理だ」

吐き捨てるように言ってその場を去った。

波乱尽くしであった騎士選抜武芸祭は、波乱のままそうして幕を閉じた。

第一話 カタナとサイノメ

敵を知り、己を知れば百戦危うからず。

そんな師の言葉をふと思い出し、己というものについて少し考えてみようとかタナは思い立った。

己について考えるということを行うことは機会が無ければそうそうあることではない。己とは常に空気以上に当たり前に存在しているからそもそも考えるという考えに思い至ることもない。ゆえに大體聞き流していた師の言葉の中では思い出せたことが僥倖とも言えるためになる言葉だった。

逃避の思いつきとしては悪くないものだと思える。

さておき、とりあえずカタナは己——すなわち自分というものがどんな存在か考えて、二秒で悪い結果が出たので中断し、結局性格あたりから見詰めなおすことにした。

客観的に見た自分の性格を列挙すると、『怠惰、横柄、不遜、怠惰、傲慢、高圧、怠惰』というどう考えても人物評の中では最悪に分類されるものが占めて、それはもう笑いが込み上げた。笑うしかなかった。

特に怠惰という単語が三回も上がった件についてが。

「何を笑ってんだよ、シャチョー。さつきから手が止まっているよ」思考という逃げ道に旅立っていたカタナを現実に引き戻したのは、不機嫌そうに笑みを浮かべる少女の声だった。

カタナは浮かべた笑いを消し、つまらなそうに彼女のほうに向き直って言った。

「重大なことに気が付けたんでな、少し嬉しくなった」

「重大なこと？　もしかして今のこの絶望的状况を打破できるようなことなの！？」

不機嫌そうな笑顔から一気に、キラキラ輝くような心の底からの笑顔に表情を変えた少女——カタナの秘書官を勤めるサイノメは何

かを期待するように詰め寄った。

「いや、全然。でもまったく関係ないわけじゃないがな」

「ふーん、正直この絶望的状况を打破する秘策以外にはまったく興味が湧かないけど、でもまあ関係ないわけじゃないなら一応聞いておこうか。シャチョーは何に気付いたの？」

職業柄なのか、サイノメは期待を裏切られたことに落胆しつつも問い直した。

「俺はどうやら怠け者らしいぞ」

自分を省みて出た回答をそのまま口にした。

「ざああああああっけんあああああー！」

平手が飛んできた。

それを難なく避けて、怒りで肩を上下させているサイノメを訝しげに見る。

「……なぜ殴る？」

「殴るわ！ ていうか避けんな、殴らせろ！ シャチョーが珍しく難しい顔して考え事してたから期待したのに。というかこれ見ろよ！」

サイノメはそう叫び、カタナが肘を置いている机の上を指差す。わざわざ見なくても分かる、机の上には目を逸らしたくなるようなというか完全に逸らしている書類の束が山積み。

「少し落ち着け、小娘が」

「うるさい怠け者！ シャチョーが全然仕事しないからこんなに溜まっているんだろが！ しかも半分は始末書ってどういうことだ！ というかわざわざ手伝ってあげている人間に向かって小娘とはなんだよ！」

ゼエゼエと息を切らして捲くし立てるサイノメ。

「俺はデスクワークが嫌いなんだ。知ってるだろ？ だいたいこういうのは秘書官であるお前の役目だろ普通」

「そう言ってシャチョーがやらなければいけない分まであたしに任せてたから、それがバレて書き直しの書類&始末書でこんなになっ

たんだろうが！」

うん、そうだな。

でもほら俺はやはり自他共に認める怠け者だし、今度は上も折れてサイノメが書いたものでも受諾してくれるかもしれないし。

「……いや、シャチョー、そこまで怠情を開き直られると怒りも湧いてこないってか、もう実家に帰りたくなるわ実際」

「お前には帰る家なんてないだろ」

「何をあつさり人の地雷踏んでんだ！ 最低だな！」

「大丈夫、ここがお前の故郷だ。……仕事をしている限りは」

「最悪だ！ 鬼畜！ 悪漢！ 人でなし！」

恨み言を言いつつも、無駄と悟ったのか、再び書類を処理しようと働き出すサイノメ。

嫌々ながら素晴らしいスピードで書類を片付けるサイノメを見ながら、よしよしと頷くカタナ。

「……って何してんのシャチョー、書類はもしかしたら誤魔化しきくかもしれないけど、始末書の方は流石にあたしが書くわけにはいかないと思うよ？」

そうだった、始末書は書くことが多い分、字や文に個人の特徴が出やすいから不正がバレやすい。

「どうしたもんか……」

考え込むカタナ。もちろんその思考の中には始末書を自身で書くという考えは無く、むしろいかにして自分で書かずに済むものかと怠情な欲望を巡らせている。

いつそ更に開き直ってそれもサイノメに任せるというのもありだが、書類の量からして期日までに終わらせるのは難しいだろう。

「なあ、逃げてもいいか？」

何気なく聞いてみる。

「逃げたら刺す」

剣呑な返答が返ってきた。

「大体シャチョーは協会の聖騎士だという自覚が足りなすぎるんだ

よ。普通は聖騎士って言ったら、みんなの憧れの的で模範となるべき人格を持つてなきゃいけないのに」

「それは俺じゃなく、俺みたいなのを聖騎士に取り立てた団長に文句を言うべきだな」

「はあー、実力主義ってのも考え物だわ」

「それに、俺が協会のお抱えになったのはお前のせいでもある」

サイノメが愚痴・小言モードに入って手が止まっていたので、カタナ釘を刺すことにした。

「うっ、それを言われると何も言い返せない」

小さな体をさらにちぢこまらせて、いそいそと書類に手を伸ばすサイノメ。それを横目に嘆息しながらも、カタナもまた始末書の束に手を伸ばす。

ミルド共和国領ゼニス市にあるミルド協会騎士団駐屯所の、平和な一日の始まりだった。

第二話 カタナとヤーコフ

「たたたた、大変です隊長！」

甲高い声を上げて息を切らせながら事務室に入ってきた男に、書類の処理に追われて精根尽き果てそうなサイノメと、居眠りをしていたのを起こされたカタナからの非難の視線が集中する。

「……ヤーコフ、よくも大したことでもないことで騒いで俺の眠りを妨げたな。万死に値する」

眠れる獅子を起こしたようにカタナは理不尽なまでに怒っていた。普通はみんな額に汗して働いている時間だとか、サイノメの負担がとんでもないことになっているだとかという正論も、今のカタナには通用しないであろう事は、一目でわかるほどの闘気が滲んでいる。「ちょ、隊長、まさかこんな真昼間に事務室で寝てるなんて夢にも思っただけで！　というか俺が持ってきた重大ニュースが聞かせる前から大したことでもない扱いは何気にひどくないすか！？」

カタナの部下であるヤーコフは、理不尽な上司の怒りを鎮めようと、言い訳と話題転換で取り付く島を探す。

「お前の『大変です！』は聞き飽きた。つまりはその程度の事なんだから」

「う、いや確かに、いつも冷静沈着な隊長からしたら、おれが目玉飛び出して驚くような事でも大したことない、で済ませられるかもしれないですけど……や！　でも今回ばかりは隊長も目玉飛び出しますよ！　本当！　絶対！　だからせめて聞くまではその拳骨を引っ込めて下さいってば！」

必死で懇願するヤーコフ。良い大人なはずの大男が若干涙目になっている。カタナ自身も含めてなんとも嘆かわしい光景だったので、ひとまず振り上げた手を腰まで下げるカタナ。

「……言ってみろ」

あまりの必死さに譲歩する姿勢をみせるカタナ。これ幸いとヤー

コフは表情を崩す。

「へへへ、では存分に驚いてください隊長。実は……」

変な間を置き、溜めで演出するヤーコフ。それがハードルを上げていることに気づいていないのが、彼の残念過ぎるところだった。

だが話し始めるとさっきまでの怯えはどこへ行ったのか、興奮気味に表情を輝かせている。

「今日から新人が我が隊に配属されたんですが。その新人が！なんと！ 超超超超超超超超超超……美人の！ 女の子なんですよ！」

「……」

「ぜえぜえぜえ」

超をノーブレスで何度も言ったせいで酸欠になり、息を切らして膝に手をついたヤーコフには自分を見下ろすカタナの視線の色が見えていない。

「……それで？」

聞き返したカタナの声音はとても優しいものだった。

「ですから！ 超超超……ちょ？」

聞いていなかったのかと言わんばかりに、非難するように顔を上げたヤーコフはようやく気付いた。

カタナとの温度差を。

「……美人な女の子が……我が隊に配属に」

「……からの？」

「からの！？ ちょ、隊長。なんでそんなに笑顔なんすか！？」

「ああ本当だな。今まで知らなかったが、どうやら俺は笑って人を殴り殺せるタイプらしい」

「衝撃の事実！？ 待ってください、もう一度チャンスを！ 今度は！ 今度はきつとうまくやって見せますから！」

「……そうだな。来世ではうまくやれよ」

「のおおおおおおおおおおおおおおお……」
「いい加減に仕事しろー！！」

ボゴン

鈍い音が響いて人が一人床に倒れ伏した。

「……」

「……」

「あのう、サイノメ秘書官殿？」

ヤーコフは地面に倒れているカタナから視線を外せぬまま、恐る恐るサイノメに声をかけた。

「何かな、ヤーコフ副隊長？」

返ってきた声音はとても優しい。

しかしそれが落とし穴であると先程体験したばかりのヤーコフは察していたが、それでも言わなければいけないことがあった。

「さすがに死んでしまうかと……」

倒れているカタナの傍らには文鎮が落ちている。そしてヤーコフはすごいスピードで飛来したそれが、カタナの後頭部に直撃する一部始終をしっかりと見ていた。

ちなみに投げつけたのがサイノメだというのも見えていたが、場合によっては黙秘しようと思いに決めていた。主に自分の身の安全の為に。

「シャチョーなら余裕で大丈夫だよ。むしろこの程度で死んでくれるのなら、私の仕事が大幅に減ってとても嬉しい」

淡々と積みあがった書類を処理していきながら、淡々と告げるサイノメに、言い知れぬ恐怖をヤーコフは感じた。

そしてその数秒後に何事もなく立ち上がったカタナを見て。ヤーコフは色んな意味でこの二人を敵に回してはいけないと、肝に銘じるのだった。

第三話 カタナとカトリ・デアトリス

「……それで、新人が来てるって？」

痛む後頭部を擦りながら、カタナは聞き覚えのない事実疑問を口にする。

仮にも、本当に仮にもと言わざるを得ないほどの仕事ぶりであるが、一応はこの駐屯部隊の隊長である自分が、隊の人間の入れ替わりを知らないのはおかしい話だと思った。

「え？ 聞き覚えのないって、十日ほど前の会議の時に報告があった、その場には隊長もいたはずっすけど？」

「……あー会議ね。なるほど、理解した」

疑問は解決したとばかりに、納得するカタナに、ヤーコフの疑問を深めた視線とサイノメの呆れたような視線が向けられる。

「……シャチョー、居眠りして聞いてなかったんでしょ」

「馬鹿にするな。単に面倒臭くて聞き流してただけだ」

「威張って言うなよ！ どっちにしてもダメダメじゃん！」

そうしたサイノメの小言も華麗に聞き流し、カタナはヤーコフに向き直る。

「それで、俺に報告に来たってことは、その新人と面通しでもさせるからか？」

「ええ、まあ。それが筋でしょうし、新人の子も隊長には挨拶しておきたいと言ってますしね」

まあ、当然だ。しかし当然のことを言っているのに何か引っかかるのは、きつとさっきまでのヤーコフの異常なテンションのせいだろうか。

「それにしても面倒だな、ヤーコフの方で適当によろしく言っておいてくれ」

「ええー、それはちょっと……」

なんとなくそんな返答が返ってくることは予想していたヤーコフ

だが、そういうわけにもいかないだろうと、サイノメに視線で助言を要求する。そこは自分でこのダメ上司をなんとかしようと思えないヤークフの弱いところである。

「……まあ、シャチョーがあんまし人と関わりたくないのは知ってるけど。それでも同じ場所に働くんだから、結果としていずれ顔を合わせることになるんだつたら早いうちに挨拶しとくのが、後々の面倒も減って良いと思うけど?」

「……まあ、それもそうだな。どのみちここじゃもう居眠りも許されなさそうだし」

サイノメの言い分に納得したというより、むしろ後者の理由が本命なのが解りきっている二人から、何とも言えない視線をもらいつつ、カタナは重い腰を上げる。

「それで、その新人はどんな奴なんだ?」

「それはもう超超超……」

「……それはもういい。サイノメ、お前なら詳しく聞いてるだろ?」ヤークフには聞いても無駄だと悟ったカタナは、即座にサイノメに疑問を向ける。

「うん、もうすでに色々調べてあるよ。中々面白い経歴の人だね。

聞きたい?」

「……いや、今は遠慮しておく」

なんだか面倒な予感がしたので断っておくことにした。

問題を先延ばしにしているに過ぎないが、サイノメが色々(・・・)と調べなければいけないほどの経歴で、しかもそれが面白いと評されたこと事態がカタナにとっては聞きたくなかった事実だった。

(まあ、俺の下に回される人材だ。どう見積もっても脛に傷はあるだろうしな)

それがどれほどのものか知っておくのと知らないのでは大違いだ、それが良い方に転ぶか悪い方に転ぶのかは一概に言えないだろう。世の中には知らない方が良いことも多い。

「なににせよ、とりあえずは顔を合わせればいいだけだろ? さっ

さと済ませるぞ」

本当ならそれも先延ばしにしておきたいところだが、されはそれで面倒な予感もするので自重しておくことにする。

「ほいじゃ、気分転換も兼ねてあたしもついていくよ」

疲れが見えるサイノメも、首をコキコキ鳴らしながら立ち上がる。「では一階の応接室に待たせてますんで、そちらまで」

新人を待たせるのにわざわざ応接室を使うことに、わずかな違和感を感じるカタナだったが。女性に甘くて弱いヤーコフの点数稼ぎなのだろうと、特にその時は気にしないでいた。

+++++

「本日付でミルド協会騎士団ゼニス市駐屯部隊に配属になりました、従騎士のカトリ・デアトリスと申します。以後よろしくお願いします」

敬礼を交えながら笑顔でそう自己紹介したカトリ・デアトリスの前に、カタナは滅多に感じない驚きという感情に戸惑っていた。

「あたしはサイノメ。ここの秘書官だよ」

サイノメの挨拶に、カトリ・デアトリスはお辞儀で返す。本来ならその行為に含まれる意味を追及してサイノメをからかうのだが、今のカタナにはその余裕はなかった。

「……駐屯部隊隊長のカタナだ」

なんとかおざなりに返答を返すことができたが、心の内では言葉の何倍も逡巡していた。

カトリ・デアトリスという新人は、確かにヤーコフが言うように超がつく美人だ。庶民には見られない金髪金眼はその美貌を際立たせているし、すらりと伸びた長身と長い手足に、芯の通るような姿勢の良さはまるで戦乙女の彫像をみているようだが、それはカタナ

を驚かせる材料にはならない。

そして貴族だけが持つ姓を名乗ったという事も、それほど気にはならない。あまり貴族というものに良い感情は持っていないが、協会騎士団に入ってから接する機会も多くなったのもう慣れた。

ただ、カタナが驚いたのは初めて会うはずだと思っていた新人が、知っている顔だったという事実だった。

一か月ほど前にミルド共和国の首都で、騎士選抜武芸祭というものが催された。

参加者はトーナメント形式で武芸による試合で勝敗を競い、観覧者は普段は見る事ができない戦いというものをお祭り気分で見物し楽しむ、そういうものだ。

騎士選抜と冠してある通り。参加者の内で上位の成績を収めたものは、大陸最強の呼び声が高いミルド共和国のミルド協会騎士団に無条件で騎士として入団できるとあって、参加者の数はかなりのものに昇った。

しかし参加者の中で、既定の成績まで上り詰めることができるものはいないだろうとも言われた。

それはあまりに低い水準の大会にならなくするため、あるいは八百長などを防ぐために、協会騎士団の騎士が参加するという既定があったため。結果としてハードルが上がりすぎてしまったからだ。

大会としては企画倒れに終わるかと思われたが、予想に反して波乱が起こることになった。

参加者の内でただ一人、並み居る騎士を打ち倒し、あるうことが優勝したものが現れてしまったからだ。

それがカトリ・デアトリス。

その姓から、かつて帝国で栄華を誇った武門の名家であり、とある事件により没落したデアトリス家の息女だと噂された。

実際にその戦いぶりは噂を裏付けるものであり、使用する魔法も帝

国で使われているものに近いことから、確実視された。

ダークホースの登場に大会は盛り上がったが。一部の、主に協会騎士団の重役達の中には快く思わない者もいた。

完全にメンツを潰されたのだから当然であるとも言えるが、そもそもそれは主題に反した事なのでやはり間違いと言えるだろう。

それでもその歪んだ思惑は、武芸祭の既定のとある一説に目を付けた。それは『優勝したものは聖騎士の称号を持つ者に、その称号をかけて挑戦する権利を得る』という一説。

元々どうせ騎士が勝ち上がるのだからと、参加者の呼び水として用意された既定だが、こうなつては騎士団のメンツを保つにはこれに賭けるしかないと考えたのだ。

武芸祭の優勝者であるカトリ・デアトリスに、協会騎士団の聖騎士が完膚なきまでに勝利する。単純な構図だが、それだけに印象にはよく残る。

そうした思惑に踊らされる形で、カタナはカトリ・デアトリスと聖騎士の称号をかけて一戦交えることになる。

その結果は一部の人間の望む形となつてしまい。騎士選抜武芸祭は幕を閉じた。

それが一か月前の全容のはずだ。

「なあ、サイノメ」

実はちゃんと聞いたり体験した事に関しては、かなりの記憶力を誇るカタナは。一か月前の顛末を思い出しながら、自分の右後ろに立つサイノメを見下ろして話しかける。

「何？」

見上げるサイノメの笑顔が、何故かやたら憎らしく感じる。

「配属された新人が、以前に一戦交えて完膚なきまでに叩きのめした相手なんだが、俺はどんな態度で臨めばいいんだ？」

「ちよっ！ 本人の前で何てこと言ってるの！？」

途端にサイノメの顔に焦りが滲む。なんだかんだで面倒見が良かったり、ちゃんと空気が読めるのがサイノメの良い所だ。

「私は気にしませんよ。それにカタナ隊長には普段通り皆様に接するようにしていただければ嬉しいですよ」

「……そうかい」

カタナのサイノメへの問いに答えるように、カトリ・デアトリスは笑顔を崩さず口を挟む。サイノメをからかっていつものペースにしようとしたカタナは、それでまたバツが悪くなった思いがした。

ちなみにヤーコフはこの場に居ない。サイノメによって書類処理地獄の任に就かされている。

（……とりあえず、面倒事の予感はあるが当たってしまったわけだ。しかしこれは……どうすればいい？）

実際のところ、カトリ・デアトリスがここにいることには何の問題もない。

武芸祭で優勝した事で騎士になる権利を得て（自己紹介の時に従騎士と名乗ったのは気にかかるが）、協会騎士団の一員になったのだから問題はないのだ。

しかしそれ自体には問題がなくても、カタナは問題があることを感じている。

それはカトリ・デアトリス本人に対して。

（態度は友好的、礼儀もなってる、おまけに美人。だが……）

棘を感じる。表面には出ていなくても何らかの黒い感情を隠しているように感じるのだ。

（これが武芸祭の事を恨んでいるっていう感情なら、解りやすくもいいが）

だがそれがカタナに向いているかといえば、そうではなさそうで、だからこそ対応に困るのだ。

「どうかしましたか隊長？」

カトリ・デアトリスは心配そうに尋ねる。

その態度にも演技めいたものを感じて。

そんな調子に合わせるのが面倒になり。

「ちよつと表に出る新人、二人つきりで話がしたい」
気が付けばそんなことを口走っていた。

「え！　ちよつとシヤチョー！？」

サイノメが驚きの声を上げた。カタナの剣呑な雰囲気は誰の目から見ても明らかだった。

実際カタナも自分自身で驚いているほどだ。

しかしカトリ・デアトリスは笑みを崩さず。いや深めたようにも見える。

「はい。私もちよつと、隊長と二人つきりでお話がしたいと思っております」

「そつちも何！？　何なの！？　私って邪魔者なの！？」

もし傍目からみればサイノメはそんな扱いになるのだろうが、カタナからすればそれは違うと言える。

本来ならこんな面倒事は、サイノメに任せてさつさと逃げたいところなのだ。

しかしそれができない。なぜならカタナに向いていないカトリ・デアトリスの棘は、サイノメに向いているのかもしれないのだ。

（……難儀なもんだな）

逃げたいのに逃げられないというのは、とサイノメの苦勞が少しは解ったような気がして、カタナの口元は自然と歪んでいた。

「じゃあ少し出てくるぞ。サイノメはヤーコフと留守番な」

「書類地獄の間違いだろ！！」

そうとも言つ。ん？　結果的に始末書から解放されて得したのではないだろうか？

そうしてカタナはサイノメからの罵詈雑言を背に、カトリ・デアトリスを連れ立って駐屯所を出た。

第四話 カタナとカトリ・デアトリスの本音

駐屯所を出たカタナはカトリ・デアトリスを連れてゼニス市の貧民街を訪れていた。

貧民街は市民税の払えない貧しい者たちがゼニス市の郊外に作った集落で、本来はゼニス市とは呼べないが、市内外で立派に一部として認識されてしまっている。

理由はその労働力が街の維持に貢献していること、人は富を得れば墮落するが貧しければそれを脱するため懸命になる。その懸命さはいまだ発展途上のゼニス市で必要とされるものだった。そのため駐屯部隊や自警団の巡回ルートにも組み込まれていて治安も悪くない。

カタナがこの場所を選んだのは、やたら目立つ金髪と、白を基調とした騎士団の制服を着たカトリ・デアトリスを連れて、人通りの多い場所に行きたくなかったからだ。

もっとも灰色の髪色と、春の陽光の中黒い外套を身に纏うカタナもよっぽど目立つ風体だった。

貧民街は南部端の駐屯所からそれなりに近く、昼の内は女子供も働きに出ている家が多いため人気がない。二人がゆっくり話をするのに適した場所だった。

「ここでもいいな」

貧民街の更に人通りの少ない裏路地に入り、カタナは置いてあった用途不明の樽に腰掛けながら言った。

「ええ、結構です」

対してカトリは、立ったまま四歩分ほどの間隔をあけて答えた。

座れそうな樽はまだそこらに散らばっているのに座ろうとしないのも、会話するのには少し遠い距離もカタナへの警戒が見て取れる（こんなところまで付いてきて今更だと思うがな）

ちなみにここに至るまで二人の間に会話は一切なかった。

すれ違う他人には、一定の距離を保ちながら黙々と歩いている、相反する格好の二人には奇異の視線を送っていたが。流石に出刃亀根性を見せる勇者は存在しなかった。

「とりあえず。聞きたいことは三つ」

前置きなしにカタナはそう切り出した。元々面倒なのが嫌いな性質なので、会話の流れの作り方も簡潔になってしまふのだ。

「え？」

しかし返ってきた返答はさも以外といったものだった。

「何だ？ 質問に答えるのは嫌か？」

「いえ、そうではなく……まさか『二人っきりで話したい』とは、本当にただ話がしたかっただけですか？」

「他にどういう意味がある？」

「いえ、てっきりコチラの事だと思ひまして……」

「……ああ、なるほど」

カトリの疑問にカタナは心底理解不能だったが、彼女が指差すものをみて得心がいった。そして呆れた。

カトリが指差したものは腰に帯びた長剣。見たところ騎士団で支給されるものではなく、武芸祭でも使用していた自前のものだろう。武人同士は時として剣で語り合う事もある。カタナは前に師がそう言っていた事を思い出してしまった。ちなみにその時カタナは生まれて初めて爆笑という体験をした。その後、静かな怒りの笑みを浮かべた師に訓練という名の拷問を受けさせられたが。

「お前……馬鹿だろ」

「なっ！？ いきなりなんです！？」

「話がしたいを、〃剣で語り合いたい、に変換する奴を世間一般ではそう言う」

世間一般の認識とか知らないが。少なくともそうであると信じた。いや、そうじゃない世の中とか終わってるだろうと思う。

「し、しかし。先程の隊長の様子を見るにそうだろうと……」

確かに少し苛立ってはいた。

「俺はそんなに好戦的に見えるのか？」

自分では無力系とか怠惰系だと思っっているカタナは、生まれて初めて他人の目というものを気にした。

「いえ、見た目ではそれほど……しかし武芸祭の時の印象が強かったものですから」

「ああ、あの時か。あの時はかなり苛立っていたからな」

できるだけ日陰で生きることが望むカタナが大観衆の前に晒され、いつもは威張り腐っているくせに、いざという時に不甲斐ない馬鹿な連中の後始末を任されたのだから。

だがその苛立ちを騎士団にぶつける訳にもいかず、結果としてそれは八つ当たり気味にカトリに向かってしまった。

「言っておくが、俺は戦いが嫌いだ。何よりも面倒だからな」

それがカタナの本音のところだ。勝っても負けても軋轢を生む、それが嫌にならない訳がない。

「聖騎士に認められるほど強いのにですか？」

「俺は強くななんかねえよ。一人じゃ当たり前のことすらできない、弱い人種だ。最弱と言ってもいいくらいいな。聖騎士の称号だって眉唾ものだしな」

「私には強者の詭弁にしか聞こえませんが？」

気に障ったのか、わずかに慥然とした態度でカトリは言った。

「やけに強さに拘るが、そんなに重要なことか？」

「ええ、私にとっては何よりも重要です」

キツパリと答えるカトリの目に迷いはなく、そこには確固たる意志がある。

「……理解できないな」

対するカタナの目は言葉以上に温度が低かった。

しかしそれも次にカトリが発した言葉により驚愕に変わる。

「……そうでしょうね、私を無手で圧倒し。いざとなれば『魔術剣』だって手にできる貴方には、強さなんてどうでもいい事なのでしょう」

「！『魔術剣』だと……！？ 誰に聞いた！？」

カタナにとってそれは聞き捨てならない言葉であり、同時にその時は聞き流すべき言葉であった。

なぜならカトリ・デアトリスには確信がなく、カマかけのようなものであったから。

「その反応、余程の物のようですね」

「……………」

（あー、やっちゃったか？）

少し考えれば秘匿されている魔剣の情報がまるまる洩れているはずなどない。

しかし、協会騎士団でもほんの一部しか知る者がいない、その存在や所在が知られていただけで問題なのだから、カタナの反応は正当とも言えた。

「知ったのは、たまたま小耳にはさんだ噂話からです。魔術剣と呼ばれる超常の武器と、その使い手が協会騎士団にいるらしいと。噂話らしく抽象的なものだったのでどれほどのものか測りかねてましたが。私の想像以上かもしれませんね」

「……そんな噂話から、どうやって俺と魔術剣を結びつけた？」

黙秘しておくべきかとも思ったが、それ以上にそんな曖昧な噂で真実に限りなく近づいたカトリにカタナは興味を覚えてしまい、隠す事を忘れてそう聞いていた。

「たまたま、ですかね？ 本来ならそんな噂話を信じて行動してみようなんて誰も思わない。それでも私は信じるしかなかった、たまたまその結果が当たっただけ。そんな感じです」

カトリはあっさりとそう答えた。

「馬鹿な、そんな思い付きのような行動で……」

「言われてみれば確かに馬鹿なことかもしれませんがね。武芸祭に出たことも、こうして貴方の元に訪れたことも。無駄足に終わる可能性もあった、しかし行動しなければ何も解らなかったことは確かだったのです」

だからといって普通は行動には移さないだろ、とカタナは思う。
(そもそも普通の人間が武芸祭で優勝するなんて無理か。しかし馬鹿に実力を持たせるところという結果になるのか)

「武芸祭で優勝して騎士になったのは魔剣の事を探るためか？」

「そうです。大陸最強といわれる協会騎士団の実力を見ておきたいという意味もありましたが、本筋の目的としては協会騎士団の内部から魔術剣について調べるためでした」

「俺にあたりを付けたのは……」

「騎士団に数人しかいない聖騎士の称号を担うもの。魔術剣というものが本当に存在しているのなら、使い手はその内の誰かであると考えるのは、単純ながらあながち間違いではないと思ったからです」
おそらくはカタナを選んだのは、他に接触できる聖騎士がいなかったからだろう。カタナ以外の聖騎士は重職に就いていたり、国外で忙しく活動する者ばかりだから。武芸祭で顔を合わせてしまったのがとても大きい。

そう思えばそんな消去法的理論で言質を取られたカタナは、かなりの失態を犯したことになる。

「……まったく、やはり慣れないことはするべきじゃない」

「それで、魔術剣の存在は解りましたが。所在についてはどうなのですか？ やはり隊長が所有しているのですか？」

「……言うんでも？」

今更だがそこはきっちり秘匿しておかなくてはならない。

「でしようね」

カトリは苦笑いをして肩を竦めるが、諦めた様子もなさそうだ。

「魔術剣について探ってどうする？ 手に入れる気なのか？」
「可能ならば」

「それはお前が強さに拘ることに関係しているのか？」

カタナにはカトリの行動理念が、なんとなくだが解ってきた。

「……ええ、その通りです」

そう、きつと強くなるというただ一点のみ考えて、そのための行

動を選んでいる。

「言っておく。魔術剣はお前が考えているよりも便利な代物じゃない。手に入れたところで扱えないし、強くなれるわけじゃない」

「扱えない？　どういう事でしよう？」

やはりカトリは魔術剣が実際にどういうモノなのかまでは知らない様子で、疑問を呈した。カタナはそのことに軽い安堵を覚える。

「言葉のままだ。詳しくは言えんし、もし知ったら殺さなくてはいけないかもしれない」

「肝に銘じておきましょう。しかし実際に見てみるまでは諦めるつもりはありません」

カタナの物騒な物言いにカトリは動じた様子もない。

「それならそれでいい。一応警告はしたからな」

面倒は増えるが、言って聞くような相手じゃないともよく解ってきた。

詳しく理由を聞く必要もないだろうと思い、カタナは話を打ち切ることにした。元々知りたかったカトリの目的は最低限知ることができたし、それはカタナの周囲には影響を及ぼさないということが解った。

カトリにとってカタナは何らかの目的を果たすための通過点なのだろう。それは魔術剣を手に入れるという目的も同義だと思う。

おそらく駐屯所で感じたカトリ・デアトリスの黒い感情はその先の何らかの目標に向いている。こうして二人つきりになっても敵意や害意というものは感じなかったから、それも無視していい事柄だと判断した。

「じゃあ駐屯所に戻るぞ、あんまりサボっていると怒るやつもいるしな」

「え？　私もですか？」

「お前……初日からボイコットする気とは、俺への挑戦か？」

自分はサボってばかりだが、他人にはそれを許さないというカタナの理不尽な物言いだった。

「そうではなく。私を近くに置いておくことに、何も思わないのですか？」

カトリ自身、協会騎士団の秘密を狙っているという事に自覚があるからか、それを何とも思っていないという様相のカタナには疑問を感じたようだ。

「別に追い出したところで諦めないのなら、その必要も無いだろ。それに部下が増えるのに越したことはないしな。でも出ていきたいなら好きにしろ、去る者は追わない主義だ」

「いえ、許されるのならいいのです。元々の目的は魔術剣でしたが、武芸祭以来の私の当面の目標は隊長に勝つことでもありますから」

「なんだそれ？ そんなことが望みなら今ここで決着をつけてやってもいいぞ」

「……嫌です。隊長、手を抜く気でしよう？」

面倒は早いうちに減らすに限ると思ったが、そう簡単には許されなかった。

うんざりしたような様子のカタナとは対照的に、カトリは笑っていたが、その笑みに不自然さはない。

「なんとなく隊長の考えている事が解った気がします」

「……俺にはお前の事はさっぱり解らないがな」

樽から腰を上げたカタナはばやくように呟いた。

そうして駐屯所に戻るために歩き出した二人の距離は、来た時よりもわずかに縮まっていたが本人達は気づいていなかった。

その後、駐屯所で地獄のデスクワークが待っていたのは言うまでもないが。

第五話 カタナとサイノメ（裏）

夜の隠が降りた後、カタナは駐屯所の屋上で星を見ていた。

苦手なデスクワーク、というか勤務を、やっとなのおもいでこなした頃には深夜に近い時間となっていた。

「こういう時に見る星はやたらと光って見えるな、なんか馬鹿にされている気がして腹が立つ」

そういう、かなりやさぐれた思いで星が見えるのも仕方なし、といったぐらいの激務ではあったのだが。元々は自身の日頃の怠慢が原因であつたので文句は言えない。言っているが。

それでも星を見続けるのは理由がある。
暇なのだ。

夜は長い、これといって趣味のないカタナには残酷なほど何もない。

「お疲れ、シャチョー」

仕方なしにぼうつと、星を見続けていたカタナの頭の上から不意に声がかかった。

「サイノメか、気配もなしにいきなり現れるな」

「はは、職業病つてやつ？ でも言う割にシャチョーは驚かないよね」

ちょこんと、サイノメは定位置であるかのように、寝転んだカタナの右側に腰を下ろす。

「何か用か？」

「用があるのはシャチョーの方だと思うけど？」

「まあな」

サイノメとの契約の上で、指定されている場所が屋上。

契約といっても、秘書官としての、サイノメの表の顔ではなく。裏の顔との契約の話。

「……カトリ・デアトリスについての情報を全部よこせ。表も裏も

な」

カタナのその言葉に、サイノメは少しだけ意外そうな表情を見せるが、すぐに首を縦に振る。

「あいよ、『情報商会サイノメ・ライン』契約通りに要求にお答えさせていただきますよつと」

サイノメは裏の顔である『情報屋』として、『契約主』のカタナに応える。

だが裏の顔、表の顔といっても、特にサイノメの態度には違いはない。おどけた調子も怒りっぽいのも、それは秘書官でも情報屋でも変わりはない。

ただ少しかだけ立場が変わるだけだ、ミルド協会騎士団ゼニス市駐屯部隊の隊長と隊長付き秘書官という関係から、情報屋と専属契約主という関係に。

サイノメがカタナの事をシャチョーと呼ぶのは、情報屋が契約主の個人情報許可なしに明かさないため設けられた敬称だからだ。表の顔も裏の顔の時も例外ではないらしく、そのルールを守ることが情報屋としての誇りなのだと、以前にサイノメはカタナに語ったことがある。

「私が調べた中でカトリ・デアトリスの一番昔の情報は、彼女が十二歳だった五年前からかな」

「五年前？ お前にしては最近の事しか把握してないんだな」

「まあね、彼女の家は結構な秘密主義だったみたいだね」

「デアトリス家が……」

「そう、しかも彼女は当主の娘だよ」

帝国の武門の名家として名高いデアトリス家。軍の要職に幾人も輩出していたほどで、戦後の帝国を支えた『栄華五家』にも数えられていた。

しかし別の意味でも有名だ。

「お前がカトリ・デアトリスの過去を捉えた五年前は、確かデアトリス家が没落した時期じゃないか？」

そう、それまで最高級の富と権力を誇っていたデアトリス家は、突如として帝国の表舞台から姿を消した。

「軍部に絶大な影響力を持っていたデアトリス家が、爵位を剥奪されて、要職に就いていた者は全て更迭された。しかもなぜそうなったのかの発表はないまま。当時は帝国内外で結構な混乱を招いた事柄だ」

「お、さすがシャチョー。古巣が帝国なだけあって詳しいね」

「茶化すな、その程度の曖昧な事柄くらい帝国民なら誰でも知ってることだ」

「そうだね、じゃあ私は情報屋らしく、誰もが知らない事を話すよ。実は更迭されたデアトリス家の面々は既に全員死んでいるんだよ」

「……確かなのか？」

「帝国軍部のちよつとした非公開資料を、覗いて知ったことだから間違いないと思うよ」

「……何とも、それだけで本が一冊出版できそうな事実だな」

茶化して言ったカタナだったが、実際言葉通りの衝撃的な事実だと認識している。サイノメの「ちよつとした」はかなり重要なものである事が多いと知っているからだ。

ちなみに非公開資料を覗いた、とかあつさり言ってしまう事には微塵も驚かない。それだけの凄腕だというのは認知しているし、それでなくては契約する意味もない。

「いつ、どこで、どうして死んだのかは解るか？」

「資料に載っていた死亡日は全員同じ五年前の十一月二日。場所はデアトリス家本邸で、何者かに殺されていたとあつたね」

「全員が同じ日にデアトリス本邸で殺されていた？ 使用人はどうしていたんだ？」

「私の調べによると、使用人は全て殺されているみたいだね。いや、それだけじゃない……」

それだけで十分な惨事であるのに、まだあるという。

「デアトリス家に連なるすべての者はその日、何者かに殺されてい

るみたいだよ」

「……」

そこまで聞いて、カタナは少しだけ後悔していた。思っていた以上に荷物になりそうな情報ばかりが聞こえてきたからだ。

情報の一番厄介なところは、捨てることができない事だろう。

一度知ってしまったら、相応の責任が一生ついて回る。

「それだけの事があって、よく隠し通せたな。普通なら大事になるだろ」

「そこは他の栄華五家が頑張ったみたいだね。どんな汚いやり方を使ったのかは知らないけどさ、そんな事件があった事なんて世間はもう誰も知らないよ」

そう、世間が知っているのはデアトリス家が権威を失って没落したという事だけ。しかし民衆にとつての権力者なんて、代わりの者が置き換われれば、それだけで興味が移る程度のものなのかもしれない。過去となった者の動向を知ろうとする者は少なく、せいぜい噂話を勝手にするくらいだろう。

「それで、その件にカトリ・デアトリスはどのように関わっている？」

前置きは充分といった様子で、カタナはそもその本題について尋ねる。

「おうおう、美人の事だからか、今日のシャチョーはグイグイくるねえ」

「……茶化さないでさっさとええ」

「わかりましたよー。それでカトリ・デアトリシユ………ねえシヤチョー、フルネームじゃ長いからカトちゃんでもいいかな？」

噛んでしまった腹いせなのか。サイノメは本人のいないところで、勝手に際どいニツクネームをつけようと試みる。

「……好きにしろ」

面倒なのでカタナは受理した。もっともそれで呼ぶ気はないが。

「それでカトちゃんはその件にどう関係しているかだけど……私はさつきデアトリス家に連なる者は全て殺されたって言ったよね」

「ああ、言ったな」

確かに全ての者と言った。例外に関しては一言も漏らさずにはつきりと。

それはつまり。

「実はカトちゃんことカトリ・デアトリスも、その日——五年前の十一月二日に死んだ事になっているんだよ」

フルネームで呼び直すのならならニツクネームなんて必要ないだろ。という指摘も咽から出かかったカタナだが、そんな事は後回しにすべきだと流石に思った。

「それはお前の見た『ちよつとした非公開資料』の情報か？」

「いや、公開非公開を問わずに、その日にカトリ・デアトリスという十二歳だった少女は死んでいるよ。ちなみに十一月二日は彼女の十二回目の誕生日だったみたい」

デアトリス家の本邸に一族郎党集まっていた理由は、当主の娘の生誕祝いだったという事らしい。いや正直、それすらカタナにとっではどうでもいい事。

「……なあサイノメ、幽霊って信じてるか？」

「うっん、信じてないよ」

「安心した。俺も信じていない」

今日見たカトリ・デアトリスが実は幽霊でした、なんて言われたら反応に困るところだった。

「今日、俺の前にカトリ・デアトリスと名乗る女が現れたが、あれは誰だ？」

「さあ？ 本人がカトリ・デアトリスって言ってるんだからそうなんじゃないの？」

「なんだそれは、からかっているのか？」

「いや、実際のところ解らないんだよ。彼女がカトリ・デアトリスなのか、名を語る偽物なのかね。何せカトリ・デアトリスの動向は、

記録的に死んだ事になっている五年前の後にも先にも情報が少なすぎてね。生年月日くらいしか知らないんだよ」

「……なあ、どうしてそんなに情報が少ないんだ？ 他のデアトリス家の人間もそんな秘密主義で守られていたのか？」

「いいや、カトちゃん以外ならそこそこ集まるんだよこれが。交友関係やどんな教育を受けたか、好きな食べ物や愛した芸術、出産時の身長体重なんかもね」

「それはそれでキモいな」

いまさら言っても仕方ないがプライバシーの侵害も甚だしい。

「うるさいな！ 仕事なんだからしょうがないだろ！」

半分趣味でやっていそうな、サイノメの言い訳としては説得力に欠けるが、カタナにも若干の責任はあるため追及はしない。

「だがそうなると当主の娘とはいえ、カトリ・デアトリスだけ解らないことだらけってのはおかしい話だが」

「そうだね。でもきつと、どうしてカトちゃんだけ特別なのが解れば、すべてが見えてくると思うんだけどね。情報ってそういうものだから」

そういうものらしい。他はどうか知らないが、情報商会サイノメ・ラインにとってはそういう事なのだろう。

「ところで、今の話は協会側も知っているのか？」

「知ってると思うよ。デアトリス家の事はともかく、カトちゃんが既に死んでる事については公開情報だから」

「……なるほど、俺のところを送られてくる訳だ」

「それも穿った見かただと思うけどね、カトちゃんは自分で志願したって言うてたしさ」

サイノメも言いながら、半分はカタナを疎ましいと思っている人達の嫌がらせだろうと思っていたが、一応依頼主が暴走しないためのフォローを入れておく。

「ところで、お前はと思う？ あの女はカトリ・デアトリスなのかどうか」

「うーん、一応は周辺情報から、デアトリス家の人間は金髪金眼が多かったという事で身体情報の一致が見られることと、彼女の持っている剣が第一世代の魔法剣『エーデルワイス』なのが、本人であるかもしれないと見れるところね」

「エーデルワイス？」

「そう、純正のミスリライトで作られた名工エーデルワイスの作品で、白く輝く刀身の美しさと、五十年前の大戦を戦い抜いたほどの実用性を併せ持った、一部で世界最高峰の剣と言われているらしいよ」

「……お前、変なことに詳しいな」

「いやその言葉、情報屋にとって侮辱だから。武芸祭の時の観客にその道のマニアがいたんだよ」

「それはいいとして、そのエーデルワイスとカトリ・デアトリスに何か関係があるのか？」

「腑に落ちないけど、いいわもう……魔法剣エーデルワイスはデアトリス家の家宝だったの。ただそれだけ」

サイノメは半ば投げやりに締めくくったが。なるほど、そうなると見方も難しくなる。

関わりのあるものが一つなら偶然で済ませるが、二つ重なれば必然にも思えてしまう。

「あたしとしては、カトちゃんか本物でも偽物でも、どちらでも構わないけどね」

「どうしてだ？」

「だってどちらにしても、丸裸になるまで調べるんだからさ」

そんな事をサイノメは楽しそうに言う。やりがいのある仕事を見つけた事を喜んでいるようだ。

「充分に調べてほとんど何も出なかったんだろ。このままずっと何も解らないかもしれないぞ？」

「それならそれで、最高に嬉しいよ。あたしが自分の実力を極限まで発揮して、解らない事があるんだって信じられるから」

「……理解できないな、徒勞に終わるくらいなら何もしない方が楽でいいだろ」

「結果が出ない過程を、徒勞と吐き捨てるか、それとも新たな糧にするかは本人次第だよ。あたしは何もしないより、何かをしてる方が楽しいと思うからそうするだけ」

そう言ったサイノメの表情は輝いているようで。カタナには少し眩しく見える。

「シャチョーはどうなの？ カトちゃんが本物か、偽物か。はつきりさせたい？」

その質問にカタナは逡巡なく答える。

「……正直どうでもよくなってきた。まあとりあえず面倒だからカトリ・デアトリス本人として接していくがな。お前が調べるなら俺が何かする必要もないし」

「うん、シャチョーはそれで良いよ。というかそれが良いよ。シャチョーが本気で動けばあたしの出る幕なんてなくなっちゃうからさ」

「んなわけあるか。俺にお前の代わりなんて無理に決まってるだろ」
「ん、まあそういうことにしておくか。っと、そういうことでカトちゃんについては今のところ以上。新たに何か解れば随時報告するってことでいいかな？」

「構わない」

「そう。じゃあ、ほれほれ」

サイノメは右手の指を三本立てて、左手をカタナに差し出した。

それは報酬の請求。大したことが解ってないような、解ったような微妙な情報だったが、取るものはしっかりと取るらしい。

「いつも通り、給料から勝手に引いとけ」

「うしし、毎度あり」

その時のサイノメの顔が本日一番のいい顔であったのは商売人としての本質なのだろうか。

「ああ、そういえばサイノメ」

「ん、なあに？」

預金残高を思っただけ顔だったサイノメに確認しておくことがあった。

「お前今日の昼、俺とカトリ・デアトリスのお話を盗み聞きしてたろ」

「え！？　嘘、あの尾行に気づいていたの！？」

「やっぱりか」

カタナは半信半疑だったが、誰かに付けられている気がしていたのだ。

だからこそ人通りの少ない場所を選んだ。

まあ、半分以上はただの勘だが。

「周囲の雑踏の少ない場所だと気配は探りやすいからな」

「うっ、流石はシャチョー。あたしの洗練されつくした尾行を捉えるなんて……」

まあ、あの時に尾行してくるものがあるとなれば、確実にサイノメだと思っていたので捨て置いていたが。

「それで、話はしっかり聞いていたか？」

「……はい。ごめんなさい」

素直に頭を下げるサイノメ。

「いや、聞いていたのならいい。説明する手間が省けるからな」

どちらにしろ、カトリとの会話はサイノメに落としておくつもりだった。

「それで、まずはどうしても解せない事があったが、どうして『魔術剣』の事が漏れていたかだ」

「うん、それについては私も同意。カトちゃんにはさんだ噂話だっけってんだけど、それは普通じゃありえないよ」

そう、だから解せない。

魔術剣は本来協会に——いや、ミルド共和国にあってはいけないものだ。

それを存在させておくことが事態がミルド共和国の元々の理念や信仰に反するから。だからこそ秘匿され、その機密レベルは最高に近

い形だ。

そのため使用者であるカタナも、おいそれと許可なく持ち出す事は出来ない。

共和国や協会騎士団の関係者が漏らすとは到底思えない、デメリツトしか考えられないからだ。

「あるとすればスパイが紛れ込んでいるか、しかしそんな深部の情報を掴んで民間に流すとは思えないな」

「うん、あたしもそう思う。というか民間に流れていたら、サイノメ・ラインの網に引っ掛かるはずだしね」

大陸有数の規模の、情報網を持つサイノメ・ラインならそれを豪語することも許されるだろう。

「だとすれば、後は俺の古巣か……」

「帝国だね。それだとは絞ることはできそうだけど」

そこでサイノメはカタナの顔色を窺うような仕草を見せる。センチメンタルな何かを気にしているのだろうか。

「帝国が仕掛けているなら、それに対して遠慮はしなくていい」

「……でも愛着はあるんでしょ」

「もう捨てた……いや、捨てられたのは俺か」

そう言って自嘲気味に笑ったカタナは、サイノメの目には無理をしているように見えた。

「なんにしろ、カトリ・デアトリスの事も含めて帝国に動きはありそうだ。そっちもしっかり調べておけ」

「ういつす、了解」

あえておどけた調子を出すのは、少しだけ遠くを見つめたしたカタナを、いつもの調子に引き戻したかったからか。

「ねえ、シャチョー。もうちょいここに居てもいい？」

本来ならサイノメの役目はこれで終わりで立ち去るべきなのだが、今日は気分が違った。

それは秘書官でも情報屋でもなく、サイノメという個人の問題で。

「……子供はとっくに寝る時間だぞ」

「年上を子供扱いすんな！　むしろ年齢だけでいえばシャチョーの方が遥かに子供だ！」

背が低いことで幼く見えるサイノメは、よくカタナにそれをからかわれる。

元々コンプレックスであったが、それをズケズケと遠慮なくついでくる無礼者のおかげで、最近はあまり気にならなくなってきたが、「好きにしたらいいだろ。この場所は俺の所有物じゃないんだ、誰が居たって文句は言わない」

カタナの顔に感情は窺えない、でもそれは隠しているだけのよう
に感じられる。

「ふふ、じゃあ遠慮なく好きなだけ居るよ。明日は秘書官の仕事は休みだしね」

そうと決まれば、とサイノメは立ち上がる。

長い夜にはピツタリの良い飲み物がこの世にはあるのだ。

「コーヒー淹れてくるけど、ミルクと砂糖はいる？」

「……どっちもいらん。ミルクは俺の分も自分のほうに入れていいぞ」

それも優しさではなく、暗にサイノメの低身長を皮肉っている。

「だ・か・ら、少しはデリカシーを持てっついてもいつているだろ
！！」

そう言っつて肩を怒らせながらコーヒーを淹れに行くサイノメから、
カタナは視線を夜空の星々に向けた。

「今日は星を数えずに済みそうだ」

夜は長い。眠らない者にとっては時間が止まったかと錯覚するほどに。

でも、誰かと過ごす時間はそれを忘れていられるから不思議だ。
カタナは心の内だけで感謝を述べ、思考のなかでサイノメをからかうネタを模索し始めていた。

第五話（裏） 夜空とカトリ・デアトリス

カタナがサイノメと情報を交わすのと同じ頃、別の場所、同じ満天の星空の下で剣を振り続ける少女が居た。

少女の名はカトリ・デアトリス。星々と同じ輝きの金髪を揺らしながら、ひたすらに一連の動作を繰り返す。

無駄なく、淡々と、体に染みついた型をほぼ無心のまま繰り返す。
「フツ、ハツ、セイ！」

呼吸法も掛け声もその動きにあつた適切なもので。疲労の蓄積を抑える、または一番力の出せるものが自然と出るほど洗練されている。

カトリの剣の型は、道場剣術のように一対一を主にしたものとは少し違い。背後からの攻撃や同時に多数を相手取るための足さばき、時には蹴りや手甲による防御や攻撃も交えた、より実戦を踏まえたものだ。

それはカトリ・デアトリスという、まだ少女と比喻される年齢の彼女が、危険な生き方をしてきた——あるいはしてこなければならかつた証でもある。

誰もいないゼニス市の郊外で、永劫続くかと思われたカトリの繰り返し稽古は予兆なく止まった。

かつては自身の中で型を繰り返す回数を数えながら臨んだものだが、すでに体に染みついたのは動きだけではなく、時間の配分や疲労度も無意識の内に、完璧に把握できるようになったため必要も無くなっていた。

そして長い時間、常に動き通しだったカトリが動きを止めたのは、稽古の終了を意味しているわけではない。

むしろカトリにとってはこれから本番といったところだった。

「——駆身魔法発現」

一言カトリが呟くと、自身の周囲に白い靈光が上がる。

体全体を包んでいくそれを、念入りに僅かに体を動かしながら確認していく。

「右腕、左腕、異常なし。右足、左足、異常なし。腰部、肩、首、全て異常なし」

カトリが発現させたそれは、霊力により世界の理に干渉する——いわゆる『魔法』と呼ばれるものの一つ。

正式な名称は『付加魔法系統・帝国式駆身魔法式』。

自身の体に、自身の意志を、外部から物理的に干渉する術式であり。修練を積み、相応の霊力を持つ者ならば、身体能力を数倍に跳ね上げる事も出来る。

内部ではなく外部から干渉するのは、魔法というものは自身の体内には発現できないからだ。

それは同じ波長の霊力は、混ざり合うと魔法が発現できなくなるという結果になるということに由来していて。自身の霊力で発現する魔法は、自身の体に絶えず流れている自身の霊力が発現を邪魔するから。

顕著な例では体内の治療力を活性化させる医療魔法は、他人を治すことはできても、自分を治すことは不可能という事が、これまでの研究で明らかにされている。

そしてカトリが使う駆身魔法はその盲点をついた、今の時点で唯一の魔法による身体能力の強化方法ともいえる。

だが外部から干渉するという方法は、それ故に危険も多い。

自身の身体能力を数倍に上げるという事は、それだけの力を自身に掛けるという意味で。

もし自分の意志とは裏腹な動きを自分の体がしてしまった時、あるいは自分の体とは裏腹な動きを自分の意志が示してしまった時は、使用者の身体を簡単に壊してしまう諸刃の剣となる。

だからこそ、先程までの無心で動けるほど体に染みつかせた型稽古であり、発現時の入念なチェックである。

カトリは有事の際にはそれもなく必要なく、瞬時に無理無駄なく発現

できる自信はあるが。だからといって平時に怠る理由もないため修練時には欠かしたことはない。

「では……いきましよう」

誰にでもなく自分に対して呟く。ここからはカトリにとっては意を決して行つ、過酷なものだからだ。

そして僅かに息を吹き込み、動き出すと世界が変わる。

同じ型、同じ動きでも、先程までとは段違いの速さである自身の身体を操るのは、至難の技だ。

常人ではもはや目で捉えるのは不可能な域に達した動きと、僅かなミスさえ許されない世界で、時としてフェイントや急制動も交え、決して単調ではない実戦の型を繰り返す。

呼吸さえ追いつかず、神経をすり減らしながらのその修練は、ピタリと決まったように止まった先程の修練とは違い、カトリが膝を屈する事で終わりを告げた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

服が汚れることもお構いなしに地面に倒れ伏したカトリは、顔だけ上げて懐中時計で時間を確認する。

「ぜえ……実時間で……五分強……ぜえ、新記録ですね……」

魔法無しの訓練ではその十倍は動き続けても息を切らすことはなかったのに、今は絶え絶えといった様子で呟く。

それほどまでの消耗と引き換えに得られる、超人的に動き続けられる五分。それが短いのか長いのかは微妙な所だ。

（それも様々な要因で不確定要素も生じる実戦では半分程度……）

せいぜい三分以下の間だけ。一対一ならそれでも充分だが、それ以上を相手にする場合心もとない時間だ。

（補うには、やはり地力をつけるしかない）

一人で強くなり、一人で戦う決意を決めているカトリには何よりも必要なものだ。

しかし限界も感じている。

（霊力の絶対量、そして性別の問題……と言えば、諦めのつくよう

などうにもできない理由になりますか)

魔法を発現するのに必要な霊力量は、生まれた時にある程度が決まっっていて、修練で高めることも可能だが、劇的に上昇したという事例はいまだかつてない。

それでも統計的に遺伝は関係していると言われ、そうした意味では武門の名家という家柄に生まれたカトリは恵まれているとも言える。しかし、カトリは自分の持つ霊力量には不満を抱いている。

(戦術魔法を一度も発動できないというだけで、自分の才能が中途半端に感じられてしまうのだから。困ったものですね……)

もし知識のある者がそのカトリの不満を聞けば、持つ者の贅沢だと説くか、あるいは腹を抱えて笑うだろう。人一人がそれだけの霊力を有するのはそれだけありえない事なのだ。

そして、霊力以外のもう一つの悩み。女であるという事。

単純に男性と女性では、女性の方が身体能力は劣る。太古から変わらぬこの世の真理とも言える事に不満を抱くのは、それこそ無駄なことだとも思う。

(しかし、それでも不満を抱いてしまうのは……)

自覚はある。カタナに負けたからだ。

それまでは誰かの負けたのはいつ以来だったか、記憶を遡らなければならぬほどだった。

武芸祭でも協会騎士団の騎士達を圧倒し、積み重なった自信も、ただそれだけで崩れ去った。

ただ不満とは別に、おかしい感情も芽生えていた。

(そう、私は嬉しい。とても嬉しいのです。自分よりも強いものが身近に存在するという事が)

人は目標がなくては足を止めてしまう生き物だ。上があると解つてはいても、道がなければ昇ることができない。限界など無いと信じていても、指標が無いと歩くことができない。

誰よりも強くなるという漠然とした目的しかなかった中で、誰かよりも強くなるという目標が見えた事はカトリにとって大きなプラ

スとなっていた。

「ふふふ、待っていて下さい聖騎士カタナ。私は貴方を超えて見せます」

息も整ったので、改めて修練を再開するためにカトリは立ち上がる。

そしていつの間にか取り落としていた魔法剣エーデルワイスを拾い上げた。

鍊金魔法で高純度に精製されたミスリライトを原料にし、最高クラスの鍛冶技術で鍛え上げられ、そして付加魔法で強化された五十年前の遺物は、今なお高貴ささえ感じられる白い輝きを失うことなく夜を照らしている。

使う者が使えば鋼鉄すら切り裂き、刃こぼれも無いその名剣にすらカトリの不満は尽きない。

いや、きっと結局は何に対しても不満は解消されないのだろう。（五年前……いえ、きつともっと前から私のエゴは続いているのでしょうね）

誰よりも強くなると決めた時から、家族の為に強くなると決めた時から、家族の為に自分の為だったと、気づいた時から感じている——呪いに近いもの。

現状に満足してはいけない。満足しては守れない。立ち止まることは許されない。焦燥感は留まるところを知らない。

（これは罪であり、罰。でもそれに救われている自分が、少し惨めですけど……）

デアトリス家に生まれた事も、デアトリス家が没落した今でも、それを名乗っているのがそうだ。

「つと、考え事で足を止めるのはダメですね——駆身魔法発現」
負のループに陥りそうになったのを踏みとどまり、カトリは修練を再開することにした。

カトリにとって過酷な修練がもたらす一番のものは、余計な事を考えずに済む時間だ。

結局それから東の空が白むまで倒れては起き上がり続け、カトリ・デアトリスが満天の星空に気付くことはなかった。

第六話 ヤーコフとカトリ・デアトリス

朝の9時20分、ミルド協会騎士団ゼニス市駐屯所では、ちょうど夜勤の者と朝の平常勤務の者との引き継ぎが行われていた。

とはいえってもゼニス市の治安は比較的良いため、引き継ぐほどの事は大してなく、ほとんどの場合は形だけに留まるが、その朝は少し違っていた。

「自警団に何かしらの動きがあつた？」

「ええ、市外に出動していったみたいです二十人ほど」

自警団とは騎士団以外の者で組織された、治安を守るための市民警察のようなものである。

それは本来、騎士団の任であるが。駐屯させておく人員にも限りがあるため、各市町村の長の判断で自警団を持つことを許されている。

特にゼニス市のように、首都から離れていて国境などにも面していない所は、騎士団を常駐させておく理由も薄いため、自警団を持つことが推奨されている。

その実、騎士団と自警団の間には変な競争意識のようなものもあり、時として摩擦も起こるが、それも治安維持のためには必要なものだと多くの者が思っている。

「市外か、どこに行つたのかは分かるっすか？」

「方角で言えば南という事しか解っていません。でも遠出するようで、全員馬に乗っていたと、見たものの証言があります」

「南に遠出……」

引き継ぎを受けていたヤーコフは考え込むように顎に手を当てる。ゼニス市は大陸の南端近くにあり、それより南には港にできそうな海岸もないため、あとは数個の村が点在しているだけのはずである。

もし自警団が本当に南に出動したとなれば、その数個の村の周辺

で問題が発生して、出勤の要請を受けたとしか考えられない。

「でもこつちには何も連絡は入ってきてないって事っすか？」

「ええ、自警団はもちろん。その他のどこからも何事もなくいつも通りです」

「はあ、自警団が出勤している以上は何事か必ずあるはずなのに、メンツでも気にしてんのかな」

嘆息するヤーコフだが、表向きは何事もない以上、いつも通りにするしかないと思った。

「分かった、ごくろうさん。後は僕の方から隊長に伝えておくし、一応今日は巡回を多めに行っておくことにします」

「はい、よろしく願います副隊長。ではお先に失礼します」

そうして引き継ぎを終えた夜勤の騎士は、少し眠そうにしながらも騎士団の敬礼を交わして退室していった。

「さて、隊長は今日も重役出勤か。でも昨日来ただかりの新人もまだ来てないってのは何でか？」

もしかして、と不意に不安がよぎる。

「昨日は二人で出かけていたみたいだし。あれで結構隊長はモテるうっむ、でも朴念仁の隊長がすぐに手を出すとは思えないし」

しかし、新人のカトリ・デアトリスという少女の美しさを思い出し。あり得る話かもしれない、という悪い予感もヤーコフにはあった。

実際ヤーコフも、副隊長という地位を忘れて舞い上がってしまったほどののだ。隊長がそうであってもおかしくない、と考えてしまう。

「だとしたら羨ましさすぎるよ隊長。月の出でない夜は背後に気を付けるっすよ！」

あまりの羨ましさに思いつきりヤーコフは声に出していた。

「誰が背後に気を付けろって？」

そして背後からの声にヤーコフは戦慄した。

「あ、はは。おはようございます隊長。今日もいい天気ですね」

冷や汗だらだらでも調子の良いヤーコフに、カタナは挨拶代わりに嘆息で答えた。

+++++

「申し訳ありません、遅れました」

カトリ・デアトリスが駐屯所にやってきたのは、本来の出勤時間より一時間遅れてのものだった。

「昨日の今日でいきなり遅刻とは良い身分だな」

「……いや隊長も遅れて……すいません何でもないです」

ヤーコフの指摘は視線で黙らせてカタナは続ける。

「うちは遅刻に対して罰則は特に決めてないがな。しかしそれだと他の者に示しがつかない」

だからどの口が言うのか、というヤーコフの視線も完全に無視してカタナは続ける。

「だから今日はこのヤーコフが、巡回を兼ねてお前にこの街を案内させようと思う。異論は認めない」

「い、異議あり!?!」

流石に聞き捨てならない事だったので、ヤーコフは声高に異議を唱えた。

「……なんだ？ 新人の案内がそんなに嫌なのか？」

「いや、嬉しいですけど……そうじゃなくて！ どうして僕が案内するのが罰則代わりみたいな言い方なんですか!?!」

「……それを俺の口から言わせるのか？ 酷な奴だなお前も」

やれやれと言ったようにカタナは肩を竦める。表情はかなり意地の悪い時のものだ。

「え、いやちよっと、何を言う気ですか？ そんな酷な事を言われるんすか？」

「そうだな。年中盛っているお前の生態を話せば、大抵の女は近づきたくなるだろうな」

それを聞いたヤーコフは顔を青くする。

「すいませんでした。異論はありません」

流れるような綺麗な土下座だった。しかも地面におでこを完全につける土下座の完成系をヤーコフはマスターしていた。

そんな様子を見て困るのはカトリだった。

「あの……隊長」

「ああ、大丈夫だ。ヤーコフは重役達の娘を四股にかけてたのがバテて地方に飛ばされてきた程度で、別に犯罪を犯したわけじゃない。仕事に関しては誠実な男だし」

「言ってる！？ 完全に言っちゃってる！？」

仕事に関しては誠実、という最後の褒め言葉が強調されている分、前半の誠実じゃない部分が余計に際立っている言い方だった。

「もういいから行けよ面倒だな」

あっさりとはらしておきながら鬱陶しげに手を払うカタナが、ヤーコフには悪魔に見えた。

「もう駄目だ……おしまいだあ」

地面に手をつきもはや顔も上げることができなくなったヤーコフ。しかし、手を差し伸べる者がいた。

「……え？」

「私は気にしませんよヤーコフ副隊長」

手を差し伸べるカトリの笑顔が、その時ヤーコフには天使ように感じられた。

「私、自分の身は自分で守れますから」

しかし、その言葉で絶望に立たされた。時として優しさは人を不幸にするものらしい。

「いや、いいだ。どうせ脈なんてなかったし。はは」

乾いた笑いをもらしながらヤーコフは自力で立ち上がると、私生活はともかくせめて副隊長としての威厳だけは保とうと表情を作っ

た。もうだいぶ遅いが。

「それじゃ行きましようか。仕事に関しては誠実な所を見せてやりましょう」

何か変な意地みたいなスイッチが入ったのか、妙に胸の張った態度でヤーコフは出て行った。

続いてカトリも出て行こうとするが、ドアの前で思い出したようにカタナに向き直った。

「……あの隊長」

「何だ？」

「もしよろしければ、後で稽古をつけていただきたいのですが？」

稽古の申し出、騎士団では特に部下と上司の間では珍しくはない。だが、基本面倒臭がりなカタナは大体断る。そもそも駐屯所では相手が務まるほどの者が居ないため、所望されること自体少ないが。

「……後でならいいぞ」

それでも断らなかつたのは昨日、カトリやサイノメと話した事が気になったからか。

（……おかしなもんだな）

面倒だからとサイノメに任せたり、ヤーコフに押し付けたりしていても。なんだかんだで自分にもお鉢が回ってくるあたり、世界は都合よくできていないのだなと実感した。

「ありがとうございます」

カトリは去り際にそう言い残してヤーコフに付いて行った。

「……とりあえず寝ておくか」

カタナは椅子に背を預け、腕を枕代わりに眠りに落ちる。

窓からは陽光がありありと差し込んでいた。

+++++

ヤーコフに対するカトリ・デアトリスの印象は、軽い男というのが本音だった。

先日初めて会った時は、自己紹介代わりに齒の浮くような台詞を言われたし。見た目も流行を意識した髪型やアクセサリ等が目につく。

雰囲気やしやべり方とはつつきやすさがあるが、それも軟派目的ではないかと思えてならない。

カタナに聞いた話と相まって印象はよろしくないと言える。

「ハハハ、ではデアトリスさん。僕がこのゼニスの街を案内しましょう。なあに、ここは僕の庭みたいなもの、あらゆる道を完璧に案内して見せましょう」

しかしこんなに無理に空元氣を見せる人を放っておくほど、カトリは人でなしではなかった。

「あの、副隊長。そんなに無理しなくても、私は隊長の言ったことは気にしませんから。普通にしていたで結構ですよ？」

「……そんな事言つて、僕の事を最低のゲス野郎だと思っているんでしょう？」

「そんな風には思っていない」

そう、最低だとは少し思ったが。ゲス野郎とまでカトリは思っていないかったから、嘘はついていない。

「……副隊長がこんな奴で、先が思いやられるわ、ともか思っているんでしょう？」

「思つてません。大体さっきの話は本当なのですか？ その……重役達の娘を四股にかけていたとかというのは……」

正直、目の前でいじけているヤーコフという男が、そんな大それた事をしでかす様には、カトリにはまったく見えない。

ついでに言えばそんなにモテるようにも……。

「……若氣の至りで、本当の事っす」

しかし、ヤーコフはあっさりと認めた。

「どうしてそんな事に？」

その問いは完全に興味本位だった。一応カトリ・デアトリスも一端の女性であり、そうした話に全く興味が無いわけではないのである。

「……実は僕、ちょっと前までは将来を有望視されていた騎士だったんっすよ」

ヤーコフは眩しそうに空に向かって顔を上げると、懺悔するように語りだした。

「……？」

疑問符。

人は見かけによらないという言葉があるが、中背でそこまで遅しくも見えないヤーコフが、将来を有望視されるような騎士だったとは信じがたい事だった。

「誇張ですか？」

「キミもたいがい酷いな！ 本当の事っすよ！」

ちよつと必死過ぎるようにも見えるが、信じない事には話が進まないとかトリは判断した。

「それで……将来を有望視されていたはずの副隊長は、どうして四股などを？」

「……上司には目をかけてもらっていて。縁談とかも結構来たんすよ」

優秀な者には子種を残してもらいたくて、若いうちから縁談を持ちかけるといふのはよくある話だ。

実力主義的な思想を持つ共和国ではなおの事。後継ぎを自分の身内とするために、権力者は政略結婚に近い縁談を部下に強いる事もある。

「もしかして……」

「うん、次々舞い込んでくる縁談を断れない内に四股してる事になってたっす」

「それは……どちらが悪いかは微妙なところですね」

共和国の法では一夫多妻制度は認められていない。

なのにそれだけ同時に縁談が持ち上がったというのは、権力者達が派閥間でヤーコフを取り合っていたからで。

その煽りをヤーコフだけが受けた様にも考えられるし、しっかりと断らなかつたのが悪いともいえる。

「お蔭で世間からは『ハーレム騎士』の二つ名を頂いてしまったつつわけっす」

一人の騎士のスカンダルを聞いて、カトリは協会騎士団というものに不安を覚えた。

現在のミルド共和国を支えているのは、ミルド協会騎士団という軍事力に他ならない。

五十年前の大戦以降、国家間の戦争が表向きは一度も行われていないのは、バステイト王国とガンドリス帝国に匹敵する軍事力を持つ、ミルド共和国が中立を誓っているからなのだ。

それはかつて聖剣で世界を救った勇者の平和への志が、五十年もの間受け継がれていたからであり、そのための力がミルド協会騎士団である。

しかし、その想いがもし一枚岩ではないのであれば、いつか欲を持った者が制度を、国のあり方を変えてしまいかもしれない。そしてそれは大陸すべてのバランスを壊して、大戦前の戦乱の世が戻ってくる事を意味するかもしれない。

「……人と人が争う事は悲しい事ですよね」

「？ 何の話っすか？」

何の話でしょう？ と、作り笑いで誤魔化したカトリは、今感じた不安は胸に秘めておくことにした。

（些細な事で考えすぎですね。もしそうだとしても、私には如何する事も出来ないこと。そんな余裕すらありません）

どうにもできないのであれば、放っておく。それがカトリがこの五年で培った処世術なのだ。

「ゼニス市の駐在騎士になったのも、それが理由なのですか？」

カトリが話を戻すと、感傷に浸っている風だったヤーコフもそち

らに意識を向ける。

「そうっすね、本当は騎士勲章を剥奪されるところだったんすけど……まあ、そこで今の隊長に拾われまして。割に合わないと思うほどき使われる毎日っす」

「心中お察します」

配属されて二日目だが、なんとなく部隊の力関係というか役回りというものを、カトリは理解していた。

「まあ、恩もあるし。暇なよりは忙しい方が、嫌な風評を気にしないでいらるって意味で、ここに来てよかったって思えてるっすけどね」

言葉はどこか皮肉げだが、そう言ったヤーコフの表情は少しだけ晴やかだった。

「……昔に戻りたいとは思いますか？」

カトリ・デアトリスのその問いは誰に向けたものだろうか。あるいは、自分自身に向けたもので、答えなど欲していなかったのかもしれない。

しかしヤーコフは応えた。

「思わないっすね」

即答だった。

あまりの即答にカトリは疑問すら覚えたが、ヤーコフは続けて言葉を発した。

「だって思ったところで過去は戻ってこないっすよね。だったら昔をいつまでも引きずるよりも、未来の不安について頭を悩ませたりしてる方が、ずっと建設的っすから」

少しだけ自嘲気味に言ったヤーコフの言葉は、現実的で面白味のないものだった。

しかしカトリには、その答えこそがヤーコフの人柄を表しているのだと感じられた。

「夢のない話ですね」

何か気の利いたことを聞きたかったわけでも無いが、カトリは思

つたままを口にした。

「二十の半ばにもなつてくると夢なんて見てられないんすよ。夢を見るのは十代の特権ってね」

ウィンクを交じえて冗談っぽくヤーコフは言った。

「私は夢なんて見ませんが……まあ人生経験豊かな副隊長がそう言うのならそうなのでしょね」

「デアトリスさん……たまに手厳しいっすね」

「現実的な意見です。あ、それとデアトリスではなくカトリで結構です。家名で呼ばれるのは好きではないので」

「おっと、これは失礼しました」

「……何故嬉しそうなのですか？」

ヤーコフの口元が若干緩んだのをカトリは見逃さなかった。そんな反応を見せられれば、勘違いされたのかと不安になってしまう。

「いや、僕としても貴族姓を持つ人とあんまり接した事が無くて、実は少し戸惑っていたんですけど。でもなんとなく、カトリさんとは仲良くやれそうな気がしたもんで。あ、上司と部下でって意味っすよ」

「……そういうことならいいですけど」

何をもってそう思われたのかはカトリには理解できなかったが、そういうことにしておいた。

「じゃあ二人の距離も近づいたところで、そろそろ行きますか」

「別に近づいてはいませんが、確かにここに立ち止まっている理由はありませんね」

気づけば結構話し込んでしまったかもしれないと、今更ながらに思った二人は本来の目的のために足を向ける。

「おや、ヤーコフさんじゃないか。こんにちは」

と、正面からすれ違ってくる女性から声がかかった。おそらく近所に住む市民だろう、恰幅の良いその女性の両手には買い物袋が下がっている。

「あ、どうもこんにちはキョーコさん」

ヤーコフは知り合いらしいその女性に挨拶を返す。カトリも一応会釈をすると、キョーコというその女性は、にんまりと嬉しそうに笑った。

「ヤーコフさんは、今日も違う女の子を連れてるんだね」

「ちょ、ちよつとキョーコさん！ 何言うんすか！」

あわてた様子のヤーコフを面白がるようにキョーコは声を上げて笑う。

「かっかっかっか、まああんたが真面目な人で、彼女達とも誠実に付き合っているのは分かってるから大丈夫。でも本命は早いうちに決めてあげなさいよ」

ひとしきりからかって満足したのか、そのままキョーコは去って行った。

「……」

「……」

残されたヤーコフとカトリの微妙な空気を残して。

どうやら『ハーレム騎士』の二つ名は過去の件だけでついたものではなかったらしい。

「……あのカトリさん」

「デアトリスで結構です副隊長。なんとなく、副隊長に名前で呼ばれるのは汚らわしいと感じました。あと可能ならば半径三メートルは離れていただけると嬉しいです」

「……ですよねー」

そうして結局元通りのような間隔で、二人は再び歩き出した。

第七話 騎士団と自警団

「ここがゼニス市の中央広場っす、昼間は人通りが多いんで迷子とか結構でるんすよ。一応最低一人は部隊から置くようにしてます」

「迷子……ですか。それも騎士の仕事ですか？」

「そうすね。魔物や盗賊を討伐したり、手配犯を捕まえるって事以外にも、市民を守るためにできることはありますから。皆が細かい所に目を配れるようになれば、犯罪も減りますし」

「なるほど。確かにそうですね」

ヤーコフの話を聞いて、カトリは少し目から鱗が落ちる思いだった。

殺伐とした環境に身を置きすぎたせいか、他人を気に掛けるといふ余裕もなくなりかけていて、当たり前前の事にも気が付かない自分が恥ずかしい。そう思ったのだ。

ヤーコフがまず始めにカトリを連れてきたのは、ゼニス市の中心、名称もそのまま中央広場と呼ばれる所。

円形に道が舗装され、囲むように市外からの商人の露店が軒を連ね、買い物や見物の市民と、商人の呼び込みの声でとても賑やかだ。

「それにしても、意外に人が多いですね……」

人の波を避けながら、カトリはヤーコフのすぐ後ろをついて歩く、半径三メートルの縛りも今この時は封印していた。

「まあゼニスには位置的には田舎っすけど、結構潤っている面もありますから」

大陸の南端近くの片田舎、港も作れないうえ山に囲まれていて交通の便も悪い、多くの者がそういう印象のゼニス市だが、市を名乗れるまでに発展したのは田舎であったというのが重要事項だった。

五十年前の大戦で多くが戦場になった共和国の中央部と違い。戦略上重要ではなかったゼニス付近の土地は、自然がそのまま残って

いて、特に周囲の山々で採れる多くの木材は共和国の建国と発展に大きく貢献した。

「……まあ、貧民街なんてあるくらいなんで、皆が皆富める暮らしと言えないすけどね」

商業に偏りがあると、貧富の差にもそれが浮き出る事になる。それに月日によつて中央の土地が復興した今となつては、ゼニスの発展の根幹だった林業も下火になりつつある。

そうして職を失つていく者が年々多くなっている事は、今のゼニスの一番の問題点でもあった。

言いながら齒がゆく思つたのか、ヤーコフの表情は少しだけ渋くなっている。

軽い見た目とは裏腹に、心の内は結構真面目な所のあるヤーコフは、本気で現在の世情に嘆いているようにカトリには見えた。

「……副隊長」

「ん、あ、すみません。今は職務に集中しないとつすね」

「いえ、別にそういう意味で呼んだわけではないですけど」
本当に仕事に関しては誠実な人だ、とカトリは関心した。

（これで女性にだらしなくなければ、好感も持てるのですが……）
天は二物を与えずという言葉を思い出し、少しだけ残念に思つた。

「おっと、やばい」

と、突然ヤーコフが後ろを振り返つて足を止めた。

バツの悪そうな表情で顔を伏せて額を掻いている。

「どうしました？ もしかして恋人にでも見つかりましたか？」

カトリが冗談めかしてそう聞くと、ヤーコフは首を振り、少し真面目な顔で答える。

「ちよつと嫌な顔が見えたんで、見つからない内に……」

「おい！ 誰かと思えば協会のハーレム騎士さんじゃねーか」

野太い大声が広場に響き渡り、人の波をかき分け、体格の良い男がヤーコフを呼び止めた。

ヤーコフは嘆息しながら男の方に向き直る。表情から察するにあ

まり友好的な関係ではなさそうだった。

「何か御用っすかダルトンさん？」

「こんな真昼間からデートたあ、景気の良い事だな。こっちは忙しくてそんな暇なんてねえのに、騎士様は羨ましいぜ」

ヤーコフにダルトンと呼ばれた大男は、腰に剣を帯びていて、緑を基調とした自警団の制服を着ていた。

顔には大きな傷跡が走っていて、体格の良さと相まって百戦錬磨の傭兵のようにも見える。しかし下卑た笑みを浮かべ、その言葉尻からも品格は感じられない。

「いえ、デートではないっすよ。うちに配属された新人の案内をしていただけです」

ヤーコフは冷静に対応する。面白がっている風なダルトンとは正反対の冷めた表情だ。

「新人？ 協会騎士団はこんな小娘を使わないといけないほど人手不足なのか？ はっはっはっは、こりや傑作だ。こんなのが騎士だなんて、協会騎士団も地に落ちたな」

ダルトンの大声は周囲の注目を集めている。カトリにはわざとそうしているようにしか見えない。

「……それはどういう意味ですか？」

そしてダルトンの中傷的な言葉は、今のカトリには決して聞き流せないものであった。

「どういう意味も、こういう意味も、そのまんまの意味だろ？ 協会騎士なんて女のおままごとでも務まるんだなって言ったのさ」

「……ほう、おままごと、と言いましたか」

「もしくは色欲か？ あんたあ美人だから、身体使ってそっちのハイレム騎士のお情けでも頂戴したのかな？」

「——！！」

カトリの瞳に鋭さが差し、腰の剣帯に手が伸びる。

しかし柄を掴む前に、カトリの腕はヤーコフに掴まれる。

「……揉め事は駄目っす。ここは我慢してください」

小声で告げるヤーコフの表情は真剣そのもので、切実ささえ感じられる。

「ここまで愚弄されて、如何して黙っていられましょうか！」

しかし、意外と沸点の低いカトリはヤーコフの手を振り払う。ダルトンの挑発に完全に頭に血が上っていた。

「駄目っす、絶対駄目っす。僕らがこの街に駐在してるのは治安を守るためっす。その僕らが治安を乱すようなことはしてはいけませんよ」

以外にもヤーコフは強い姿勢でカトリを窘める。それは駐屯部隊の副隊長という責任を背負う者として確固たる意志があった。

「——しかし！」

「駄目なものは駄目っす。どうしても言うならば、僕の権限でデアトリスさんを除隊処分にしなければなりません。それに、その場合デアトリスさんは取り締まりの対象になってしまいます」

そうした場合どうなるか。ヤーコフは解らせるように剣帯に手をかける。

如何に部下であったとしても、切り捨てる覚悟はある。その決意だけは伝わってくるようだった。

「……わかりました」

カトリは強張らせていた全身の力を抜いた。

ヤーコフの言う事はもつともで、一時の激情の為にその正しい信念と相對するのは、自身の品格をも陥れると気づいたから。

ヤーコフもカトリのその様子に、ほっと胸を撫で下ろす。

しかしつまらなそうにしている男がいた。

「なんでえ、せっかく面白くなりそうだったのに、拍子抜けだぜ」
ダルトンは舌打ちしながらヤーコフを睨み付ける。

「あんまりうちの新人をからかわないでほしいっす。では巡回中なので、僕らはこれで失礼します。ダルトンさんがここを見回ってくれてるなら、安心して次の場所に行けますから」

ダルトンの睨みもヤーコフはどこ吹く風で、あくまで飄々と受け

流す。

「まあ、待てよ」

立ち去ろうとするヤーコフの肩をダルトンは掴みあげる。

「なんすか？」

まだ何かあるのかと、少々うんざり気味にヤーコフが振り向くと、すぐそこに拳が迫っていた。

ドゴツ

「うわあっ！」

「きゃあああああ！」

殴り飛ばされたヤーコフは、露店の一つに突っ込み、その一帯の客と商人の悲鳴を呼んだ。

「貴様！ 何故殴った！」

カトリは、ヤーコフを殴りつけたダルトンに向かって檄を飛ばす。ダルトンは薄ら笑いすら浮かべて答えた。

「ハッ、そんなのあいつのすかした態度が気に入らなかったからに決まってるだろ」

それは最低の返答。

少なくともカトリにはそう断言できた。

そして思考はただ一点『今が剣を抜く時』と警鐘を鳴らしている。……いざ」

我慢の限界を超えたカトリの選択は一瞬。

エーデルワイスの柄を握り、ヤーコフの様子を見ているダルトンの死角に一足踏み出し、切り上げ……ようとした時。

「だから駄目って言うてるっすよ、デアトリスさん」

またしても止めるのはヤーコフだった。

殴られた片頬が赤みを帯びているが、さも平気そうに泰然と立つ姿は、その身を大きく見せている。

「僕が殴られたことを怒ってくれるのは嬉しいですけど、僕はこのく

らい気にしてないっす。でも僕が気にしてない事を、デアトリスさんが怒ってしまうのは迷惑な事っす」

「……どうして、ここまでされて」

怒らないのか。非は明らかにダルトンの側にあるのに、他人ごとのはずのカトリでさえ怒りを覚えているのに。どうしてヤーコフは平気な顔をしているのか。

カトリには理解できない。理解できないながらも、有無を言わせないヤーコフの強い意志に負け、剣を収める。

「『我が剣は我が為に非ず』」

ヤーコフはどこかで聞いたことのあるフレーズを口に出した。

それは協会騎士団が掲げる憲章の中の一説。

私闘を禁じ、自身以外の余人の為にのみ剣を振るうという、騎士道の理想であった。

「僕はこれでも騎士の端くれ。どんなふうに使われても、思われても、その誇りは一時も忘れることはないっす」

ヤーコフは静かに宣言した。そしてその言葉はこの騒ぎでできていた周囲の人だかりに静寂を与える。

皆、一人の騎士の清廉な誓いに只々感服し、そしてそれはカトリ・デアトリスも同じだった。

しかし、ただ一人その誓いを侮蔑する者がいた。

「結局はやられてもやり返さねえだけの腰抜けって事だろ。それで格好つけてるつもりかハーレム野郎」

ダルトンはヤーコフを陥れようとしてるつもりなのだろうが、それが自分を陥れていることになっていないことに気付かない。

「いい加減にしましょうダルトンさん。もう気が済んだでしょう？ これ以上の騒ぎは個人同士ではなく、自警団と騎士団の問題にも発展しかねませんよ」

「……てめえのそういうすかしたところが大嫌いなんだ」

ヤーコフの正論も、ダルトンには通じない。正しい言葉は時として、向けられた者の感情を逆なでしてしまう事もある。

「……いいぜ、あくまでてめえが騎士の誇りつてもんを守る気なら俺はそれを捻じ曲げてやるよ」

ダルトンはヤーコフの胸ぐらを掴みあげ、拳を振りかぶる。

ヤーコフが反撃しないのをいいことに、まだ暴力を振るう気でいるのだ。

「副隊長！」

「大丈夫つす。耐える精神を養うのも騎士の務めつすよ」

「——ぐっ！」

カトリの心配も、ヤーコフには不要だと言われ。踏み出しそうになった足を引っ込め、奥歯を噛んで耐える。

「どうぞダルトンさん、殴りたいだけ殴ってみるがいいつす。でも僕の信念は貴方には屈しない」

「そうかい。なら言葉通り、好きなだけ殴らせてもらうぜ！」

ダルトンはその大きな拳を遠慮なく振るう。そこには一切の手加減もない。

誰もが目を背ける中、ヤーコフは自身に迫る拳から目を離さなかった。

「ちよつと待ちな」

まるで狙ったようなタイミング。英雄が誰かのピンチを救う時に現れるように、ヤーコフが殴りつけられる寸前で誰かの声がかかった。

反射的に動きを止めてしまったダルトンは、忌々しげに邪魔をしたその声の方に顔を向ける。

「何だお前は、こいつらの知り合いか？」

そこには騒ぎで出来た人垣から進み出る男の姿があった。

長身で痩せぎすというより引き締まったという印象の痩躯、燃えるような赤い髪を逆立て、服装は上がシャツ一枚に下が皮のズボンという出で立ち。

だが外見で突出して目につくものがある。それは刺青、見えている皮膚のほとんどに不思議な紋様が刻まれていて、それだけで男がとても異質に見えてしまう。

「俺はただの通りすがりさ。なんとなくあんたらの喧嘩のやり方が気に入らなかつたから止めただけさ」

通りすがりと称した刺青の男は、確かにその通り、ヤーコフも力トリもダルトンとも見知った中では無い。

「下がってくださいっす。これはあくまで僕らの問題で、関係ない方を巻き込むわけにはいかなつす」

「騎士のにーちゃんは黙っててくれ。俺は巻き込まれるんじゃないで、割り込むのさ、あんたらの喧嘩にね」

「け、喧嘩？」

「そ、男の意地と意地がぶつかってんのなら、それは喧嘩だろ？」
確かにそうなのかもしれないが、喧嘩の一語で済ませられると、

ヤーコフの誓いとかも少し安く感じてしまうから不思議だ。

「……喧嘩ね。それでもいいが割り込むってことは、お前は俺の邪魔をする気だつて事でいいのか」

ダルトンは刺青の男を睨み付けながら問う。しかし刺青の男は首を横に振り、否定を示す。

「いや、俺はあんたと無性に喧嘩がしたいだけ。別に邪魔をするつもりはないさ」

「……それを、邪魔だつて言うんだよ！！」

ダルトンは掴みあげていたヤーコフの胸ぐらを放し、腰に付けた剣帯から得物を引き抜く。

周囲の人垣から悲鳴が上がった。今の今まで注意を集めているに留まっていた騒ぎが、刃傷沙汰にまで発展したことで、広場に軽いパニックを引き起こし、逃げ惑う人に溢れた。

「切られなくなかつたらさっさと失せな」

ダルトンは鉄剣の銀光をちらつかせ、刺青の男に向かって凄む。
対する刺青の男は丸腰であるが、なんら動じた様子もない。

「いいぜ、あんたのそのクズっぷり。喧嘩するには最高の相手さ」

むしろ喜んでるように、獣のような獰猛な笑みを浮かべていた。一触即発、そんな空気の中、静かな怒りを燃やす者がそこにいる。

「……駆身魔法発現」

「……え？」

ヤーコフの全身に白い靈光が上がるのを、カトリ・デアトリスは見逃さなかった。そして彼がその場を制圧する、一部始終を見た。

ヤーコフは右手に引き抜いた長剣で、ダルトンの持つ剣を叩き落とし。左手に取り出した短剣を、ダルトンの首筋に押し当てる。

ハイレベルな駆身魔法の発現を、目の前で見せつけられたカトリは驚きで言葉を失う。

ダルトンはいきなりの形勢の逆転に動転し、刺青の男は目の前で起こった出来事に苦笑していた。

「……てめえ、卑怯だぞ」

やっと状況を理解したダルトンが口にしたのは、程度の低いそんな恨み言だった。

「騎士が常に正々堂々と戦うとは思わないでほしいっす。守る者の為なら僕はどんな手でも使っつすよ」

ヤーコフは怒りさえ滲む口調で、捲し立てる。

「あんたはやっちゃいけない事をしたっす。自警団員であるあんたが帯剣を許されているのは、喧嘩に持ち出す為じゃない。市民を守るために許されている権利を、市民を傷つけるために持ち出すなんてあつてはならない事っす」

「う……」

僅かにダルトンの首の皮を裂いたヤーコフの短刀が、血を滲ませ滴り落ちる。

ダルトンの額に脂汗が流れる。ようやく気付いたのだ、自分の命が今は他人に掴まれていることに。

「僕に突っかかってくるのはまあいいっす。自警団と騎士団の摩擦も、切磋琢磨につながるなら許容できる事っす。しかし、許された

権利を逸脱して、間違いを犯すのは許されない事っす」

「……わ、分かった。分かったから殺さないでくれ」

全身が硬直するほどの緊張を見せるダルトンの訴えは切実で、これでは説教どころじゃないと判断したヤーコフは短剣をゆっくりと首から離した。

ダルトンは膝から崩れ落ちる、そしてヤーコフは遠慮なくその手に手錠をかけた。

「話の続きは所でするっす。自警団に引き渡すのはその後で、それまではじっくりと聞いてもらっつから覚悟するっす」

「……」

返事する気力も無いのか、ダルトンは首を縦に振るだけで肯定を示す。

「貴方はどうするすか？」

思い出したようにヤーコフは刺青の男に問う。

なんとというか出番を根こそぎ奪われて、微妙な表情だった刺青の男は、一瞬カトリの方に視線を送った後に、ヤーコフに向かって言った。

「俺は帰るさ。面白いものも見れたしな」

そう言っつて背を向けて去っていく刺青の男。結局彼は何だったのか、その背中に訝しむ視線を送りつつも、ヤーコフはカトリに確認する。

「知り合いじゃないっすよね？」

「はい、初めて会う方で間違いないです」

もし、あんな特徴のある刺青を一目でも見れば、記憶から抜けることはないだろう。

「まあ、それならいいんす。それよりすいません、市内を案内するはずがこんな事になっつて」

「構いません。副隊長のせいではありませんし」

ヤーコフからすると、結構自分せいでもあつた気がしたが、氣を使っつてくれているのかもしれないので、素直にそのまま受け取っつて

おいた。

「それじゃ、行くつすよダルトンさん。いつまでも座り込んでないで立ってくださいっす」

「わ、分かった。分かったから殺さないでくれ」

もはや、ヤーコフが話しかけるだけでビクついているダルトン。余程さっきの事が恐怖を感じたのだろう。ヤーコフもこのままの方が色々と楽だろうからと、特に訂正する気もなかった。

そうして小一時間ほどで終わってしまった巡回を兼ねた市内案内だったが、カトリ・デアトリスにとってヤーコフという男を知る機会となったのは、結果的に自身の目的に添うものとなった。

第八話 本気と稽古

ゼニス市のミルド協会騎士団駐屯所の屋上に、カタナは若干の後悔と共に突っ立っていた。

後悔の理由は、目の前で全身から靈光が上がっているカトリ・デアトリス。

視認出来るほどの高密度の靈力の光は、大気上の靈子に人の持つ靈力を反応させ、自然に干渉して現象を引き起こす——魔法の発現を意味するという事。

それは誰でも知っている世界の常識とも言える事であり、魔法が使えないカタナも当然のように知っている。

問題は、なぜ目の前の少女が魔法を発現していて、なぜ真剣（正確には魔法剣）を自分に向けて構えているのかという事。

（……確かに稽古に付き合うとは言ったが）

そう、今朝確かに約束した事は覚えていて。その為に駐屯所の屋上に、カトリを連れてきたのもカタナ自身だ。

しかし、どう考えてもおかしい。

それを一々指摘せねばならない事が何よりおかしい。

「……お前、やはり馬鹿だろ」

「な、何ですか藪から棒に」

とりあえず常識というものを、この馬鹿に自覚させなければいけない。

普通、剣の稽古や修練を行う時は怪我の無いように、刃引きされた訓練用の模擬剣か木剣を使うのが当たり前。それでも本気で打ち合えば、骨の一本や二本は平気で折れるくらいの危険はあるが、真剣を持ち出すよりは命の危険は遥かに少ないだろう。

当然、この駐屯所にもちゃんと訓練用の剣は用意されている。

ちなみ防具もあり、カトリはそっちをちゃっかり着用していたり

する。カタナはいつもの黒の平服に黒の外套のままの格好だが、実はそれがカタナの戦装束なのだ。

「どこの世界に、訓練稽古に魔法剣持ち出す馬鹿がいる？」

短い一言に、そうした常識というものを凝縮してある。面倒臭がりのカタナにしては、それでも異例の処置だ。

「え？ 何かおかしいですか？」

しかしカトリは全くの意表を突かれたように目を白黒させる。

「……お前は今まで誰かと稽古した事は無いのか？」

「ありますが、そういう事を指摘されたのは初めての事です」

「……」

ひどい、これは最悪だ。カタナは生まれて始めて、顔も名も知らぬ誰かに向かつて憤りを感じた。

何せ、本来その誰かがしなければならなかった、カトリ・デアトリスに常識を叩き込むという面倒を、自分が被らなければいけないようになっていたからである。

だいたい貴族の令嬢というのは世間知らずと相場が決まっているが、これはもう別のベクトルというか次元の話になっている気がする。

それにこういう時に限って、そういう役回りに適したヤーコフが居ない。何故か奴は巡回中に自警団を捕まえてきていて、下で説教している最中だ。

とりあえず後でヤーコフには報いを受けてもらう事にして、カタナは思考を切り替える。

「まず、馬鹿なお前に一つ忠告がある。剣で斬られれば人は死ぬぞ」

「ば、馬鹿にしないでください。そんな事くらい弁えてます!!」

カトリは顔を真っ赤にして、まさかの弁えている宣言。むしろそっちの方がカタナとしては最悪だ。

「……じゃあ、なにか。お前は最初から殺すつもりで俺に剣を向けていると？」

だとすれば、カタナはカトリ・デアトリスという少女を見くびつ

ていたことになる。

もしこれでカタナが殺されても、稽古中の事故と偽って免罪とする。無理がありそうだが、カタナの持つ騎士団での悪評価が、そう転ばせてもおかしくない事を考えると言い手なのかもしれない。そう思っただけでカタナは若干感心した。

「違います！ 寸止めくらい私にもできます！」

カトリは豪語するが、剣の寸止めの難しさを知っているカタナには納得できることではない。失敗した場合、首が飛ぶのはカタナの方なのだから。

「大丈夫です。その為のこの魔法ですから」

カトリが言っているのは全身に作用させている駆身魔法の事で、ヤーコフが似たような魔法を発現できる事を知っているカタナは、身体制御式あるいは補助強化式の魔法だという事は理解できた。

「この魔法なら危ないと思った時に、私の意志一つで急制動が可能です」

「……それは、やるとお前の身が危険じゃないのか？」

「いえ、失敗してもせいぜい腕の一本が折れるくらいなので、問題はありません」

そう当然のように言い放つカトリに対して、カタナは呆れを通り越していた。

（本当に、どんな環境で育ったのか知りたくなるな）

腕の良い治療師の魔法なら、骨折も数日で完治は可能かもしれない。だが、骨折をする時の痛みは、治るからと安易に考えられるほど軽いものではない。

それを問題ないと言い張るカトリには、虚勢ではなく何度も経験したうえでの実感が伴っているのがカタナには感じられた。

それでも、

「悪いが、信じられないな」

カタナは突き放すように言った。

反論の余地の無い拒絶の言葉に、流石のカトリも言葉をなくす。

「……別にお前だけを信じられない訳じゃない。俺は基本的には他人を信用しないだけだ」

まるでフォローしているようだが、カタナにはそのつもりがなく、実際そうだから本当の事を言っているだけ。

カタナは他人を信用しない。例外もいるが、基本的には自分だけを信じているし、今までの人生がそうさせてしまった。

それはどうしても曲げられない。屈折していると自覚もある確固たる倫理感だ。

「残念です。隊長には私の本気を今一度、改めて評価してもらいたかったのですが」

結局、食い下がる余地の無いと判断したのか、カトリは剣を引いた。

しかしカタナは下がろうとするカトリを制止する。

「まあ、待て。勘違いするな」

カトリは訝しげにカタナを見る。それも当然だ、今の会話の流れから勘違いする余地は見当たらないのだから。

それでもカトリは確かに勘違いをしていた。

「俺はお前の魔法や、寸止めの技術を信用しない。だが俺は俺の事だけは生憎と信じられる」

「——？」

「まあ、つまり。お前がいくら本気でその剣を振り回そうと、俺にはかすりもしないから好きなようにかかってこい。存分に稽古をつけてやるって事だ」

堂々とカタナは言い放った。

内心このままお開きでもいいかとも思っていたが、大きな心残りが一つあったからだ。

「そのかわり、俺にお前の剣がかすりもしなかった場合は、二度と訓練稽古に真剣を持ち出すな」

そう、カトリ・デアトリスに常識を叩き込むという事。

ただでさえ問題児がそろっている自分の隊に（カタナ自身の事は

棚上げ)、新たな問題が発生するのを防ぐため、カタナは面倒臭さを押し殺してそう決めた。

対するカトリは笑みさえ浮かべてそれに応じる。

「良いでしょう。そうなれば、私は隊長以外にはこの剣を向けないでしょうから」

「俺にも向けんな」

それにはカトリは何も答えなかった。

代わりに改めてエーデルワイスを抜いたカトリと、外套の隠しから何も持たない右手だけを出したカタナの、本気の稽古が始まった。

+++++

実時間で五分間。その長いようで短い時間を経て、カトリは膝を屈した。

その五分に技の応酬というものは全く無く。

あったのは応酬ではなく、カトリからの一方的な怒涛の攻めと、それを躲し、流し、軽く往なすカタナの姿。

カタナの言葉通り剣はかすりもせず、拳打や蹴撃で意表を突こうとしても、まるでお見通しであるように通用しない。

完全に見切られている、それをしつかりと実感した途中からは寸止めの意識も薄れ、終わり頃には完全に振り抜いていた。

それだけ全力だったにも関わらず、カタナは淡々と単純作業でもこなすように、無手の右手一本をうまく使って全て捌ききった。

「ふう……本当に、信じられません」

駆身魔法による強化でまず常人には捉えられない剣速も、最小限の動きの紙一重で全て躲すカタナの反応速度は、それこそ魔法でも使っているかと錯覚するほどの速さだ。

しかし、魔法は視認できるほど高密度の霊力によってしか発現はで

きず、カタナからはその兆候は無い。それがカタナの地力を裏付けていることがカトリには到底信じられないのだ。

武芸祭で感じた力の差は、今この時を持って開いていく一方だった。

「もう、打つ手無しみたいだな。終わりでいいか？」

そう告げるカタナは、カトリから見て圧倒的な強者であり。同時にそう感じてしまった事に悔しさを覚えたカトリは、最後に足掻いてみることを決めた。

「いえ、もう一手」

「――む」

カトリは屈した膝を持ち上げると同時に、腰だめに振り抜いたエーデルワイスをカタナに投げつけた。

剣の投擲は剣士にとって最後の手段で、それは悪足掻きの破れかぶれに他ならない。

意表を突くには十分だが、しかしエーデルワイスという決め手を放した時点でそれは有効ではない。僅かに見せるカタナの隙も、そこを突く武器が無ければ意味がないのだ。

しかし実はカトリにはもう一つ武器がある。それこそが真の最後の一手。

カタナは回避の動作に入っている上、視線はエーデルワイスを捉えている。絶妙のタイミングを見極めたカトリは、霊光の集束する左手の掌をカタナに向かって突き出した。

「――雷槌」

電力球の魔法が発現し、一直線にカタナに飛ぶ。

それこそがカトリの最後の武器。戦技魔法という系統に区分される、それだけで戦闘に有効な効果あるいは破壊力を持つと認められる魔法。

駆身魔法で消耗してはいても、直撃すれば意識を刈り取るくらいの威力は出ている。

そして戦技魔法は魔法を使えるものにしか防ぐ手立てはない。それ

以外の者が対処する場合は回避しか選択肢は無かった。

「——っ」

タイミング的に回避は間に合わず、魔法も使えないカタナには、当然防ぐ手立てはなく。

選択肢はない。

炸裂音。

高圧の電気が打ち付けるような音が辺りに響く。

そこに立つ者は二人、カタナとカトリ・デアトリス。

「……あれが防がれるとは、もう打つ手なしです」

数秒の静寂を挟んで、口を開いたのはカトリの方だった。

「いや、あれだけ高速発現の戦技魔法まで使えるとは。侮っていた」
カタナも初めてカトリを称賛するような言葉を口にする。それだけの驚きと敗北感があつたからだ。

戦技魔法に区分される魔法は、瞬間に必要なその効力・威力・距離などから消耗も激しく、またそれだけの条件をクリアするための霊力と霊子の反応・発現には十分な時間が必要となり。霊光という兆候があるため、それらをどれだけ削れるかが魔法を使う者たちにとって永遠の課題になっている。

協会騎士団の魔法戦隊の隊員が、威力を抑えたものを発現したとしても五秒弱。その半分以上ともなれば、どこに出しても恥ずかしくない天才だと判断される。

カトリ・デアトリスが垣間見せたのは、天才と呼ばれるに相応しい実力だった。

（天は二物を与えないはずじゃないのか？）

剣の冴えもそうだが、実際カトリ・デアトリスの実力はこんな辺鄙な所の一隊員でいるのが不思議でならないほどだ。

「今のは俺の負けだな」

「何故です？ 完全に防いでいたではありませんか。あの反応は相

殺障壁魔法のはずです」

相殺障壁魔法は魔法を防ぐために開発された魔法であり。

原理としては霊力と霊子の反応で発現している魔法に、別の霊力を重ねて反応を相殺させ、発現している魔法を無効化するというものだ。

防御の魔法としては一番よく使われるが、問題点としては発現している魔法を構成している霊力と、ほぼ同等の霊力が防御側に必要になるため、力の差が歴然の場合はその効果は表れないということ。「俺は魔法が使えないからな。今のはコレのおかげだ」

訝しげなカトリに説明するため、カタナはコレと指した自身が今着ている外套の裏地を返して見せた。

「——！ これは魔法印ですか？」

外套の裏地にあつたのは、幾何学模様で刻まれた魔法印という付加魔法の術式の一つ。物体に術式を刻んでおくことにより、魔法の発現を援助する為のもの。

「織り込んであるのが、アラクネルという霊力を取り込んでおける霊系だ。そこから霊力が魔法印に充填される仕様になってる」

そうなると霊力の供給と、魔法印の術式による霊子との反応を自動で行うことができる。

つまり先程カタナが戦技魔法を防いだのは、外套に刻まれた相殺障壁魔法の術式が自動で発動したからである。

「だから防いだのは俺じゃなくこの外套。俺は何もしていない」

「……装備を負けた言い訳にする方を見たことはありませんが、装備を言い訳に負けようとする方は初めてです」

「気に入らないだけだ、こんなものに頼らなければいけない事がな」「大体、これは私が稽古をつけてもらったのであって、勝ち負けを競ったわけではありませんよね」

「……あれだけ本気で斬りかかってきたのを、まだ稽古だといいはるのか」

「かすりもさせなかった人の台詞とも思いませんか？」

「それも、まあそうか」

妙に納得してしまう。いやそうせざるを得ない雰囲気がかトリにはあった。

ここで引かないと、もう一本なんて面倒な事になりかねない雰囲気だった。

「しかしすごいですね、その外套」

カタナの危惧は回避されたようで、かトリの興味はカタナの外套に移った。

「まあ、確かにすごいはずがいか。協会騎士団最高のヘンタ……モとい、最高の技術者が作ったものだからな」

カタナは危うくのところに変態という言葉を飲み込んだ。かトリは気付かなかったようでジロジロと外套の裾あたりを眺めている。

かトリが先程見て分かったのが、霊力の増幅機構や他にも対魔法の為のような術式が見られるという程度で。きつと魔法学校の導師並みの知識がなければ、全容の理解すら難しいものだろう。

魔法印を刻んだ術者の実力と苦労がよく解る。

「これは隊員にも支給されるものなのですか？」

遠慮気味に聞くかトリの目は、かなり物欲しそうにしている。まあ、無理もないが。

「いや、霊糸が貴重だからな、騎士団でも数人にしか渡ってない」

「……そうですか」

残酷な現実を聞いてなお、かトリの目には物欲が滲んでいる。残念そうにしているが、外套から目を放そうとしていない。

「やらないぞ」

「い、いりませんよ。汚そうですし」

図星をさされた照れ隠しなのか、かなり失礼なことを口にするかトリ。カタナにはだんだんと遠慮がなくなってきたように感じた。

まあ確かに毎日着てるからよく勘違いされるが。

「……一応言っておくが、同じものを持つてるから着回しはしてる

ぞ」

洗濯は、部下やサイノメにやらせてるのは口にしない。

「同じもの……ならば一着私に……」

しかしカトリ・デアトリスの物欲を再度刺激する裏目の結果になってしまったのは、カタナの失言であつた。

+++++

欲しがりのカトリを「そんなに欲しければ、お前の魔法剣となら交換してやる」という一言で沈黙させたカタナだったが、しかしそれとは別に辟易していた。

「どうすれば隊長のように強くなれるのですか？」

きつと聞かれるだろうと思つてはいた。だが想定していたところで、答えられない事を聞かれては結局返答に困るだけ。

「……さあ、知らない」

「私は真面目に聞いているのです」

真剣な顔を近づけるカトリだが、カタナはカタナで真剣に本当の事を答えている。

知らない。

そうとしか答えられない自分が、本当に弱い生き物なのだと自覚させられてしまう瞬間でもある。

生まれた時から何も変わらず、替えていくだけの人生。いやこれを人生と呼ぶのは人に対して失礼なのかもしれない。

生を全うし、死を体感する。そんな普通が化け物として生まれた自分には許されていないのだから。

あるとすれば道具を全うし、必要なくなれば捨てられるという事実だけ。

「俺は強くなる方法を知らない。知っていれば教えてほしいくらい

だ」

かつて師に教わった事は強くなるための技法ではなく、弱くなるための技法だった。

道具として長く使われる為に、使用する者に道具が危険なものだと気づかせない為に、手加減というものをその身に叩き込まれた。

必要な時以外武器を持たず、必要な時以外は動かない。

細々と隠れ生きる事をしなければならぬ。そんな奴のどこが強いのか。

「……いいです。解りました、教える気はないという事です」

少しだけ寂しげに言って身を引くカトリ。失望の色が見えるようだった。

そんな顔をして困るだけだ。

カトリは勘違いをしている、だがカタナはそれを正すことはしない。それがいつもの面倒だからという言い訳ではなく、正す為には話したくない自分の腐った運命を話さねばならないから。

そうしたくないという理由だけで、カトリ・デアトリスとの擦れ違いを放置する。

しかし、一つだけ忠告はしておこうと思う。

「強くなりたいなら、少なくともここに居るな。ここにはお前を変えられるものは何もない」

後ろめたさからの親切心であつたが、それが今のカトリに正しく届くはずもなく。

「……私はいつか貴方を超えて見せます」

キツと目を鋭くして立ち去って行った。

階段を下りる足音が聞こえなくなり、カタナは嘆息と共に屋上からの景色を眺める。

（いつか……くればいいな）

それはカタナにとっても、カトリ・デアトリスにとっても幸いな事だ。

しかしそのいつかがこない事はカタナには解っている。解ってい

るからその分ため息が漏れるのだ。

（こういう時サイノメが居れば、いらんフォローがあるんだがな…）

生憎と今日は休み、つくづく世界はカタナを嫌っているらしい。

「……フケるか」

もう今日はヤーコフも戻っているし臨時休業でいいだろう。

外套を翻して、三階建の駐屯所の屋上から飛び降りたカタナは、音もなくゼニスの街に消えて行った。

第九話 魔剣と風神

「……ちつ、あのウエイトレス。今度会ったらただじゃおかねえ」
深夜に近い時刻、貧民街をチンピラみたいなボヤキを呟きながら歩く男。

黒服黒外套に身を包んだ灰色の髪、灰の目の長身。よく不審者と間違われるが、逆にその不審者を取り締まる立場にいるのがその男の職だ。

協会の聖騎士の称号を持つ者であり、同時にここゼニス市の協会騎士団駐屯部隊の隊長でもある。

それがカタナ。名ばかりの隊長だとか、名前負け聖騎士と皮肉られるほどの評判の悪さを持つ男である。

今日もその名に恥じぬ行いで、昼にカトリ・デアトリスと稽古を行った後は勝手に臨時休業を決め込み、行きつけの喫茶店にコーヒー一杯で八時間ほどダラダラと居座り、閉店時に営業を終えたウエイトレスに喜々として追い出され、その後も特に何をするでもなく街をブラブラしていた。

「……暇だな」

言葉に出してしまうくらいカタナは暇であった。夜というのは眠らない者にとってはつまらない事この上ない。ゼニス市の北側に夜通し開いている娯楽の店も存在するが、そんなところに行く金も、サイノメへの契約料を払うので精一杯のカタナには到底無理な話だ。
だから大体夜は街中をブラブラしている。カタナは安宿をねぐらにしているがあまり使用していない、夜に一人で部屋にいと昔の嫌な事ばかり思い出してしまうからだ。

だからといって仕事をするわけでも無い。一度ヤーコフに夜間勤務にしてはどうなのかと聞かれたが、夜は駐屯所に詰めている騎士が少ないからサボれないという理由で断った。

まあ、こうしてブラブラしているだけでも、巡回と言葉を変えれば仕事をしていると言えなくもないと、誰も認めないような自己満足に浸っていたりもするが。

「おや、カタナさんじゃないか。今晚も暇そうだね、よかつたらうちによつてかない？」

ふと、空き家のはずの家の前に立つてゐる女性から声がかつた。着古した観のある黒いドレスと、厚い化粧、ところどころで艶を感じる美人だが、カタナはその女性の名は知らない。

「いや、今日は遠慮しておく。手持ちも無いしな」

「ありや、そりや残念。割の良い客を逃がしちゃったよ」

世辞ではなく本当に残念そうにするその女性。

カタナはその女性の名は知らないが、職業は知っている。この貧民街の夜の名物とも言える、春を売る職業だ。

何故知っているかという……実はカタナもその女性と何度か夜を共にしたことがある。

といっても女性の愚痴を一晩中聞いているだけで、身体の付き合いは一度もない。

カタナにとつては一人で当てもなく街をブラブラしてるよりも、一晩中尽きない女性の愚痴を聞いている方が遥かに有意義なのだ。しかも料金は、富裕層と混じつて娯楽の店で遊ぶより遥かに安い。女性にとつても愚痴を聞いてもらえる上、通常通りの料金までもらえるという事で、カタナは本当に割の良い客なのだ。

「今日は他の客も来ないようだし、店じまいにしようかね」

「タダでも良ければ、話に付き合うぞ」

「はは、それもたまには良さそうだけど。うちのマーク君との時間も作りたいから帰るとするよ」

「……子供は寝てる時間じゃないのか？」

たしかマーク君とは、この女性の長男でまだ八歳のはずだ。

「子供の寝顔を眺めているのも、親の楽しみなのさ」

そう言った女性の顔はとてもいい笑顔だ。そういう顔をされては

カタナの出る幕は無い。

「なるほどな……じゃあ、フラれた俺はさっさと退散するか」

「悪いね。代わりと言っちゃなんだが、次に会った時は三割引きにしとくよ」

「……それでもまだ割が良くないか？」

「別に私は身体の付き合っても良いんだよ？　むしろアンタとならそっちの相性も悪くなさそうだし」

「……いや、いい。そっちは間に合ってる」

全然間に合っているわけではないが、カタナは見栄でそう言った訳ではない。

この女性とはそういう関係にはなりたくないと思ったただけ。今がどつという関係なのかも不明な不思議な間柄であるけども。

ただ女性が愚痴を言って、カタナがそれを聞くだけの関係。よく解らないがカタナにはそれが何ものにも代えがたいと思ったのだ。

「そうだ、一つ。忠告しておくことがある」

「ん、何だい？」

思い出したようにカタナは女性を呼び止めた。

「今日は何があっても家からは出ない方がいい。あと鍵はしっかり掛ける」

カタナの忠告は女性にとって不可解そのもので、少し訝しんでいるようだったが、それ以上何も言わないカタナに何か聞くような事は無く、最後にはしっかりと頷いた。

「……何か解らないが、他ならぬ常連さんの忠告だ、真摯に受けておくよ」

それを聞いて少しだけ安心したカタナは、そのまま女性の前を立ち去る。

しつかりとその背に何者かの気配を感じながら。

+++++

「……出てこいよ」

カタナは一言そう言って振り返った。

路地の裏から身を震わせたような衣擦れの音が微かに聞こえた。

（下手な尾行だ）

相手がサイノメならこうはいかない。足音も完全に消えてないし、距離も少し近い。そこらの一般人ならともかく、カタナを尾行するのなら及第点もつけられない。

それでもまだ姿を現さない。かといって立ち去るわけでも無く、尾行者は何かを迷っているようにも思える。

「……出てこないならそれでもいいが、バレている尾行ほど滑稽なものは無いぞ」

そう言つて、決めるだけの時間を五秒だけ与えてやる、と心の中でカウントしていたカタナの前に、四秒後その尾行者が進み出た。

現れたのは長身痩躯で赤い髪を逆立てた男。上はシャツ一枚と下は皮のズボンというシンプルな格好だが、何より目を引くのが見えている肌全てに走る奇妙な刺青^{いれずみ}。

その刺青を目にしてカタナの視線が険しくなる。

（……あれは、魔法印か）

意味のない刺青で巧妙に隠されているが、その刺青の中に術式と思われる部分が見受けられ、カタナにはそれが見分けられた。

カタナの持つ暗視とも言える先天的な特技に近い『夜目』。外灯の無い深夜の暗がりの中の貧民街で、男の特徴を正確に捉えたのはそのおかげ。

だが、刺青で巧妙に隠された魔法印を見分けたのは別の理由。

実は今日の昼間にこの刺青の男を、カタナの部下のヤーコフとカトリ・デアトリスは、自警団のダルトンとのいざこざの際に目にしていて、二人は刺青の中の魔法印に気付かなかった。

だがカタナは気付いた、それは単純に知っていたからという理由に

他ならない。

そういう手法があるという事と、そういう手法を行える者がこの世にいるという事と、そういう手法をその身に刻んだ者がかつて居た事を。

「帝国特務か……」

郷愁に駆られたせいかわたなは思いがけず呟いていた。

だが、じつと黙っていた刺青の男は、その思いがけない呟きをきっかけとして口を開いた。

「何さ、おにーさん知ってんの？ 表に出ない裏部隊のはずなのに、意外と有名なんさね俺達」

何故か嬉しそうにする刺青の男だが、わたなは警戒を緩めない。

軽い空気を出して油断を誘うというのはよくある手だ。

だが、内心で相手が帝国特務だった事に少しだけ安堵した。

街中で誰かに尾行されていることに気付いたわたなは、暇つぶしから人目の少ない所まで連れて行き、相手の出方を窺う気だった。

しかし力タナの不注意で、知り合いの女性に出会ってしまい。その女性に危険が及ぶ可能性が出てしまった。

女性を気に掛けたり、忠告したのもそのせいだし。本当は貧民街を出てからするつもりだった尾行者との接触も、万が一女性に危険が及んだ場合にすぐ駆けつける為に、それほど離れてない場所で行う事にしたのだ。

(……完全に杞憂だったかな)

だが、相手が帝国特務だと解った以上その心配はない。かつてそこに在籍し、そのやり方を知り尽くした力タナだからこそ断言できる。

だが一つ解せない事もあった。

「何故姿を見せた？ 尾行がバレたら即退散がお前らのやり方だろ？」

心配を潰すために問いかける。まともな答えが返ってくると思わないが、反応を見ることは必要だ。

「……あ、確かにそうさ。そうしろって教わってたんだったださ」
……まともな答えは返ってこなかった、想像してたのとは違う意味で。

（……というかこいつ本当に帝国特務なのか？ あっさりと認めたが、それも結構不自然な話だが）

だがそっちは男の身に刻まれた魔法印がクロだと示している。

なにせ人体刻印式の魔法印は、カタナの外套を作った変態——的な技術力を持つ技術者だと思いたい——でも忌避するような法式だ。する側もされる側も失敗すれば死の危険があり、変態曰く「僕が行った場合、一回に一回は失敗するよ。論理的に考えて」と言わしめるほどのものだ。なぜ一回なのかは、勿論その時点で死ぬかららしい。実に論理的だ。

そんな事を当たり前にできる奴がそう何人もいては堪らない。

「……それで、逃走に失敗したらどうしろって教わったんだ？」

「あーと、確か絶対に手を出さずに、そのまま殺されるって言われたさ」

「……」

なんだろうつか、いまだに警戒を解いていない自分が馬鹿みたいに思えてきた。

少なくともカタナの知っている帝国特務に、こんな馬鹿はいなかった。

だが、あえて馬鹿のふりをするブラフなのかもしれないと、緊張感は維持させる。それがかなりしんどく感じたのは初めての事だ。

「でも俺はそうしない事に決めたさ、おにーさんはかなり面白そうだし、いい喧嘩ができそうさ」

しかし、気を持ち続けたカタナが間抜けでは無かったのだと、すぐに分かった。

飄々としながらも、刺青の男が見せたのは戦う意思。カタナは歴戦の闘士の風格が滲むのを感じ取った。

殺気は感じられない、しかしだからといって遊び半分でなさそう

だ。

場合によつては殺すことも辞さない、そういう本気は感じられる。

「……お前は、俺が誰か解っているのか？」

「知らないさ。なにぶん下っ端なもので、余計な情報は何も与えられてないのさ」

「……なるほどな」

おそらくそれは特務側の保険だろう。もし、こういう状況になった場合、対立するのは組織としてではなく、個人同士の喧嘩ですむようにするための。

かつて特務の責任者と交わした盟約が破られたのでなければ、カタナとしては特務と対立する理由はない。刺青の男の喧嘩を買う必要もまた無い。

「いいだろう、名も立場も知らぬ者同士としてお前の『喧嘩』買ってやるよ」

だがカタナにはその必要のない揉め事から引く気はなかった。理由は簡単、とても暇であるから。

帝国の裏機関との接触も、カタナにとっては些事であり。それが完全な排除を目的としたものなら状況も変わるが、そうでなければ暇つぶしの一言で済ませられる話である。

「名も立場も知らぬ者同士……いいね、どうやら話が分かる漢みたいさおにーさんは」

嬉しそくに刺青の男は笑う、だがそれは獲物を前にした、獣のよきな獰猛さを含む笑みだ。

刺青の男は腰を僅かに落とし、右手だけ体の後ろに回し、左手を胸の位置で構える。その格好から得物を隠してようには見えない。おそらくは今のカタナと同じ、無手のスタイルで戦うのだろう。

刺青の男が構えるのと同じ、カタナも両手を外套の隠しから取り出す。それでも構えは取らずに自然体で対峙する。

一触即発。

しかし、どちらともなく動き出しかけたその空気は一瞬にして壊れ

た。

「……ぶっ！？」

「……おいおい」

刺青の男は突然地面に突っ伏した。それは転んだと言えるような自然さは無く、どう考えても不自然な、まるで地面に吸い寄せられたかのような動作で。

それを呆れながら見ているカタナには、その事象の原因にも当たりがついた。

帝国特務に在籍していた時、幾度も見たその力。それこそ人体刻印と同じくらい誰にも真似できない魔法を発現できる、カタナのかつてのパートナー。

「久しぶりだな『風神』」

呼びかけると、ふわりと人が空から舞い降りてきた。

月明かりに照らし出される銀系のような長い髪、黒い右目と青い左目のオッドアイ、不機嫌そうな表情が美貌に少し傷をつけているその女性。黒い軍服に身を包む帝国特務の風神は音も無く地面に着地した。

「……久しぶりだな『魔剣』」

風神はカタナの呼びかけに、かつてカタナに与えられていた呼び名で応じた。

三年もの間呼ばれていなかったからか、やはり懐かしさは感じる。
「今はカタナだ」

「……知っている、だが私にとって貴方は魔剣以外の何者でもない」
風神は不機嫌さを、表情だけでなく声にも滲ませながら言い切った。カタナとしては魔剣という呼び名も、それなりに愛着があるものなのでそれ以上訂正はしようと思わない。

何せそれまで数字でしか呼ばれていなかったカタナが、たとえ組織の駒を示す呼称であっても、初めて与えられた名だったのだから。
「……魔剣って……なんの事さ？ 風ちゃんは……そこのおにーさんと知り合いなのか？」

地面に突っ伏した姿勢のまま、若干苦しそうに刺青の男は風神に問う。

風神は不機嫌そうな表情を更に険しくさせ、おもむろに刺青の男の後頭部を踏みつけにした。

「ぶごっ……ぶごっ……」

立ち上がることでできない状態で、さらに地面に顔を埋めるが如くの圧力を与えられ、刺青の男は呼吸困難に陥った。

「愚図が、少し黙っている。今貴様の命令違反の尻拭いをするところだ。それと上官を変なあだ名で呼ぶなど、いつも言っているはずだぞ」

「……はい……すみません」

刺青の男が必死にそう答えると、やれやれと言った様子で風神は踏みつけにした足を放す。

「お前が誰かの尻拭いなんて、苦労してるようだな」

「……それは皮肉のつもりか？」

カタナの言葉に風神の不機嫌さも増す。それは気に障ったというよりも、今の風神には何を言っても同じような結果なのだろうと、カタナは思った。

「そんな事より風神、俺に何の用だ？」

風神とカタナ、三年ぶりの再会だが両者がそれを喜ぶような素振りを見せる事は無い。

実際カタナは会えずに済むなら一生会いたくなかった。かつてのパートナーで背中を預けあった中であつても、今は敵と言って差し支えない立場であるし、それ以外にも複雑な思いがある。

風神はどう思っているのか解らないが、間違はなく言えるのは、かつてのように好意を向けてくれてはいないという事。三年前の事を思えば当然であるが。

「……貴方に用などありませんよ。あるとすれば、言わなくても解るはずです」

流石に地面に這いつくばっている刺青の男のように、ベラベラ余

計な事を喋るような事は無かった。

しかしカタナにはそれだけで充分だった。

「サイノメだな？」

「……」

カタナのほぼ断定の疑問に対して、無言の回答。

それをカタナは肯定と受け取った。

というかそれ以外には考えられない。カタナ自身に用が無いのなら、その付属品でカタナ以上に危険視されるサイノメ以外に、帝国特務が出張ってくる理由は無い。

大陸屈指の『情報屋』にして、稀代の犯罪者として裏手配書に名を連ねるサイノメ・ライン。非公開の秘匿情報を、当たり前のようにその頭の中に納めているのは、実際に法に触れるやり方をしてい
るのだから当然と言える。

（三年間見つからなかったのが今更になって居所が割れたのは……
やはり、あの武芸祭のせいだろうな）

一か月前のカトリ・デアトリスと出会った時を思い出す。あれだけの規模の大会で各国のお偉方も来賓で来ていた、当然護衛や密偵も腕の良いのが入り込んでたはずだ。

そこからカタナの情報が流れてしまったのは想像に難くない。

（…… 本当にあの武芸祭は面倒ばかり運んでくるな）

聖騎士になつてしまったりもあつたが、それでも表舞台には上がらないように務めてきた。だからこそ三年もの間帝国の網にはかからなかったのだ。

それを台無しにした馬鹿な重役達を、カタナは一人ずつ並ばせて殴りつけてやりたい心境だった。

「俺を張っていたのは、お前らじゃサイノメを捉えられないし、捕えられないからだな。だからこそ俺とサイノメが接触する時を狙っている、そういうわけか？」

「……」

「黙っていても話にならないぞ。そいつの尻拭いをするんだろ？」

さつきまで立とうともがいていたが、もう諦めたのか完全に地面に身を任せている刺青の男を指してカタナは言った。

風神が無言を貫くならそれでもいいが、それではここに居る意味が無いのだ。

推測を語るだけなら一人でできるし、わざわざ敵に聞いてもらう必要が無い。反応が見られれば話しは別だが、変化の乏しい風神の表情から窺い知るのは難しい。

「……そうだな、認めよう。私達はサイノメを追っている。相変わらず奴だけは私の魔法で捉える事が出来ない。今現在有効な手は貴方との接触を待つという事で相違ない」

「見つけたところで捕らえられるのか？」

「……絶対に捕まえる、上の命令だしな」

そう言った風神の決意には、命令以外の感情も含まれているように感じた。

「……そうかい、まあ好きにしたらいい。俺は別に監視されようが尾行されようが気にしない」

「解ったうえで容認するか、相変わらず掴みどころのない人だ。それともそれはサイノメへの信頼の表れか？」

「いや違う。単に面倒なだけだ」

「……本当に掴めない人だ」

風神はしみじみと嘆息する。何かを懐かしむように。それでも表情に穏やかさは表れないのだからある意味凄い。

「じゃあ俺はもう行く」

「な、まだ話は……」

「俺に用は無いんじゃないか？」

もう必要な事は聞けたし、言っただけだ。これ以上は刺青の男が気の毒になってきたというのもあるが、カタナとしても風神と面と向かっているのは気まずいものがある。

「ぐ、そうだが」

「じゃあ、もういいだろ。せいぜい頑張れよ」

そしてカタナは背を向けて立ち去ろうとする。相変わらずすることとは無い暇人だが、ここに居たくは無かった。

「……待て」

何かを押し殺したように風神はカタナの背に声をかけるが、カタナは気にせず歩みを止めない。

「待て、待ってくれ魔剣！……いや、先輩！」

しかし、そう呼ばれた事でカタナの足はピタリと止まる、条件反射のように止めてしまう。

バツが悪い思いをしながらもカタナは振って応える。

「……何の用だ後輩？」

先輩と後輩——魔剣と風神ではなく、私的な立場の時にそれ以外の呼び名の無い二人はそう呼び合うのを好んでいた。

だからこそカタナは立ち止まってしまったのだろう。風神ではない彼女が、魔剣でもカタナでもない自分と呼んだから。

風神は逡巡しているようだったが、やがて意を決した。

「……どうして先輩は帝国を……いや、私を……」

しかし、その後の言葉はどうしても出ないようだった。確かめるのが怖いのか、まだ何か信じていたのか、それはいつも泰然としている風神からは想像もできない臆病さだ。

だがカタナには風神が何を聞こうとしているのか解ってしまった。その自覚があったから。

『どうして私を捨てたのか？』

言葉にできない風神の思いは、カタナに正しくそう伝わった。

「……じゃあな」

結局カタナは答えられず、逃げるように去るしかなかった。

その狡さを風神は咎められない。言葉にできなかった臆病な彼女には、自分の思いが伝わっていたのかなど知る由もないのだから。

追いかける事も、追いつがる事も出来ずに、風神はただカタナの背を見送り、自身の勇気の無さを恥じた。

第十話 風神と鋼

（聞きたいことは山ほどあるが、結局聞けずじまいか……馬鹿だな、大馬鹿だ）

風神はかつての相棒の背を見送りながら、意地っ張りで臆病な自分を猛省していた。

「追いかけていいんか？」

その様子が地面に突っ伏している今の相棒に伝わってしまったのか、そんな心配をかけられてしまう。

「……必要ない。それよりいつまで地べたを這いずり回っている気だ？ 魔法はとくに解いてあるぞ」

「あ、本当さ」

地面に押し付けていた風神の魔法が消えていると解ると、彼はのそのそと起き上がった。

「うげ、ぺっぺ」

口の中に砂利でも入ったのか、一生懸命唾をはきだしている情けない相棒の姿を、風神は不機嫌さの混じる呆れ顔で見る。

「貴様もほとほと使えない男だな、尾行一つろくにできないとは。」

『鋼』^{ハガネ}の名が泣くぞ

「関係ないし、好きで名乗ってるわけじゃないさ。それに俺の仕事は戦う事であって、裏でチマチマ動くのは性に合わないのさ」

風神の今の相棒——鋼は愚痴をこぼす。

「……よく言う。『室長』に見初められるまでは、裏闘技場でチマチマ稼いで暮らしてたくせに」

「稼ぎは少なくとも、喧嘩の相手に困らなかったあそこは天国だったさ。今となつては室長の口車に乗った、あの時の馬鹿な自分を殴りつきたい気分さ」

「それについては同情するよ。だが、お前の馬鹿さは変わらないから、結局同じ結果になるだろうがな」

「……ひどいさ風神。八つ当たりは他を当たってほしいさ」

「……誰が誰に八つ当たりをしていると？」

眉根を顰めた風神を見て、鋼はビクツと体を震わせる。

風神が不機嫌なのはいつもの事なので、鋼は慣れているつもりだが、その不機嫌さがいつもの比じゃないと肌で感じたのだ。

だがそれで怯む鋼ではなかった。むしろ危険に踏み込むのが彼の生き方で、「藪があつたらまずつついてみる」を信条とするくらいのものなのだ。

「さっきのにおにーさん……風神は魔剣って呼んでたか？ あの人と話してから苛立っているさ」

「……そんなことはない」

風神は表情を変えないが、視線を僅かに逸らしたことを鋼は見逃さない。

「なんだが知り合いみたいだったし、風神があんなに取り乱している所を見たのも初めてさ。どういう関係なのさ？」

「……それこそ貴様には関係ない」

「関係あるさ、ダシに使われた身としては」

「……チツ」

風神は忌々しげに舌打ちして鋼を睨み付ける。しかしはつきり凶星をさされて怒りを向けたのでは、本当にただの八つ当たりだと気づき自重した。

（……普段は何も考えてない癖に、こういう時だけ鋭いな）

鋼の言う通り、風神は鋼をダシに使った。

尾行の訓練はしていても、経験のほとんどない鋼にそれをさせたのは、もしサイノメが現れた時に目立つおとりとさせ、風神がサイノメを捕縛するための布石であつたのだが、それがうまくいくとは思っていないかった。

危険が大好きで喧嘩っ早い鋼が、魔剣を前にしてじっとしてるはずもなく、実際その通りになった。

「俺があのおにーさんに喧嘩ふっかけて、風神がそれを止める。後

方で有事に備えることが役割の風神が、前に出てくる理由としてはありさ、何せ命令違反してるのは俺なんだから。でも普段の風神ならそんな穴のある作戦を立てるより、最初から自分の力だけで遂行しようとするはずさ」

「……そうだな、認めよう。私は任務に私情を持ち込んでしまった。上に報告するなら好きにすればいい」

鋼の言ったことに間違いは無く、風神はどんな処罰でも受けるつもりだった。最初からその覚悟もある。

しかし鋼は首を横に振って否定する。

「報告なんてしないさ。ただ俺は知りたいのさ、いつだって任務に従事する風神が、そうまでしてあのおにーさんに会いたかった理由を」

気づけば鋼はいつになく真剣な面持ちだった。誤魔化しは許さないという雰囲気である。

「……大した話じゃないぞ」

「いいさ、それでも」

鋼が頷くと、風神はぼつぼつと語りだした。

「あの人はかつては魔剣と呼ばれ、帝国特務の一線を担っていた武官だった。その頃の私の任務は、もっぱら魔剣のサポートをするこ
とだったな……」

「なるほど、かつての相棒だったってわけか」

「そうだ、だが三年前、魔剣は任務中にそれを放棄して姿を消した。私に何も言わずに……つい最近まで行方すら知れていなかった」

「任務放棄に逃亡？　おいおい、それって普通の軍法でも重罪、特務だと尚更厳しいんじゃないんか？」

「すぐに追手はかけられたさ。だがどんな有能な密偵を派遣しても足取りを捉える事は出来なかったらしい、私はその任に就くことを許されなかったがな」

鋼にはその理由が理解できた。さっきの風神のように、任務に私情を挟むかもしれないと上が判断したからだろう。

「……ひよつとしてさ、魔剣つて風神の元恋人だったりする？」

「それはないな」

風神はきっぱり否定する、だがその鉄面皮に朱がさしているのを、鋼はどう受け取って良いか悩むところだった。

「頼れる先輩という印象だったか、気づけばその後ろをついていくのが当たり前のように思っていたな」

「うへ、あの風ちゃんが誰かの後ろをついていくとか信じられ……」

ゴッ

「上官を変なあだ名で呼ぶなど、何度言ったらわかる愚図」

「すみません……ウウ……ウウ」

鳩尾に肘鉄を食らった鋼は呻きながら息を整える。

（……本当に、こんな女が後ろをついていくなんて……魔剣、何者なんだ？）

対峙した時、只者ではない印象を鋼は持ったが、話を聞けば聞くほど興味が尽きなくなってくる。

「……とにかく、私はずっと知リたかったのだ、魔剣が裏切ったその理由を。結局聞けなかったがな……」

「今からでも聞こうと思えば、聞けるんじゃないの？」

「……そうだな。だけど分かったのさ、どうしたところで時間は戻らないと、私の望む答えはもらえないとな。怖いのは私は、あの人と完全に決別してしまうのがな……」

もう立場上は敵と言って差し支えない相手で、本来ならとくに割り切るべき事なのに、何かに期待して——期待したくて目を背けてしまう。

「なるほどな……よく解ったさ。風神が恋する乙女まっしぐらだったのが」

「なっ！？ 違う、そういう感情は断じて持ち合わせていない！！」

「いや、その反応だけでもう十分だからさ」

そうじゃなければ三年も行方知らずだった相手の事を、思い続けられる訳がないと鋼は思った。きっと遠距離恋愛のように、会えない時間が愛を育てるというやつなのだろう。

いつだって冷静な風神が、また取り乱した事がその証明だとも言える。

「でもよく久しぶりの再会で、あんなに淡白に接してられたさ」

「……少し、少しだが頭が真っ白になってたから、そのせいかな」

「……じゃあ無言だったりしたのって」

「……少しだけだ」

「はい」

言い知れぬ風神の剣幕に押されて、鋼は敬礼までとっていた。

ちよつとからかうのも命がけなのだ。

「でもさ、これからどうするのさ？ 任務如何によつては、あのおにーさんと戦う事になるかもしれないさ。風神はそれでもいいのか？」

「覚悟はしている……だが勘違いするな、私達の任務は魔剣と戦う事ではなく、魔剣と契約している情報屋を捕縛あるいは抹消することだぞ」

「いや、勘違いしてるのは風神さ」

「……何？」

「そつちの情報屋については、どう考えても風神の担当さ。俺が言ってるのは、俺と魔剣が戦う事になった場合の話さ」

鋼は理解していた。この任務における風神と自分の役割を。上がどう判断して自分達を派遣したのかを。

「……解っている。最悪の場合もお前の迷惑になるような事は無い」「それならいいさ」

風神の言葉には含むものもありそうだったが、鋼はそれだけで充分に満足した。

「それで、今日のところは挨拶代わりだとして、これからの方針としてはどうするさ？」

「魔剣の監視には私が付く、お前はそのサポート……雑用だ。魔剣が情報屋と接触があるまでこれを維持する」

「なんでわざわざ雑用と言い直したのはともかくとしてさ、それだと風神の負担がものすごい事にならないか？」

「問題ない。私を誰だと思っている」

「さようですか」

風神はいざとなれば眠りながらも魔法を発現したままにできるから、その大口も十二分に説得力はある。

「ところで風神はその情報屋の事は知ってるのか？」

「ああ、よく知っている、仇敵だからな」

三年前に逃がし、おそらく魔剣の裏切りとも関係がある相手だ。

情報商会サイノメ・ラインの構成員であるサイノメ。いくつもの国家機密情報を盗み出した犯罪者だが、その流出を恐れる各国の政府は、表立って捕まえようとすることはできない。

そういう相手には裏手配書という形で、帝国特務のような裏の機関が事にあたる。

「奴を捕まえるのは容易ではないが、結果は出して見せる」

サイノメの持つ情報量はどこも咽から手が出るほど欲している。

それこそ自国を守るためのみならず、他国の機密を手に入れる為にも。

だがそう言った事情とはまた別に、風神が意欲を燃やすのは、一重に魔剣の事があるからだった。

（サイノメ……三年前に何があったか知らないが、魔剣を奪った事は高くつくぞ）

一度だけ風神がその目に収めた仇敵の姿は、幼い少女といったものだったが、その見た目に騙されることの愚かしさは既に学んでいる。

一度は逃したが、二度は無い。そう固く誓い、後は相棒に釘をさしておけば完璧だ。

「だからお前も足を引っ張るような勝手な事は、くれぐれもするな

よ鋼。今日の昼のようにな」

「ん、ああ喧嘩に割り込んだことね。まあ、結局なにもしないまま事態が収まっちゃったけどさ」

「お前が首を突っ込んでどうせ道化にしかならないのだから、無駄な事はするなという事だ」

「道化……ね。まあ昼もさつきも確かにそうだったさ。わかったよ、有事の時まで我慢しておくさ」

「それでいい」

帝国特務の二人は頷きあい、任務を再開する。

パートナーでありながら、それぞれ見ているものは違いつつも。

第十一話 カタナと喫茶店

「お客様、コーヒーのおかわりはいかがでしょうか？」

痙攣した青筋をこめかみに浮かべながら、それでも営業スマイルを絶やさずに問いかけるウェイトレスの声で、カタナは目を覚ました。

ウェイトレスは少し巻き気味の栗毛と大きな瞳が印象的で、着ているフリルのついたかわいらしい制服の似合う美人だったが、寝起きで思考がぼやけ、機嫌の良くない状態のカタナにはそんな事は関係なく。

「いや、いらん。というか人が寝ている時には話しかけてくるな」

常識だろと言わんばかりのつつけんどんな語気で返す。それは正論として実際間違っではないかもしれないが、しかし常識で考えると三人がけの椅子を、ベッド代わりのように寝ることに使っている者が、常識を強調できるはずもなく。

「アンタ！ コーヒー一杯とはいえ、お客様と思って下手に出ていれば付け上がって！ その一杯だけで、こつも一日中席を占領されちゃ、こつちは迷惑なのよ！」

さすがに我慢の限界だったのか、ウェイトレスもキレた。

「大体アンタ一週間も朝から晩まで居座って、仕事全然してないでしょ！」

その怒声は店内中に響き渡るには十分な音量だったが、この時カタナの他にお客がいなかったのは幸いだったろう。

しかしウェイトレスの怒声を聞きつけた者はいた。

「どうかしましたかリーネちゃん？」

この喫茶店のマスターである。穏やかな雰囲気と笑顔は誰しもを落ち着かせる魅力のある、初老の男性だ。

その穏やかな声に我に返り、泣きそうな顔でウェイトレスこと——リーネはマスターに懇願する。

「マスター、もう嫌ですこのお客様。というかお客様とも思いたくないです。もう出入り禁止でいいと思います。いえ、今すぐそうしましょう、つまみ出しましょう」

カタナに向かって指差しながらまくし立てるリーネ。本来は誰にでも笑顔と礼節を失わないウェイトレスの鏡とも言える少女なのだが、何事にも例外、範疇外は存在するようだ。

「まあまあリーネちゃん。落ち着いて、常連のお客様に向かって失礼ですよ」

「確かに常連ですけども、こんなのに居座られてしまったら店の品格が疑われてしまいますよ！これが視界に入るだけでも他のお客様には不快感を与えてしまいます」

人差し指をカタナに突きつけながらも、視線はマスターの方に向けたまま毒を吐く。そのリーネの剣幕にマスターは困ったような微笑を浮かべる。

「はは、特に気にしてるお客様もいないと思いますよ、当店は元々品格を疑われるほどの、徳のある店ではありませんから。それに他の常連様からしても、もはやカタナ様は店の一部みたいな認識になっているみたいで、居ないと違和感があると言っていた方もいるくらいですし……」

店の一画を占領はしていても、誰かの迷惑になっているわけでもないカタナは、ある意味でオブジェのような扱いなのかもしれない。「それに私としてもここまでくつろいで貰えんと、店を開けている甲斐があるというものです」

そう誇るように言うマスター。これは何を言っても無駄なのだと悟ったリーネは肩を落とすしかない。

「おいウェイトレス、コーヒーのおかわりを寄こせ」

「はあ！？ アンタさつき、いらんって言ってたでしょ！」

狙ったようなタイミングに本来喜ぶべきオーダーに食って掛かる。しかもお客をあんた呼ばわりのおまけ付き、まあそれも結構いつものことなのだが。

「おいマスター、店員の教育が行き届いてないぞ」

「はい、申し訳ございません。私からよく言い聞かせますので」

「ちょ、ちよつとマスター!？」

どこか芝居がかかったようなカタナとマスターの態度に、クレームを付けられたリーネは目を白黒させる。

「今のはリーネちゃんが悪いです。お客様のオーダーには、笑顔でありがとうございます。でしょ？」

「……うう、はい。申し訳ございませんでした。ありがとうございます。ます……」

どこか釈然としないまま、しかし自分に非があつたのは確かなのでリーネは頭を下げる。

そんな彼女の下げた頭の先では、マスターとカタナが悪戯を成功させたような微笑を交わしていたのは知る由もないことで。

温厚で落ち着いた雰囲気を持つマスターが、実は結構悪戯っぽい性格だというのは、カタナ以外であまり知る者はいない。

「いつもありがとうございます」

リーネがコーヒーを淹れにカウンターに向かった後、マスターはそう言った。

他に誰もいなかったのも、その感謝の言葉はカタナに向けられたもので間違いないものだが、今日のその言葉はお客に向けるような唯の営業文句とは違っていろいろに感じた。

「感謝されるようなことをした憶えはないが？」

むしろ煙たがられるようなことならいくらでもしてると、自信満々に返すカタナ。

「はは、まさか、カタナ様には感謝してもしたりないですよ」

言いながらマスターの視線はぎこちない手付きでコーヒーを淹れるリーネに向かう。

「リーネちゃん……今では笑顔を振りまく当店自慢の看板娘ですが、

最初の頃は失敗も多くて沈んでいたことも多かったのですよ」

「あれがか？ ……想像できないな」

カタナの中ではリーネはいつも無駄に元気な印象しかない。というより罵声や怒声しか浴びせられていない気がする。

「想像できないのも無理ないですね。彼女が今の調子になったのはカタナ様が当店に通って頂けるようになってからですから。いえ、むしろカタナ様のおかげ、と申すべきでしょうか」

「俺のおかげ？ それこそ意味不明だが」

先程の通り、リーネを怒らせてばかりのカタナには身に覚えが何一つない。

「ふふふ、なに簡単な事です、好き勝手言い合える相手というのは貴重なものなのですよ。こと接客業というものに関しては特にですね」

「……おい」

言われてピンと来るものがあつたカタナは、嫌そうに眉をしかめる。

「それは暗に、俺があの子のストレス発散に使われていると、そう受け取ってもいいんだな？」

「はい、その通りです」

カタナの問いに、実に良い笑顔で答えるマスター。

「……あのウェイトレスにして、このマスターありといったところか」

「カタナ様もお互い様、といったところです」

「……」

まあそう言われるとコーヒ一杯——今日は二杯だが——で一日中居座っているカタナには何もいえないわけで。

「まあ、あれも含めてこの場所は気に入っているから良いとするか」

「あれ、ですか？」

頬杖をついたカタナが顎で指す方向には、何かが割れる音と悲鳴を上げるウェイトレスの姿があつた。

「失敗は最初の頃だけじゃなかったのか？」

「いやあ、実は彼女が練習以外でコーヒ―を淹れるは初めてのことでして……まあ、見ての通りの結果ですね」

少し呆れながらも、楽しそうに言うマスター。性格が良いのか悪いのか計りかねるが、とりあえずカタナの言うべき事は。

「……俺の注文を練習代に使うなよ」

「おっと、私も掃除を手伝わなくては。では失礼しますカタナ様、ごゆっくりとおくつろぎ下さいませ」

そそくさと立ち去るマスターを横目で見送ると、カタナは視線を窓の外に向けた。ゼニス市の北側の街並みは、富裕層が多く済むからか、景観がとてもいい。

昼間の忙しくなく人が行きかう通りを、ゆったりと見ていられるのは最高の贅沢だと言える。

しかしその忙しくなく行きかう人の中を、知った顔が走ってきているのに気付いたカタナは、嘆息しながらその贅沢を最後の時までかみしめた。

+++++

カランコロン。

お客の来店を知らせる為にドアに取り付けられたベルが鳴り、息を切らせた男が入ってきた。

「これはヤーコフ様、いらっしやいませ」

すぐさま入口に接客に向かうマスターの所作は、もはや一流それと言っても差し支えないほど洗練されている。

「ハアハア……どうもマスターこんにちわっす。うちの隊長お邪魔してないすか？」

「えっ？ ヤーコフさん？」

マスターの声に反応し、リーネが掃除を一時中断して顔を上げた。

「あ、リーネちゃんもこんにちは。今日も一段と可愛いっすね」

「そんな、ヤーコフさんったら……」

会ったびに同じことを言われているくせに、頬を染めて照れるリーネ。実は彼女は『ハーレム騎士』ことヤーコフの数人いる恋人の内の一人なのだ。

「……お前は本当に節操がないな」

「うお、隊長、やっぱりここでしたか。大変なんすよ、すぐに駐屯所に戻ってくださいっす」

「パス」

「うえ！？ 何でっすか！？」

「お前の『大変』は、大変だった為しがないからだ」

そんな事でこの憩いの時が邪魔されてたまるかと、豪語するカタナ。

一週間も仕事を押し付けていた副官に対するには、あまりにあまりな態度と言えるが、ヤーコフは既に慣れきっているため、一々反抗する事は無い。

「そんなこと言わずに来てほしいっす。僕じゃ力不足な事態に陥っているんすよ」

「……何があつた？」

ヤーコフがはつきりと力不足というからには、もしかすると本当に大変な事態なのかもしれないと察したカタナは、話を聞くことにした。

なんだかんだ言っても、ヤーコフの仕事の有能さは認めているのだ。

「それが市長が隊長と直々に話したいと、今駐屯所で待つておられるんすよ」

「それは大変だな……だがパス」

「何でっすか！？」

ヤーコフが言うに於ては、本当に大変な事態だった。大変過ぎて

動く気になれないほどに。

「お前、あの白髪ジジイの相手をする苦勞知ってるだろ」

「知ってるっすけど、でも隊長ご指名ですし。それに僕じゃあの市長の前に、面と向かって五秒もいられないっすよ。なにせ、隊長を呼びに行く十五分貰うのを頼むのに土下座しちやったくらいっすから」

「……それは弱すぎるだろ。じゃあそうだな、サイノメにでも相手をさせろ」

「秘書官殿っすか？ まだ出張から帰ってないっすよ」

「そうだったな。なら、あいつ……カトリ・デアトリスでいいだろ」

「何でそこでデアトリスさんなんすか？ 新人に頼むくらいなら僕が行きますよ」

「市長も若い女の方が良いかもしれないだろ」

「……真顔でそんな冗談を言わないでほしいっす」

結局カタナが行く選択肢しか無いのだが、それでもどうにか会わなくて済むような可能性を探す。

何せ面倒臭いジジイなのだ市長は、態度も横柄で、他人を見下しているような喋り方をする。継続任期九年目でその手腕は誰からも認められているが、人格の方を褒めるものはあまりいない。

「いいから行きなさいよ、市長も忙しい中待ってるのに失礼でしょ」
そこに便乗してきたのはウエイトレスのリーネ。もっともな事を言っているが、カタナを早く追い出したいという魂胆が丸見えだ。

「……おいウエイトレス、コーヒーのおかわりはまだか？」

「（ギクッ）いや、ほら、急用みたいだし、注文はキャンセルかなと……」

よく見ると、リーネが掃除してあたりになたな残骸ができていた。駄目すぎるだろこのウエイトレス……。

「……客を待たせるのは、失礼に当たらないのか？」

「くっ、わかりました、すぐにお持ちします」

「いや、やっぱリキャンセルのままでいい。これ以上何か割られる

とマスターが哀れになる」

「キイー、ほんとむかつくわコイツ！」

いや、意地悪で言った訳でなく、現にマスターの目が流石に勘弁してくれと訴えていたのだ。

「元々そんな時間も無いっす、というかあと五分で戻らないといけないっす。頼みます、僕の土下座を無駄にしないで下さい」

「……それはお前が勝手にやった事だろ」

「ちよつとアンタ、ヤーコフさんが頼んでるのにその態度は何よ！」

「……お前は俺に突っかかりたいだけだろ」

ヤーコフとリーネの話には聞く耳持たずのカタナ。なんとなくか内容もそうだが、こいつらがカップルであるという事自体もウザく感じる。

一向に話がまとまらない中、リーネがやらかした部分の掃除を終えたマスターが、やれやれといった様子で声をかけた。

「カタナ様、私からもよろしいですか？」

その穏やかな声は、うるさいヤーコフとリーネの声を一瞬で止ませた。カタナが促すとマスターは一礼して、まるで主に諫言する忠臣のように話し出した。

「今回の事、市長が事前のアポイントなしに、カタナ様呼び出そうとしている事自体が失礼に当たります。しかしそれに対し無視をして、カタナ様が失礼を重ねてしまうのは良からぬこと、ここは寛容な心でお会いしてあげるのがよろしいかと思えます」

「その通りだな。じゃあ行くか……」

「「おい!？」」

重い腰を上げたカタナに、すごい勢いで食って掛かるヤーコフとリーネ。気持ち悪いほど息が合っている。

「どうしてマスターの言葉には二つ返事なんすか!？」

「そうよ、私だって同じような事さっき言っただじゃないの!」

右と左からグイグイくるバカップルの図。これほど面倒なものは無い。

「お前らとマスターじゃ人徳が違う。その歴然たる差を自覚してから、ものを言え馬鹿共が」

大体ウエイトレスが言ったこととマスターが言ったことは全然違う。誰の目線に立っているかが差として出てる。これがお客様の目線に立つという、接客を極めた者とそうでない者の差である。

単純にカタナが客と認められてないのが問題でもあるが。

「それじゃマスター、また来る」

「お待ちしておりますカタナ様」

カタナの指摘でその差をようやく自覚したのか、静かになったヤ
ーコフとリーネは放ってカタナは店を出る。

この後面倒が待っているのが解っているが、不思議とマスターに見送られるとどんな時でも気分が良く感じる。

その喫茶店の看板に書かれている店の名は『コシーロ』。

そういえば、そのコシーロという言葉の意味を知らない事に気付いたカタナは、次に会った時にマスターに聞くことを決めた。

第十二話 聖騎士殿と市長さん

「この私が二十三分四十六秒も待たされるとはな、相も変わらず聖騎士殿は大した大物だ」

開口一番にそんな皮肉を言つてのけるのは、シワ一つない紳士服に身を包んだ白髪 of 壮者。固く引き結ばれた口元と、シワの消えない眉間がその気難しさを物語っている男。

彼こそゼニス市を九年にも渡り治めている、『市長』ことベルリークだ。

「待つのが嫌なら、今度から事前連絡くらいはよこせ」

そんな相手に、喧嘩腰にも見える態度で返すカタナ。

「聖騎士殿は暇そうにしていることで有名だからな、そんなものは必要ないと思つていたぞ」

「ただの憶測で行動して時間を無駄にしてるようじゃ、老い先短い人生がもつたいたいなぞ市長さん」

「……私は市長である事に誇りを持つているが、役職に敬称を付けて呼ばれるのは好かない」

「奇遇だな、俺も聖騎士殿っていう呼ばれ方は大嫌いだ」

カタナの傍らに付き添うヤーコフは、その二人によって空気が冷えていく駐屯所の応接室を、一刻も早く抜け出したい思いだった。

胃が痛くなってくるのを我慢しながら、それでもヤーコフは永久に続きそう na ピリピリした空気を仲裁する。

「お、お忙しい中、市長をお待たせして申し訳ないっす。なにぶんうちの隊長も市内の巡回中だったもんすから。すぐに掴まえられなかったのは僕のせいっす、本当に申し訳ないっす」

実際にはカタナは喫茶店でサボっていたわけだが、それがバレては市長の皮肉に拍車がかかるのでヤーコフは嘘をついた。

「ふん、確か君はさつき聖騎士殿を十五分で連れてくると言っていたな、だが実際は八分四十六秒の超過だ。時間と自分から持ち出し

た約束事を厳守するのは、人として当然の事だというのは解っているのか？」

矛先が自分に向いたことで、ヤーコフは市長の強面に漏らしそうになるが。なんとか耐えて謝罪を続ける。

「はい、本当に申し訳ないです。この度の事は全てこのヤーコフに責任があるです。お望みならどんな謝罪でもさせて頂きますです」

この手の相手に有効なのは何よりも謝罪、反論などもってのほかだという事を、これまでの苦労人と呼んでいい人生で培ったヤーコフは、それを遺憾なく発揮する。

誠心誠意をもって頭を下げる相手に、常識を持つ者なら追撃することは無い。

「……解っているのならいい。気を付けたまえ」

市長もそのあたり、しっかりと常識人なので安心だ。

ヤーコフは少し緩んだ場をそのままに、早くこの対面を終わらせるために話を促す。

「ところで市長、隊長に話があるってことだったすけど……」

「そうだな、こんなつまらない事を言いに来たわけではなかった。

私がわざわざここに出向いたのは、聖騎士殿に御願ひしたいことがあるからだ」

「……パス」

「何だと？」

「御願ひする気があるなら、それ相応の態度を示せ」

（ああああああ、胃が、本当にこの二人は本当にもう）

どうしてここまで噛み合わないのか、ヤーコフは理解した。

似た者同士なのだ力タナと市長は、どちらも退かないし譲らない、そついう生き方ができる人間なのだ。

普通はそうはいかない、退いて譲って人は助け合って生きていく。だが一握り、それをしないで生きていけるものもある。本来集団で生きる中で淘汰される性質だが、自分の実力のみで這い上げれる者はその限りではない。

強い弱いで語れるものかは解らないが、ヤーコフはそれを凄いと思う。だが同時に、思う事もある。

（周りの迷惑も少しは考えてください。というか僕抜きでやってくれっす）

この場で一番ストレスを感じているのが、自分であることも確信したヤーコフは、本気でこの場を逃げ出すことも考えた。

「……報酬は出す、一千万エルクだ」

市長が示したのは態度ではなく、金銭による報酬額だった。それは頭を下げて頼むよりよほど市長の性格に合ったやり方だ。

「一千万!？」

市長が何気なく提示したその報酬額は、ヤーコフの胃の痛みを吹き飛ばして叫び声を上げさせる程だった。

「うるさいぞヤーコフ」

「すいません。でも隊長、一千万つすよ、一千万エルク!」

自分の今の給料で換算して、数年分のその額に、無駄に高揚するヤーコフ。

対してカタナは冷めた表情で市長を見ていた。

「……何があった? アンタが俺に御願いつても珍しいが、それ以上にそれだけの報酬を提示するって事は、尋常じゃない事態みたいだな」

「察しがよくて助かるよ。聖騎士も案外伊達ではないのかな?」

「……貧乏極まってるこんな田舎の市長が、それだけの額を提示したら誰だっけ解るだろ」

「……」

無駄にはしゃいでしまったヤーコフは、カタナと市長の両方から冷たい一瞥をもらい縮こまる。

羞恥に塗れて静かになったヤーコフを尻目に、カタナと市長は話を続ける。市長が持ちかけたお願いというものの危険な臭いに、話を聞く気がまるでなかったカタナがようやく興味を示したのだ。

「聖騎士殿の言うように尋常ではない問題が発生した。この街の存

続が危ぶまれるほどの事だ。場合によつては滅びるかもしれない」
もとより真剣な顔の市長だが、そこに神妙さも混じるように声を落として言った。

「……街が滅びる、か。ずいぶん切羽詰ってるな、賊や魔獣程度の話ではないんだな？」

戦争の無い今の大陸は、国同士が争っていたかつての時代よりは十分に平和であると言える。しかし、だからといって危険が無いわけではない。

人間には清い心の者もいれば、道を踏み外したような行いに、進んで手を染める汚れた心の者もいる。治安が悪ければ犯罪も起こるし、犯罪者が徒党を組めばその被害も広がる。

その最たるものが賊——盗賊、山賊、海賊などいろいろな呼び方があるが、広義の意味ではすべて同じ賊である。

彼らが居るからこそ、傭兵や自警団、そして騎士団が必要とされるのだ。

そしてもう一つ、この共和国には他国にはない危険も存在している。それが魔獣——かつて大陸が別世界である魔界と繋がった時に紛れ込んだ、異界の獣。

人間に害のないものも僅かにいるが、そうでないものがそのほとんどを占め。中でも大きい個体で体長が二十メートルを超える『魔竜種』は、一匹相手に軍隊総出でかからなければならぬほどの脅威であった。

今では各国が総力を挙げて大々的に討伐されたこともあり、大陸にいる魔竜種は絶滅したとされているが。小型の『亜竜種』や、大陸の動物が魔獣と交わって個別に進化を遂げた『新種』も存在し。更に共和国の開拓の済んでいない北西部は、魔獣達の巣窟と化しており、その将来的な危険性も懸念されている事項ではある。

そういった魔獣の対応も騎士団の使命であるが、今のところは散発的な被害に留まっているため、そこまで重要視されてはいないのも事実。

実際年間の統計で見て、人が魔獣と遭遇する事よりも、人が人を殺めてしまう事件の方が百倍も多いのだから、それが人間の業の深さを表しているのかもしれない。

「賊に魔獣か、その程度なら我々でも対応可能だ。だが今度の件はそれよりも重大な事態だ……」

「……」

カタナもヤーコフも、市長の言う「我々」という言葉には引っ掛かるものはあった。

ゼニス市のほぼ全ての権限を持つ市長にとっては、自分の権限の内にはない協会騎士団は異物のように思えているのだろう。敵愾心みたいなものはよく感じるし、快く思われていない事も知っている。

自警団と騎士団の反目も、あるいは市長のそういう態度にも原因が作られているのかもしれない。

だがこの場で何か言ったところでその姿勢が変わるわけでも無い、むしろトラブルの元になりそうであったので二人は何も言わなかった。

「魔人が出た。私からのお願いというものは、その対処だ」

そしてその市長の言葉に、ヤーコフは言葉を失い、カタナは嘆息を漏らす。

「……ずいぶんと簡単に言うな」

「問題が難しい時ほど、人は落ち着いていなければならない。そう思わないか？」

「そうだが……まあいい、詳しい話を教えろ」

「やる気になってくれたようだな」

「いいからさっさと話せ、落ち着くのもいいが、無駄に時間をかけて良い事じゃない」

カタナが苛立ち交じりに促すと、市長はフンと鼻を鳴らし説明を始めた。相変わらず友好的とは言えない空気だが、カタナの言い分が正しかったので市長に反論は無い。

「……では話そう、まずこの大事を知るきっかけとなった事からだ」

+++++

絶句していたヤーコフは我に返って、カタナが市長の話を聞く様を見ていた。

そこで気付く、どうして市長がカタナに直接話をしたいと言ったのか。

（僕じゃ、ここまで落ち着いていられないっすよ）

副隊長として働かない隊長に代わり、その業務を代行することが多かったせいか、知らぬ内に自分を過信していた事に気付く。

きっかけは先程の市長からもたらされた凶報。それを聞いた時、ヤーコフは頭が真っ白になってしまった。本来ならば市長が言ったように、問題を前にして落ち着いて対処を考えなければならぬその時に、あるうことか思考停止していたのだ。

今こうして我に返っているのは、落ち着いて話を聞いているカタナの後ろにいるからだ。そうでなければ何も考えられず、何も出来ずに取り乱していた事だろう。

（流石隊長っすね、僕じゃまだまだ何もかも敵わないっす）

問題が発生した時、上に立つ者は落ち着いていなければならない。指示を出す者が取り乱したり不安を見せたりすれば、下の者にも伝染していつてしまう。だが逆に言えば上に立つ者が落ち着いていさえすれば、下の者にも良い方向でそれが伝染していく。

その恩恵を受けたヤーコフは、カタナが自分の上司で本当に良かったと改めて実感した。

目の前の問題は難しそうだが、それでも打てる手はあると思える。頼れる上司の背中が目の前にある限り、そう思えた。

+++++

魔人という存在の事を、大陸に生きるもので知らない者はいないだろう。

約五十年前に起きた人と魔人の戦争の事は、それこそ学校の社会の授業で必ず習う事だ。その人類史で最も多くの血を流したと言われている熾烈な戦いは、忘れてはならない事であるし、伝えなければならぬ事だ。

だが一方でどうしても伝えられない、いや伝わらない事もある。それは魔人の恐ろしさ。

実際に戦ったものにしか解らないその力の強大さを、徹底的に魔人が排除された現代となつては、戦後に生まれた者達には知る術のない事。当時一戦を張っていた老人達も、たまの自慢話に持ち出すくらいで、魔人についてはあまり語る者がいない。

あるいは恐ろしいからこそ、過去の恐怖を呼び起こさない為に、語ることができないのかもしれない。

いずれにしても過去の事、過去の存在だと、多くの者が思っている。

しかし、一部の人間は知っている、魔人との戦争は終わっても、魔人の恐怖は終わっていないのだと。

+++++

「初めは近隣の村からの要請だった。内容は、山賊による被害が拡大しているからその討伐を頼みたい、という事だった。それに対して私は一週間程前に、自警団からその半数の派遣を決めた」

半数といえは二十人くらいだったかと、カタナは市長の話聞き

ながら記憶に照らし合わせる。

そして一週間程前に自警団が市外に出動したらしいという報告を、ヤークフから受けたことを思い出す。記憶違いでなければその時の事だろう。

「山賊の人数ははつきりとはしていなかったが、証言から十人には満たないと判断した。単純に人数差はこちらが倍以上、問題は起こらないとその時は思っていた」

市長のその物言いは、暗に問題はその時発生したと言っている。

カタナはそう理解した。

「何故、俺達に協力の要請をしなかった？」

「それについては、私から自警団の団長に持ちかけはした。だが団長がかえって邪魔になると言って拒んだ、私は現場の意見を尊重したまでだ」

「……それで、派遣した自警団員は何人帰ってきたんだ？」

「……二人だ」

（ほぼ全滅か。そうなることとしては、協力の要請が無かった事が良かったかもしれないな）

犠牲になった自警団員には思う事が無いわけではないが。今必要なのは感傷的な思考ではなく、あくまで現実的な思考だけ。

「その流れだと、山賊団の中に魔人が混ざっていた、ということではないのか？」

「……その通りだ。帰ってきた二名の自警団員から聞いた証言から、そう確信した。なにせ有名な話だ、『災いの黒き髪と目』は」

災いの黒き髪と目とは、魔人の特徴を言い表すのによく使われる言葉である。

単純な見た目で言えば、基本的に魔人と人の相違点はさほど多くない。墨で人物画を描いたとすら、個体差（美形かそうでないか程度の）くらいしか見分ける方法は無い。

それを見分ける方法として言われているのが、魔人は全て黒い髪と瞳を持つという特徴である。これは大陸の人間では見られない特

徴であるため、そう言われている。

しかし厳密に言えばかなり少ない割合だが、黒い髪と瞳の人間は大陸でも生まれている。

そうした一部の黒い髪と瞳を持って生まれた人間は、迫害の対象になったり、不幸を呼ぶとして赤子の内に親に捨てられたり、といった差別や偏見が今でも後を絶たない。

そう言った意味でも『災いの黒き髪と目』と言われる所以でもある。

「もちろんその特徴だけでなく、黒い光と共に見た事のない魔法を放ったとも聞いている。これは魔術という事で間違いないだろう」

「詳しいんだな、白髪は伊達じゃなかったわけだ」

「……普通は見識を褒めるところだろうがね」

確かに白髪ではあるが、市長はそこまで年老いた印象は無く、見た目で言えば五十前後。魔人の事をちゃんとした知識を持っている事は、褒められるべき事だろう。

もちろんカタナが市長を素直に褒める事など、世界がひっくり返ってもない事だが。

「魔人の数は何人だ？」

「確定ではないが、おそらく一人」

「一人か、まあそうだろうな……」

何かを考えるように、カタナはそれきり黙りこむ。ヤークフが何かを言いかけるが、結局この場はカタナに任せることにしたのか、言葉にすることはしなかった。

「……」

市長は言うべき事は言ったという雰囲気、後はカタナの返答をじっと待っている。

一分ほどの静寂の後、最初に口を開いたのはやはりカタナだった。「いいだろう。魔人の対処、こちらで引き受けよう。だが条件がある」

「……何かな？ 報酬額だけでは御不満か？」

「……そうだな、その報酬がまず不満だな」

「ちよつと隊長！？ 弱みに付け込んで搾り取る気っすか！？」

守銭奴の暴言に聞こえたのか、ヤーコフは口を挟む、それだけ一千万エルクが衝撃的だったのだろう。

「待て、別にもつとよこせて言っているわけじゃない。金で動かそうっていうのが気に食わないっただけだ」

「どういう意味か？」

「そのままの意味だ、金はいらない。必要なものは用意してもらうが、報酬として何かを受け取る事は無い」

当然の話として、騎士は騎士団からその働きに見合う給料が出ている。その務めの中で他からも報酬を貰うというのは、場合によっては賄賂だととられて罰せられることになる。

それはヤーコフも理解しているから、しきりに頷いている。だが少し残念そうにしているのを、カタナは気のせいだという事にしておいた。

「それは助かるが、良いのか？」

「要らんものは要らん、だが必要なものを用意してもらうという事も含めて、俺の言う条件は聞いてもらう」

「うむ、私にできる事なら何でもしよう」

その市長の言葉に、待つてましたとばかりにカタナは口を歪める。

「じゃあ、まず態度で示せ」

「何？」

「言っただろ、御願ひする気があるならそれ相応の態度を示せと。なあヤーコフ、人にものをお願いする時に普通はどうする？」

「え？ えっと、頭を下げるとかつすか？」

いきなり話を振られたヤーコフは思ったままそう言った、カタナはその返答に満足げに頷く。逆にカタナの言っていることを理解した市長は苦い顔をしている。

「……どうしてもか」

「嫌なら別にいいが、何でもするって言ったことは嘘なんだな。自

分の失態を押し付けた上に、あつさりと嘔吐なんて市長さんは大した大物だ」

「ぐ……わかった。聖騎士殿、この度の事宜しく御願います」

何かの覚悟を決めたように、潔く頭を下げる市長。ソファアに座りながらであるが、前にあるテーブルにつくくらい姿勢よく下げられた頭は、若干震えている。

「ああ、改めて引き受けた市長さん」

対するカタナは凄くいい顔をしていた。

その一部始終を傍らで見ていたヤーコフは、上司への認識をまた改めざるを得なかった。

第十三話 隊長と副隊長

「それで、どうするんすか？」

市長が帰るのを見送った後、徐にヤーコフは尋ねた。

魔人への対処を自分達駐屯部隊が引き受けることになったが、どういう方法をとるのかという意味だ。

何せヤーコフが直面するのは初めてのケースであり、いくら考えても他人を頼る以外の明確な答えが出なかったからだ。

「どうするか、ね。なあヤーコフ、お前は魔人を見たことがあるか？」

「いえ、無いっすけど。話だけは、よくじっちゃんから聞きました」
「……なんと言っていた？」

「魔人には常識が通用しない、だから間違っても正面からは戦うな、もしそうになったら迷わず逃げろ。って言ってたっす」

ヤーコフは戦いを教えてくれた師でもある祖父の言葉を思い出しながら、唯一話していた魔人と戦う場合の対処法を口にする。

「それは正しい、いい爺さんをもったな」

「いや、それじゃ全然問題は解決しないっすよ。第一騎士が真っ先に逃げてどうするんすか」

「馬鹿だな、年寄りの話はしっかり聞くもんだ」

「な、なんすかいきなり、隊長だって市長相手に散々な態度じゃなかったっすか」

「態度がでかくて嫌味な奴はその限りじゃない」

何とも一方的な暴論だが、カタナが他人を褒める事の方が珍しい。ヤーコフは祖父が認められたことが少し嬉しかったからか、なんとなく納得してしまう。

「まあ、じっちゃんや市長の事はいいとして。実際、僕には魔人と対した事が無いっすから、どうするかなんて皆目見当もつかない訳っす。是非隊長の意見が聞きたいっす」

「意見も何も、もう決まってる」

この件に関してはカタナの中で既に答えが出ていた。人が魔人に対抗するには、相応の覚悟が必要になる。そう、多くの犠牲を出す覚悟が。

五十年前の大戦で学ぶべきはそれ、数で遥かに劣る魔人の軍隊が、大陸にどれだけ多くの被害をもたらしたかという事。

駐屯部隊の隊長として部下に命令することがあるとすれば、魔人と戦って死ねと言うか、協会騎士団の本隊に逃げ帰り、救援を要請させるかのどちらかだ。

だが、最初からどちらを選ぶ気はカタナには無い。この件に関しては部下に何かをさせる必要はないのだ。

「俺が一人で直接出向いて、魔人を潰して帰ってくる。簡単な話だろ」

当然のようにカタナは言うが、それが如何に道理を外れているかは、ヤーコフのみせた反応で明確だった。

「へ？ 隊長が？ 一人で？ 魔人を？」

いちいち一言ずつ区切って確認するヤーコフを、カタナは鬱陶しげに首肯して答える。

「それが一番被害の少ない方法だからな。それにお前も含めて、この部隊には魔人と戦った事がある奴はいないだろ？」

「そりやもちろんいませんけど、それじゃ隊長はどうなんすか？」

あるわけがない、ヤーコフの口ぶりではそれが当然だと言っている。それもそうだが、五十年前から徹底的に排除された魔人は、世間的にはもうこの世には存在しないものとなっているのだから。

だが、ヤーコフにとっての常識が、カタナにとってもそうであるとは限らない。

「俺にはある。魔人と戦ったことも、魔人を殺したこともな」

かつてのカタナはそれが日常だった。戦いと言ってもまだ若く、五十年も生きているはずのないカタナが戦ったのは、歴史に名の残るような大戦ではなく。誰も知らない裏側の話だが。

帝国特務——帝国の暗部を一手に担うその機関は、存在するという事さえ最重要秘匿事項である。だからかつてその構成員の中に『魔剣』と呼ばれた男がいて、対魔人に関する役目を負っていたという事は、既に葬り去られた誰も知らなくていい過去の事。

「……いつもの、隊長が真顔で言うタチの悪い冗談じゃないんすね」
もちろんカタナにはその事を説明する気は無かったが、ヤーコフは何か察するものがあつたのか、意外と簡単に信じた。

本当ならもう少し疑ってもらつて適当に誤魔化す気でいたが、それならそれで仕方ない。知りすぎるという事は不幸な結果になることもまああるが、ヤーコフならばなんとかするだろう。

それは微妙に信頼と呼ぶにはズレがあるカタナの偏見に近いものだが。

「ああ、だからこの件に関しては俺に全て任せろ」

「あ、いえ、だからって隊長一人に任せる訳にも……」

ヤーコフにとってカタナは何だかんだ言っても頼れる存在だが、だからといって自分の隊の隊長一人だけを危険にさらして、部下の自分達だけ安穩としているのは許せなかった。

「俺が信用ならないか？」

「そうじゃないっす。でも僕らにも誇りがあるっす」

そういうヤーコフの真面目な所をカタナは美点だと思っているが、今の今では邪魔なだけだ。

「いらん、誰が付いてきても足手まといになるだけだ」

「なら、せめて僕なら、僕だけでも……」

「馬鹿かお前、隊長が留守にするのに副隊長のお前がここにいないくてどうする」

「う、しかし……」

もつともなカタナの意見は、ある意味でいつも留守にしているからこそ説得力があつたのか、ヤーコフは黙り込む。

「そもそも市長が話を持ってきたのは、直接俺に対してだったろ」

「それは、事態を重く見た市長が、隊の代表として隊長を指名した

だけでは……」

「いや違うな、市長は一度も俺の事を隊長と呼ばなかった。頭を下げて頼んだのも俺に対してだけだったし、引き受けたのも俺だ。なら俺が行くのが道理だろ」

それはただの屁理屈で、実際に市長がカタナの事を理解して話を持ちかけたわけではないだろう。聖騎士殿という呼び名も、皮肉もあるだろうが一番は協会騎士団の本部への影響力を指して呼んでいたに過ぎず、むしろカタナに期待してるのはそちらであることは容易に想像できる。

魔人の事を理解していた風の市長は、今のゼニスの戦力では不安に思っているのだろう。

市長は帰り際に本部への援軍要請について気にしていたので、カタナは一応、それも行う旨を明言はしておいた。

「……まさかそんな無茶苦茶な事を言うために、市長に頭を下げさせたんすか？」

「いや、あれは趣味だ」

それもキツパリと明言しておく。単純に市長の事は嫌いだからちよつとした嫌がらせがしたかっただけである。

「……隊長の冗談は本当にタチが悪いっす」

嘆息しながら言うヤーコフはえらく疲れた顔をしていた。

「いいからごちゃごちゃ言わずに俺に任せておけ。まあ、どうしても俺を一人では行かせられないって言うなら……」

カタナは鋭い視線でヤーコフを射貫く。

「ついてこれないように、お前ら全員丁寧に病院送りにしてやるさ」

それがかなり本気で言っているのだと理解したヤーコフは、流石に頷くしかない。

「——わかりました、隊長がそこまでの覚悟なら、もう言わないっす」

一応カタナの言葉は死なせるくらいなら病院送りの方がまし、と

いう変な優しさで溢れているが、本当にそれをされてはたまったものじゃない。

「それでいい。じゃあ留守は頼むぞ」

「はい…… ってもう行くんすか!？」

自然に立ち去ろうとするカタナをヤーコフは慌てて呼び止める。

「ああ、明日の準備もあるしな」

市長に相手方を偵察するためという名目で、自警団から案内人と馬車を用意させる手筈となっている。用意はすぐできるという事だったが、カタナの方に準備が必要だったので、出発は明朝の夜明け頃とした。

「分かりました。ではまた明日、見送りには参りますっす」

「別に来なくていいぞ、あと解つてると思うが他の隊員には話すなよ」

「はい、それは勿論解つてますっす」

魔人が現れた事を知るの今は一部の者達だけでいい。いずれ知らなければならぬかもしれないが、大きな問題に発展する恐れもある以上、事が終わってからでもそれは構わないだろう。

「じゃあな」

「ええ」

本来なら万が一、カタナが失敗した時の事も、話し合っておかなければならない所でもある。しかし二人はそれをしない。

カタナは何だかんだでヤーコフの事を信任しているし、ヤーコフはそれを今する不吉さが嫌だったという甘さからそうなった。

だが根源的に重なっている理由としては、どちらも互いを信じているからだった。

第十四話 駆身と駆身

カトリ・デアトリスは長剣を正眼に構える。

一刀で防御も攻撃も全ての動作に対応させるものとして、カトリの始動は常にその構えが染みついている。

相対するヤーコフは半身になり、右手に持った長剣を前に突き出すような構え。

貴族が嗜む競技にフェンシングというものがあるが、ヤーコフはそれを実戦的に使っているようだ。

実際にヤーコフのその半身の姿勢は、急所の集中する胴体部分を相手側から隠し、突き出された剣で容易に間合いを詰めさせない。一対一の戦いにおいては相手からするとかなりやりにくいものになっている。

「いきます」

「いつでもどうぞっす」

カトリとヤーコフは互いに声を掛け合う。これは両者の準備ができた事の最終確認でもある。

それを意味するように、既に両者の全身からは靈光が上がっている。

構えと共に両者の戦いの基本となるのが、そこに発現している駆身魔法。超人的な動きを可能とするその魔法によって、その始まりも終わりも、光が集束するような速さを見せる。

先に動いたのがカトリ。

ヤーコフの突き出した剣を弾く為、最小の動きで剣を振り上げ、そのまま打ち下ろす。

ヤーコフはそれに合わせて一步退きながらカトリの剣を受け流す。並みの剣士ならそこで体勢を崩すはずだが、カトリはそれを見越していたのか全く隙を見せなかった。

（読まれてた？ いや、そうさせるように自分から動いたっすね）

齒噛みしながら守勢に回らざるを得なくなったヤーコフは、次の動きに備える。

するとカトリは間合いを詰めるべく、姿勢を低くして一気に踏み込んでいく。

それに合わせてヤーコフは剣を振り下ろす、リーチは元々の僅かに勝る体格とカトリが両手で剣を構えている事で、半歩分は勝っている。

カトリが間合いを詰め切るより早く、ヤーコフの剣が肩にとどくかと思われた、しかしカトリは剣から左手を放し、手甲をヤーコフの剣の平に打ち合わせ、それを弾く。

（なんつー反応っすか!？）

駆身魔法により高速化した戦闘の中で、それだけのタイミングを合わせるのは、それこそ超人的な集中力と、意志を反射に合わせる反応速度が必要になる。それを平然と目の前で見せつけられたら嘆きたくもなるというものだ。

そして剣を弾かれたヤーコフの懷はがら空きであり、カトリの間合いに入る。

カトリは右手の剣をヤーコフの胸めがけて水平に斬りつける。

手甲で弾かれた剣は防御に間に合わない。それで勝負ありかと思われた。

「っ危ない」

ヤーコフは左手で引き抜いた短刀で、カトリの剣をしっかり受け止めていた。

本来なら決め手が搦め手に使うはずなのだが、カトリを相手にするといつもこういう苦しい場面で使ってしまった。

とはいえこの体勢と近い間合いでは、ヤーコフの剣はカトリの手甲、カトリの剣はヤーコフの短刀で封じられるため、動きようがない。

「これは、仕切り直しっすかね？」

「いえ」

カトリは剣を引くが、それは言葉通りヤーコフの言に背く形で、必要な動作。

ヤーコフは気付いてなかったが、ものすごく隙だらけになっている所があるのが、カトリには見えていた。

「足元が隙だらけです」

カトリの蹴り出した左足はヤーコフの両足を刈り取り、両手に得物を持っていたヤーコフは受け身もろくにとれずに尻餅をついた。

「ぐっ、あいたた」

「勝負ありですね」

ヤーコフは鼻先に剣を突きつけられている状況、当然その宣言を受ける他ない。

「ええ、参りましたす。デアトリスさんには、もう敵う気がしないっすね」

悔しくもあるが、負けを認める時は潔く相手を称える。それが騎士としての理想を常に求めているヤーコフである。

そういう騎士の礼儀のようなものにいまだ慣れないカトリは、少し照れながらも数歩下がって剣を構え直した。

「ではもう一本、御願います」

「もうっすか！？ 少し休憩を……」

「本当の戦いの場で、敵がそれを聞いてくれるのですか？ 不調な時でも実力を出すためには、多少の無理は必要ですよ」

「う、はい、そうっすね」

最初はカトリがヤーコフに稽古を乞う形で始まったこの実戦訓練であるが、情けない事に一週間で立場がほぼ逆転していた。

それは最初は互角であった戦績が、今ではカトリにしか白星が上がらなくなった事に由来しているだろう。

「では、いきます」

「い、いつでもどうぞっす」

結局、この日の戦績も二十本行った内一本もヤーコフはとれずに終わった。

+++++

ここ一週間程、業務が終わるとヤーコフとカトリはゼニス市の郊外まで出て、実戦形式の戦闘訓練を行っている。

自警団とのいざこざで、ヤーコフが駆身魔法を扱えると知り。カトリとしては同じレベルかそれ以上の技量を持つと見て訓練相手に選んだ。

ヤーコフも駐屯部隊の中では、訓練の相手が居なかったのが現状だったので、喜んでその申し出を受けたのだが。今となっては少し後悔もしている。

「はあ、はあ、もう無理っす」

「そうですね、今日は終わりにしましょう」

息を切らせて大の字に倒れたヤーコフ、カトリも流石に疲労を感じたのか腰を下ろしている。

駐屯所から持ち出した、訓練用の武器防具が投げ出されたままだが、今の二人には片付ける体力は残っていない。

「それにしても本当に凄いつすねデアトリスさんは、まさか一本も取れなくなるとは思ってなかったっすよ」

十数秒息を整えることに苦心したヤーコフが、やっと発した言葉がそんな贅辞だった。

「そんな事はありませんよ、ヒヤヒヤする場面は何度もありました。今日二十本全部とれたのはまぐれのようなものです。それに副隊長は危険だからと言って、突きを禁止にしましたが、これは結構副隊長の方に不利な条件ですよな？」

「いや、それはないっすよ。だってデアトリスさんに突きまで使われたら、僕は受けきる自身は全くないっすから」

ヤーコフは本心からそう思っている。だいたいそれ以前に刃引き

されている訓練用の物とはいえ、剣先が超速で突き出されるのは怖すぎて話にならない。

「そうですか、でも勝敗とかに関係なく、副隊長との訓練は得るものが多いです」

「へえ、そうなんすか？ 例えばどんな？」

ヤーコフは純粹に興味があつた。ヤーコフ自身、カトリとの訓練はかなり得るものが多かったので、相手がどう思っているのかは気になっていたのだ。

それに他人の意見を聞いて、気付かなかつた事を知る事は時としてある。

「まず、駆身魔法についてですが。関節などの運動に直接かわる部分と、そうでない部分には、状況によって使う霊力量を変えてますよね」

「ええ、そうつす」

それはヤーコフが師である祖父に一番最初に教わつた事。どうやっても限りがある霊力を節約して、少しでも魔法を保つために行っている事だ。

「正直それだけ細かな事象の変化を、戦いながら無理なく行えるのは感服しました。私も真似をしようと試みましたが、現状はまだ無理なようです」

「まあ、僕は子供の頃からじっちゃんに叩き込まれたつすから。むしろ僕としちゃ、常に霊力全開でも僕以上に長い時間持続できる、デアトリスさんが羨ましいつすけどね」

それは覆しようなない地力の差なのでどうしようもないことだが。霊力は大気に満ちる霊子が呼吸などで取り込まれ、体内で常に生み出されているが、一度に使える分が霊力量として個人の差となり。それによって霊子と反応する量も比例するのだから発現する魔法に大きく差が出てしまう。

霊力量が多ければ、それだけ使い果たした時に回復するまでの時間はかかるが、だからといって霊力量の少ないものが回復するのが

早いというわけではなく、単純に器が小さいから満ちるのが早いというだけの話である。

「でも長期戦になれば、私と副隊長の霊力差は微々たるもののようにです。何戦か続けて行った場合は、むしろ調節ができる副隊長の方が長い時間持続可能なようです」

「ああ、確かに。あ、それで無理して休憩無しで、訓練続けてみたんですか？」

「ええ、霊力量ではなく単純な技量と力量で、どこまでその差が埋まるのか知リたかったのです」

結果としてカトリが全て勝ちはしたが、危なげなく勝ったのは最初の内だけだった。それだけ差が無いという事だろう。

「そうすると僕も捨てたもんじゃないっすね」

「いえ、充分凄いと思います。以前に武芸祭の本選であたった協会騎士の中にも、副隊長以上の使い手はいませんでしたし」

「まあ、駆身魔法を使う騎士はあまりいないっすからね」

「いえ、単純に剣技だけでも副隊長以上の使い手はいませんでした」

「そ、そうすか」

慣れない事を言われて照れくさくなったヤーコフは、唐突に話題を変えたくなった。

「そういえば僕は観てなかったんすけど、デアトリスさんは武芸祭で優勝したって聞きました。たしか規定では優勝者は騎士になれたはずっすよね」

少しだけ気になっていた事だが、いい機会だと思ってそれを聞くことにした。

本来なら騎士になれたはずのカトリが、現在その見習い職である従騎士として、ヤーコフ達の隊に居る理由。

「騎士の位は自分から辞退させてもらいました。でも協会騎士団には入りたかったので、代わりに従騎士として、おいてもらう事になったのです」

「それは、なんでまた？」

どうせ協会騎士団に入るならば、待遇の良い騎士になる方が得だろうとヤーコフは思う。特に給料が段違いだし。

「……私には、騎士になる資格がありませんから」

「え？　どういうことですか？」

騎士になるのに資格があるとすれば、それはカトリが武芸祭で優勝した事でその資格を得たはずだ。

通常なら騎士となるためには、協会騎士団の設けた試験を通らなければならぬとはいえ、武芸祭の規定も協会が定めた正規のものだ。

それが資格にならないというのはヤーコフには理解できない。

「副隊長を見ていると余計にそう思います。私がここに居る事さえ間違っていると……」

「ど、どうしたんですか。話が見えないですよ」

なにか変な方向に話が進んでいると感じたヤーコフは、今更ながらに慌てだす。もしかしたら聞いてはいけない事だったのかと思い、話題を変えるべきかと逡巡する。

しかしそうしている内に、先にカトリが口を開く。

「……やっぱり、何でもありません。最近少し自信を無くすことが多かったせいか、不安定なのかもしれませんね」

「もしかして、隊長ですか？　あ、前に稽古つけてもらった時に、辛辣な事言われたとかっすか？　そうだとしたら気にしない方がいいですよ、あの人の口の悪さは挨拶みたいなもんっすから」

「そういうわけではありませんが、ただ隊長に関係はあるかもしれません。武芸祭の時もこの前の稽古も、完膚なきまでの力の差を見せつけられましたから」

「それこそ一番気にしちゃいけない事っす。なにせあの人は色々と規格外っすから」

「……ええ、確かに普通じゃありませんね」

カトリが知っているカタナという男についての事柄に、何一つとして普通という言葉は当てはまらない。

どこをとつても異常で異質、

「でも……私は超えて見せます」

もしかしたらそう宣言することは、単なる強がりであつて、本当は諦めがついてしまっているのかもしれない。認めたくない事から、目を背けているだけなのかもしれない。

（そうしなければ、私は……私という存在が生きている意味を失う）
立ち止まらずに、上だけ見つめ続けて上り続ける。カトリはそう自分に課していなければ自己を保つことすらできない。

（そうでなければ、死んだあの人達に顔向けができない）

地獄のような血の海、大好きだった人達の屍の中心。

血塗れの、まだ少女だったカトリ・デアトリス。

思い出したくない、しかし、決して忘れてはいけない過去。

幾度も刻み付け、既に傷だらけの心に、また新たな誓いの刻印をする。

「デ、デアトリスさん？」

「……すいません、考え事をしていました」

心配そうなヤーコフの問いかけに、我に返ったカトリは苦笑を浮かべる。

「ひどく怖い顔してたっすけど、何か悩み事っすか？」

「いえ、大した事ではありません。それよりも怖い顔とは失礼ですね……」

「あ、いや、でも怖い顔でも美人っすよ、デアトリスさんは」

「そういう冗談は好きではありません」

「……冗談じゃないんすけどね。でも凄いつすね」

「はい？」

また脈略なく褒めるヤーコフを、カトリは不思議に思つて見つめる。

するとヤーコフは嬉しそうに語り出した。

「だって隊長を『超えて見せる』なんて、普通は言えないっすよ。

僕なんかは一回稽古つけてもらった時に心を折られたし、隊長の強

さを知ると大抵の人は忌避するっすよ」

「……その割には、副隊長は慕ってますよね。隊長の事」

「はは、まあ恩人っすから。それに、なんだかんだであの人から学んでることも多いっす」

「いいですね、私は何一つ隊長から教わったことはないです」

「いやいや、『教わる』ではなく『学ぶ』っすよ。隊長が自分から何かを教えてくれることなんて、まず無いっす。だけど背中を付いて、その背が語る言葉を聞けば、見えなかったものが見える時があるんすよ」

「背中が語る……なるほど、そういうこともありますか」

「もしかしたら騎士とはそういうものかもしれないっすね。敵に後ろを見せず、味方を其の背に守る、みたいな」

「……前から思っていましたけど、副隊長は少し、騎士という職に理想を求め過ぎている気がします」

「う、否定はできないっす」

「でも、そういうの、私は結構いいと思います」

カトリは素直にそう思う。ヤーコフという男が騎士という職に持つ志は本物で、それは万人の救いとなる素晴らしいものだ。

だからこそ眩しく、同時にそうはなれない自分がとても汚く思える。

どうせならそういう生き方をしたかったと、カトリの言葉に照れているヤーコフの横顔を見ながら思った。

「デアトリスさんにそう言ってもらえると、やる気が出るってもんす」

「でも意中の女性は一人に絞るべきですよ」

「……やっぱりオチは、そこに落ち着くんすね」

胸を張った体勢から、一気に肩を落としたヤーコフの拳動が可笑しくて、カトリは自然と笑みを零していた。

ヤーコフもつられて笑ったが、ふとその表情が陰る。

西の空に太陽が落ちたせいかと思ったが、実際に神妙な顔つきに

なっているにカトリは気付いた。

「どうかしましたか副隊長？」

「いや、本当は言うべきかわざるべきか迷っていたんですけど……」
ヤーコフは歯切れ悪く、何かを言いあぐね、カトリは不思議に思
いながらも言葉を待つ。

やがてヤーコフは意を決したように、唐突に頭を下げた。

いや、それどころではなく、地面に両手と額をつける、いわゆる
土下座の体勢をカトリに向けた。

「わ、どうしました？」

いきなりそんな体勢を目の前で見せつけられ、戸惑うしかないカ
トリ。

しかし、ヤーコフは頭を上げずに一言絞り出す。

「……僕の御願いを聞いてもらいたいです」

そして訥々と、ヤーコフは今日の昼、市長が持ちかけた一件の事
を語り出す。

それは最初で最後、副隊長が隊長の命令に背いた瞬間だった。

第十五話 犯罪者と軍人

夜明けより少し前のもつとも空が暗い時間、カタナはゼニス市の郊外に訪れていた。

ヤーコフには、準備があると伝えて出掛けたはずのカタナ。実のところそれはサボる口実で、いつものように街をブラブラしていただけだったが、その場所に出向いたのは一応の理由がある。

市長との取り決めにより、明日カタナは偵察の名目でゼニスを発つ。その前に会って置くべき者がいて、待ち合わせに指定したのがこの場所なのだ。

街道からも離れ、誰もいないその場所はとても静かであり、唯一聞こえるのは虫の声だけ。しかしそれを風流とは思わないカタナは、雑音として切って捨てる。

見上げると空いっぱい闇が広がっている。今日は夕方から曇り気味だったから星も月も出ていないらしい。

「今日はシャチョー好みの、良い夜だね」

狙い澄ましたかのように、唐突にカタナの背後から声が掛かった。振り向かなくても誰かは解っている。そいつをこの場に呼んだのはカタナなのだから。

「風神とのかくれんぼは済んだのか？」

カタナの背後には、一週間程姿を見せていなかったサイノメが何故か正座していた。

「まあね、ちよいと巻いてきたとこさ」

「簡単に言うな。いや、お前にとっては本当に簡単な事か」

正直な所、サイノメがこの場に来るかどうかは微妙だと思っていた。風神がサイノメを追っている事をカタナは知っていた。だがサイノメはそれを伝えるより早く、自分で察知して身を隠していたので、どんな状況になっているかはカタナは知らなかったからだ。

それでもサイノメが捕まることはありえないと思っていたから、

いくつか取り決めてある伝達手段で呼び出してみたのだが。

「いやゝ実を言うとかなりしんどいね。元から風ちゃんとは相性が悪いからさ、まあ風ちゃんから見てもあたしは相性が良くないだろうから、どっこいどっこいだけだね」

そう言いつつも微塵も疲れた様子を見せないのは、ある意味逃げる事に掛けては文字通りのプロである余裕なのか。

しかしカタナにはそれよりも気になることがあった。

「本当に巻いてきたのか？ 近くに居るんじゃないだろうな？」

「気になるなら見回りでもしてくればいいよ」

「……面倒だからやめておく」

「あはは、それでこそシャチャョーだ」

近くに居ても居なくても、風神にはそれこそ意味が無い。

風神は風の霊子を媒介にした特殊な魔法を扱う事が出来る。その中で風と意識を共有し、風の通る所を知覚し探知が可能な魔法が存在していた。

カタナが知るうえで、風神の最大知覚範囲は約一キロメートル四方その気になればそれだけ広範囲を捉えられる風神が同じ街に居る中で、逃れられる事自体が間違っているように思う。

「それで、俺の方の状況は知っているか？」

「もちろん。市長から魔人退治を頼まれたんでしょ」

そこは流石の情報屋というべきか、話が早い。風神から逃げながらも、しっかりと仕事はこなしていたらしい。

「俺が知りたい事は解るな？」

「うん、その魔人とその周囲の情報」

そこも流石というべき的確さで言い当てるサイノメ。しかしそれも情報屋としては当たり前らしく、サイノメ曰く「得られる情報には限りがあるから、常に契約主の欲している情報を見極め、取り捨て選択している結果に過ぎないよ」という事らしい。

「じゃあ知っている事を全て話せ」

「あいよ、じゃあまずその魔人についてだけど……残念ながら分か

った事は少ないね。挙げられるとすれば、最近この辺のならず者を集めて山賊団を結成した中心人物だって事と、炎の魔術を扱って事くらいかな」

「確かに少ないな、だがまあそれもそうか。存在しないはずの魔人の情報が、そんなに簡単に挙がるわけがないからな」

「そうだね、でもそう考えると変な話だよ。その魔人が五十年前の生き残りなのか次世代なのかは解らないけど、これまでひっそりと生きていたわけじゃない？　それが山賊団を結成して、わざわざ目立つような事をする理由があるのかな」

「単純に考えればひっそりと生きていくのが嫌になったか、あるいは山賊として生きても魔人だとバレないでやっていける自信があったか、というところだが。まあ、何にしても始末するのは変わらないから、その点は気にするところではないな」

「うわ、ドライね」

「そうじゃなければ、やってられんさ」

慣れた事のようにカタナは言い捨て、その話は終わりと言わんばかりに締めくくる。

「魔術については、シャチョーの方が詳しいだろうから別にいいよね」

「ああ。炎の魔術を使う事らしいって事は、市長から聞いた。何でも、黒い炎が広範囲に広がり、戦場になったのは山中だったが、焼かれたのは自警団員だけだったそうだな」

「そう、魔法じゃ難しい常識外れの離れ業だよな」

「焼きたいものだけ焼く炎な、便利で効果的だがそれだけだな」

「……まあシャチョーにとっちゃ、どんな魔法も魔術も怖いもんじゃないだろうね」

「そういうわけじゃないが、本当に恐れるべき事がもつとあるからな」

「例えば？」

「お前も知っている事だからわざわざ言うのは時間の無駄だ。それ

よりも話すことがあるだろう」

サイノメは悪戯っぽい笑みを浮かべ、少し残念そうにしながら求められた情報を引き出す。

「魔人の結成した山賊団についてだけど。これについては本当にならず者の寄せ集めで、中には賞金首もいるけど、おおもとの身元は割れている人間だけだね」

実のところ、カタナが一番知りたかったのはその点だった。

「山賊団は何人で構成されている？」

「全部で九人、魔人を抜かせれば八人だよ」

「そうか、それが解れば充分だ」

カタナが知りたかったのは魔人が本当に一人なのかという事。それは単純に始末する対象を明確にしておきたかったに過ぎない。

だが、根底にある理由として、相手が犯罪者であってもそれが人間ならば、カタナは殺さない。いや殺してはいけないとしている。

それが化け物として生まれた自分が、人に交じって生きるために作った最低限の制約だと思っているから。

「こちらについてはそれで全てだな」

「いや、もう一個あるよ。前回保留だったカトちゃんこと、カトリ・デアトリスについて」

「……そうだったな」

完全とはいえないが失念はしていた。帝国特務や市長との事で、優先順位が入れ替わってしまったので、後回しになったが。それも一応は気になっている所だ。

記録ではカトリ・デアトリスは五年前に死んだ事になっている。ではカタナの部隊に配属されたカトリ・デアトリスは何者なのかということ。

「何か解ったのか？」

わざわざサイノメがその件を持ち出したという事が、期待を持てる理由だったため、カタナは何らかの進展があるものだと思った。

「うんにゃ、それが全然なんも解んないのだなこれがまた」

「……無能め」

「ひどい！ それはちよつと酷過ぎない!?」

カタナとしては見事に無意味に期待を打ち砕かれたわけだから、それくらい言つても罰は当たらないと思つている。

「これでも風ちゃんの目を盗んで色々調べたんだよ！ 本当だよ！」

「……解つた、別に責めているわけじゃないから心配するな。ただお前の実力はその程度だったかとかとがっかりしたただけだ」

「待った！ やっぱり責めて、責めてください！ 何かシャチョーがその冷たい目で見てくるのだけは最高に嫌だ！」

「冗談だ」

どれだけ嫌だったのか、サイノメが変な要求をしてきたのでカタナはお茶を濁すことにした。

「……まあでも、カトちゃんの事については、今度こそ次までに調べておくよ」

若干疲れた様子でサイノメはそう言った。

「別に急ぐ必要はないぞ、それより先に、お前に対応すべき事があるだろう？」

「ああ、風ちゃんの事？ そつちは大丈夫」

「何か手があるのか？」

「まあね、だから心配無用だよ。かくれんぼもそろそろ終わりにしないと、シャチョーも寂しいだろうしね」

カタナから見えてサイノメの最大の懸念事項は、帝国特務と風神の事だと思つていたので、そうやってあつさりと返されるのは意外だった。

「別に寂しくないはないが、無理はしてないだろうな？」

「うん、全然」

「そうか、それなら任せる事にする」

それ以上は愚問だとサイノメの目が言っている。カタナはこの小さな相棒の事はそれなりに理解して、信賴しているつもりだ。

だから、もう何も言わない事に決めた。

「任せるも何も、帝国特務との事はあたしの問題だよ。最初からシヤチョーが気にすることじゃないのに、あの時だって私のせいで……」

しかし、サイノメがなにやら昔の事を蒸し返そうとしたので、もう一つカタナが言うべき事が増えてしまった。

「お前にはやつてもらわなければならぬ事が山ほどあるからな、面倒をこれからも被ってもらうために、潰れてもらっちゃ困るんだ」「最低だな！ やっぱりもつと心配しなよ！」

吠えるサイノメを見て、カタナはこれでいいと思った。

本音を見せるのはサイノメらしくはない。もちろんカタナらしくもない。だからいつも通りに建前で言い合う。それで充分解り合えるし分かち合えるから。

「じゃあ、余裕があれば留守の事も頼むぞ。ヤーコフだけじゃ手が足りない事もあるだろうしな」

「……秘書官の仕事か、そうだね検討しておくよ。書類が溜まるのはもうこりこりだし」

以前に机に積み上げられたトラウマを思い出したのか、サイノメの顔色は若干悪くなる。

カタナもそれは同感だった。

「じゃあ、俺は行く、一応旅立ちの準備もあるしな」

「はは、ギリギリまでしないのがシヤチョーらしいよ」「放っておけ」

そう言ってカタナは立ち去る。本当はもう一言残しておきたいところだったが、言わないと決めた事だったので止めておいた。

サイノメはカタナの背が小さくなるのをその場で見送り、完全に見えなくなってから夜空を見上げた。

「今日は良い夜だね、そう思われないかな風ちゃん？」

「ふん、貴様のような犯罪者にとっては、月の無い夜が最良なのだろうな」

サイノメが見上げた空には、銀糸のような髪を揺らして不機嫌な顔で見下ろす風神の姿があった。

+++++

「こうして顔を合わせるのは三年ぶりか、変わらないな貴様も」

「そういう風ちゃんは眉間のしわが増えたんじゃない？ 苦労してるのかな？」

「白々しいな、誰のせいだと思っている」

風神は眼下の、かつて苦汁を何度も飲まされた宿敵とも言える、少女のような風貌の犯罪者を睨み付ける。黒と青の色違いの両目はその対象を掴んで離さないように、しっかりと見据えられている。

「誰のせい？ うゝん『室長』かな？ それとも『雷神』？ あ、解った、『鋼』でしょ！！」

「お前のせいに決まっているだろう……いや、まて、なぜ貴様が鋼を知っている？」

鋼が帝国特務に組み込まれたのは最近の事だ。少なくともサイノメが現れた三年前にはいなかったのだから、情報が漏れていたことになる。

「敵の動きを調べておくのは基本だよ。そうしなければ、所詮は弱い少女であるこのサイノメちゃんは逃げ延びる事も出来ないのだからさ」

「つくづくコケにしてくれるな……」

「本当のことじゃん？ あたしには戦う力はこれっぽっちもありはしないよ。本当なら風ちゃん達みたいな凄腕集団よりも、近所のワンちゃんに追い回されるのがお似合いだと自負してるよ」

確かに見た目だけは無害な少女ではあるが、サイノメの中身には害悪しか詰まっていなと風神は思っている。

「そんな戯言はどうでもいい……それより、何が目的だ？」

「目的つて、もしかしてこうやって風ちゃんの前にわざと姿をさらした事かな？」

「そうだ、この一週間だけ血眼になってもこの目に貴様が映ることは無かった。その方法も不可解だが、それ以上に一番私がマークしている『魔剣』の側に貴様が現れた事が不思議でならん」

「なんだ、そんな事を気にしてたの？ そりゃ簡単さ、シャチョーに呼ばれたからここに来たのさ、ただそれだけの事」

「シャチョー？ 魔剣の事か？」

「あ、風ちゃんは知らなかったね。私達情報屋の鉄則として、契約主の情報はどんな些細な事であっても口外してはいけないってのがあつてね、ただの記号であつても名前はそれに当たるんだ。ま、私のは只の癖つてのもあるけどね」

「……ふん。では魔剣に呼ばれたからという理由だけで、私に捉えられるのも構わずにこのこ出て来たのか？」

「まあね、契約主の命令は絶対だし。ただシャチョーの方は、無理なら来なくてもいいと思つてたみたいだけど。あたしとしては別に風ちゃんに見つかるくらいどうでもよかったから」

「……何？」

「そうじゃない？ だつて風ちゃん、折角こうしてあたしが目の前に居るのに、何もしないで呑気に会話なんてしちゃつてさ。まるで何かを警戒してるみたいだよ？」

「……」

「まあ、追っている対象がいきなり目の前に現れて二の足を踏むのは解るよ。罠の可能性だつてあるし、私の余裕もそれを裏付けているように見えるかもね……でも残念だよ」

「……何が残念なんだ、言ってみろ」

「風ちゃんがちょっと見ない間に変わっちゃつてた事がさ、三年前

なら問答無用であたしを殺そうとしてたと思うよ。いや、出世した分、丸くなっちゃったのかな？」

「そうかもしれないな、不出来な部下を何人も見てきた、その分過去の自分を見つめ直すこともできたのだから」

「……へえ、認めるんだ。以外だよ」

「ああ、だからこうして貴様を殺さずに捕らえる事が出来る」
「――!?」

サイノメの周囲の地面から靈光が上る。

それと同時に、サイノメは突然仰向けに倒れる。それはまるで吸い寄せられるように、受け身も取れずに地面に貼り付けられた。

足掻こうとするも、手も足も動かすことができない、それどころか妙に息苦しい。

「どうした、まさか逃れるすべを何も用意していない訳ではあるまいな？ それ以外にも四つほど魔法式を組んであるんだ、不本意な貴様との対話の時間で用意した貴重なものだ、無駄にしてくれるなよ」

風神は始めからサイノメと、ともに話す事など考えてはいない。考えていたのは決して失敗しないための入念な準備だ。

「か、身体が重い……何……これ？」

空間魔法式・重烙。くわいろう 物体にかかる重力の負荷を数倍にする、風神の編み出した独自の戦技魔法。受けた者は身動きどころか指一本動かすことも困難になる。

「どうやって私から逃れ続けたかは知らないが、貴様の神出鬼没さはよく知っている。風に頼るだけでは三年前と同じ結果になる事は解っていた。だから貴様を捕らえる為にと思って編み出したものだが、存外役に立ったな」

風神は自身に纏う風の魔法を解除して、上空から地面に降り立つ。これ見よがしに饒舌なのはサイノメに好き勝手を言われた仕返しなのか。

「貴様は、三年前の私なら問答無用で殺しにかかると言ったな。そ

れは私も認めた通りだが、それは決して私が貴様に対する憎しみを無くしたわけではない。むしろその逆だ」

「……」

「憎いからこそ、生かして捕らえて死ぬより辛い地獄を見せてやる。殺されて楽になれるほど、貴様の犯してきたことは綺麗なものではないぞ」

「……そう、かもね。でも……風ちゃんが憎く……思っているのは、私の……犯してきた事じゃないだろ？」

「……喋りすぎた。もう貴様と対話する必要は無かったな」

すでにサイノメは重烙による負荷で息も絶え絶えだ。この状態から逃れられるとは考えられない。

風神の任務は達成されたとみて間違いない。

だが、サイノメの顔に浮かんでいる笑みは未だ消えていない。

「……ああ……そう……そんなつれない事……言わずにさ……」

後はサイノメを気絶させて完全に無力化すれば完璧になる。放っておいても重烙の負荷で気を失うだろうが、念を入れて意識を失わせる薬品を用意してある。

それをサイノメに使うために風神は近づいていくが、信じられない事が起こった。

「——馬鹿な！？ 消えただと!？」

一時たりとも目を放していなかった風神の視界から、サイノメの姿が消えている。それどころか重烙の術式も解除されていた。

突然の事に、さしもの風神も取り乱す。そんな風神を嘲笑するかのように背後から声が掛かる。

「もうちょいお話ししようぜ、風ちゃん」

「貴様……どうやって」

振り向くことすらできずに風神は問う。背中を中心下部に突きつけられているものを無視できなかったから。

丈夫なはずの黒い軍服を貫き。サイノメの懐剣はあと少し力を入れれば、容易に風神に致命傷を与えられる部分を撫でている。

「どうやって逃れたかって？ それは企業秘密だけど……まあ、あえて言うとするれば、それはあたしが神出鬼没さを売りにしている奇術情報屋だからなのさ！！」

「……そんな下らない冗談を聞いているのではない。重烙は貴様に直接発現させた魔法だ。だから解除しない限り、場所を移しても効果は残るはずだ」

しかし、解除された形跡も素振りも無かったのに、重烙の術式は解除されている。それはまるで対象を見失った事で自然に消滅したかのように、サイノメの倒れていた場所に霊子の残照が残っていた。「そうなんだ、へえ。それはまた良い情報を聞けたよ。重烙って魔法の事をあたしは何も知らなかったからさ」

「……」

それではどうやって解除したのか。あるいは言葉とは裏腹に、サイノメは重烙の事を知っていて対策をしてあったとも考えられるが。結局疑心は疑心を呼ぶため、サイノメを理解しない以上、風神には結論を出せない事だ。

「まあ、そんな事はなんでもいいじゃない。あたしはもっと意味のある事が聞きたいのだからさ」

「……意味のある事？ 貴様との対話に、私は寸分も意味を見いだせないが？」

「はは、そう言わずにさ。あたしは風ちゃんに、聞いておきたいことがあるんだよこれが」

「……」

何を聞かれたところで答えない、風神の中では初めからそう決まっている。

「例えばさ、カトリ・デアトリスの事とか」

「——！？」

「お、いいね。表情の変化には乏しいけれど、身体の反応は意外に分かりやすよ風ちゃんは」

サイノメは風神の身体の硬直や呼吸の乱れで、動揺を見極めた。

ほんのわずかなものだだったが、情報屋としての勘は間違いないと告げている。

「やっぱり帝国特務と関係があったか、おかしいとは思っていたけどね、あたしがその正体を掴めないなんてさ」

「……知らないな、カトリ・デアトリスとは誰の事だ？」

「はは、その誤魔化し方はないよ。詳しい裏の事情はともかくとしても、シャチョーの周りを張っていた風ちゃんが、その部下であるカトちゃんの事を知らないはずないし。それに帝国で栄華五家と言われたデアトリス家の事は、シャチョーでも知ってたくらい有名な話だよ、それを引き合いに出さないのはおかしい」

「……ぐ」

「まあこれで、ようやく確信が持てたよ。彼女は『名無し』だね……」

サイノメの言う『名無し』とは、帝国特務における最も下位の構成員たちの事。『風神』や『鋼』という記号の与えられた駒とは違う、その名の通り呼び名すら与えられない捨て駒達の事をいう。

「いくら調べてもほとんど何も掴めなかったのは、既に抹消されていたからかな。何もかも奪われて、名前すらも無くなっていたんだ、そりゃ調べるのも到底無理な話だよな」

「……仮に、貴様がいう事が本当だったとして。カトリ・デアトリスをどうする気だ？ まさか、そんな当て推量で殺す気じゃないだろうな？」

「いやいや、確かにあたしは犯罪者だけでも、誰かれ構わず殺すような殺人鬼ではないよ。カトちゃんの事を知りたかったのは、情報屋としての依頼主と約束した事に対する唯の意地さ。それにあたし自身で確信はしても、これじゃあとても情報として確定とは言えないから、この件はまだ保留事項だよ」

とはいえサイノメとしては、ようやくカトリの件についての進展をカタナに報告できると一安心ではあった。何気に無能呼ばわりされた事を気にしていたのだ。

「何にしても、カトちゃんについてはシャチョーに任せる事になるだろうから、あたしが直接手を下すことはまず無いね」

「……そうか。では私からも一つ聞かせろ」

「お、何かな。風ちゃんの言葉を借りるなら、あたしとしては風ちゃんに『対話する必要はもう無い』わけだけど……でもいいよ、折角だし答えてあげよう」

ふざけた物言いだが、風神がサイノメに心臓を握られているも同然の状況であるので、言い返しはしない。そんな事よりも、聞いておくべき事が風神にはある。

「貴様にとって、『魔剣』とはどういう存在だ？」

「……こんな状況で、聞きたいことってそんな事だったの？」

「ああ、私にとっては何よりも知りたいことだ」

どうしてか風神はそう思った。

もしかしたら自分はこのまま死ぬことになるかもしれない、そう思った時に確認してみたくなったのだ。

自分から大切なものを奪った者が、それを大切に思っているかどうか。

「……あたしにとってシャチョーは、ただの金ヅルだよ」

しかし、サイノメからの答えは風神の望むようなものでは無く。

それによって風神の覚悟は決まった。

「そうか……三年も魔剣と過ごしても、貴様は何も変わらなかったのだな」

「変わる必要があるのかな？ お金は大事だよ、『世の中金だ』って言葉もあるくらいだしね。大抵のものは手に入るし」

「本当に価値のあるものは、大抵のものの中には無いと気づかないのか？」

「あら？ どうしたの、風ちゃんがそんなこと言うなんて雨でも降るの？」

「……確かにらしくはないな。だが最期に言っておきたかった、貴様と私が死ぬ前にな」

「は？」

「貴様の非力な腕とその得物では、私を即死に追いやるのは不可能だろう。そして覚えているか？ 私は重烙以外に、四つの魔法式を残してあると言ったのを。今度はそれを全霊力をもって、貴様を殺す為に発現させてもらう」

「ちよ、ちよと待った。風ちゃん自分の全力を弁えて言ってる！？ この距離で戦術級に近い魔法を発現させたら、風ちゃんだって巻き添えでしょ！？」

「元よりこのまま貴様に殺されるか、相打ちかのどちらかしは道は無い。ならば後者に賭けるのは当然だろ」

「そうかもしれないけど！ 別にあたしは風ちゃんを殺すつもりなんてないから！」

「……もう貴様の舌先三寸に付き合うのはうんざりだ。あの世では関わってくるなよ」

風神は自身の全霊力を持って術式を起動、それは霊子を望むように変化に導き、この周囲を殲滅させる魔法を発現させるはずだった。――！？」

しかし風神は自身の身体に起きている変化を、その時になってようやく気付いてしまった。

視界がぼやけ、意識が遠のいていく。

その感覚に気付くと同時に、風神は地面に倒れていた。

サイノメはホッとしたように、風神のその様を見下ろしている。

「あつぶないなあ。なんとか間に合ったか」

「……これは、毒か」

「そ、効果は麻痺と睡眠作用。命には関わらないから安心していいよ」

言いながら懐剣をしまうサイノメ。その刀身に塗られていた毒が、撫で斬られた風神の背中から作用していたのだが。そうやってその毒が遅れて作用するように仕向けていたのは、サイノメが風神から情報を引き出す為に、話をする時間を作る為だった。

「でも焦ったあ、反撃はあると思っていたけど、まさか相打ち覚悟で来るとは思ってたからさ。もう、風ちゃんはもつと自分を大切にした方が良いよ」

「……それを……貴様が……」

言うな。という言葉を絞り出せずに、風神は意識を失う。

眠りに落ちた風神の様子をサイノメは数秒観察をする。

「ふむ、風ちゃんは眠りながらも魔法を発現できるって聞いた事があるけど、麻痺毒で霊力の操作を不能にすればそれも不可能みたいだね。本当に良かった」

サイノメは風神を殺すわけにはいかない。なぜならサイノメの契約主がそれを絶対に許さないからだ。

だから相打ち覚悟なんてものが一番困る。サイノメが逃れるすべはいくらでもあったが、風神が死ねば意味が無い。

「しかし本当に相性が悪いな、あたしと風ちゃんは。頼むからもう関わってこないでよ」

と、意識の無い者に言っても仕方がない事を言い残し、サイノメはその場を去る。

そのまま置いていくことは少しだけ気が咎められたが、そこはうまく風神の相棒をここに誘導する事でフォローすることに決めた。
(あの毒なら二、三日は風ちゃんも動けない。これであたしの仕事の不確定要素は無くなったかな)

サイノメの頭の中にある情報の数々。それを繋ぎ合わせるとこれから起こることがある程度予測でき、それによって自分がどう動くべきか理解している。

サイノメにとってこの時に風神を無力化しておくことは、必要であり必然。カタナに呼ばれた事による偶然に見えるかもしれない事柄も、サイノメにとっては必然なのだ。

ならば次に動くべきも決まっていた。

必然は必然のままに、サイノメは決められた道を進むようにブレなく行動する。

それはきつと何より大切に思うものの為に。

第十六話 旅と道連れ

夜明けと共にカタナは、埒わづらにしている安宿を出た。

格好はいつもと変わらず黒い外套に、黒い平服の黒尽くめ。片手には頭陀袋を持ち、その中身は着替えのみだが、その着替えも全て黒である。

大陸では一般的に黒という色が好まれない傾向にあるが、一部の高級品では他との差別化を図るためにあえて黒を使ったり、逆に黒い物が少なくなつた為に価値が上がったものなどもある。

カタナの持ち物に黒い物が多いのは、単純に好みの問題だが。

カタナは鳥も寝ている早朝の静寂の中、そのままゼススの中心である公道を歩き、南端の街の入口まで向かう。

そこには市長に頼んであったものが用意されていた。

二頭の馬と、それに連なる車輪のついた天幕付きの荷台……いわゆる馬車と、その傍らで煙草を吹かしている商人のような格好の男。男はカタナに気付くと煙草をくわえたまま歩み寄ってくる。

「よう、久しぶりだな隊長さん」

「……アンタは、確か自警団のニール副団長だったか？」

「お、よく覚えててくれたな。呼ぶ時はニールで構わんぜ、俺もカタナって呼ぶからよ」

ニールは自警団の所属にしては珍しく駐屯騎士に対しても友好的だ。それゆえ二回程しか顔を合わせた事の無かった相手でも、カタナの記憶に残っていた。

「それで、アンタが市長に頼んであった案内役を務めてくれるのか？」

「おう、ついでに御者も俺が務めるから大船に乗った気でいな。いや、船じゃなくて馬車だったか、ガッハッハッハッハ」

ニールという男は結構なお調子者気質もあるらしい。カタナとしては苦手な部類の相手だが、替えはきかないだろうから我慢するし

かない。

（それにしても、商人の格好が似合っていないな）

カタナの指定で、案内人と馬車には商人の偽装を施すように市長に伝えてあった。

理由としては、カタナが馬に乗る事が苦手であるという事と、騎士や自警団だと気づかれずに目標に近づく為。あるいは目標が山賊を率いている関係上、商人を偽装すれば目標の方から近づいてくれる可能性もあったからだ。

だが大柄なニールの体格では商人に見せるのは少し不自然であり、近くで見れば右目に古く大きな傷跡が走っていて、どう見ても荒事で生きてきた人種である。

「目標の場所までは二日くらいかかるはずだが、アンタ一人で大丈夫なのか？」

「任せな、体力には自信があるんだ。あと俺はニールだぜカタナ」

白い歯を見せながら親指で自身を指差ししてアピールするニール。

「……ああ、世話になるなニール」

「おうよ！」

ドンと胸を叩きながら任せろと言うニール。一々拳動がオーバーであるが、それもやる気の表れなのだろう。少し鬱陶しいとカタナは思ったが、馬車を動かす事はしたことが無いので、我慢しておくことにした。

「そういやお連れさんはもう馬車に乗って待ってるぜ、あれカタナのとこの新人だろ？ 噂には聞いてたが、すげえ美人で驚いたぜ」
「連れ？」

ヤーコフにはカタナ一人で行くと伝えてある。他の隊員に伝える事すら止めてあったから、ここにカタナ以外が来るはずは無い。

しかしニールの言葉で、なんとなく誰が居るのかは想像がついた。カタナが馬車の荷台の後ろ側から天幕の中を覗くと、その想像通りカトリ・デアトリスがそこに居た。

「おはようございます隊長」

「……どうしてお前がここに居る？」

「副隊長に頼まりました」

「あの馬鹿が……」

初めてのヤーコフの命令違反がよりによってこんな時だった事に、カタナは頭痛がする思いだった。

「とりあえず帰れ」

「……いきなりのお言葉ですね。私が居てはお邪魔ですか？」

「そういう問題じゃない。俺がこれから何処に何をしに行くか知っているのか？」

「ええ、もちろん。副隊長に全て聞きました」

「魔人の事もか？」

「はい」

「……あいつの口の軽さには本当にあきれ果てる」

「そう言わないであげて下さい。副隊長はただ隊長が心配だっただけです」

そうだとってもこの判断はひどい、完全に余計な事だった。確かに魔人の対策等で、詳しい事を何も伝えずにいたカタナにも非はあるが、それは伝えられない事情があるからこそ。

こうして誰かが付いてくることで、カタナはかなり動きにくくなったと言える。

「遊びじゃないんだ。迷惑だからさっさと帰れ」

「私も遊びで付いていくと決めたわけではありません。むしろ命を懸けてでも、ここは退けなくなりました」

「……ヤーコフに頼まれたのがそんなに大事な事か？」

流石に大袈裟な表現だが、カトリの瞳は本気で言っているように見える。

「いえ、私的にはそれはあまり気にしていません。ただこれから隊長が行う事は私がここに来た目的でもあるからです」

「……目的だと？」

以前にカトリはカタナに強くなりたいと言った。

そしてカトリは強くなる事に対してあまりに貪欲だった。その理由はきつと普通に人が強くなりたいと思う事とはかけ離れたものだと、カタナも感じるところはあった。

そうでなければ武芸祭で優勝するような力を手に出来る筈は無い。「お前が強くなりたいと願うのも、その目的の為か？」

「……はい、そうです」

この流れでカトリの目的に魔人が関わっている事はカタナに解った。そして協会騎士団で騎士になることもできたカトリが、尚も強さを求めるその理由もなんとなく想像がつく。

だがそれを認めるには想像だけでは無理な話だ。

「その目的とは何か話してみる。それ如何によつては連れて行く事も許可してやる」

「……それは」

カトリは少し考える素振りを見せながら、決心を固めているようだった。それを話すのがカトリにとつては余程の事だろう。

「なあカタナ、まだ時間かかりそうか？ そろそろ出発したいんだが」

そこでニールから声が掛かった。今まで空気を読んでか離れたところで煙草を吹かしていたが、出発が遅れるのもまずいと思って声をかけたのだらう。

「解った」

カタナが頷いて荷台に乗り込むと、ニールは御者台に向かう。

カトリに降りるそぶりは無く、カタナにもとりあえず降ろすつもりは無い。

「隊長……私は」

「移動中に聞いてやる。だが気に入らなければ途中で置いていくかな」

「……解りました」

そして荷台が妙な空気のまま、馬車は走り出した。

+++++

「……」

「……」

世界で一番気まずい空間というのは、人と人が向かい合っている状態で無言がその空間を支配している時だろう。

互いに理解しあった仲であるならばその限りではないだろうが、残念ながらカトリとカタナの間にある静寂はそういったものでは無い。「……おい、もしかして話さないつもりじゃないだろうな」

普段一人でいる事が多い分、実はそういう気まずさに耐性がないのはカタナの方であり

、自分からその妙な空気を打ち破った。

「いえ、違います。ただ……心の準備というか整理がつかなくて。今まで他人に話した事が無い事なので……」

「解った。一分だけ待ってやる」

「一分！？ 短くないですか？」

「まあな、俺は気が短いんだ。さっさと決めろ」

「解りました……今、話します」

一分待つてもらったところで結局は変わらない。そう思うとカトリの決心も意外と簡単だった。

「私の目的……これは私が強さを求める目的ですが、それはある魔人を倒す為なのです」

「……ある魔人？」

「ええ、五年前にデアトリス家が没落した事は、きつとご存知かと思われませんが。その元凶となったのは、その魔人によりデアトリス家の当主と、当家に連なる者が私以外全て殺されてしまったからなのです……」

カタナはサイノメから聞いていた情報と照らし合わせながら、カ

トリの話を聞いていた。

デアトリス家の者が記録上死んだ事になっていたのが、魔人の手によるものだという事は新事実だが、今一つ解せない事はあった。

「……」

だがそれを問うのは、カトリの話が終わってからにしようと思いい直す。

「今でもよく夢に出ます。たった一人の魔人に、近しい者が殺されていく惨状が。駆け付けた使用人、私の剣の師でもあった父、そして女子供も容赦なく魔術で逃げる術を奪われて、最後には屍の山しか残らなかった……」

「どうやってお前だけ生き残ったんだ？」

「……それが私にも解りません。魔人は私以外を殺し尽くした後、震えで動けない私の前から何も言わずに去っていきました。見逃された事に意味はあるのか、ただの気まぐれなのか、考えても解らない事です……」

「……」

こうして本人の口から直接聞くのと、サイノメから情報として得るのでは、やはり捉え方が随分と違って感じてしまう。他人事だと思っていたものが、現実問題だと実感させられる。カタナはそう思いながら、カトリの話を聞いていた。

「でも私がその時拾った命の意味は、復讐するためにあると思ってます」

「……普通に生きる道は考えられないのか？」

「はい、それが私の生きている意味ですから」

揺るぎ無くそう言ったカトリ、その生き方が如何に悲しく、如何に無意味であるか解っていないながらも、意味を自分なりに見出して信じている。

「無理だとは思わないのか？」

「思う時もあります、しかしそれでもやり遂げるまでは諦めないでしょう」

「そうか」

「ええ……」

それつきりしばし黙り込んだ二人。

それは気まずい無言とは違い、両者が思考を巡らせる為の時間だった。

その沈黙を先に破ったのはまたしてもカタナだった。

「もう一つだけ、聞きたい」

「何でしょうか？」

改めて聞くのは解せないと思っていた一点。サイノメから情報を得た時から保留にしていた事項だった。

「デアトリス家の当代の娘、カトリ・デアトリスは記録上では死んだ事になっている。これはどういう訳だ？」

サイノメの事を話すわけにはいかないが、その情報は公開されているものでカタナが知っていても不自然じゃない事だ。

「……それは」

口ごもるカトリ。カタナとしては今までそれはさほど気にしなくてもいい事であったが、カトリから話を聞いた今となっては違う。

デアトリス家を魔人が襲ったという話では、その場にカトリ・デアトリスが居たという事であった。

「もし、カトリ・デアトリスが記録の通りに死んでいるのなら。お前の語った話の信憑性は無くなるな」

「そう……ですね。ですがそれについて私が言える事は、カトリ・デアトリスは今ここに、生きて隊長の目の前に居る。それが事実だという事です」

「……記録が間違いだと言うのか？」

「それについては複雑な事情も絡みまして、私は一度死んだ事にしなければならなかったのです。理由は残念ながらお教えできませんが……」

ここまで言って何を隠すのか、カタナは納得できない所だが、カトリが本当に困っているようなので、今のところは追及をしない事

にする。

しかし譲歩する代わりに一つだけ決めた。

「では、お前がカトリ・デアトリスであると証明できるものはあるか？」

もしこれで証明できるものがあるのなら、カトリの話を信じてみる事にした。もちろん証明できなければここで馬車から降りてもらう。

「証明ですか……」

「ああ。言っておくが、その魔法剣^{エーデルワイス}じゃ駄目だ」

「これがデアトリス家の家宝だったと知っていたのですか？」

「ん……まあな、知り合いにそういう武器に詳しい奴がいるんだ。いや、そんな事はいいからさっさと証明して見せろ」

カタナは少し口を滑らせるが、それも知っている者には解る事なので、カトリはさほど気にしなかったようだ。

それよりも自分をカトリ・デアトリスだと証明する方法に真剣に悩んでいる。

本来ならエーデルワイスでも証明する材料にはなるだろう。だが、カタナが求めるのはサイノメが調べても得られなかった程の何か。それが警戒心は低くとも猜疑心は高いカタナが、信じてもいいと思えるボーダーラインだった。

「……エーデルワイスではダメとなると……あ、これならば」

カトリは何か思いついたようで、傍らの荷物からある物を取り出した。

「何だそれは？」

「懐中時計ですが、こちらを見てください」

カトリは取り出した懐中時計の裏側をカタナに見せる。そこにはある図形が描かれていた。

五芒星を元としているようだが、かなり妙な意匠を凝らしており、蛇が巻き付いていたり、変な所から羽が生えていたり、カタナには悪趣味この上ないように見えるデザインだ。

「これはかつての帝国栄華五家の、それぞれの家紋を合わせた紋章です。それぞれの当家の者のみ、持ち物に装飾することが許されていました。当然複製することは重罰に当たります。もっとも、デアトリス家が没落した今となつては、これがどう扱われているのかは解りませんが……」

「……なるほど、逆に考えればそれを今も持つていることが、デアトリス家の当家の者の証明だと言えるかもな。だが可能性を指摘すれば、重罰を受ける危険があつてもばれなければ複製は可能だとも言える」

「それについては今ここで証明ができませんが、目の利く者に見てもらえれば複製品ではない事は解るはずです。この紋章にはいくつか仕掛けが施しており、それを知らない者には完全な複製ができないはずですから」

「……流石貴族、そういう無駄な所にだけは拘りがあるんだな」

「私が考えた訳ではないのに、そういう一括りにされた言い方は心外です」

カトリは若干不機嫌そうにしながら懐中時計をしまつ。既に貴族では無くなっているカトリはその一括りには入らない筈だが、元貴族として思う所はあるらしい。

「とはいえ……そうだな、お前がカトリ・デアトリスであると信じよう。もちろんさっきの話も込みでな……」

本当はまだ指摘しようと思えばいくらでも思いつくところだが、それこそ疑い出せばキリがない事になる。カタナとしては納得のいく条件を十分に満たしたと判断した。

「ではそれを踏まえて最後にもう一つ聞く、お前は俺に付いて来てどうする気だ？」

カタナはカトリに問う、目的に対する決意と真意を。

カトリは唇を引き結び、いつも以上の真剣な表情で答えた。

「私に……現れた魔人の対処を任せて頂きたいのです」

第十七話 受け売りと受け入れ

「御馳走さん」

「ありゃ？ おかわりあんのに、もう食わねえの？」

スプーンと食器を置いたカタナに、残念そうな顔を向けるニール。自信満々に多めの食事を用意したニールは、カタナの口に合わなかったのかと心配しているようだ。

「ああ、俺はそんなに大食じゃない。だが意外と美味かった」

一杯分で結構な量を盛られていたのでおかわりの必要が無かっただけで、カタナとしては充分満足のいく味だった。

「意外とは余計だけどな、でも口に合ったのなら良かった。作った甲斐があつたぜ」

カタナが世辞などを言わない性格だと解っているのか、素直に嬉しそうにするニール。

その手の食器には既に三杯目のおかわりが盛られているが、食事のスピードは衰えていない。

いったい何人分のつもりで作ったのかと、最初鍋の中を見てカタナは思ったが、どうやらニールが自身の胃袋の大きさを計算して作つてあつたようだ。

途中で休憩を挟んだりしたが、早朝から日暮れまでほぼ一日馬車を走らせたニールは流石に疲れが見えている。食事もここに至るまで軽い物で済ませていたから、その分まで満喫しているようだ。

「今日はどのくらい進めたんだ？」

「ああ、目標まで三分の二以上は来てるな。今日はここで野営するとして、明日は早くに出発すれば昼頃には着けるな」

カタナが聞いた話ではゼニスから目標の地点まで約二日の道のりだという話だった。

直線距離ではそれほど遠くないのだが、山岳地帯を迂回して進まなければならないのでそれだけかかるようだ。

とはいえ、ニールが言うペースで来ているのならかなり順調らしい。それもずっと馬車の手綱を握っていたニールの苦労の賜物だろう。

「明日も苦労をかけるが、宜しく頼む」

それがカタナなりの、ニールの苦労に対する労いの言葉だった。

「なにいいってことよ。こうなった元は俺達がへまをしでかしたせいだからな」

ニールの言うへまというのが、賊の討伐に失敗した事を言っているのだらうとカタナには解る。

「……そんな事はないだろ。魔人がいるなんて誰にも解らない事だった、どうしようも無かった事だ」

「それでもさ。俺らは……いや、俺は自分の役目を果たせないまま、逃げるしかできなかったんだ。命に代えても付いて行くと決めた人にまで、背中を守られて迄……な」

「……自警団の団長の事か？」

「そう、俺と自警団の内の何人かは元々、団長の作った傭兵団の団員だったんだ。でもうちの団長は腕は確かなんだが交渉事がへったくそで、その上お人好しだったから傭兵団は困窮して、給料の定まつてる自警団に鞍替えしたんだ。まあ、それでも団長のお人好しに困ることはあつたけど、俺はあの人を好きだった……親父みたいに思っていた」

カタナからしても数度しかあつた事は無いが、自警団の団長はニール同様に好感の持てる相手だった。

正直、自警団の団長として団をまとめる能力を言えば、残念な部分もあつたが、それもニールの言うように人好きのする部分のせいだったのだらう。

「あの時、魔人の放つ黒い炎が隊列を包んだ時……俺は動けなかった。ただ死ぬのが怖くなって、足が震えて進むことも退くこともできなくなった。でも団長は恐慌状態の団員達を必死に鼓舞して、俺には最後に支持をくれた……『生き延びて、この危機を伝えろ』」

てな」

「……そうか、優秀な指揮官だったんだな」

「どうかな？ その時同行していた新人の若い奴も俺に託して、一緒に逃がすようにしたのは、結構お人好しの部分も出てたと思うけどな。撤退を確実にするなら経験のある古参を選ぶべきだったろう？」

ニールは冗談めかしてそう言ったが、その時の団長の判断は間違っているとは思っていない。

現にニールとその新人はゼニスの街に逃げ延びて、団長の最後の支持を達成できたのだから。

「まあ、だからこそ俺は団長が託した思いを忘れずに、その為にも今回の任務も全力でやり遂げる。だからカタナ……俺に労いの言葉は要らない、ただ約束してほしい」

ニールは食事の手を止めて、まっすぐにカタナを見ている。

その目は本気の戦士の目であり、挨拶した時に感じたお調子者の雰囲気は完全に引っ込んでいる。

「必ず魔人を殺してくれ……死んでいった団長と自警団の奴らに報いるためにも」

「……俺がその為に行く事に、気付いていたのか？」

「まあな、賊と魔人の動向を調べるための偵察ってのはそれっぽい理由だが、それに駐屯部隊の隊長が一人で出るってのはおかしい話だ。それにカタナがものぐさなのは有名だし」

「……ものぐさなのは否定しない」

というよりも否定できない事実である。

「だが、俺に魔人を殺せると思うのか？ ニールは身をもって魔人の力を感じたはずだ」

部隊としてならともかく、個人で対処できるとは考えられなくなつたはずだ、それだけ人と魔人では個体の能力に差がある。

「……それでもカタナなら出来る気がする、いやそう思いたいという気持ちもあるが、なによりカタナは出来ると思っっているんだろ？」

そうじゃなけりやここに居ないからな」

「まあ、出来ないとは思っていないが」

「それなら俺もそれに賭ける理由になるだろ。どうだ、さっきの事約束できるか？」

「……約束するまでも無い。と、言いたいところだが」

カタナには何故ニールがわざわざその話題に拘るのが解っていた。

だから誤魔化そうとはせずに、本音を語る。

「正直なところ、予定外の事があつてな。どうすべきか迷っている」

「……付いてきた新人の、あの娘の事だな」

「馬車の中の話、ニールにも聞こえていたんだろ？」

「ああ、聞きたくなかったがな……聞こえちゃった」

馬車の中でカトリ・デアトリスが語った過去と、そして魔人の対処を任せてほしいという願い。

「なあカタナ、あの娘が話していた事は俺には正直ついて行けない話だった。だが一つだけ共感したところがあるんだ……魔人に家族を殺されて復讐したいってところな」

「……お前」

「俺も叶うなら復讐したい。親父みたいに思っていた団長と、兄弟みたいに思っていた自警団の奴らを殺したあの魔人に……」

悔しさを噛み締めるようにニールは言う、それはどう足掻いても無理な事を自覚している故の感情だろう。

「でもな……そんな事はお前には関係ない事だ」

「あ？」

唐突にニールはそんな事を言い出した。

「俺の事も、あの娘の事も、お前が考える事じゃないだろ？ そんな事を考えて迷っていたら、出来るもんも出来なくなるぜ」

「……おい、さっきは約束してくれとか言ってたか？」

「約束するまでも無い事なんだろ、本来は。カタナが迷っているようだったからな、ちょっとだけ試してみたのさ。でもまあ、あんた

も意外にお人好しなんだな、あの娘の事もそうだが、俺の話を真摯に聞いてくれたりして、意外だったぜ」

「放っておけ」

「はは、まあでも俺が話した事が本音なのは違いなさい。だからってそれをカタナが気にする事じゃない、カタナはカタナのやるべき事をやりたいようにしたい。本当はそれが言いたかったんだ」

一転して軽快に笑うニール、無理をしてるわけでも無くそれが自然体なのだろう。

「……考えすぎか、なるほどな」

カタナにはニールが何が言いたかったのか、ようやく解った。

（カトリ・デアトリスの話を聞いて、覚悟を知って。どうするべきか、どうさせるべきか考えたが、結局無意味な事だ）

「そう、あの娘の復讐はカタナには関係ない、俺の思いもカタナには関係ない。邪魔になるなら切り捨ててもいい、もっともお人好しのカタナはそうしなと思うがな」

「勝手にお人好しを定着させるな」

「少なくとも、その素質はあるな。きつと苦勞するぜ、カタナの周囲に居る奴らは」

「……それについては大丈夫だろう。俺の周りにいるのは、面倒を押し付けられるのに慣れた奴らばかりだからな」

「それはもしかして……カタナが押し付けてるんじゃないのか？」

ニールが怪訝な顔でそう問うと、カタナは誤魔化すように水筒の水を煽った。わざとらしいその様子に、呆れたように嘆息するニール。

「そついやあの娘、どこに行ったんだ？　俺が飯作っている間に居なくなっていたが」

今気づいたわけではないだろうが、ニールはこの場にカトリが居ない事を指摘した。話題の内容も、カトリが居ない時の方が都合が良かったので言わなかったただけだろう。

「あいつなら川の上流の方に行くと行っていたな」

ニールが野営にこの場所を選んだ理由として、近くに水場に来る川があった。

「へえ、何をしに……ってまさか!？」

ニールは何か勘ぐったらしく、大声を上げて鼻息を荒くした。

カタナにはニールが何を考えたのか手に取るように解ったので、変な期待を持たせないように即座に否定しておくことにする。

「水浴びとかでは無いぞ、きつと」

予想だが、ほぼ間違いない自信がある。

「……じゃあ、何を？」

わざわざこんな夜更けに川の上流に行く理由が解らないのだろう、ニールはカタナの言う事が信じられないように怪訝そうに聞く。

「知りたいなら見に行つて来ればいい。ないとは思うが期待するものが拝めるかもしれないな」

意地の悪い笑みを浮かべながらカタナは言う。

「い、いや、やめとく。そうなつても困るしな」

そう言いつつも、ニールは少し迷うように視線を泳がせている。それが男の性さがというものなのだろう。

「じゃあ俺が行こう。飯が出来た事伝えてなかったしな」

「お、おう……あ、やっぱり俺も」

諦めきれなかったのか、ニールは便乗するように立ち上がった。

「いや、ついでに少しあいつと話しておきたいこともある」

「……そうか、そんなら俺はここに居るわ」

そういう所はしっかり空気の読める奴らしい。それでも肩を落としながら座り込んでいる様は少し残念そうだった。

+++++

川の流れに逆らうように、白い光が波を作りあげる。

流れの速い上流の川の中、カトリ・デアトリスは日課とも言える型稽古を行う。当然ながら強い抵抗を受ける分、いつもよりも疲労の度合いは大きい。

更に腰ほどの深さのある水の中を着衣のまま入っているから、水を吸った衣服の重さも加わり、気を抜けば川の流れに足を取られそうになる。

それでもそれを感じさせぬほど、カトリの型稽古は淡々としたものだ。

振るう魔法剣の剣先はぶれず、白い光の斬線が夜闇と急流を切り裂いていく。

ただ斬り続ける、まるで何かに憑りつかれたように。カトリの瞳は閉じられているが、その瞼の裏にはカトリが憎悪を向ける対象が映っている。それをめがけてただ斬り続ける。

川のせせらぎの代わりにカトリの息遣いと、剣の切り裂く音が支配していたその場が、不意にその音色を変える。

「ふう……誰ですか？」

人の気配と共に草木をかき分ける音、その中から現れたのは闇と同じ外套に身を包んだカタナだった。

「ずいぶんと熱心だな。いつもそんな事してるのか？」

「隊長でしたか……いえ、今日はほとんど馬車の中に居たので体が鈍らないように、軽い運動程度です」

「……そういうのは軽い運動とは言わないが。まあいい、明日も早くに出発するから疲れは残すな」

「ええ、今日はもう充分でしょうから、早くに休んで明日に備えようと思います」

言いながらカトリは川の流れと足元に気を付けながら川岸まで歩いていく。

「あの……隊長」

かけてあった手拭いで汗を拭きながら、カトリは少し言いにくそうにカタナに声をかける。

「何だ？」

「着替えをしたいのですが……」

着衣のまま川に浸かったままの濡れた姿でいるのは気持ち悪い。だが着替えをするのに視界に邪魔な人が居ると、カトリは暗にそう言っている。

「ああ……どうぞ、俺の事は気にするな」

「は、はあ！？ 気にします！ 何を言っているのですか！」

カタナの突拍子もない発現に、人並みに羞恥心のあるカトリは当然ながら激昂する。

「冗談だ」

「……やめてくれませんかそういうの、真顔で性質の悪い冗談を言わないでください」

さっきまでの修練よりも数倍疲れたように、深々と溜息を吐くカトリ。

「悪いな、だが悪いついでに話がある。背を向けてるから、着替えながらも聞いてくれ」

そう言ってカトリに対して背を向けて座り込むカタナ。

「……いえ、それでも気になるので、隊長の話が終わってから着替える事にします」

「そうか……風邪ひくなよ」

「これでも体は丈夫なんですよ私。生まれてこれまで風邪や病気の類はしたことがないです」

それを聞いてカタナは、ナントカは風邪をひかないという言葉を出したが、言うのだけは流石にやめておいた。

「……話つてのは、察してるとは思うが、馬車の中で保留にした事だ」

「私が隊長に頼んだことですね……」

そう、カトリがカタナに頼んだ「魔人の対処を任せてほしい」という事を、カタナは保留にしていた。

本来なら二つ返事で却下なのだが、カトリが語った過去と決意に

対して、カタナはその時に答えを持っていなかった。

だから返事は保留にして、とりあえず同行だけは許していた。

「結論から言うと、却下だ」

「……私では役不足だと、そう仰りたいのですか？」

そうなるとは思っていたが、カトリは不服を申し立てる。簡単に割り切れたり、諦めのつく事ではないのだ。

「いや、違う」

「では何故ですか？」

「……逆に聞くが、お前はそもそもなぜここに居る？」

「私が……ここに居る理由？」

「そうだ、お前はヤーコフに言われたからここに居る訳じゃない。

俺の手助けをする為でもない。まして騎士として街を守る為なんてこともないだろう。根底にあるのは復讐という目的達成の為の礎を気付くこと。今回確認された魔人がお前の過去に関わりがある者がどうかは知らないが、お前にとっては関係のない事なんだろう？」

「……」

「ただ、自分が魔人に匹敵できる力があるのか試したい、それだけだ。何とも身勝手に周りの迷惑を考えない子供のような我儘だ」

「それは……」

「俺がこの事を保留にしたのは、そうした子供の我儘を言い聞かせる術が無かったからだ。俺がお前に何を言っても、お前は自分の我儘を通すだろう？」

辛辣な言い方だが、それは的を射ていた。カトリ・デアトリスが復讐という誰も望まない、自己満足とも言える生き方を選び続ける限り、それは付いて回る事。

復讐の為に強くなる事は、他人の為では無く自分の為に強くなる事。復讐の為に生きる事は、誰かを想うことなく自分の為に利用して生き続ける事。

その生き方が如何に醜い物かカトリ自身自覚もある。

だからカタナの言葉に反論はできない。

「……だから俺は決めた。お前の好きにさせるってな」
「は？」

カタナの意外な言葉に、黙り込んでいたカトリは間抜けな声を上げてしまった。

どういう流れでそうなったのか、どういう思考をすればそうなるのか皆目見当もつかなかった。

「我儘なガキを黙らせることができないなら、いつそ放っておくほうがいいと、そう思ったんだ。どうしたって決意は変わらないのなら、それはもう俺には関係ない事だ」

「……隊長、滅茶苦茶を言いますね」

「先に無茶を言ったのはお前だ」

「それはそうですが……ところで好きにさせるとは、具体的にはどういう事ですか？」

「煩わしいし迷惑だから、そうやって伺いを立てるなって事だ。我儘な生き方を選ぶなら、それを通してやり遂げる。その覚悟はあるんだろ？」

「……つまりこの一件、私は自由に動いて良いと。そういう事ですね」

「ああ、魔人と戦いたいならそうしたらいい。そのかわり俺も好きにさせてもらう、まあそこはいつもと変わらないがな」

もとより我儘度で言えばカタナも相当なものだ。今まで周囲に迷惑をかけた回数で言えばカトリの比じゃないだろう。

「だが俺の邪魔をする事だけは許さない。その時は容赦なく潰す、それだけは憶えておけ」

「……心得ておきます」

カタナは背を向けたままだったが、僅かに見せた気迫がその本気を物語っている事にカトリは気付いていた。

「それならいい、話は以上だ。と、そう言えばもう一つあったな。飯が出来ているぞ、ニールが作ったから不安だったが、これが意外と美味かった」

「……そうですか、では着替えたらすぐ戻ります。言われてみると空腹でした」

「ん、じゃあ先に戻っている」

言いたい放題言い残し、背を向けたまま片手を挙げてそのまま立ち去るカタナ。

その背を見送りながらカトリは思う。

（本当に掴めない方ですね……単純なのか、そうでないのか、判断が付きません）

とはいえ結果的には、カトリの望み通りになったとも言える現状。その期を逃すわけにはいかない。

（好きにして良いのなら、そうさせて貰いましょうか。隊長がどういう気であるとしても、私がなすべき事は変わらない）

カトリ・デアトリスは改めて、決意と覚悟を固める。

（私は……私の全てを持ってして魔人を討つ）

第十七話（裏） 暗いゼニスと黒いゼニス

夜のゼニス市の協会騎士団の駐屯所で、ヤーコフはせつせと残業に勤しんでいた。

カタナとサイノメが留守にしている今、そのおかげで溜まっている二人分の仕事と自分の分の仕事をこなさねばならないヤーコフだったが、朝から居るのに一向に終わる気配がない。

その事に半ば絶望を感じつつも、それを投げ出さないでいるのは、ヤーコフという騎士の人物像を如実に表している。

「うーん、これは本当に……サイノメ秘書官殿の優秀さがよく解るっすね」

普段カタナが居ない時でも、サイノメが居るからこそ、ヤーコフは自分の仕事だけに集中ができていたという事を実感した。

ヤーコフが今やっている仕事は三人分ではあるが、それが単純にいつもの三倍というわけでは無く。量だけで言えば四倍に相当するという事は、単純にサイノメは普段からヤーコフの三倍は仕事をしているという事になる。

「これは、いよいよ頭が上がらないっす」

今でも簡単に思いつき事が出来る、ヤーコフがサイノメとの初対面時にしでかした失敗。

サイノメの少女というより幼女のような風貌により。ヤーコフは初対面時に思いつき子供扱いで接してしまい、大いにサイノメの怒りを買ってしまった。

そのためサイノメに対してヤーコフは苦手意識を持っているが、その優秀さを実感して更にそれが強くなった気がした。

（それにしても、隊長と秘書官殿はどういう関係なんだろう？ 結構仲良さげっすけど、恋人同士には見えないし、かといって仕事だけの関係にも見えない……）

ヤーコフが協会騎士団の本部に居た時から、カタナはある意味で

有名だったが。その時から、カタナの専属秘書官を務めていた筈のサイノメの事は何も知らなかった。

（まあ、そういう意味じゃ僕は、隊長の事だって知っているとはいえないっすけど）

隊長と副隊長、隊の中では一番近い間柄にある筈のヤーコフも、カタナの事は知らない事の方が多い。

普通の上司と部下のように、飲みに行ったことも無ければ、人生相談をしたことも無い。

そういうのを求めている訳ではないが、ヤーコフとしてはもっとカタナの事を知っておくべきだと思うし、知りたいとも思う。

（隊長が帰ってきたら、ご飯でも一緒に食べに行くのもいいかもしれないっすね。まあ、隊長は何故かいつも金欠だから、ワリカンになりそうっすけど）

そんな事を考えつつ、もう一人気になる人物の顔をヤーコフは思い浮かべた。

カトリ・デアトリス……ヤーコフの見立てでは自分以上の実力を持ち、ともすれば協会騎士団でも屈指の実力者であろう女性。

（隊長の事を頼んでみたのはいいけども、余計な事だったっすかね……）

カタナが魔人の討伐に向かう事をカトリに話したのは、大事な時にカタナの隣で補佐できないヤーコフ自身を不甲斐なく思ったからだ。

本当ならどうしても自分がカタナについて行きたいと思ったが、それが許されない以上誰かに頼むしかない。

その誰かがカトリになったのは、彼女ならカタナの足手まといにはならないと思ったからだ。

その理由と一緒に数日訓練して感じた、カトリの中にある底知れない何か。カトリ本人はヤーコフとは互角くらいだと言っていたが、ヤーコフはカトリがまだ何か手を隠しているように感じた。

そしてカトリに感じた底の知れなさは、カタナを相手にした時に近

いものだと思える。

（デアトリスさんが隠しているものが何かは、自分には測れなかったすけど。隊長の助けになってくれると信じたいっすね）

ヤーコフとしては悩み抜いて出した結論だったが、それがプラスに働くかマイナスに働くかは解らない。

もしかしたら何もしない方が良い結果につながるのかもしれない、しかしヤーコフは何かをせずにはいられない性格なのだ。

（隊長はデアトリスさんを拒まなかったみたいすから、うまくやってくれているといっすけどね……それにしても年下の女の子にこんな大事を託すなんて、僕は本当に不甲斐ない男っすね）

少し自虐的になってしまふのは、暗い駐屯所に一人で居る事で鬱がさしてしまっただろうか。

気づけば仕事もまるで手についていなかった。

「あゝ今日はもう無理っすね、夜勤の皆が帰ってきたら終わりにするとしますか」

仕事は溜まってはいるが、急ぎのものはそれほどない。後は明日に回しても問題ないはずだ。

ヤーコフが時計を見ると、ちょうど夜勤の者が定時の巡回から帰ってくる時間になっていた。

本来駐屯所にも最低一人は詰めていなければならないが、今日はヤーコフが残っていたので、皆外に出てしまっている。

退屈しのぎにもう一仕事だけやっていこうかなと思った矢先、背後のドアが開く音がした。

「お、流石時間通りっすね、関心関心……え!？」

ヤーコフは部下が帰って来たものと思い振り返ると、そこには夜勤の部下だけでなく、自警団の者が数人取り囲んでいた。

自警団の面々の中にはヤーコフの顔見知りであり、以前に揉め事を起こしたダルトンの姿もあるが。それよりもヤーコフの目に留まったのは、部下が自警団の者から剣を突きつけられ怯えている姿。

「こんな夜更けに、自警団の皆さんが雁首揃えてうちに何用っすか

？」

由々しき事態だが、ここは冷静に対処するのが賢明と判断し。ヤ
ーコフはとりあえずこの凶行とも言える行動の真意を問う。

それに対して下衆の様な笑みを浮かべたダルトンが喜々として答
えた。

「なに、市長の命令でな。お前ら駐屯騎士を拘束しろって言われて
んだ」

「市長の命令？」

「そうだ。新たな街作りの為にお前ら騎士は不要なんだとよ」

（どういう事つか？ 市長にとって僕らが不要？ 昨日は魔人の
討伐を依頼しに来たのに……いや、まさか）

ダルトンの話を鵜呑みにするのは危険だが、自警団を動かせる人
物というのは限られる。

ヤーコフの知る限りではダルトンに人を動かす人望も、言いくる
める頭の良さもない事は周知の事実。

そして自警団の団長が殉職したという話も聞いていることから、
一つの仮説が立った。

「ダルトンさん、魔人の一件を貴方は知っていますか？」

「あん？ 魔人だあ？ いきなり何を訳のわからん事を言ってるん
だ？」

「いえ、何でもありません」

やはりダルトンは知らされていない。

（市長が依頼した事が、僕らの戦力を削ぐためだとするなら。この
タイミングで自警団を動かす事が最良……そうだとするなら殉職し
た自警団の団長や団員も、市長の思惑によるもの？）

しかし魔人の事もある。あるいはそれがただのガセネタであるな
ら問題は無い。そちらに向かっているのはその程度の嘘には踊らさ
れない、でたらめな人なのだから。

だが魔人の事が真実であつたとするなら、それはありえない事を
意味する。

（市長と魔人に繋がりがあつて事になるっすね。そうなると新たな街作りっていうのが、かなり危険な臭いのするものになるっすね）あくまで推測、ヤーコフの頭の中で構築された情報の断片がどこまでの射ているのかは不明だ。

「おい、急に黙って何を考へてる？ 下らない真似しようとするればお前の部下の命は無いぞ」

それよりもまず、ヤーコフは目の前の事態を解決せねばならない。既にヤーコフは囲まれており、ダルトンを始めとする自警団の人数は八人。そして部下が一人人質に捕られている。

切り抜ける方法はいくつかあるが、その為には犠牲になるものも出てきてしまう。

「二つ、聞きたいっす」

「何だ、言ってみろ？」

「まず、僕らを拘束するって事でしたが、命の保証はしてもらえんすか？」

「……ああ、しばらく牢に入って臭い飯を食う事になるがな。殺せとは言われてねえ」

「つまり、僕がダルトンさんの言う、下らない真似をしようとしなければ、部下の身の安全は保障されるんすよね」

「俺が市長に言われたのは、駐屯騎士を拘束して牢に入れろという事だけだ。お前らをどうこうする気はねえ」

「……本当っすね？」

ヤーコフは鋭い目つきで真っ直ぐダルトンを射貫いて問う。

それが以前に感じた恐怖を呼び起こすものだったのか、ダルトンは臆した様子で脂汗を垂らしながら首を縦に振る。

「ほ、本当だ。お前もお前の部下の身の安全は保障する」

「嘘です副隊長！ さっきこの人、副隊長にいつかの仕返しをしてやるって息巻いてました！」

ダルトンの言葉を即座に否定したのは、人質になっていたヤーコフの部下。

まだ十代の若い騎士だが、この状況でそれを言えるのは大した胆力だった。

「てめえ!？」

「待って下さいっす」

激昂したダルトンが部下に手を上げようとしたところを、ヤーコフは言葉で制した。

「解りました、おとなしく拘束されることにするっす」

そしてヤーコフは全て受け入れたように両手を挙げて、降伏を示す。

「副隊長!？」

「大丈夫っすから。ここで無駄に血を流す必要は無いっす」

ヤーコフにとっての重要な事は約束された。ここはそれで充分である。

ヤーコフという男は、人である前に騎士だと言える。自分の事よりもまず他人の事を考え、自分の身よりも他人の安全を考える。

それが彼の騎士道にしている『我が剣は我が為に非ず』という協会騎士団の憲章の一説である。

そしてヤーコフが言った『無駄な血』というのは部下の騎士の事だけでなく、ダルトンを始めとする自警団の面々の事でもある。

ヤーコフがこの場を切り抜けるには、部下か自警団のどちらかが血を流さねばならなくなり、それをヤーコフ自身が良しとしない。

確かにダルトンはヤーコフに恨みを持っているようだが、それ以外の自警団員は命令に従っているだけのようであり、悪意も敵意も感じられない。

そんな相手に向ける剣をヤーコフは持ち合わせていないのだ。

「やけに素直だな、何を企んでいるんだ？」

そういうヤーコフの思いはダルトンには理解できないのだろう。

妙に訝しげに警戒した視線を向けている。

「何も企んではないっすよ。どうぞ拘束するなら早くして下さいっす」

余裕を見せ始めたヤーコフに、不満を抱きつつもダルトンは近くの自警団員に指示を出す。

「おい、早くこいつを拘束しろ。さっさと連れて行くぞ」

「ちっ、なんで俺が。ていうか何でダルトンが仕切ってたんだ？」

「う、うるせえ。さっさとしろ」

どうやらヤーコフと面識があったからダルトンが率先して話してただけで、別にリーダー格というわけではなさそうだった。

指示された自警団員は不満そうな顔をしながらも、結局誰かがやらなきゃならない事だと割り切ったのか、最終的にダルトンに従った。

「副隊長……」

「大丈夫っす」

心配そうに見つめる部下を、拘束されながらもなるべく頼もしく見えるように笑顔を作りながらヤーコフは元気づけた。

（とは言ったものの、何がどうなっているか確信が無いから、動けなくなるのはまずいと言えばまずいんすけどね）

そんな思いも押し殺し、それでも自分の甘さを省みないのは、それが自分の騎士道だと信じているから。

そして自分に何かあっても、自分が信じる者がきつとどうにかしてくれると信じているから。

（って、また他人頼みになっちゃってるっすねこれ。本当に僕は不甲斐ないな、こりゃ隊長が帰ってきた時が怖いっす）

そして仕事が溜まっている事も危惧しながら、ヤーコフは連れられて行く。

+++++

ゼニス市の市長を務めるベルリークの執務室にノックの音が響く。

「入れ」

ベルリークは誰が来たのか確認もせず、ただそれだけ言って招くと、自警団の制服を着た体格の良い大男が入ってくる。

「君は……確かダルトンだったか？」

「は、そうであります。市長から貰った指令が完了したので、報告に来ましたぜ」

畏まった話し方出来ていないダルトンに、ベルリークは眉根を寄せるが。そういう繊細な部分の観察もダルトンは苦手なようで、気づいてはいなかった。

「……つまり協会騎士団の駐屯部隊は全て拘束したのだな？」

「ええ、隊長のカタナは対象外って事だったんで。副隊長のヤーコフ以下の隊員は、全て拘束して牢に入れてやりました」

実は一人だけ、カトリ・デアトリスという従騎士は街の外に出ているようだったので、拘束できていなかったが、ダルトンは虚偽の報告をした。

ベルリークの指令では、今日の夜中の内に行っておけと言われていた事と、その従騎士が最近配属された新人であったから、後で誤魔化す事も出来るだろうという打算があつたからだ。

「ふむ、ご苦労。では下がって良いぞ」

ベルリークは自分が指示した事でありながら、特に関心を待たぬかのようにそれだけ言って報告を終わらせた。

「あ、あの市長……約束の件ですがね」

恐る恐るダルトンが尋ねると、ベルリークは苛立たしげに険しい顔で答えた。

「殉職した団長の代わりに、君を新たな自警団の団長に取り立てるという話かね？ 覚えているが、それがどうかしたのかね？」

「い、いえ。何でもありません失礼しました」

ダルトンも結構な強面であるが、老獪さの滲むベルリークの凄味は相当なもので、睨み付けられると震え上がった。

「何でもないのなら早く出て行きたまえ。見ての通り私は忙しい」

「し、失礼しやす」

心象を悪くしてはいけなないと、ダルトンは慌てて市長の執務室を出て行った。

ボタンツと大きな音を立てて閉じられたドアに、またしてもベルリークは眉根を寄せたが。その後険しい表情は笑みへと変化した。「滑稽だな。偽りの地位に目が眩み、自分が何に与しているかも気付かずにいるとは」

それは嘲笑。それが向いているのはダルトンだけでなく、ベルリークという男を市長の座に置いた、ゼニス市の市民すべてに向けられていると言っても良い。

「明日、とうとう明日だ。この街は変わる、いや世界が変わる。偽りの平和、偽りの世界が私によつて変えられる……黒の予言の第一幕、この栄光が成った時を思うと身が震えるな」

ベルリークは興が乗ったのか、執務室の窓から夜の街を眺めながら独りごちる。

「凶星を運ぶ聖騎士も、まんまと誘導に従った。これで私の邪魔が出来る者はこの街に居ない」

いつもシワの消えない眉間のせいで、不機嫌な印象しか他人に与えないベルリークだが、この時ばかりは晴やかに自然な笑みが浮かんでいた。

そしてベルリークは机からシャンパンを取り出した。たった一人の執務室で、たった一人で祝杯を挙げる。それは五十年の時を一人で待ちわびたベルリークの、人生そのものを表しているようだった。「祝杯など、まるでニンゲンのようだが。何年も偽ってきたのだから、最後の時までそうするのも悪くないだろう……」

そう言つてシャンパンの栓を開けたベルリークの背後から、不意に声が掛かった。

「ねえねえ市長さん、なんならあたしがお酌をしたげようか」
ベルリークが振り返ると、そこには見知らぬ少女（というか幼女に見える）の姿があった。

「……誰だね君は？」

「あたしはただの通りすがりの大人の女性だよ。それでも成人しているから一緒に祝杯を楽しむこともオーケーなのさ」

「ふざけるな、君の行っている事は不法侵入という立派な犯罪だ。返答如何によつてはすぐに牢に入つてもらうぞ」

上機嫌だったベルリークの眉間にシワが戻る。しかしダルトンが震え上がったベルリークの凄味のある睨み付けも、少女には通用していないようで、へらへらとした笑みが返ってくる。

「まあまあ、そう常識ぶらない。代わりにあたしも冗談は言わないよ。あ、でも成人しているつてのは冗談じゃないから、そこは勘違いしないでね」

少女のおちよくるような物言いは、ベルリークを更に苛立たせるには充分なものだった。

（どこまで聞かれていたかしらんが、殺すべきか？）

準備に十年近い年月をかけたベルリークの計画には、僅かなイレギュラーも許したくは無かった。

たとえ相手が無力な少女だとしても、例外ではない。

（いや、私が気配を悟らせずに背後を取られたのだ。これを無力な少女と思つていいはずがない）

ベルリークは思い立つと同時に、少女に向けて右手を振るつた。

すると黒い線が少女に向かって伸び、その場を切り刻んだ。

それは紛れもない魔術……黒い魔光をはらんだ魔力によつて発現する、魔人が使う異界の異能。

それをベルリークが駆使したという事は、彼が魔人であるという事の証明であり、それを知る者は彼の同族を除いてもういないはずだった。

しかし、今まさにそれを目撃された事で、新たに知る者が増えてしまう。

「……今、何をした？」

先程までとは反対側の位置、またしてもいつの間にか背後にいた

少女にベルリークは尋ねた。

「ふふーん、それは企業秘密だよ。でも一つ言える事があるとするなら、無駄な事は止めて、あたしとお酒を飲もうよって事かな」

「……何者だ貴様は」

少女の言う事は無視して、ベルリークは今一度問う。

冷静に考えればまともな答えが返ってくるとは思えないが、すでにベルリークは冷静さを欠いていた。

しかしその様子を見て、少女は満足したように。あえてまともな答えを返した。

「あたしはサイノメ。しがない情報屋、そして貴方の信じるものの敵だよ」

「サイノメ……そうか、貴様が。なればここにいる理由は、私の邪魔をしに来たという事だな」

「いんや違うよ。本当は今日の所は様子見だけだったんだけど、うまそうなお酒を出すもんだからついね」

「……おちよくっているのだな」

我慢の限界といった様子で、眉間が痙攣しているベルリークだが、対するサイノメはあくまで自然体。

「別にあたしは市長さんをおちよくる気も、邪魔をする気もないんだけどね。まあでもそういう風にとられちゃうならしょうがない、今日のところは帰るとするよ」

「生かして帰すと思っているのか？」

ベルリークは再び右手を振るう、同じように黒い線が現れてサイノメの居る場所を切り刻むが。先程と同じ結果、刻まれた絨毯だけがその場に残ることになった。

当のサイノメは執務室のドアに手をかけ、出て行こうとしている。

「待て！」

「それじゃあ、明日の余興楽しみにしているよ」

サイノメがドアを出て、閉めるのと同じ時。ベルリークは三度目の魔術を放つ。

黒い線が執務室のドアを切り刻むが、その向こうには無人の廊下が続いており、既にサイノメの姿は無かった。

ベルリークはどこにも向けようのない苛立ちを感じ、シャンパンを床に叩きつける。

（くそつ、なんなのだこの苛立ちは！！ もはやあんな小娘一人にはどうにもできない所まで来ている筈だ！！ それが、なぜこうも許せない！！）

今までが順調すぎた故、それが不安という感情だという事にベルリークは気付かない。

そしてそれが取り越し苦労だという事にもまた、気付いていなかった。

第十八話 山賊とアジト

「カチャカチャと、うるさいぞ」

「……すいません」

静かな山道の中、響いてくるのは鳥の声などではなく、鎧と衣擦れの音。

カタナが忌々しそうに後ろを振り返ると、軽鎧等で武装したカトリ・デアトリスが申し訳なさそうにしていた。

「大体、何で後ろを付いてくる？ 別の道を行けばいいだろう？」

「……どこを見ても一つしか道がありませんけど？」

山の中を伸びている道は一つ、それも獣道に近い僅かに踏み荒らされて出来た細い道だけだ。

「お前が道を作ればいいだろう？ 腰に帯びたその剣は何の為にあるんだ？」

「少なくとも、木々や草の根を分ける為にある訳ではありません！」

なんとも勝手なカタナの言い分に、カトリも少しむきになって答える。

「あんまり大声を出すなよ。一応ここは敵地なんだぞ」

「誰のせいですか！ ……そう思うなら放っておいて下さい。大体、好きにしていいたったのは隊長の方ではないですか」

「そうは言ったが、俺の邪魔をしなればという条件付きだったはずだ」

「そ、それはそうですね」

「山道に行くのが解っているのに、そんな装備で音を立てて、更には足音を消そうともしない。敵地に行く時の定石も知らないのか？」

「……ぐ、申し訳、ありません」

かなりもつともな事を言われて、黙るしかないカトリ。カタナを気を付けて見てみれば、いつも通りの外套姿であるが、確かに衣擦れや足音といった物音は最小限もさせていない。

カトリが山歩きに慣れていないという事もあるが、それは普段の適当な物腰からは考えられない程完璧に見えた。

「まあ、敵に見つかることは気にしないがな。むしろ向こうから出向いてくれた方がこんな獣道を行く手間が省ける」

「……では何故それを気にするのですか？」

何か狙いでもあるのかと思い、カトリは疑問を口にする。

「単純に静かな方が好きただけだ。俺がな」

「……はあ」

何とも横暴な事である。

とはいえカトリにも非があるので、極力音を消しながら山道を登るように努めた。

魔人の討伐の為に丸一日と半日を、馬車の中で揺られて過ごしたカタナとカトリは。今まさにその魔人の巢食う、山賊のアジトに向かって歩を進めていた。

山賊というからには当然ながらアジトは山の中にあり、更に当然ながら山の中を馬車で進むことはできない。よってカタナとカトリは自分の足で山を登る。

ニールは麓ふもとの村に待機。案内人と御者役としての仕事は、ここまですで二人を送り届けただけで充分であるといえる。

「……ん？」

カトリは立ち止まり、振り返る。視界に映る傾斜の先には、特に変わった所は無く、つい今しがた通り過ぎた細道と、生い茂った草木があるだけだった。

「どうかしたのか？」

カトリが立ち止まった事に反応し、カタナも立ち止まって振り返る。付いてくるなと言いつつも、一応は気に掛けているようだ。

「いえ、何か気配を感じた気がしたのですが……気のせいだったのでしょうか」

「気配か……まあ、カチャカチャうるさい鎧女がいるから、山賊どもに気付かれていてもおかしくないが」

「……それはもう許してください。気を付けてますから」

「ふ。なに、気のせいだろう。そうじゃなくても麓側から感じたのなら気にしなくてもいい。アジトは山頂付近だという話だからな、山賊の気配は山頂側からしないとおかしい。きっと獣か何かだろ」

「……そうかもしれませんね」

カトリ自身も自信を持っているわけではなく、ただの勘ともいえる事だったので、特にそれ以上気にすることは無かった。

+++++

「この辺りで自警団が壊滅させられたようだ」

カタナの感覚では山の中腹より僅かばかり登った辺り。木々は茂っているが、それなりに視界のひらけている場所だった。

「どうして解るのですか？」

「……臭いと土だ」

「あ……」

言われてカトリは気付いたのか、自分の足元を凝視している。

そこは明らかに土の色が他と違っていた、周囲も見渡してみるとそういう場所が疎らに見受けられる。

「おそらく、金目の物以外は運び出さずに埋めたんだろう」

埋まっているのは壊滅した自警団の遺体、ニールの言っていたお人好しの団長とやらもこの土の中だろう。カタナには関係の無い事だが。

カトリには何か思う所があるのか、足を止めてしまっていた。

「……隊長、目撃された魔人は炎の魔術を使うと聞きました。しかしこの臭いは……」

「ああ、腐乱しているな」

魔人の情報が聞いた通りなら、かなりの魔術の使い手だと解る。その気になれば骨も残さずに灰にする事も可能だった筈だ。

しかしあえてそうしなかったという事は、

「……苦しめる為にそうしたのか、それがどういう感情からくるものだったかは知らないが。まともな相手じゃない事だけは確かだ」
「埋められているのは、どうしてでしょう？ 死者を冒瀆するわけではありませんが、こんな場所に穴を掘って埋めるだけでも重労働です。それならば……」

流石に言い難い事だったのか、カトリはその先を言わずに口を閉ざした。だが言いたいことはカタナに伝わった。

「推測だが、死体を埋めたのは手下の山賊達がやったと思われるがな」

魔人は人を人とは扱わない、またその逆も然りなのだが。形だけでも埋葬するという行いをするのであれば同じ人間だろう。それが道徳心が景観か、どちらを気にしたものかは解らないが。

「ここで俺達が気にするものじゃないか」

いつまでも足を止めている訳にはいかない。カタナは再び歩を進める。

「あ、待ってください。せめて一度だけ、ここに眠る方々に祈りを……」

「……祈りたければ好きにしろ。俺は先に行く」

無神論者で死後の世界なども信じていないカタナには、そのカトリの行為は無駄にしか見えない。

だがカトリは遠くなるカタナの背を気にしながらも、そこに眠る死者たちに祈りを奉げた。

+++++

（あれがそうか、中々良い場所にあるな）

真上にあつた太陽が傾き始めた頃。カタナはようやく目的の場所にたどり着いた。

山頂付近の山小屋を改築して作られた、山賊団のアジト。

昼前に山を登り始めて、体感でそこに至るまで二時間弱。普通ならかなりの強行なのだが、カタナは汗一つかいていない。

（にしても、まさか最後まで付いてくるとは。正直驚きだな……）

カタナの横にはカトリ・デアトリスの姿もある。流石に疲れも見えないが、普段着に近いカタナとは違い、軽鎧などで武装したうえでその強行に付いてきたのだから、その体力は感嘆に値する。

（綺麗なナリをしてるくせに、まるで八脚馬並みの体力だなコイツ）
スレイブニル

八脚馬とは文字通り、八本の足を持つ馬であり、大陸の動物と魔界の魔獣が交わって生まれた『新種』の中の一つ。

普通の馬よりも大型で快速、そして何より一頭いれば大陸が横断可能、と言われるほどの体力持久力を持つ。

それだけ調教も大変であるので一般には見かけないが、共和国の貴族の内ではそれを持つ事が一種のステータスになっていたりもする。

「……何か失礼な事を考えてませんでしたか？」

気づくとカトリが半眼でカタナを見ていた。変な所で妙に鋭い時がある。

「いいや、褒め称えていた所だ」

少なくともカタナは嘘を言っていない。褒めていたのもまた事実だから。

「……そんな冗談はさておき、流石に見張りがいますね……でも一人ですか。警戒はかなり低そうですね」

「自警団を撃退して気が緩んでるんだろっな。これならすんなり通

してくれそうだ」

「夜を待つて夜襲を行うという手もありますが？」

「……いや、時間の無駄だ。このまま正面から堂々と行く」

そもそもカタナの目的は山賊退治などではない。そこに時間を割く必要は全くない。

「そう言うと思っていました。私としてもこの場合は、魔人を相手にする腕試しの場でありますから、望むところです」

「やっぱり、お前も付いてくるのか……」

「当然です。どうせならこの場合は全て私に任せて頂いてもよろしいのですよ？」

自信満々にしたり顔で言い切るカトリ。それが裏打ちされた実力も持っている事を、カタナも知っているから止めたりはしない。

「好きにしる。俺も好きにする」

言うが早いかカタナは飛び出していく。

「あ、待つてください」

カトリもその後をすぐに追いかける。しかしカタナの驚異的な速度は、その一瞬でカトリとの間に大きく溝を空ける。

カタナはあつという間に、アジトの前で暇そうにしていた山賊の見張りに肉薄し、

「な……」

見張りに気付かれた時には既に、掌打を顎に打ち込んで昏倒させていた。

そして、そのままカタナは悠然とアジトの扉を開いた。

「あ？」

「何だお前？」

まず目についたのが卓を囲んで酒を飲みかわす四人。その内の一人が立ち上がって、カタナを睨み付けながら歩いてくる。

「何の用だ？　ここが何処か知ってんのか？」

中背のその男は下から睨みあげながらカタナに問う。その全く持つて愚問に思える問いに、カタナは律儀に答えた。

「ああ、知っている。ドブの巣だろ？」

「んだと！ ゴラアアア！！」

カタナとしてはドブネズミじゃねえのかよ、というツツコミを僅かに期待していたのだが。沸点の低いその男の頭には、もうカタナを殴る事しかないようだった。

下から突き上げるアッパーが、カタナの顎を狙って伸びる。

しかしカタナそれに合わせた動きで、一步後退し最小限の動きだけで回避する。

「何！？」

「少し落ち着け」

あつさりと躲され、驚きで動きを止めた男の鳩尾にカタナは手刀を叩き込む。

男は僅かに呻き声を上げた後、その場に崩れ落ちた。

その一部始終を見ていた周りの者達は、ようやくカタナに対して危険を察知したようで、各々得物を取り出して応戦の構えを見せた。卓を囲んでいた三人以外に、物音を聞きつけて奥から二人出てきた。五人に囲まれる形になったが、カタナの余裕はそのぐらいでは消えない。

「おい、殺気立っている所悪いが。用があるのはお前らの頭に対してだけだ。俺にはお前らと争う気はない」

「ああ！？ てめえ、ダンを殴り倒しておいて何を言ってる！
！」

カタナが殴り倒した男はダンというらしい。かなり意味の無い情報だ、今カタナの脳の容量を狭めてしまった。

「今のは正当防衛だ。殴られたから殴り返しただけ」
殺していないから過剰防衛にはならない筈だ。

そんな正論は頭に血が上った山賊達には、当然ながら通用しない。むしろそんな余裕を見せつけるカタナに、向ける怒りが増したようだった。

「ふざける！！」

山賊の中からまず一人、手に短刀を構えながらカタナに向かってくる。

「オラア！」

その一直線の愚直すぎる動きには、カタナも溜息を禁じ得なかった。

短刀を蹴り上げて、足を引くと同時に突き出した手で横面を殴り飛ばす。その山賊は置いてある卓におもいつきりぶつかっていき、乗っていた瓶やグラスをただのガラス片に変えた。

「気を付ける！ コイツ結構使えるみてえだぞ！」

「んなの見りゃわかるっての！」

様子見をしていた二人が息を合わせてカタナに襲いかかる。

一人は壁に立てかけてあった長剣を手に取り、もう一人は斧を持つてカタナに切りかかった。

「……全然、解ってないぞ」

力量の差、それは得てして離れば離れるほど計り兼ねてしまうものだ。

ある意味カタナはその不幸な理の、この場で最大の被害者かもしれない。もし山賊達が正確にカタナの力量を測っていたのなら、無駄な手間が省けて面倒な事をしなくても済むのだから。

気が付けばカタナはほぼ条件反射で、左右から襲い掛かる山賊二人を薙ぎ倒していた。

「もう一度言う、俺はお前らとは争う気は無い。いや、もう争いにすらならないって解ってもらえたか？ それが解ったなら、無駄な抵抗は止めて俺に絶対服従しろ」

無手のカタナにあっさりと仲間が倒された事で、残った山賊達はたたらを踏んでいた。

「……先程よりも、随分と要求が利己的になっていませんか？」

そして、カタナの背後から呆れたようなカトリの声が掛かった。

「何だ、いたのか？」

「いましたよ。入口を背に隊長が暴れていたせいで、入れなかった

だけです」

「そうか。だがどうせなら、もう少し遅れて入ってくるべきだったな」

「どうしてですか？」

カタナの言った意味が最初は解らなかったカトリだが、山賊達の様子を察するとそれも納得だった。

「おい見ろよ、あの女かなりの上玉だぜ」

「ああ、ありや高く売れるぜ」

「馬鹿、俺達が楽しむのに使っただよ」

もはやカタナの方には目が言っておらず、山賊達はカトリを見ながらそんな相談を交わしていた。

「……なるほど、随分と下劣な方々の方ですね」

カトリは怒りを露わにし、剣帯に手をかける。一瞬で臨戦態勢に入っていた。

「山賊に品格を求める方が無理な話だ」

とはいえ貞操を狙われるという事の嫌悪感は、何となく理解できるため。カタナは道をカトリに譲る。

カトリは無言で山賊達の前に躍り出る。剣を構えたその隙の無い姿より、山賊達はそれぞれ別な所に目をやっていてそれに気づかない。

「殺すなよ」

カタナから言える事はそれだけだった。それにカトリは背を向けたまま首肯して応えた。

（本当だろうな……）

カトリからは殺気が迸っている。そういう意味ではかなり不安だった。

如何に山賊が相手でも、一方的に殺害する事は共和国の法では認められていない。足る理由があれば止む無しとも考えられるが、極力は法の裁きに委ねるのが一番なのである。

特に協会騎士団の殺人に対する規定は厳しい。それは時に秩序を

守る上で重荷にもなるが。何者にも法を犯す権限を与えてはならない、というのが設立時からの騎士団長の考えなのだ。

だからカタナもそれに習い、ここまで殴り倒した山賊にはちゃんと手加減してある。その労苦を台無しにされては困る。

やっぱりここは自分で行くべきかと、思い直そうとしたカタナだったが、それよりもカトリが動き出す方が早かった。

残っている山賊は三人、じりじりと三方から間合いを詰めていたが、カトリはまず右側に居た山賊に向かって大きく一歩踏み込んだ。「うあ!？」

同時に低い姿勢からの切り上げ、それは山賊の太腿と剣を構える腕を斬りつける。二か所を同時に斬られ、痛みから武器を持つ事も立つことも出来ずに止血を余儀なくされた山賊は戦意を失った。

すぐさまカトリは別の対象に向き直る。狙いは正面に居た、仲間が血を流すのを見て少し顔色が悪くなっているようだ。

その態度にカトリの心中の苛立ちは増していく。山賊が、それも常に武装しているような者達が、罪の無い人をこれまで手に掛けていない筈がない。

それが一転して自分に危険が及ぶと認識すると、怯えを見せる。何とも不条理な光景だ。

「……貴方にはこの剣の錆になる価値も無い」

浮足立つ山賊の側頭部を剣の平で殴りつける。また一人気を失って床に倒れるものが増えた。

「うおおおおおおお!」

残った山賊がカトリの後ろから全力で斬りかかる。今までは傷物にしないで捕らえる事を優先していた為か、躊躇が見られていたが、最後の一人になった事でそれが消えたようだ。

「愚かですね……」

背後からの奇襲に大声を上げれば、攻撃のタイミングと位置をみすみす教えるようなものだ。

カトリは振り返ると同時に左手を振るう。左手に装着された手甲

が、山賊の振り下ろした長剣の横腹を真芯で捉えた。

耳を劈くような金属音と共に、山賊の持つ剣は中心から二つに折れる。

「何iiiiiiii!？」

啞然とする山賊の胸ぐらを掴みあげ、カトリは足払いと共に一回転させて床に叩きつけた。

「がふっ、う」

背中からかなり勢いよく叩きつけられた山賊が、戦闘不能になった事でその場が制圧された。

魔法無しでそれだけの立ち回り、カトリ・デアトリスという従騎士の地力が垣間見える結果となった。

（しかし、大の男を投げ飛ばすとは……つくづく八脚馬並みだなコイツ）

カタナがそういった感想を持ったのは内緒の事。実際には合気のカモ借りているのだが、大の男を女性が投げ飛ばしている姿はそれだけのインパクトがある。

「……ところで隊長、気づいていますか？」

「ん、まあな」

カトリの問いの意味はカタナも理解している。

この山賊のアジト内にはカタナとカトリ、そして今二人に倒された山賊達が内部に六人と外に一人いるが、それ以外の気配は無い。

聞いていた山賊の数と合わない事も少し気になるが、何よりここに来た理由でもある魔人の姿がない事が一番の懸念事項だ。

「……だが、おあつらえ向きに一人意識がある奴が居る」

そしてカタナとカトリの視線は、壁際に座って切り付けられた腕と太腿の止血で動けない山賊に集まった。

「ひっ！」

その山賊は怯えた表情でブルブルと首を横に振る。

「……もう危害を加えるつもりは無い。だが質問にだけ正直に答えろ、お前らの頭はどこに居る？」

「か、頭……ひいつ、殺さないでくれっ！」

「だから危害を加えるつもりは無いと言っている。解ったらさっさと答える」

「し、死にたくない。死にたくないんだ……」

まるでカタナの言葉が聞こえていないように、山賊は尋常ではない怯えを見せる。

何かおかしい……そう、違和感があった。山賊はカタナ達の事など目に入っていないようにうわ言を呟く。

「これは陣！？……隊長、危険です！！」

異変にいち早く気付いたのは、尋問に参加せずに周囲を警戒していたカトリだった。

だがそれも遅い。

同時に黒い魔光がアジトを包んでいた。

+++++

山賊のアジトを山の頂の高みから見下ろす者が居た。

黒い髪、黒い瞳を持ち、まるでその存在を主張するかのように黒衣を身に纏う男。

この世界に生きる者は、彼の事を畏怖の念を持って称する……『魔人』と。

人の形をしながらも、人ならざる力を持ち、そして決して人と相いれる事の無い存在。

この世界に生きた半世紀の時間も、それを変える事は無かった。

そして今、偽りの自分と偽りの居場所を消し去る。

「境界の炎よ。ボイダーフレイムさあゴミ共を焼き尽くせ」

魔人は魔術陣によりその強大な力を解き放つ。

眼下に黒い炎が立ち上った。

第十八話（裏） 英雄と神話の終わり

「……んーと、朝……なんすかね」

薄暗い牢屋の中で、ヤーコフは目を覚ました。

日の光は届かない地下、妙にジメジメしているのはもはや牢屋の御約束と言ってもいい。

そして自分の手には錠が掛かっており、足には枷が付き、更に首には魔法を封印する魔封錠まで付けられていた。

「完全に凶悪犯用のフルセットじゃないっすか」

眠って目を覚ませば少しは事態が好転しているかな、という甘い理想も描いていたが、残念ながら現実はそんなに甘くないようだ。

「しかも隔離牢とは、完全に特別待遇っすね。何か恨まれること……は、してたな」

自警団のダルトンには結構な恨みを買ってしまったっているようだった、完全に逆恨みと言えるが、それも恨みの内だ。

溜息が出そうになるのを堪えながら、辺りを見回してみる。

鋼鉄の牢は錬金魔法の技術も使われているようで、かなり頑丈そうだし、手錠足枷に至っても同様である。

（うん、まず脱出するのは無理っすね。さすが我らが共和国、いい仕事してるっすね）

そうやって早々に色々諦めつつも、今できる事はやっておこうとヤーコフは思った。

まずは思考をクリアに保っておく事。

こういった場所に居続けると、精神を病んで狂ってしまう事がある。どうしても牢屋という所が陰鬱な雰囲気になってしまう場所なのだから、こういう時こそポジティブな思考を保持するのが大事だ。騎士たる者、どんな極限状態であっても己を見失ってはいけない。部下に聞かせれば笑われそうな、いつものヤーコフの騎士理論だが、この時ばかりはその心掛けが彼を支えていた。

（さて、色々考えておくことはあるっすけど。まずはやはり、市長の事っすね）

ヤーコフを捕らえるように命令を下したのは、市長だとダルトンは言っていた。

ダルトンは新しい街作りの為に、ヤーコフ達が邪魔になるからと言っていたが。それだけの理由で審議もなしに、駐屯部隊を牢屋に入れるのはかなり無理がある。

下手をしなくても公になれば、協会騎士団の本部が黙っていないだろう。

（それを承知の上で行動を起こしたとするなら……干渉されるまでの僅かな時間でも、邪魔が入らなければ良いと考えてるから？）

まさかと思うが、不安は拭いきれない。市長がカタナをゼニスの街から遠ざけたのも、目論見の一部である可能性もあるのだ。

だが精々数日の僅かな時間で、人が出来得る事は限られる。それも理解しているヤーコフは尚更、市長の真意が見えないでいた。

（……やっぱり解らない事はいくら考えても解らないっすね。せめて相談役でも居ればいいんすけど）

生憎と他に捕まった部下たちとは別に隔離されているから、そんな相手もない。牢屋の中で文字通りの八方ふさがりであった。

「お困りのようだね、ヤーコフ副隊長君」

どうしたものかと天井を見つめながら途方に暮れていると、牢の外側から声が掛かった。

「え！？ 秘書官殿！？」

そこに居たのはサイノメ。不敵な笑みを見せながら、ヤーコフにとって全く予想外のタイミングで、全く予想外の相手が現れた。

「……ふふふ。中々いい格好だね、まさか副隊長に自縛趣味があったとは」

「違います！！ そうじゃないっす！！ これはどういう訳か自警団に捕まって……」

「解っているよ、あたしを誰だと思っているのさ。ここに来たのは

君をそこから出す為なんだから」

そう言つてサイノメは、ヒモに通してあるいくつかのカギをヤーコフに見せびらかした。

「それはもしかしてこの牢の鍵つすか？」

「そうだよ。ちゃんと手錠と足枷用のもありまーす」

軽い調子で言っているが、どうしてそれをサイノメが持っているのかを考えれば、ヤーコフは少し恐ろしくなった。

「も、もちろん許可を得て持ってきたんすよね？」

「んなわけ無いじゃん、盗んできたんだよ。ここに来るのだって正規の手続きを踏んでないし」

「やっぱりー!!」

完全に犯罪だ。

いや、ヤーコフがこうして捕まっているのも、正規の手続きを踏んでないようなのでお互い様とも言えるが。それでも犯罪は犯罪、許されることではない。

「ほいじゃ、開けるよ」

「ああああ、駄目つす!! 開けちゃ駄目つす!!」

慌てて止めるヤーコフに、サイノメは怪訝な表情を見せる。

「何で？ そこから出たくないの？ ……ハッ、やっぱり自縛趣味が!？」

「だから!! そんな趣味は無いつす!! ……僕が言いたいののは、僕の為に秘書官殿が罪に問われるような事をしちゃ駄目つて事つす」
「何だ、そんな事を気にしてたの？ 大丈夫、こうして不法に侵入してる時点でもう罪に問われるような事しちゃってるし、問題なし」
「大有りだ。むしろ何をもつて問題がないと言っているのか、ヤーコフには理解不能だった。」

「ま、まだ誰にも見つかつてないんすよね？ だったら見つからない内に、ここから出て行つた方がいいつすよ。僕の事は放っておいてくれていいつすから」

助けてもらえるのはとてもありがたい、しかしながらその後の事

を考えると、犯罪まがいの手段でここを出るのはよろしくない。

少なくとも法を犯した時点で、協会騎士団からは何かしらの罰則があるのだから。

「悪い事は言わないっす、秘書官殿がここに来たことは黙ってますから」

「心遣いは嬉しいけどね。今はそんな綺麗事や悠長な事を言っている場合じゃないんだよ。副隊長にはどうしても、やってもらわなくてはならない事があるんだから」

少しだけ強い口調でサイノメはそう言った。それが妙に迫力のあ
るものを感じて、ヤーコフは吞まれてしまう。

「な、なんすか？ 僕がやらなくちゃいけない事ってのは……？」
恐る恐る尋ねるヤーコフに、サイノメは満面の笑みを作って答えた。

「なあに、簡単な事だよ……」

言いながらサイノメは徐に牢の鍵を開いた。

舞台は既に整っている、後は役者を揃えるだけ。その為に全てを負う決意も既にできている。

だからサイノメは笑う。これから起こる事と、起こす事の残酷さと冷酷さを理解したうえで尚、全てを包み込むような笑顔を見せる。それがこの世で最も醜い偽りだと理解した上で。

「副隊長には、英雄になってもらうよ」

ヤーコフに宣告した。

+++++

ゼニス市の中央広場、いつもは出店や商店が出そろうその場所が、
今日は一風違った賑わいを見せている。

その理由は、突然に決まった市長の演説。何やら重要な事を全市

民に伝える為として、自警団等の人出を使い、集められるだけの市民を中央広場に集めていた。

普段あまり人前に出ない市長が直々にという事もあり、集まった市民は何かしらの期待や不安を抱きながらその時を待っている。

「あ、おい来たぞ」

自警団が道を空け、中央広場の中心に特設された演説台に向かって歩く、市長の姿に衆目が集まった。

市長の普段通りとも言える気難しげな表情は変わらず、市民から呼びかける声には何の反応も示さずに演説台に上る。

市長のそういった無愛想な態度は、以外にも市民からは不満には思われていない。それはこれまで九年もの間、ゼニス市の市長という職を、立派に勤め上げてきた実績によるものが大きい。

だからこそ市民は市長の呼びかけに応じてこの場に集まり。市長が演説台に上ると、それまで聞こえていた囁き合う声も落ち着き、皆が市長の言葉に耳を傾けようとしていた。

そして完全に静まるのを待った後、市長は口を開いた。

「……まず始めに、突然の事ながらこうして皆が、私の呼びかけに応えてくれたことに対して礼を言わなければならない。本当にありがとうございます」

そう言って頭を下げた市長の態度に、静まった筈の市民たちはざわめき出す。

これまで市長がそういう態度を示した事は、未だかつてなかった。常に強気の姿勢で事に当たり、その仕事ぶりが完璧であつたから誰にも頭を下げる必要が無かつたとも言えるが。

それは集まった市民からすれば逆に不安も感じてしまう。重要な事を伝える為として市民を集めた市長の態度に、そういう違和感があるとするれば、何か良くない事態を想像してしまうからだ。

そんな市民たちの反応を気にしていないかのように、市長は頭を上げた後、続いて話を進める。

「ここに諸君らに集まってもらった理由であるが、どうしても知っ

てもらいたい重要な事柄を、私の口から伝えたかったからだ……」

改めて主旨を自身の口から語る市長。

「諸君らの知っている通り、我らがミルド共和国の民は、五十年前に起こった大陸と魔界の戦いを終わらせた、『勇者ミルドレット』の意志を継ぎ、勇者が守ったこの世界が、再び戦火に包まれぬように努力してきた」

かつてこの世界は魔界という異世界と繋がった事で、世界規模の戦争が起こった。

それを終わらせのたが勇者ミルドレット。かの者が『聖剣』の力により異世界との繋がりを断った事で五十年前の大戦は幕を閉じている。

そしてその後建国された共和国の起こりは、勇者ミルドレットの英雄的偉業を崇拝した者達が、『ミルド協会』という共同体を作り上げた事から端を発する。

ミルド協会は勇者という救世の英雄を神格化し、その思いを信仰とした。それは勇者が望んだ『戦争の無い世界』を維持する為、後に大陸最強を謳われるミルド協会騎士団を生む事になった。

「我らは戦争の無い平和な世を五十年もの間維持し、過ごしてきた。これは有史以来見られなかった人類の快挙でもあり、同時に勇者がもたらした平和という神話が、今でも続いている事を示している」

当然ながら市長の話を聞く市民の中で温度差が生まれた。

五十年という月日は、人の価値観を容易に変えてしまう。平和を待ち望み、勝ち取った世代。戦後の荒れきった土地に生まれ、険しい日々を送った世代。平和で豊かな世に生まれ、それが当たり前になった世代。

それでもそこに居る誰もが、勇者に対して敬虔な思いを持ち得ている。

それがミルド共和国という国の教えであり。そこに属す誰もが持たなければならぬ風潮でもある。

「だが、諸君らには改めて知ってもらいたい……」

市長は一度言葉を区切つて、強調する。市民達は張りつめたような空気を感じとった。

「勇者がもたらした神話が既に終わりを告げている事を」

そしてその一言に、周囲が大いにざわめく。

市長が言つた一言は聞こえようによつてはミルド協会の教えに対する冒瀆にもとれる、そういう言葉は共和国民である以上禁句であり、場合によつては異端者ともとられかねない。

しかし、あくまで市長は周囲の反応には気にも留めない姿勢で話を続ける。

「今ここに、その証明を示そう……諸君らの黎明の終わりを身を持つて知るがいい。そして根源に刻まれよ。フッフハハハハハハ……」

市長は笑っていた、とても楽しげに、まるで人が変わったようにそれは文字通り確かに人が変わっていた。性格だけでなく、その外見までも市長は別人となっていた。

それまで演説台に居たのは、シワーつない紳士服を着こなした白髪 of 壮者だった。しかし、今市民達の目の前に居るのは、黒い髪と黒い瞳を持つ若い男。

その突然の変化に、ついて行けるものはその場に居ない。市民達は驚愕で目を丸くして、ただ言葉を失う。

「ハハハ、やはり愚かだな。見えている世界が全てだと思っているからこうなる。騙されている事にも気づかずに、疑う事も出来なくなる、これこそ具の骨頂というものの……」

そして、と市長ことベルリークは最後に付け加える。

「見えない場所にこそ、罠が仕掛けられているものだ」

同時にその場が悲鳴で騒然となった。

突如として中央広場の全域に黒い幾何学模様が浮かび上がる。とつもない異様な光景は、恐怖として伝染し、危険を察知したものはそこからすぐに逃げ出そうとした。

しかし、もう遅い。

その場を支配する力は逃げ惑う事を許さない。まるで蛇に睨まれた蛙のように、市民達はその場を動けなかった。

魔術陣『インフリーズン縛呪』

魔術を最大効率化するために施す術式の事を、魔術陣と呼ぶ。魔力や霊子の流れを自在のものとし、術者の技量以上の事象を起こす事が可能になる。

反面、その為に複雑な術式を組むことになり、膨大な時間を要する場合があるが。

ベルリークが長い時間をかけて地層深くに仕込んだ魔術陣は、その場に集まった千に近い数の市民達を行動不能に陥らせた。

+++++

「……お、おい！ これはどういう事だ！！ 市長はどこへ行った！？」

自警団の次期団長を夢見た男――ダルトンは、それが潰えた事にまだ気づいていないのか、ベルリークに抗議する。

「ほう、私の術中にありながら、まだ叫ぶ元気があるとはな。過分な夢を見た愚か者だと思っていたが、存外適任だったのかもしれない」

ベルリークは興味深そうにダルトンに向き直って眺める。その黒い眼は同じ生き物を見るようなものでは無く、ダルトンは背筋が凍るようだった。

「それで、貴様が出来る事は叫ぶ事だけか？ それだけならばこの場で何も意味を成さない。むしろ、その無駄な行いが命を縮める事にもなるぞ」

実際に、この場に居る全ての人がベルリークに命を握られている。ダルトンとて全く動かなくなっている自分の四肢を思えば、それも

脅しでは無いのだという事が理解できる。

そして動けないという事以外にも、何かに自分の力を奪われる感覚というものを、ダルトンは感じていた。

それでもなおダルトンは食って掛かる。

「うるせえ、お前なんぞは眼中にねえ！　市長はどこに行った！

俺を自警団の団長にするって話は！？」

「……ふん、愚か者は所詮、愚か者か。私がこの九年、ゼニスの市長を務めてきたベルリークで間違いは無い。ただ貴様らに本当の私が見えてなかったただけだな」

「な、何い？　意味が解らない。お前、何言ってるんだ？」

「……解らないのなら、そのままそこで死ね。本当なら貴様のような愚か者は有無を言わず処分するのだが、貴様の白き力が今は必要だ。生かしておいてやる」

「てめえ！　何だか知らねえが、上からもの言いやがって！　ゆるさねえぞー！」

ベルリークの言葉にいきり立つダルトンだったが、回るのは口だけであり、体が麻痺するような感覚は消えない。

周囲からは苦しむような声、自警団の同僚たちも顔色を悪くしていた。

その原因は地面の黒い模様だというのは明らかであるが、動けない以上はダルトンに打てる手は無かった。

「畜生！　おい、誰か動ける奴あ射ねえのかよー！」

「無駄だ、私の魔術はそれほど容易くは無い。この陣の中で動けるものなど居るものか」

ベルリークの言葉通り、誰ひとりとして立ち向かえる者も逃げ出せる者も居ないように見えた。

もしこの状況でそれが出来るとするなら、それは英雄の器だと呼べるだろう。

ベルリークとしても、そんな不確定要素が現れない為に手は打つてある。自警団の主力は罠にはめて弟に処分させた。そしてそれを

ダシに協会騎士団の駐屯部隊隊長であるカタナをこの街から離れさせ、残った駐屯部隊の隊員もダルトン達に命じて拘束してある。

万事手抜きなく、計画通りであった。

（……黒の予言、巫女が示した我らが繁栄を極める道。それを阻むものを許してはならない）

ベルリークの悲願、その為に今まで生を繋ぎ、そしてその為に死ぬ。その決意があるからこそ抗い続けてきた。

（そして巫女が示した最大の障害は『凶星を運ぶ聖騎士』。協会騎士団では八人しかいない『聖騎士』の称号を持つ者が、まさかこのような辺鄙な所にいると知った時は運命というものを呪ったものだが）

カタナがこの街に居るだけで、その存在はベルリークを不安にさせていた。早々に処分する事も考えたが、それをする事で協会騎士団への影響がどう出るか、それこそ不確定要素が多くなりすぎる為、苦渋の末断念した過去もある。

（この段階まで至れば、その心配も杞憂だったという事が……我ながら滑稽だな）

もはや計画の成就を確信したベルリークは、込み上げてくる歓喜を止めることなく笑い続ける。

既に勝利を確信しているが故の気の緩みであった。

しかしその耳にどよめきが届き、その思いも一蹴される事になる。「な、何だと!？」

どよめきが続く方向にベルリークが目を向けると、ただ一人向かってくる者がそこに居た。

+++++

ベルリークの魔術によって動けなくなつた市民達の間を縫いなが

ら、高速で駆け抜ける男がいる。

黒い外套を身に纏い、眩い輝きを放つ長剣をその手に持ち、颯爽と現れる者。

それはまさに、民衆の危機に現れる英雄という概念そのものように。

そしてその男の胸中に宿る意志は、まさに英雄と呼ばれて相応しいもの。

（皆を助ける）

その一心が男を進ませる。

そして、とうとうベルリークの前に躍り出た。

「……君は、確が見覚えがあるな」

ベルリークの黒い双眸が男を睨み付ける。

「覚えておいて下さったようで、嬉しい限りっすよ」

軽い口調でベルリークの言葉を受け流す男。そしてその背後からはその場の雰囲気をぶち壊す大声が轟いた。

「あ？ ああああー！？ てめえ、駐屯部隊のハーレム騎士じゃねえか！？ どうしてこんなとこに居やがる！？」

ダルトンが空気も読まずにそんな事を叫ぶものだから、男——ヤーコフは大勢の市民達の前で大恥をかくことになった。

「ちよっ！？ こんな時までやめて下さいっすダルトンさん！！」

格好をつけたいわけでは無いが。今まさに敵と相対している時に緊張感を無くすような事を言われるのはとても困る。

「いや、そんなこたあこの際どうでもいい！ おいハーレム野郎、俺達は身動きがとれねえんだ。なんとかしやがれ！」

更にそんな事をのたまうダルトンに、ヤーコフは軽い殺意を覚えた。

大勢の前で殴られたり、大勢の前で恥をかかされたり、牢屋に放り込まれたり。思い返せば散々な目にあわされている。

そもそもこうしてヤーコフが此処に居るのは、この状況を何とかするために決まっているのに、わざわざ命令するように言われたの

も癪に障った。

(……と、いけない。今は目の前に集中しないと)

何やらまだ後ろで叫んでいるダルトンは無視する形に決めて、ヤーコフは気持ちを切り替える。

ヤーコフが今相対しているのは『魔人』なのだ、かつてこの大陸を蹂躪した種。その恐ろしさは伝え聞いているものしか知らないが、それでもベルリークの隙の無さや感じる圧力は、その種の差というものを感じ取るには充分だった。

(……これは骨が折れそうっす)

とはいえ悠長にしている時間もなさそうであるのは、周囲を見れば明らかである。市民達は魔術によって動けなくなっているが、ただ動けないだけではなさそうなのだ。

ヤーコフは確認の為にダルトンに声を掛ける。

「ダルトンさん、動けないみたいっすけど。それ以外に何か異常は無いっすか？」

「……あ？ ああ、そういうはずと力が抜けるような感覚があるな」

それを表すようにダルトンの騒々しさも薄れている。やはりベルリークの魔術には別の何かがあるようだ。

「……ヤーコフだったな、どうして私の術中にありながら自由に動くことができるのだ？」

「秘密に決まってるっす」

興味深げに聞いてくるベルリークを、当然のようにヤーコフは突っぱねる。

実はヤーコフがベルリークの魔術陣の中に居ても自由に動けるのは、サイノメからある物を託されていたからだだった。

それはヤーコフが今着ている黒い外套。これはカタナが普段から着ている物と同じ物であり、彼が着回している代用品^{スベア}だった。

その外套には高度な魔法印が刻まれていて、ヤーコフが聞いた限りでは共和国一の魔法の使い手が作り上げた物らしい。

（しかし、まさか魔術すら完全に防ぐとは……隊長が普段からこんな暑苦しい格好をしている理由が解るっす）

編みこまれた^{アラクネル}霊系によって、障壁魔法が自動で発現しているからヤーコフには負担は無い。この場では何よりもありがたいものだった。

そしてもう一つ、ヤーコフの手には普段は持たない特別な装備。

魔法剣——無銘であるが、協会騎士団の本隊にのみ支給されるもので、当然ながら普通の鉄剣よりも数段上の性能である。本来なら騎士勲章と一緒に剥奪される筈の物だったので、もう持たないと決めていたのだが。

ヤーコフは魔法剣を構える。

「今すぐこの魔術を解いて投降すれば命までは奪わないっす」

「フン、何を言うかと思えば戯言を。ニンゲン風情が私に敵うとでも？」

ベルリークの手には武器は無い、それでも全く臆することない態度は余裕そのものである。

しかし、ヤーコフはそれが偽りであると見抜いていた。

「そういう強がりは少し痛々しいっすよ」

「……何？」

ベルリークの目が細まる。

「これだけの魔術を維持するのに消耗しない訳がないっす。貴方が今まで偽っていた白髪の老人では無く、その姿になったのも余裕がなくなつた証拠っす」

姿を偽る事が出来るというのはヤーコフにとって衝撃的だったが、かつて祖父が言っていた魔人に常識は通用しないというのは、まさにこういう事なのだろう。

「ほう……少しは頭が回るようだな」

ベルリークは感心するように頷いた、しかしそこに含む笑いにヤーコフは気付いた。

「……何が可笑しいっす？」

「何、私も思つたのさ。弱者の強がりには痛々しいとな」

今度ははつきりと嘲笑いながらベルリークは言う。

「ハハハ、確かに私は消耗しているが、君程度のゴミを片付ける程度の余力は十分に残している。それは君自身がよく解っているだろう？ 先程からずつと隙を窺っているようだが、その機会がないと思うからそのような言葉で惑わそうとしているのだろう？」

（……バレバレだったっすね）

確かにベルリークは消耗している、だがそれを鑑みても歴然たる力量差は揺るぎ無い。

力の差と、心の内まで見透かされるといふ絶望的状况。だが、まだ一っだけヤーコフに勝機は残されていた。

それはベルリークがヤーコフよりも、優位に立っていると思ひ込んでいる状況。付けこむ隙があるというならそこだけだ。

靈光が上がり、ヤーコフの身体に白い光が灯る。

「――駆身魔法、発現」

瞬間、世界が加速する。

「……ほう」

一瞬で間合いを詰めたヤーコフに臆することなく、ベルリークは魔光が上がった腕を振るう。

黒い線が刃のようにヤーコフに襲い掛かる。

「――つつ」

全方位から襲い掛かる黒い刃、逃げ場はない。だからヤーコフは立ち止まらずに走り抜ける。

「何だと!？」

賭けであつた。ヤーコフがサイノメから聞いてあつたベルリークの黒い刃の攻撃に、対抗できるすべがあるとするなら、それはカタナの外套に賭ける事だつた。

対魔法、対魔術のあらゆる法式、術式に対応する、その規模内では言えば現代最高の防護魔法。

『三連魔法印・守天導地しゅてんどうち』

外套に刻まれた三つの複雑な魔法印が合わさり、発現されるその魔法はヤーコフの全身を包み。ベルリークの放った黒い刃のことごとくを防ぎきった。

「はあああああああああ！！」

ヤーコフは上段から魔法剣を振り下ろす。ベルリークの放つ魔術の中を突き進み、得た最大の好機。一瞬の逡巡などでもそれを逃してはならない。

一閃、それはその場に響いた。

ポタリと血の滴る音。ベルリークの身体から流れ出る赤い血は、ヤーコフを青ざめさせていた。

「まさかこの私に血を流させるとは……君の事を大分過小評価していたようだな」

ベルリークは荒げた息を整えながらそう呟いた。

「それは……僕も同じっすよ……」

魔人に常識は通用しない、だから間違っても正面から戦うな、もしそうになったら迷わず逃げる。かつてヤーコフが祖父から教わったその言葉の意味を、本当の意味で実感していた。

ヤーコフの剣はベルリークの素手に受け止められていた。

与えた損害は軽微、手の皮一枚を裂いただけ。渾身の一撃でその程度。

そして次の瞬間、ヤーコフの魔法剣はベルリークによって握り碎かれた。

その戦いを見守っていた周りの自警団や市民達も消沈し、そしてその顔が絶望に染まった。

「名誉な事だよヤーコフ君、五十年前の大戦でさえ私は一度も血を流す事が無かったのだから」

「……それは、随分と臆病者だったんすね」

そうやって憎まれ口を叩くのが、今のヤーコフにできるただ一つ

の抵抗。

それをベルリークは鼻で一笑に付し、血に塗れた手でヤーコフの首を掴む。

「――あがつ」

「君は中々良くやったよ、この私の計画を少しだけ狂わせた。そのお礼に、精々苦しませて殺してあげよう」

魔法剣すら握り碎いたその手は、ヤーコフの首の骨を砕かないように加減され、じわじわと窒息させる。

「が、うあ……」

無駄と悟り、ベルリークの手を外そうともしないヤーコフ。諦めたのだと誰もが思っていた。

（……やっと見つけたっす）

だがもしベルリークが人間というものを、もっとちゃんと見ていればそれに気付けただろうか。

ヤーコフの目がまだ死んでいないという事を。

（……我らが勇者が、絶望の中に希望を見出したように。僕にもそれを見つける事ができたっす）

最後の最後、声を出す事が出来ないのが悔しいが、ヤーコフは心の中で高らかに叫ぶ事にした。

（隙あり！！）

ヤーコフが取り出したのは短刀。

祖父の形見であり、ヤーコフが常に持ち歩く、相棒とも言える存在。

銘は『バシリコフ』、祖父の名がそのまま付けられている。

五十年前の大戦を生き抜き、共和国の建国に尽力した騎士の刃と意志は、時を経て受け継がれ。

刃渡り二十センチメートル程の魔法付加された刃は、易々とベルリークの胸の中心を刺し貫いていた。

「……馬鹿な」

心臓に突きたてられた短刀をヤーコフが引き抜くと、先程とは比

べ物にならない程の鮮血が流れ出た。

ヤーコフの首にかかっていたベルリークの手から力が抜ける。

「けほっ、ぐえ……やった」

咳き込みながら、その手応えを感じたヤーコフは控えめに呟いた。それは確かな勝利宣言であり、ヤーコフが一時の英雄になった瞬間だった。

広場を覆っていた魔術陣は消え、市民達は身体の自由を取り戻す。ほとんどの者が疲弊し、幾人か気絶している者も居るようだが、命に別状は無いようだった。

そして無事な者達からヤーコフに向けて歓声が届く、現金な事にその一員にダルトンもいた。

「……クフフフフフ」

しかし、その歓声を吹き消すかのようにベルリークが乾いた笑いを漏らす。

「何が可笑しいっす？」

「フフ、秘密に決まっている。と言いたところだが……私の生を終わらせる君には知っておいてもらおうか……」

もはや目に焦点が定まらない瀕死の状態で、勿体付けるようにベルリークは言った。

「——？」

「私の魔術陣が……ただニンゲン共の動きを止めるだけだったとは思っていないだろうか？」

「……そうっすね、だからこそ力付くでも止めた訳っすから」

ベルリークがその気になれば、この場に居る者全員を皆殺しにも出来たかもしれない。ヤーコフとしてもベルリークの発現した魔術の意味は気になっていた。

「……^{インフリズン}縛呪は動きを止めると同時に、力を奪う……君達の言葉で言う^{インフリズン}と霊力だったか……」

ダルトンが力が抜けるような感覚がある、と言っていたのをヤーコフは聞いている。そして疲弊したり気絶したりという症状も、体

内の霊力が枯渇した時の状態と同じだ。

「街の皆から霊力を奪って何をしようとしたんすか？」

「……この世と、かの世を繋げる為。その為には我ら黒き民の力と……貴様らニンゲン——白き民の力が同量必要だった……」

「この世と、かの世を繋げる？」

「……そう、君達が魔界と呼ぶ、私達の世界とこの世界を繋げる為……」

「な！？ 馬鹿な……五十年前に、勇者が聖剣によって異世界との繋がりを断った事で、それは出来なくなっただ筈だ！？」

それは世界の常識とも言える事で、現実はこの五十年の間は一度も、異界とこの世界が繋がる事は無かった。

「……フフフ、愚かな……この世に永遠などという幻想は存在しない……ましてただ一人が世界に干渉した結果だ……五十年持っただけでも驚異的な話だろう……」

もはや先程の歓声は消え、ベルリークの話を聞く誰もが青ざめている。

話が本当なら信じているものの根底が崩れる事になるのだ、平和な世を生きている現実も、平和な世がこの先も続いていく幻想も。

「……そして、君は少し遅かった……」

「な……」

ベルリークの真下から黒い光と白い光が天に向かって伸びていく。これこそ、ベルリークが十年の時をかけて完成させた魔術陣。ベルリークの血が霧消していく、その血に含む魔力すら陣が吸い取っていくように。

「……すでに発現しているのだよ……開くぞ……異界への門が……もう、鍵は無し……」

「あ、あれは……」

ゼニスの空の上、青い空が歪みをみせて黒い裂け目を作った。

「……これが私の世界への反逆……勇者が残した神話の終わり……巫女が残した、黒の予言の第一幕『獣が世界を蹂躪する』……クフ

フフハハハハッ……」

ベルリークはこだまするような乾いた笑いを残してこと切れた、その死に様を見ていた者はその場には誰もいない。

誰もが空を見ていた。黒い裂け目を作った空と、そしてそこから這い出してくる巨大なモノ。

誰もがそれに釘付けになっていた。その圧倒的な存在感、そして根源から這い上がってくるような恐怖。

ヤーコフも、ベルリークなど比ではない脅威をその目に映し、心が折れそうになった。

空の裂け目から現れたのは『魔竜』、魔界において最強にして最凶の獣。かつてこの世界で破壊の限りを尽くした魔獣が、再びこの世界に現れた。

恐怖は広がり混乱を呼ぶ。それを止める事など出来る筈ない。

だがその場でヤーコフだけは己を見失ってはいなかった。

（一人でも多くの人が、逃げ延びる事が出来るように……）

この場で自分が何をすべきなのか見失ってはいなかった。

恐怖に慄く市民達が走り去る方向とは正反対に、ヤーコフは走り出した。

+++++

「はあ……」

事の顛末を見届けたサイノメは溜息をついた。

「やっぱり役者不足だったか……お膳立てはしてあげたのに」

最善とは言えないが、出来るだけの手助けはしたつもりだ。それでこの結果だったのだから、運命を呪ってもらうしかない。

「でも、ベルリークを討つたのは称賛に値するかな。おかげであた

しの仕事の一つ減ったし」

誰にも聞こえないような拍手を三回ならし、サイノメは混乱のただ中にあるゼニスの街に背を向けた。

「さて、これからが忙しいぞー」

軽く伸びをして、これからの重労働に向けて意気込む。

そして一度だけ、サイノメはゼニスの街を振り返った。

「……いい街だったな」

おそらく次に見る時には、まったく別の風景に変わってしまったて
いるだろう。

名残惜しそうにしばらく目に焼き付けて、サイノメはその場を去
った。

第十九話 魔人と魔元心臓

周囲を黒い炎が満たす。

一たび触れれば骨まで焼き尽くされるほどの業火、その中心にいて未だカタナとカトリ・デアトリスは健在であった。

その理由は、

「……隊長、だけでも、何とか脱出できま……せんか？」

いち早くその罠に気付いたカトリが、防護魔法によって迫る黒炎を食い止めているからだった。

魔術と、それに対抗できる知識と技量がカトリにはあったからこそ成せた業。

元々、魔法とは魔術に対抗するために編み出された技法であり、同時に同じ理を流用し模倣したものである。

それが、人が扱うものでありながら『（魔）法』と呼ばれる由縁。

「お前……」

「もう……あまり長くは持ちません……私の、力不足です」

陣によつて高められた魔術を、人一人がここまで防ぎ切っただけでも凄い話だ。しかもカトリの魔法は、自身以外にカタナを含めて四人もの命を守っている。

助けられなかった他の数名は灰になったが、カトリは敵であったはずの山賊達まで守ろうとしていた。

「……俺やこいつらに構わずにいれば、お前だけでも助かったんじゃないか？」

カタナからすれば、カトリのその行動は意外なものであった。目的の為なら手段を選ばず、他者の事よりも自分の事を第一に考える、そういう奴だと思っていた。

「そう、かもしれませんが……でもそうしたくは……ありませんでした……」

「何故だ？」

そのカタナの問いに、カトリは答えずに僅かに首を振る。

「そんな……問答を、している余裕は……もう無いです」

もはや限界なのか、息を切らせながらカトリは片膝をつく。

そんな状態でも、いまだ防護魔法は強固にカタナ達を守っている。カトリの身体から上る霊光は輝きを増し、それはまるで命の最期の灯のようにも見えた。

「——っ馬鹿が——！」

「……隊長に、そう言われるのにも……慣れてきましたね」

カタナから見えるのはカトリの後ろ姿なので表情は窺えないが、それはまるで笑っているようだった。

（……笑えない、本当に笑えない真性の馬鹿だ。なんで俺の周囲にはこういうのが集まるんだ？）

要領が悪く、不相応な志を持ち、その拳句が目も当てられない。

（だが、馬鹿でも悪い馬鹿じゃないな……本当に馬鹿なのは、最低なのはこの俺か）

一番安全な所にいて、何もしない。何もしないで、一番安全な所にいる。

誰が死のうが関係ないと。他者の事より自分の事を第一に考えているというのは、一体誰の事だったのか。

（殺さないのは協会騎士団という居場所を失いたくないから、力を使わないのもそうだ。そんな打算にまみれた奴が『聖騎士』なんて本当に反吐がでそうだ）

それでいいと思っていた。そして、ずっとそういう生き方をするのだろう、という確信もあった。

しかし、既にカタナの内には、かつて失った思いがもう一度芽生えていた。

「……おい、カトリ・デアトリス」

「……え……今、なんて」

カタナに呼ばれなれていない、自分の名前で呼ばれて、カトリは僅かに狼狽して振り返る。

「……さっきの問いの答え、この場を打破したら聞かせろ」

応えを待たずに一方的にそう約束して、カタナは今まで秘めていた、自分の忌まわしき力を使う事を決意した。

（果てしなく面倒な事この上ないが、止むを得ない。『ダークマター魔元心臓』を起動する）

「——え、そんな!？」

カタナの変化に気付いたカトリは、我が目を疑う。

黒い光がカタナから立ち上っていた、それは紛れもなく魔力の光である魔光。魔人の持つ、世界の理を捻じ曲げる黒い力。それがカトリの視界を覆い隠すほど溢れ出していく。

瞬間、猛昇っていた黒炎が漆黒に塗りつぶされ、消えていった。

+++++

「ハハハハハ、燃えろ燃えろ、この世の汚物を燃やし尽くせ」

山賊のアジトを包んだ黒炎を眺めて狂喜する男、名はベルモンド。黒い髪、黒い瞳、そして黒い力を持つ、人が魔人と呼び恐れ忌む存在。

人の持つ認識が間違いで無いように、ベルモンドは喜んで人を殺す。人が燃え散っていく様子が何よりも心地よいと思っている。

だが逆にベルモンドは、人間以外のこの世界の全てを愛おしいと思っている。緑の自然、青い海、赤い夕陽、眺めているだけで心安らぐその色彩はベルモンドの世界には見られぬものであり、だからこそ彼はそれをもっとも大事にしている。

『ポーターフレイム魔術陣・境界の炎』の黒い炎はベルモンドの意志により、人間だけを燃やし尽くし、それ以外の一切には影響が出ない。

それがベルモンドにとって何よりも嬉しく、この黒炎に魅せられる理由だった。

「ハハハハハハハハハハ……は？」

だがその予想外の異変にベルモンドは目を丸くした。
力を侵食されるような感覚、それと同時に黒炎の勢いも目に見えて衰えていく。

「ば、馬鹿な……」

そして消えた炎の中から出てくる者。それを目にして、ベルモンドは背筋が凍るような戦慄を感じた。

（なんだアレは、何なのだこの恐怖は、これではまるで……）

ベルモンドの人生でそれを感じたのは二度目だった。

（……魔王ではないか！？）

かつてそれを感じたのは主君の御前、自らを魔王と呼称し、敵からも味方からも恐れられた魔人の王の脅威。それと同種の脅威が、今日の前に居る事を認識した。

「ハハ……ハハハハ、恨むぞ兄よ」

相対した時点で勝敗は決していた。既にベルモンドは屈している。しかし、抗う事をやめる訳にはいかないのは、自身が一番良く知っていた。

+++++

「あの不快な炎、やったのはお前だな？」

問いかけが断定系なのは、既にそれが揺るぎ無いものだから。

ベルモンドは魔光を立ち上らせている。カタナにはそれが臨戦状態に入っているのだと解っていた。

「……」

「だんまりか、まあいい。解っているみたいだが一応言っておく、俺はお前を殺しに来た」

カタナはベルモンドにそう通告する。文字通りの最後通告だった。

「……それがどうした？　それで怖気づくとも思ってたか？」

「いや、ちよつとした礼儀みたいなものだ。法に守られていないお前らに対してのな」

この世に魔人を守るための法は無く、そして裁くための法も無い。それが異邦人に対するこの世界の答えだ。

「それは貴様も同じではないのか？　その力、どう見ても我らと同じものだろう？」

「そう思うか？　ふっ」

「……何が可笑しい？」

ベルモンドはカタナを指して同種だと言った。それがカタナにはたまらなく可笑的い。

「俺とお前らは全く違う。お前らは世界の敵で、俺はそれを殺す為の道具だ。一緒にするな」

「……飼われているのか？　それほどの力を持ちながら、ニンゲンの言いなりになるのか？」

「好きで飼われてんだ、放っておけ。それにこんな力じゃ大したことはできねえよ」

「ぐ、ふざけるな！！」

ベルモンドは黒炎をカタナに向けて放つ。大蛇のようにうねり上げながら襲い掛かる炎を、カタナは高密度の魔力をぶつけるだけで消し飛ばした。

魔術ですらないただの魔力の放出で、ベルモンドの魔術は無効化される。それが力の差を歴然と表していた。

（力は更なる大きな力によって屈する。それがこの世の摂理、そして一人の力なんてたかが知れている）

それをカタナはよく理解している。嫌というほど理解させられた経験もある。

「お前には聞きたいことがある。こんなところでどうして山賊なんてやっていた？　それにさっきの魔術陣、まるで俺達がここに来るのが解っていたようだった」

即興で用意したとは考えにくい。自警団の事と言い、誘い込まれたような違和感があった。

「フ……フフフ、いいだろう。どうせ貴様には勝てない。ならば最後に絶望だけは与えてやろうか」

「どういう意味だ？」

笑いながら不吉な事を言うベルモンド、既に勝敗は決しているがそれに囚われない不気味さがあった。

「既に貴様は敗北している。今この時この場所に貴様が居る事は、我らの勝利を意味しているからな」

「……我ら？ 他に仲間でもいるのか？」

山賊達の事を言っているとは思えない。カタナ達ごと焼き払おうとしたくらいだ、元から仲間意識など無かっただろう。

「フフフ、どうかな？ 我はただの捨て駒だったのかもしれない。だが貴様を見て確信したぞ、巫女の予言の意味するところかな」

「……解るように話せ」

「いずれ解る……その時になったら大いに悔しがってくれ、それが我の本懐だ……」

ベルモンドは満足そうに笑うと、魔力を全て使い、頭上に巨大な黒炎球を作りあげる。

まるで禍々しい太陽が出来たように、周囲に黒い影を作った。

「これならば……！」

「同じことだ」

カタナは高くかざした右手から、圧倒的な量の魔力を放出し、ベルモンドの作りあげた黒い太陽を飲み込んでいった。

ベルモンドの最大の魔術はそれだけで、あっという間に霧消した。そしてすぐさまカタナは駆る。

魔人の身体能力を凌駕した速度、そして反応を許さないままベルモンドの首を片手で掴みあげる。

「ぐ……あ……」

引きはがそうとしても、その尋常ではない膂力は決してベルモン

ドの首を放さない。

魔力、身体能力、共にカタナはベルモンドを上回っていた。それがかつて魔剣と呼ばれた者の片鱗。魔人を凌駕する存在として作られ、その為に存在していた者の真の実力。

ゴキリ、と首の骨を砕く音と感触が、カタナの手を伝う。

ベルモンドの苦悶の表情はそれ以上変わることなく、見開かれた瞳は虚空を向いていた。

そうして一つの命を奪ったことにカタナは何の感慨を抱かずに、そのただの死体となったベルモンドだったものを地面に落とす。

(……我ながら嫌になるほど慣れたものだが、面倒なのはこの後だ) カタナが振り返ると、カトリ・デアトリスが抜いた剣先をこちらに向けていた。

+++++

「単刀直入に聞きます、隊長は魔人なのですか？」

剣先をカタナに向けながら、カトリ・デアトリスは問う。その返答如何によつては斬りかかってくるつもりなのかもしれない。

(……やはりこうなつたか、本当に面倒だ。疲れた、少しは休ませろ)

とりあえず一番言いたいことを飲み込んで、カタナは問いに応じる。

「……複雑な問題だが、魔人では無いことは確かだ」

本当に複雑すぎて説明はしたくないが、魔人ではない事に嘘は無い。

「では先程見せた力は……あれは魔力ではないのですか？」

人が持つ力が霊力と呼ばれ、白い霊光を帯びるのと対照的に。魔人の持つ力は魔力と呼ばれ、黒い魔光を帯びる。

「ああ、あれは魔力だ」

それも誤魔化しようのない事実。カタナが持つのは魔人と同じ力だ。

「では魔人では無いのに、隊長は魔力を持っていると？」

「……つまりは、そういうことだな。無理のある話だが、全部説明するのはとても面倒だ」

「面倒……そんな理由で誤魔化せるとお思いですか？」

ちゃんと説明するまで納得しない、そういう本気の目をカトリはしていた。

「じゃあ、聞くが。もし仮に俺が魔人だったならお前は どうする？ その剣で切り捨てるのか？」

「ええ」

（言い切りやがった、コイツ）

それだけ魔人に対して思う所があるのだろう。だがそれはカタナからしたら完全なとぼっちりだ。

こういう事態になる事はある程度は予測していたが、流石にそのカトリの態度には頭にくるものがあつた。

「……もういい、面倒だからかかってこい」

投げやりな気分で、そう言ったカタナ。

「それはつまり、魔人であることを認めるとい事ですか？」

「どうでもいいって言ってるんだ。お前がそう思うならかかってこい、だが剣を向けるからには覚悟はあるんだろうな？ 稽古とは意味が違うぞ」

「……」

「……」

睨み合うカタナとカトリ、一触即発。だがその空気を読んでか読まずにか、割って入る者がいた。

「はいはい、ストーップ。仲間割れはそこまでにして下さいな」

幼い少女の様な風貌の、残念な成人女性。

カトリとカタナの間に割って入ったのは、サイノメだった。

その登場に、サイノメとあまり面識のないカトリは大いに戸惑い、サイノメを良く知るカタナは嫌な予感を走らせた。

「サイノメ……どうしてお前がここに居る？」

「あはは、いやね、何とか非常に大変な事態になったから、シヤチョーに伝えに来たんだよ」

そしてサイノメが語ったゼニスの街の惨状は、カタナの嫌な予感を的中させるものだった。

第十九話 魔人と魔元心臓（後書き）

作業の敵、それはニコ動

第二十話 サイノメとカトリ・デアトリス

「魔竜……ですか？」

サイノメが伝えたゼニスの惨状を聞き終えた、カトリ・デアトリスの第一声はそれだった。

疑問形なのは、きっとそれが突拍子もなさ過ぎて現実味に欠けているからだろう。いきなり魔界から魔竜が召喚されたと言われても信じられないのはしょうがないが。

「そう、魔竜。まあピンとこないかもね、見た事無いものにはイメージ湧かないと思うし……でも事実なんだよ」

「おいサイノメ、そいつの事は放っておけ。何を言っても信じられない人間不信女なんだから。話すだけ時間の無駄だ」

なんとかカトリに信じてもらえるように話そうとするサイノメに、カタナの横やりが入る。

「だ、誰が人間不信女ですか!？」

「お前以外にいるか馬鹿が。大体、いつまで俺に剣を向けている気だ」

「きちんとした説明があるまでです。それまではこのままでいさせて頂きます」

そうやってカタナに剣を向けたまま、サイノメの方に向くカトリ。微妙に両者の距離があいているせいで、サイノメが話にくい思いをしているのだがお構いなしだった。

「今の話が本当だったとして、一つだけ気になることがあります。どうして今ここにサイノメさんが居るのかという事です」

カトリはサイノメに疑問を呈する、それはもつともな事でありサイノメもその疑問は想定していた。

「そうだね、ゼニスの街とこの場所は日を跨ぐ程離れている。ほんの数時間前の出来事をこうやって直接伝える事は、普通は不可能だね」

「……普通は、といいますと？」

「それは、そうだね……見てもらうのが一番早いかな？」

「どういう——な!？」

今までカトリの視界に居たサイノメが、音も無くその姿を消した。

「こういう事」

カトリの後方から声が聞こえ、振り向くとサイノメが数メートル先で手を振っていた。

「い、今のは……？」

「超スピードだとかそういうチャチなものではないよ。あたしは見ての通りか弱い女の子だから、目にも止まらぬスピードで走り抜けるだとか、そういう人外じみた体力は持っていないからね。これは解りやすい言葉で言えば『空間転移魔法』さ」

「——空間転移魔法!？」

それは離れた距離を一瞬で移動するという魔法、一つの魔法分野を確立するほどにあらゆる機関で研究されている。

しかし現状では無機物を転移させるのが精一杯であり、一人一人を転移させるのも夢のまた夢と考えられている。

もし今、机上の空論ではなく、その魔法式を完全なものとして成功させれば、それだけで『賢者』の称号を授けられることもできるだろう。

「詳しい種明かしは企業秘密だけど、そう認識するのが一番理解しやすいとおもうよ」

「信じられない……いや、信じ難いことですが……うつ」

また視界からサイノメが消え、カトリが振り返ると元の場所に戻っていた。人がいきなり消えるというのは、かなり気味の悪い現象だというのをとりあえず理解した。

「まあ、見たままを信じてもらうしかないね。あたしはこの世界で唯一、空間転移を行える女の子ってわけ。凄いでしょ」

「……それは、凄いですね」

あまりに驚きすぎてカトリの語彙が一時的に不足した事態になっ

た。

「ねえ、カトちゃん」

「カト……それは私の事ですか？」

サイノメがカトリに勝手につけたあだ名で呼び、カトリは困惑して問い返す。

「そう、いいあだ名でしょう？ 私が付けたんだよ」

サイノメに笑顔でそう言われれば、カトリも曖昧な笑みで頷くしかない。

カトリの中でサイノメに対する苦手意識が地味にあった。幼い風貌からは想像できないが、サイノメは成人女性であり、カトリよりも年上に当たる。

しかし初対面の時にてつきり年下だと思って、接し方を間違えたのがカトリの中で尾を引いている事もあり。更にヤーコフからサイノメについて（主に頭が上がらないという事）色々聞き及んでいる事も関係している。

「それでさ、カトちゃんはシャチョーの事。どう思っているのかな？」

サイノメは、面倒臭そうにそっぽを向いているカタナを指して尋ねる。ちなみにサイノメがカタナをシャチョーと呼称する事は、駐屯部隊の隊員ならば誰もが知っている事だ。

「え、どう思っているとは？」

「うーん、つまりシャチョーの力をその目で見て、そうやって剣を向けているけど。その行動は気が動転してて、引っ込みがつかなくなっているからのように私には思えるから、その点確認しておこうと思って」

「う……それは」

図星をさされて口ごもるカトリ、サイノメの指摘は的を射ていた。「まあ、こんな見た目からしてあからさまに怪しい人が、あからさまに怪しい力を使ったら、そりゃ怪しいし、そのまま味方と思うのは危うい事だよね」

「おい、黙って聞いていれば何を好き勝手言っている？」

「いや、シャチョーはそのまま黙っていてよ。これは口下手で誤解されやすいシャチョーの為に私がすべき仕事なんだから」

「……まさか、話す気か？」

「それが必要だとあたしは判断するよ。余計な誤解を招くのは今後の身の振り方にも影響が出てくるし」

サイノメとカタナの視線が交差する。

しばし目を合わせていた両者だが、先に視線を外したのはカタナ。ふう、と嘆息して頭をかく。

「好きにしろ」

そう言い残してカタナはその場を離れた。

慌ててカトリは呼び止める。

「あ、何処に行かれるのですか!？」

「小便だ、ついてくるなよ」

後を追おうとしたカトリは、そのカタナの発言でピタリと足を止め、顔を赤らめた。そういう所は元貴族の品性が残っている。

「大丈夫、シャチョーは逃げたりしないよ。それに、もしシャチョーが逃げる気にいるなら、どっちにしても追いつけないと思うし」
「は、はあ」

カトリとしては何だか腑に落ちない気分だが。出足を挫かれた手前、すぐに追いかけようとはしなかった。

「それじゃ、ここは二人で腹を割って話そうか。ねえ、帝国特務の『名無し』さん」

そしてサイノメの一言で、カトリはその場を動けなくなった。

+++++

「——どうしてそれを？」

誰も知るはずの無い事実を、サイノメに言い当てられたカトリ・デアトリスは。その隠しておくべき事柄を隠すのを忘れ、驚愕と不審を問いとして投げかけた。

「カトちゃんの事を調べた結果の必然かな？ まあ、そこに行き着いたのは、あたしが帝国特務と因縁があつたつてのが大きいかな」
さらりとそんな大事を言つてのけるサイノメに、カトリは目を細めた。

「帝国特務と因縁……サイノメさん、貴方は何者なのですか？」

「うーん、そうだねえ……今ここに居るのは、協会騎士団の秘書官であるサイノメだけど。帝国特務と因縁がある方は、非合法な情報屋としてのサイノメかな」

「なんです？ 非合法な情報屋？」

カトリ・デアトリスは、情報屋としてのサイノメの事は知らないようだ。帝国特務はサイノメを追っているが、末端に至るまではその情報を提示してないらしい。

帝国特務の内情に詳しく、外部に漏れれば色々とまずい事になる秘密も掴んでいるサイノメの事は、追う側にとってデリケートな問題としているようだ。

そこをあえて簡単に明かすのは、享楽主義というべきサイノメの性格か。それとも波が立つても、それをコントロールできるという情報屋としての自信があるからか。

「ちよつとした若気の至りつてやつだから、そこはあまり気にしないでいいよ」

「……若気の至り」

どんな因縁があつたのかカトリには解らないが、それが帝国特務との関わりならばきっと、そんな一言では済まないような事だといふのは解る。

「まあ、それはおいおい話すとしてだ。今ここで帝国特務の話を持ち出したのは、実はあたしとカトちゃんだけじゃなく、シャチヨーにも帝国特務との関わりがあるからなんだよ」

「隊長も、帝国特務と関係している？　どういうことですか？」

（……やはり、知らなかったか。じゃあ、カトちゃんも帝国特務の意思とは全く関係の無く、シャチョーと関わりを持ったのかな？　いや、そういう風に仕組まれた可能性の方が高いか、『魔術剣』の事もあるし）

カトリの反応を見ながらサイノメは逐一推測を立てていく。カトリの挙動が演技であるという可能性最初から捨てている。

もし仮にカトリがサイノメを騙せるほどの役者だというのなら、それを見破るすべは無いし、その方が面白いとサイノメは考えているからだった。

そしてここからサイノメは、カタナについての全てをカトリ・デアトリスに語る事にする。契約主から「好きにしろ」という許しが出た、今のサイノメの口は軽い。

「実はシャチョーは二年前まで帝国特務に所属していたんだよ。しかも固有の記号である『魔剣』としてね」

「……ありません」

カトリは即座に否定する、その言い分もサイノメには解るものだった。

「二年前まで帝国特務に所属していた者が、協会騎士団の聖騎士になるなど許されない筈です」

カトリがそう語る背景は、まず今の帝国と共和国の仲が微妙という点である。

共和国の国土の大半はかつて帝国の領地であった。共和国の建国は時の皇帝が認めるところではあったが、それは大戦によって帝国の国力が著しく低下した事によるものと、勇者ミルドレットの偉業を認めたからだ。

だが皇帝の代も変わり、帝国の国力もかつての栄華を取り戻している現在。帝国は一部の国土の返還を共和国に求めてきていた。

当然ながら共和国の議会はこれを受け入れず、何度も会談の場は設けられたが、未だ折り合いはつけられずにいる。

現皇帝が強権主義的な思想を持ち合わせている事もあり、両国の間には数年の間きな臭い空気が流れているのも事実である。

そんな中、共和国の象徴とも呼ばれる協会騎士団に、帝国の闇と呼ばれる帝国特務の人間が入り込むなど、みすみす間諜を許してしまふ失態だろう。

「許されない筈……ね。じゃあカトちゃんはさ、どうなんだい？」

「……どう、といいますと？」

「カトちゃんだって、帝国特務だったわけなのに、今は協会騎士団の従騎士じゃないか？」

あるいはカトリが今も帝国に属している可能性もあったが、サイノメはそれをあえて指摘はしなかった。

「私の場合は武芸祭という特殊な条件を元にしてますから」

「ほう、でもシャチョーがもつと特殊な条件の元で、協会騎士団の騎士になることを許されたのだとしたら、それを信じるかな？」

勿体付けるサイノメの調子に、カトリは少し呆れながら言葉を待った。

「シャチョーは帝国特務に捨てられたんだよ、誰もが認めたその強さ故に味方からも恐れられてしまったんだ。カトちゃんも見たよね、シャチョーが宿す異形の力は」

魔人を圧倒したカタナの力、カトリがそれを見た時に感じたのも恐怖、あるいは危機といった感情だった。

相手が自分に敵意を持つていないと解つていても、自分とは異なる力は不安を呼び、そして思考さえ狂わせる。

「……隊長は魔力を宿している、それは本人も認めていました。しかし魔人ではないと否定もしていました。あれがどういう事なのか、サイノメさんはご存知ですか？」

カタナが席を外しているからか、カトリは大分落ち着いているようだ。これから話す事はある意味で、カトリに更なる衝撃を与える内容なだけに、サイノメはあえてそれを聞かれるまで話さないでいた。

「シャチョーは魔力を宿しているけど、それは実はシャチョーの力ではなくてね……シャチョーの体内にある『魔元心臓』^{ダイクマター}の力なんだよ」

「魔元心臓？」^{ダイクマター}

それはカトリが初めて聞く単語だった。

「簡単に言うと魔元心臓は魔力を生み出す装置のようなものかな。

魔術に対抗するには同じく魔術でと考えて、それを扱う為の魔力を、人に宿らせるという目的の元作られた——狂った偉業だよ」

「……そんな、馬鹿な話」

「確かに馬鹿な話だね。でもこの世界にはそんな馬鹿な話がごろごろ転がっているんだよ。五十年前の大戦でこの世界は狂わされたんだ……魔人、魔術、魔獣、魔界、研究者達はその未知に取りつかれて道を踏み外し、そして時にとんでも無いものを生み出していくつてね。そして驚くなかれ、魔元心臓を作りあげたのは帝国特務に連なる研究機関だった」

それはあるいは必然か、帝国の闇を担う帝国特務との繋がりは。

「私は聞いたことがありますよ、そのような研究も、研究機関がある事も」

カトリはかつてデアトリス家の書庫にあった、魔人や魔術に関する書物を読み漁った事があった。それは知的好奇心では無く、復讐を果たすための事前準備であったが、その中にサイノメが語ったような研究も、研究成果も記されたものは無かった。

「そりやそうさ、その研究は帝国特務の闇の中の更に深い闇。多くの犠牲を費やして行われた、狂った研究なんだから」

「多くの犠牲とはどういう意味ですか？」

「人の身体では、魔元心臓のもたらす膨大な力の負荷に耐えられない、あるいは霊力と拒絶反応を起こしてしまう。そうやって実験のなかで失われた命は後を絶たなかったって事さ」

研究者達は没頭するあまり、人としての倫理すら失っていた。

「だけどそれでその研究は止まらなかった。『人が魔元心臓に適合

できないのなら、魔元心臓に適合できる人を作りあげればいい』、
とそう言った研究者がいた。そして作りあげたのさ、『魔元生命体』
をね」

「魔元生命体？ …… また私の知識にはない言葉ですね」

「魔元生命体は、いわば人工的に作られた命。自然の摂理を捻じ曲
げて、無から作り出された人の事さ……」

それは生命への冒涇とされる禁忌。人が人を生むのではなく、作
る。自分の都合の為だけに、その生命を扱う。

鬼畜魔道に堕ちた研究者達の最も狂った偉業。

「魔元生命体は人と同じ形をしながらも、魔元心臓に適応させる為
に、生命体としての強度は人を超え、魔人の域すら超えていた」

「ちょ、ちょっと待って下さい！？ それってもしかして……」

いや、もしかしたりする必要も無く、サイノメが語っているのは
始めから一人の事。

「そう、シャチャョーは魔人では無い、そして残念ながら人でもない。
狂った研究者達に作り上げられた『魔元生命体』であり、そして『
魔元心臓』に適応できた唯一の存在なんだよ」

それがカタナという人物の生い立ち。

彼は父も母も無くこの世に生を受け、運命の介入の余地も無く生き
る道が決められていた。

「……………」

その話を聞いたカトリは衝撃を受けた様子で、しばし言葉を無く
していた。

サイノメが語った事は真実であり、そしてカトリがそれを信じる
条件はいくつも揃っている。逆に疑うための条件は少なく、それは
カトリの知識では説明できない事が多すぎるからだ。

あるいはカトリから見える僅かな葛藤は、その無知ゆえの事なの
か。

「その研究は今も、続いているのですか？」

「いや、五年程前に凍結されているね、理由は解らないけどさ」

それによってカタナがこの世で唯一の存在になってしまったのは、本当に皮肉な話だった。

「ちなみにシャチョーが作られたのは十年前だよ」

「じゅ……え！？　といいますと、隊長の年齢は十歳という事になりますか！？」

単純な驚きという意味では、それまでの専門的な話よりも理解しやすい分、カトリは感情を露わにする。

「うん、でも人のピークの年齢と肉体を基準に、最初から大人の姿で作られたみたいだね、十年前からずっと、今と同じ見た目らしいよ」

それはそれで驚く所だが、単純に成長すぎた十歳と考えるよりも、カトリには納得いく話だった。

「それで話を戻すけど、シャチョーはそれから帝国特務を経て、共和国の騎士になるわけだけど、その話も聞く？」

「……聞かせて下さい」

どこまで信じられるのかカトリには測り兼ねている部分もあるだろうが、もうありえないなどとは言わなかった。

サイノメとしては話を聞かせるだけで充分だ。いや、今はカトリにしっかりと話を聞いてもらう事が何より重要なのだ。

誤解や懸念は放っておくと膨らみ、予想外の事態を引き起こしかねない。サイノメがそれを拭っておけば、最低でも時間稼ぎくらいにはなる。

（……まあ、アレが来るまで、もう少し時間がかかるだろうし。時間繋ぎにしては有効活用かな）

そしてサイノメは自分の知る限りのカタナの半生を、カトリに聞かせた。

第二十話 サイノメとカトリ・デアトリス（後書き）

説明ってちゃんと伝わっているのか考え出すと不安でたまらないです
ね。

文章力が足りない分は勇気で補っています。

第二十一話 過去と現在

「まずシャチョーが帝国特務に入っただのは、シャチョーを作り出した研究者達がシャチョーを失敗作だと断じたからなんだよ」

「失敗作？」

「そう、シャチョーには一つ欠陥があつてね。そのせいでシャチョーは作られてから五年もの間、研究者達から拷問のような実験を受けていたみたい。それでも結局は無駄だったみたいでね、最終的にシャチョーは処分されることになったんだ」

あつさりと言い放つサイノメだが、カトリにはその『処分』という言葉が許せなかった。

「……その研究者達の望むものにならなかったから、殺されると？ 身勝手すぎます」

命をなんだと思っているのか、とカトリは怒りを露わにする。

「あたしに言われても困るけどもね。カトちゃんの見解には同意するけど、人間って理解の対象外には何処までも、残酷に無関心になれるものだからね……」

研究者達からすればカタナは研究資材の一つくらいにしか思われておらず、きつと一個の命とすら考えられていなかっただろう。

「ちなみにシャチョーの欠陥ってのは、魔術を使えない事なんだ」

「魔術を……使えない？」

「うん、シャチョーは確かに魔元心臓ダークマターに適合していて、それが生み出す膨大な量の魔力を扱う事が出来る。けど、あまりに魔力の量が膨大過ぎてシャチョーには複雑な制御ができないんだよ」

膨大な魔力もそれを使う手段がなければ宝の持ち腐れ、研究者達がカタナを失敗作と称したのも道理だ。

「しかし魔人との戦いで、隊長は魔術に対抗していましたか？」

「あれは膨大な魔力による干渉力がなせる業だね。複雑な制御が出来なくても、意志を持って数倍の魔力で術式に干渉すれば無効化する

るだけなら可能らしいよ」

簡単にサイノメは言っているが、それによってどれだけの負荷をカタナの身体が負っているのかは計り知れないところだ。

さつきも小便などと言って離れて行ったが、本当のところは一刻も早く身体を休めたかったのだらうと、サイノメの目にはそう映っていた。

「それだけの事が出来るなら、充分すぎる力だと思いますが……」
魔術を無効化出来るというのは、半ば以上魔人の力を封じるに等しい事。

「そうだね。でも他が完璧なスペックだった分、研究者達の目にはその欠陥が目立って見えたんだと思うよ」

いささか完璧主義すぎるとは思うが、研究者というものは何処もそういうものだろう。

「それに結局シャチョーは、帝国特務に引き取られる形で処分を免れたんだ。過程はどうあれ結果的にはそれで良かったと思うよ」

カタナを処分しようとしたのは研究者達の一存であり、最終的にはその研究機関に出資している帝国特務が、その判断に待ったをかけた。

「帝国特務としては、シャチョーの現状の力だけで十分な戦力になると判断したんだらうね」

その判断も研究者達と同じように、命を物としか考えていないやり方ではある。

「ところで、帝国特務についてカトちゃんはどうだけの事を知っているのかな？」

サイノメが尋ねると、カトリは難しい顔で答えた。

「私がそれについて話せる事があると思いますか？」

「だらうね……」

帝国特務においてのカトリ・デアトリスの立場は、まだサイノメの推測の域を出ていない。カトリにとってこの場では迂闊な事は言えないという事だろう。

（知っていて言えないという事は、まだ今も繋がりを持っていると
いう事に同義なんだけどね）

きつとカトリ・デアトリスという少女は、元来嘘が下手なのだろう。実直そうなイメージと同様に、腹芸に関しては向いていないのだとサイノメは判断する。

「じゃあ私が知っている帝国特務について適当に話すから、知っている事があっても適当に聞き流してよ」

帝国特務——そこは帝国軍に属してはいるが、表向きは非公認になっている公的な組織である。

設立したのは『帝国栄華五家』の内の一家であるゼルグルス家。その目的は魔人に対抗する力を保有する為に、優秀な人材を集めるというものだった。

魔人という種がいまだにこの世界に存在しているという事は、一般には知られていなくとも、国を預かる者たちの耳にはどうあつても入ってくる。

魔人については海を越えて大陸の外に逃れた者、大陸の各地に潜伏している者など様々だが。その中でかつて帝国と長らく敵対関係にあった、現在も大陸の北半分を領地に行っているバティスト王国で怪しい動きがみられていた。

それは、王国では魔人を受け入れて自国の戦力にしようとする動き。

魔人についてはかつての大戦で敗戦に次ぐ敗戦を味わった為、帝国と王国と共和国の三国において排除する為の条約が結ばれている。大陸では魔人の危険性を疑う者はいない筈だった。

「でも実際に、王国では条約を無視して魔人を受け入れていた。『オルトロス部隊』って聞いたことがあるかな？　かつて王国が飼っていた、魔人だけで構成された部隊の名前さ」

構成員は十数名であったが、帝国では何よりもそれを脅威と取っていた。そして帝国特務の設立はそれに対抗する為の事だった。

かつての大戦では、数で圧倒的に勝っていた大陸側が魔人に煮え

湯を飲まされ続けた理由として、魔人側の少数の遊撃部隊に対応できずに戦線が瓦解したという事が多かった。

それだけ魔人と人では、個人の戦力に差があるという事が実証されていたのだ。

「現在の王国を統治する王がどういつつもりでいたのかは知らないけど、そういうものが存在するというだけで立派な条約違反だ。そこで帝国と、そして共和国が行動に出た」

それは両国が王国のオルトロス部隊に対して一時的に共同戦線を張り、同じく少数精鋭でこれを壊滅させるというものだった。

五十年間続く平和というのはその時の当事者たちにとっては、笑えない冗談にしか思えなかっただろう。

その時の戦いは立派な戦争と呼べるものだったのだから。

「帝国特務と、共和国からは協会騎士団の聖騎士まで出張った戦い。ある意味で現在の大陸の雌雄を決する戦いだったのかもね」

決して表には出ない、裏側で繰り広げられた戦争。三年前に起こったその戦いは、発端となったオルトロス部隊の壊滅を持って幕を閉じた。そして王国側は白々しくも魔人との関わりを否定し続けている。

「その頃からシャチョーは帝国特務内で『魔剣』と呼ばれるようになった。オルトロス部隊との戦いで多大な戦果を上げたから、魔人を狩る剣という意味でね」

「魔剣……それが隊長のかつての名」

それまでじつと話を聞いていたカトリは、僅かに反応して見せた。おそらくはここまでの話は全て知っていた事で、それが知らなかったという事なのだろう。

（まあ、シャチョーが『ホムンクルス魔元生命体』だという事もカトちゃんには知らなかったんだ。やはりシャチョーが帝国特務に居た頃には面識は無かったんだろうね）

「もつとも、そこまでがシャチョーにとって帝国特務に居た頃の、僅かな輝かしい期間だったのかな」

「どういう事ですか？」

「オルトロス部隊との戦いでシャチョーが上げた戦果は、きっと英雄と称えられてもおかしくない程だったと思うよ。もしシャチョーがただの人間であつたならね……」

道理に見合っていない理屈。もし仮にカタナがただの人間であつたならオルトロス部隊との戦いで戦果を上げる事は敵わなかったのだろうから。

「ホームクルス魔元生命体だったから、人間では無かったから、本来は評価されるべきところを、シャチョーは帝国内部では危険視されてしまった。ジレンマだったろうね、研究者達には失敗作として処分されそうになつて、帝国特務でも役に立たなければ同じ結果になるから必死に頑張つたのに、結局は同じところに行き着いてしまうんだから」

あるいはその時の仕打ちが、カタナを今の様な怠惰な性格に導いてしまつたのかもしれない。

「……ではもしや帝国特務も」

カトリ・デアトリスにとって帝国は祖国であり、表情の陰りから察すると、今でも愛国心は持ち合わせていたのだろう。サイノメから幻滅を覚えるような話を聞かされて複雑な思いのようだった。

「そう、シャチョーは魔人と同じように危険な存在として……いや、魔人以上に危険な存在として処分されることになつた、それが二年前の事かな」

それが帝国においてのカタナの全てである。彼は身勝手な理由で作られ、そしてどうあつても人のエゴによつて捨てられる運命を架せられていた。

「でもさ、そんなシャチョーにも救いはあつたんだよ。オルトロス部隊との戦いで協会騎士団と共同戦線を張つてた事だね」

カタナのその時の活躍は、協会騎士団の騎士団長の目に止まつていた。

その為、サイノメは当時の帝国特務の『魔剣』についての調査の任を架せられていて、その頃からカタナの事は良く知っていた。

そしてカタナが処分されるという事を知った時、協会騎士団は彼を魔元生命体だと知ったうえで、受け入れる事を決意していた。

「共和国にとって、帝国のそのやり方も王国と同じように許容できるものでは無かった。命を道具のように扱う事、それはミルド協会の理念に反する事だからね」

それはすなわち共和国と協会騎士団の理念に反するという事、それを許しては存在する意味すらない事になる。

「そういうわけで、処分を待つ身だったシャチョーは救い出され、協会騎士団の騎士団長の後見の元に立派な協会騎士になりましたとさ、めでたしめでたし」

「……最後は随分と省略しましたね」

帝国特務から救い出されたというのは、きっと正規の方法で引き渡されたのではない事を重々理解しているカトリは指摘した。

「その辺は言わなくても察してくれると嬉しいな」

当然の事ながらカタナを救い出したのもサイノメであつた。その頃からカタナと帝国特務とは腐れ縁が続く結果となる。

何も言わずに笑顔を向けるサイノメに負けたのか、カトリは嘆息してそれ以上の追及をしようとはしなかった。

「解りました。概要は聞けましたし、むしろ充分すぎる程の事を聞けたように思います。ただ一つ気になった事があります」

「何かな？」

カトリの疑問は至極単純であつた。

「どうして私にそこまで詳しく隊長の事を聞かせたのですか？ 尋ねておいておかしいもの言いかもしれませんが、隠しておくべき事のように思いましたが」

普通はそれだけの情報を提示するのは、それに見合つた情報を聞き出せるという心算がある場合だろう。

しかしカトリは自分の事は、特に帝国特務に関しては何一つ話す気はない。それではサイノメやカタナにとってはデメリットしか生まないのではないのかと、カトリは思ったのだ。

「なあに、簡単な事さ。あたしはカトちゃんにシャチョーの味方になって欲しいと思ったから話したただだよ」

「味方……？」

その理由は想定外だったようで、カトリは呆氣にとられてしまった。

「シャチョーはさ、これまで大変な目にあってきた、そしてこれからも意志とは無関係にそうなると思うんだ。そうなった時にシャチョーを理解している人がいないのはシャチョーにとってきつと辛い事だと思うから……」

サイノメから見て、カタナはとても強く見える。しかし完璧とは程遠い……どう見てもただの一人の人なのだ。

「だからカトちゃんにはシャチョーの味方になって欲しいんだ。ずっとじゃなくていい、今この時だけでもいい、支えてあげて欲しいんだよ」

かつてカタナから唯一無二の味方を奪った事に対する自責の念からか、サイノメは筋違いだと思っただけでも、それをカトリに求めてしまった。

「どうして、私のですか？」

「……なんとなくシャチョーとカトちゃんは似ている、そう思うんだ。それにあたしには残念ながら無理な事だから」

「……」

カトリは返答をしかねている。当然だ、いきなりこんな事を言われても困るだろう。それはサイノメも重々承知している。

「ごめん、いきなりこんな事言われて困っちゃうよね。でもこれがあたしの気持ちなんだ、さっきの伝えたシャチョーの情報はどう扱っても、どうとって欲しくても構わない。けど一つだけお願いしたいのはさ、シャチョーを敵だと思わないでほしい。それがきつとシャチョーを一番傷つけることだから」

裏切られ続けてきたカタナには、諦めがつくことかもしれない。それでもきつと、何も感じないという事は無いはずなのだ。

「それは……いえ、解りました。味方になるという事はまだ約束で
きませんが、私から一方的に敵視するという事は金輪際いたしませ
ん」

「うん、ありがとう」

カトリが結んだ約束を、サイノメは満面の笑みで受け取った。今
はその約束を取り付けられただけで十分な結果だった。

「ところでもう一つ疑問を思い出したのですが、先程のお話の中に
隊長が聖騎士になった事について触れられませんでした、どうし
てですか？」

「ああ、それについてはまた別の話でね……っと、おしゃべりはこ
こまでみたいだ」

サイノメは途中まで話しかけた言葉を切って上を見上げた。カト
リもつられてサイノメと同じ方向に顔を向ける。

「な！？ あれは！？」

驚愕するカトリの視線の先には、翼を広げた鳥よりも大きい何か
がこちらに向かってくるのが見えた。

「まさか、あれが魔竜ですか！？」

サイノメから聞いたゼニスの街に現れた異界の獣、それが現れた
のかと思いカトリは臨戦態勢に入った。

「いや、あれは『飛竜』^{フイバーン}だよ。あたしが呼んでおいたお迎えさ」

言いながらサイノメは飛竜に向かって手を振った。

四枚の翼を羽ばたかせている飛竜は高い声で鳴くと、サイノメの
遙か頭上からゆっくりと降り立ってきた。

^{エーデルワイズ}

カトリは抜いた魔法剣の仕舞い所が解らぬまま、その飛竜の様子
を呆然と眺めていた。

第二十二話 夢と現（うつつ）

カタナが目を開くと鉄格子を挟んだ向こう側に。見知った女が座っていた。

銀系の様な長い髪に、黒い右目と青い左目の神秘的なオッドアイ、輪郭に幼さは残っているが充分に美女と言っている。

だが表情に滲む不機嫌さが、その美貌に傷を作っていた。

「……どうした風神。また眉間にシワがよっているぞ」

カタナは茶化すように指摘する。それが更なる怒りをかうと解っているにもかかわらずにはいられない性質だった。

「どうしたもこうしたもない！！ なぜ貴方がこんな場所に囚われなければならぬのか！！」

案の定怒りを露わにする風神だったが、カタナの軽口は流されてしまっていた。

「気にするな、俺はこういふところに閉じ込められるのは慣れている。それにずっと寝てても誰も怒られないから案外快適だぞ」

「ふざけないでください！！」

今日の風神にはそんな冗談も通用しないらしい。心に余裕がないみたいだ。

「……少し落ち着け、俺は見ての通りピンピンしているし、別段変わった事も起きていない。お前が怒るような事は何もないだろう？」

少し真面目に言い聞かせるようにカタナが言っていると、風神は唸って額に手を当てていた。

「貴方がこうして牢に囚われているのが問題なのでしょう。一級の捕縛魔法が重ねられている上に……何です？ その象でも縛るような鎖は、功績を上げた英雄に返す仕打ちではないでしょう」

確かに牢に囚われたカタナには、まったく身動きが取れないくらの限界に近い捕縛術が施されている。どんな凶悪な犯罪者とて、ここまでの扱いは受けないだろう（むしろ一級の捕縛魔法が重ねら

れた時点で圧死する）。

「英雄ね……俺はただ他人より多く魔人を殺したただけだ。そんなことで英雄なんて呼ばれるわけがないだろ」

「馬鹿な、それによってどれだけの平穏が守られたのか、この誰もが知っている。こんな事は絶対におかしい、許せることじゃない！」

「……他でもない俺が許しているんだ、お前が騒ぐことじゃないだろ」

「——くっ、貴方はいつもそうだ」

風神は悔しげに呟いた。それもそうだ、どんなに心配してもカタナはまるでそれが迷惑であるかのように振る舞うのだから。

そしてそれはカタナにとって本当の意味で迷惑だった。

カタナが処分される事はもう決定している。風神は聞かされてない筈だが、この時点で騒ぎ立てる事で、良からぬことが風神にも飛び火する可能性は十分にある。

（俺はもう自分の運命に諦めがついているからいい、だが俺のせいで腐った運命に風神を巻き込むのは許せない）

帝国特務にきて得た唯一と言っていい程の、大切なもの、大切な想い。

もし自分がどんな目にあつたとしても譲らないと、カタナは決めている。

「……解りました。貴方があくまでそういう態度ならば、私にも考えがある」

しかしカタナは理解していなかった。

自分が大切に想っている以上に、風神がカタナの事を想っている事を。

「何をする気だ？」

風神の瞳は、ある決意を力強く帯びていた。

「私から直接上に直訴します。最悪は家の力に頼ってでも……」

「……家って。お前、勘当されてるだろ」

「確かに私は既にゼルグルス家から除名されているが、私の力を認めている叔父ならば話を聞いてくれるはず」

風神は貴族の子として生まれながら、右目が黒いという理由だけで疎まれ。姓を名乗れず、名前すら付けられずに育てられた。

黒は凶兆として扱われる大陸では、捨てられなかっただけマシである。風神は以前に語っていたが、本当はそれで随分と心に傷を作っている事を、カタナは理解していた。

「余計な事はしなくていい。放っておいてもその内出られる」

嘘は吐きなくなかったが、風神を止めるべくカタナは自分を曲げてそう言った。

どうあっても覆らない事で、風神が新たに傷を作る必要は無いのだ。

「……貴方がどう言ったところで、私は意地でもここから貴方を出して見せる。私の力で、どんな手段を使っても」

「やめろ、そんなことされても俺は全然ありがたくない」

「……ならばこれは私の我儘という事になる。貴方が迷惑に思っても、私がそうしたいのだから」

「意味が解らん、どうしてそんな事をする？」

嫌いな筈の家の力を頼ってまで行動を起ここそうとする理由が、カタナには見えない。

そしてそのカタナの問いに、なぜ解らないのかと辟易しながら風神は肩を竦める。

「……前に食事を奢ってもらった約束をした筈だ。その約束がまだ果たされていない」

「あ？……腹、減ってるのか？」

今度は絶望したように風神は天を仰いで、あからさまに深いため息を零した。

「……本当に鈍い」

風神が溜息と共に零した一言はカタナの耳に届いていたが、その意味もカタナには理解不能だった。

そして踵を返して立ち去ろうとする。

「おい、待て」

「待たない……失礼する」

カタナの制止の声は牢の中に響くだけで、風神が足を止める事は無かった。

（あの馬鹿、まさか本気で行動を起こす気じゃないだろうな……）

上に逆らっても立場が悪くなるだけだ。帝国特務に影響力のあるゼルグルス家を頼ったとしても、元々のカタナの処分もゼルグルス家が決めたものかもしれないのだ。

そうするとそれに風神が異を唱えてしまえば、危険因子として処分されてしまう可能性もある。

「……クソッ」

こうなると身動きの取れない今の自分がもどかしい。

黙って死ぬつもりだったが、最後に大暴れしたくなってしまう。

（鎖はともかく、あいつのかけた捕縛魔法が厄介だ）

大陸一の魔法師を自称する、帝国特務の通称『室長』。奴が発現する魔法の法式強度は相当なもので、たとえ魔元心臓ダイクマターを使っても干渉力が及ばない程の強固さだ。

おそらくは陣によって発現しているのだろうが、身動きが取れない状態では崩しようがない。

「……結局、無力なのか。どう足掻いても」

行き着くところは同じ、大切なものは何一つ守れず、中途半端に巻き込んで終わる。

元々存在からして中途半端な自分の器は、そんなものと自虐する。

「そんな事は無いよ」

しかしカタナの暗く沈んだ気分と、牢屋の薄暗さとは正反対の、明るい声が否定する。

「……お前は誰だ？」

いきなり目の前に現れたように見える幼い少女に、カタナは鋭い

視線を向けて問う。

少女は笑って答えた。まるで何も考えていないような満面の笑みだった。

「あたしは死神だよ。死が間近に迫ったあなたを迎えに来たのさ」

「なんだ死神か。ちょうど良い所に来たな、さつさと連れて行け」

すぐに死にたい気分だったカタナは、少女の事をあつさりと受け入れてしまった。

「うえ！？ ちょっと、今はあたしのブラックジョークをつっこむところでしょ！ こんな可愛らしい死神が居る訳ないじゃん！」

冗談が滑ったからか、少女はあせった様子で恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「……じゃあなんだよ、面倒だな」

「め、面倒って、初対面の人にそんな事を言われたのは初めてだよ……コホン、では発表します。私は実は共和国の協会騎士団から派遣された密偵なのです！」

「嘘を吐くな」

今度は少女の言葉をカタナは断固として否定した。

「ええー、なんでそんな力いっぱい否定するの？ 今度は本当なのに」

「お前のみたいな騒がしい密偵が居るか」

「ぐ、おっしゃる通りです。い、いやほら、密偵は兼業であたしの本業は別にあるし、だから、あのギリギリセーフ？ だと思っただよ」

「意味が解らん」

「あーもう、とにかくこれを見て」

自己の証明は諦めたのか、少女は書状の様なものをカタナに向けて雑に広げた。

そこには共和国、並びに協会騎士団はカタナを受け入れるという旨が書かれており、何かは解らないが隅には紋章のようなものが描かれていた。

「……これはどういう事だ？」

「書いてあるままの意味だよ。あなたが望むなら、ここを出て共和国の騎士として新たな人生を歩むことができるのさ。もちろん嫌なら無理にとは言わないけどね」

簡単に言ってくれるが、それはまさにとんでもない事だろう。

「帝国はそれを認めてるのか？」

「まさか、そうだとしたらこんなところに直接忍び込んだりしないよ」

そうだろうとも、それを許すはずがない。

「ならばそんな書面は無意味だろうが、処分されるのを待つ身で俺はここを出る事が出来ない。共和国に迎えるなんて言われても、それが出来なければ選択する意味は無いだろ」

「ほう、じゃあつまるどころ、ここを出る事が出来るならあなたはこちらの申し出を受ける心算もあると？」

「……それは」

少女の返答にカタナは言葉を詰まらせた。不用意な言葉は許されない、不思議と少女の言葉にはそういう重みがあった。

（……共和国か、どういふつもりか知らないが、俺に何を求めている？ いや、そんな事は考えるまでもなく解りきっているか……）

カタナが人に求められるとすれば、それはただ一つ、『魔剣』としての戦力だけだろう。カタナ自身が自分にそれ以外の価値を見出していないだけに、そうとしか考えられなかった。

（誰かの都合で、これ以上好き勝手に扱われるのはうんざりではあるが……しかし）

自分の事はかなりどうでもいいが、このまま処分を受け入れるだけでは馬鹿な気を起こしそうなのが若干一名いそうなのだ。

それを止める為には、あるいはこの胡散臭い少女の提案も受け入れるべきなのかもしれない。

「……まず一つ、そんな提案をするという事は、俺をここから出す事はできるんだな？」

「うん」

あつさりと頷く少女、かなり困難な事である筈なのだが、それを言えばここまで少女が忍び込む事が出来たのも、充分にあり得ない。「……俺がその書面に書かれている事を受け入れれば、ここから出してくれるんだな？」

「うん、絶対の保証付きでね」

その返答を聞いて、カタナは深く息を吐き出し、そして決めた。

「いいだろう、全て受け入れてやる」

これまでの事を思えば、どこへ行っても結果は同じ……裏切られて捨てられる。

そうだとすると、今カタナの取るべき道は、それすらも受け入れて生き延びるしか無いように思えたのだ。

「おっけー、交渉成立だね。あたしはサイノメ、今この時をもって共和国まであなたのエスコートをさせて頂きます」

そう言ってサイノメと名乗った少女は恭しく一礼する。

そして顔を上げたサイノメは、何かを求めるようにカタナの方をじつと見つめる。

「何だ？」

「いや、せつかく古今東西の常識よろしくこちらから名乗り上げたのに、あなたの名前は教えてくれないのになって」

確かに人の礼儀としてはそうだ。

「……知ってるだろ？ 魔剣だ」

「そういうのじゃなくて、本名が知りたいんだけど」

そこでカタナは言葉を詰まらせる。

自分が持っている名前は研究所で呼ばれていた『501』という数字と、そして帝国特務で付いた『魔剣』という記号しかなかったからだ。

そこで疑問に思う。カタナという名を持つ自分の存在に、そしてすぐに理解した。

（ああ、これは夢か……）

かつて体験した転機とも言える瞬間。

風神と別れ、サイノメと出会い、共和国でカタナという名を得て現在に至るまでの、決定的な分岐点。

（二年前の俺だな……そして二年前のサイノメ、気持ち悪いくらい変わってねえ）

記憶の中のサイノメの風貌は今とまったく変わらない幼い少女のまま、最近になって再会した風神は随分大人びていたのに。

そうやって夢だと自覚して眺めていると、だんだんと景色がぼやけていった。おそらく現実のカタナが目を覚まそうとしているのだろう。

カタナを縛っていた魔法も鎖も無くなっていたが、なぜかサイノメだけは消えずにカタナの返答を待っているようだった。

「……ここを出られたら教えてやる」

二年前と同じ言葉をサイノメに返すと、カタナは無意識の海から抜け出した。

+++++

背中に感じる固い樹の幹の感触とともに、カタナは目を覚ました。魔元心臓を起動した事による身体への負担と、考えてみれば丸二日ほど睡眠をとっていたかった事からか。ベッドにするには好ましい場所では無い所で、眠りに落ちてしまっていたようだ。

それだけでも結構寝起きの気分としてはよろしくない状態であったのに、目を開けてみればむさ苦しい顔が正面にあり、更に気分が悪くなった。

「よう、お目覚めかい？」

カタナを覗き込むように眺めていたのは、今カタナが居る山の麓まで、馬車の御者役を務めてくれた自警団のニールだった。

「ニールか。とりあえずお前のむさい顔は、寝起きには目の毒だからさっさと離れろ」

「おっと失礼。いきなりぶっ倒れるように眠り出したから心配になってな、脈とか測っちまったぜ」

笑いながら、ニールはカタナから離れて近くにあった樹に寄りかかるように腰を下ろす。

「……やはり付いて来ていたのはお前だったか」

「ああ、やっぱり気づいてたのか。気配を消しての尾行は得意だと思つてたのに、自身無くなつたなあ」

ニールには麓の村で待機してもらうように言つてあつたが、山賊のアジトまでの道中に後ろを付いてくる気配を感じていた。

魔人の事が第一だったので捨て置いていたが、その時も今もニールから敵意は感じられない為、そのカタナの判断は間違つてはいなかつたようだ。

「何故そんな事をした？」

しかし今はニールの行動の意図を知つておかねばならない。

ニールにはこれから頼みたいことがあり、カタナにとって協力体制にあるのかを定めなければならないからだ。

「仇の最期をこの目で見たかつたのが理由だな。それにあわよくば、お前らを囿にして俺がこの手で仇を取つてやるって打算もあつた」

カタナの言う事を守らなかつた行動の理由を、ニールはそう答えた。

（仇か、ニールにとってあの魔人は恩人を殺した仇だったな……）

昨日の晩の夕食時にニールが語っていたのをカタナは憶えている。

あの時は自分には無理だからカタナに頼むと言つていたが、ニールとしてはやはり誰かに任せられる事では無かつたのだろう。

「……けどやっぱり無理だったわ。アジトが黒い炎に包まれた時、俺は恐怖ですくんで身を隠す事しかできなかった。本当に情けねえよな」

「かもな」

「うおい！ ちょっとはなぐさめ…… ってそんな筋合いはねえか。
何にせよ、ありがとうな」

ニールが漏らした感謝の言葉を、カタナは疑問の表情で返す。
「仇を取ってくれたことに対する礼だ。筋合いはねえかもしれない
けどよ、まあ俺が言っておきたかっただけだから気にすんな」

「そうか」

ニールは少しだけ悔しそうだったが、それでも感謝は本心からの
ようだ。

「代わりと言っちゃなんだけどよ、お前さんの事は誰にも言わない
でおくさ。まあ言ったところで誰も信じないだろうけどよ」

ニールが言うカタナの事とは、魔人との戦いで見せた魔元心臓ダークマター
の力の事だろう。

しかしそれを簡単に許容する事を、カタナは不自然だと感じてし
まった。

先程カトリ・デアトリスに剣を向けられたばかりだという事もあ
るが、しかし何も聞かないでおくというのはおかしい事だ。

魔人を倒す事に使ったとはいえ、カタナの力は魔人と同じ魔力だ。
こうして普通に接しているが、ニールだってそれは理解している筈

「……俺を放っておく事を危険だとは思わないのか？」

「これでも人を見る目はあるつもりだ。言っただろ？ お前は間違い
なくお人好しの部類の人間だってな」

何故かそれを自信満々に言っただけのニール。

「偽っているとは思わないのか？ お前は人を見る目があるのを自
負してるが、俺が人じゃなければ発揮されるかどうか解らないだろ
？」

そのカタナの問いに、ニールは噴出して笑い始めた。

「……何が可笑しい？」

「ぶくく……いや、悪い、カタナも色々大変そうだと思ってな……
そうだな、俺の答えとしちゃ、見たまま感じたままでカタナをお人
好しの良い奴だって判断してる。それで充分だし、それが全てなん

だ」

「――？」

「つまりな、カタナが何者だとしても、良い奴なら放っておいて問題なし。悪い奴なら俺は抵抗するすべなく殺されてる。まあこの辺は昔の傭兵稼業で培った割り切りの良さってやつかな。自分の身の丈以上の事には首を突っ込まない日和見とも言えるか」

「……なるほどな」

その理屈はカタナにとって理解できるものだった。そしてなんとなくニールという人間の性格も伝わってくる。

「カタナが魔人を倒した時は驚いたけど、その後にそこでぶっ倒れたのを見てさ、なんとなくコイツは大丈夫だって思った。ただの勘だが、俺がそう思ったんだから誰にも文句は言わせねえよ」

あまり深く考えずに単純に物事を割り切る。ニールはそういう直感で行動するタイプのようだ。

変に揉め事になるよりは、カタナにとって面倒が少なくていい。

「それよりもだ……」

ニールは言葉を切って、改めてカタナを見据える。

「あの嬢ちゃんが言っていた事は本当なのか？ その……市長が実は魔人だったとか、魔竜が現れたとかって話」

サイノメが伝えた内容はニールも聞いていてくれたようだ。離れた場所で身を潜めていたニールにも聞こえているか心配ではあった。これで改めて説明するのは手間は省けた。

「本当だろう。ここに俺を送り出したのは市長の計略だったらしい。魔人がこんな辺鄙な所で山賊をやるなんてのはおかしいと思っていたが」

まんまとはめられたと言うしかない。

「こればかりは、にわかには信じられないけどよ……確かに俺の勘もゼニスには近付くなって言ってる気がする」

「その事でだが……ニールに頼みたいことがある」

カタナがそう切り出すと、ニールは露骨に嫌そうな顔をした。

「さつきも言っただが、俺は身の丈以上の事には首を突っ込まねえぞ」
そう釘をさしてくるが、おそらくこれからカタナが頼むのはニールの身の丈に合ったものだろう。

「これからニールには近隣の村や町に行つて、その住人にゼニスには近づかないように伝えてくれ。魔人や魔竜という言葉は使わずに適当な理由をでっち上げてな」

「ん？ 頼みごとってそんな事か？」

「もう一つ、山賊を数名捕まえてあるからそいつらの連行も頼む」
捕まえた山賊というのは、アジトが魔術陣によつて黒い炎に包まれた時にカトリが守った奴らの事だ。

放つておいても良かったが、ついでなのでニールに押し付ける事にした。

頼みごとはそれだけだったが、ニールは何か腑に落ちない様子だった。

「異論はないが、カタナはどうするんだ？」

「俺は……これからゼニスに向かう」

ニールの言葉ではないが、身の丈に合った行動を取るのならそう言う事になる。

おそらく魔竜の対策については、サイノメが既に協会騎士団の本部に伝えている筈だ。サイノメに聞いた限りでは魔竜がゼニスに現れてから三時間は経過している。カタナに対する報告がそれだけ遅れたのは、そういう優先すべき準備に時間を取られたからだろう。

それでもカタナは行かなければならない。

サイノメのように転移魔法だとかいう胡散臭いものを使わなければ、共和国の首都にある協会騎士団の本部とゼニスでは距離が離れすぎている。

サイノメが自身以外を転移できない事を考えると、最速の移動手段でも二日はかかる距離だ。

「馬車はどうする？ 御者の俺が居なくて動かせるのか？」

ニールが危惧していたのはそれだった。ここまでカタナ達が乗っ

てきた馬車はニールが居なければ動かす事が出来ない。

しかしその点は、抜かりはない。

「お、おい、あれって……」

ニールが何かに気付いたように空を見上げた。

「ああ、迎えが来たみたいだ」

四枚の翼を持った飛竜の姿が、サイノメ達がいるところに降り立っていくのを見て、カタナは立ち上がった。

サイノメが用意した大陸では最速の移動手段。調教は難しいが、それを扱えるのは魔獣の宝庫とも言われる共和国ならではの。

「じゃあな。今言った事、頼んだぞ」

言い残して、カタナはニールと別れ。再び戦場に向かう道を選んだ。

第二十三話 カタナとゼニス

「お、シャチョーもご到着だね。クーちゃんの準備はできてるみたいよ」

そう言ってやってきたカタナを笑顔で迎えるサイノメ。その横ではクーガーという名前の飛竜が独特の甲高い声を上げた。

「ピーー」

「久しぶりだなクーガー、少し見ない内にまたでかくなったか？」

体長6メートルを超える、飛竜としてもかなり大型のクーガーは意外なほど人懐っこく。カタナとの再会を喜ぶように、長い首を伸ばして鼻先をこすり付けた。

一応はカタナの所有物という事になっているクーガーだが、普段はゼニス市ではなく、近村の竜舎に預けられている為、顔を合わせるのは一か月前の武芸祭の時に乗って以来の事だった。

「ところで、お前のそれは癖なのか？ だとしたら最悪だな」

カタナとクーガーがスキンシップを取る横で、カトリ・デアトリスは奇怪なものでも見たような顔で剣を構えていた。

「これは……失礼しました」

カタナの非難の言葉に反応して、カトリは慌てて剣をしまう。

「もう、シャチョーはもう少し言い方に気を付けてよ。カトリちゃんは飛竜を直に見たのが初めてだから驚いただけだよ」

帝国に飛竜は生息していない。そして共和国では国外での飛竜の取引を禁止していることから、帝国ではまず見る事がなく、話に聞く程度なのだ。

「俺は初めて見た時でもそんな事は無かったがな」

「シャチョーはいつも自然体過ぎるんだよ。心臓に毛でも生えてんじゃないの？」

サイノメから理不尽な事を言われるカタナだが、心臓には毛どころかもつとやばい物が付いているから反論できない。

「……それよりサイノメ、本部からの通達を報告しろ」

そんな重要な事が後回しになっていたのには理由があり、カタナには聞かなくても解るくらい予想がついていたからだが。

「シャチョーについてはいつも通りだよ、『自由にしろ』だとさ」
まさしくカタナの予想通り、そしてもっとも動きやすい通達だった。

「ちなみに魔竜に対する本部の対処としては、まず快速の竜騎士隊が尖兵、そして魔戦大隊が後詰として戦術魔法によって撃破、っていう流れを採用したみたい」

「……まあ、それがもっとも被害の少ない戦い方だろうな」

もっとも、この場合の被害とは協会騎士団についてしか考えられていないが。

（ゼニスは見捨てられたに等しい……いや、距離的な問題で初めから無理な話ではあるか）

むしろこの段階でそれだけ動きがあるのが僥倖と言える。本来は魔竜が現れた事が伝わるのはもっと後だったはずだし、伝えたのがサイノメだという事も大きい。

情報屋として広い顔を持つサイノメが、方々のツテやコネを利用しなければこれだけにすぐに協会騎士団は動かなかっただろう。

「何だったらシャチョーはこの件に関わらないで、ここで逃げ出しでもいいと思うよ。協会騎士団にはかつて魔竜と戦った経験者も多いし、任せておけば確実だ。むしろシャチョーが下手に動けば邪魔になる可能性もある」

サイノメのその具申に対し、カタナは首を振って応えた。

「それは無理だ……というより嫌だな。今回ばかりは譲れない」

「へえ、シャチョーがそんな積極的なのも珍しいね。どうしてかな？」

「俺はあの街がそれなりに気に入っている。理由としては、それで充分だろ」

カタナにとってゼニスの街は、故郷と呼べる場所であったのかも

しない。

色々な事柄から逃れ続けて、やっと見つけた安息の地。気の利く部下に仕事を任せ、行きつけの喫茶店で昼寝をし、長い夜を女性の愚痴を聞いて過ごす……そんな怠惰でどこか暖かい日々を、カタナは大切に思っている。

だからこそ、今は行かなければならない。

「うん、そうでなくちゃね。それでこそシャチョーだよ」

元々止める気は無かったサイノメは、嬉しそうにカタナの背を押す。
「待って下さい」

クーガーの背に乘ろうとしたカタナを阻むように、カトリ・デアトリスが立ちふさがる。

「……また、お前か。邪魔するな、今は構っている暇が無いんだ」
カタナが鬱陶しげに手を払うと、カトリは腰を折って深く頭を下げた。

「何のつもりだ？」

「先程の謝罪です。サイノメさんから隊長の事情についてはお聞きしました。隊長に剣を向けてしまった事をお許してください」

素直に謝罪するカトリに、対応に困ったカタナはサイノメの方に向く。
目をやる。

サイノメは笑ってしきりに頷いていた。

（……面倒だったからサイノメに任せたが、あいつ何か変な事言っ
たんじゃないだろうな）

カタナが睨んでいるのに気付くと、サイノメは視線をそらしてわざとらしく口笛を吹いた。それで誤魔化しているつもりなのだろう。
カタナは嘆息してカトリに向き直る。

「もういいから頭を上げろ。ちゃんと説明しなかった俺の手落ちでもある」

「許しを頂けるのですか？」

「……そうだな、とりあえず土下座して一発殴らせろ」

「ええ!？」

まるで許す気が無いようなカタナの態度に、カトリは困惑する。
だがカタナは鼻を鳴らして口元を歪ませる。それは笑いを堪える
のが我慢できなくなつて漏れ出したという合図だった。

「冗談だ」

「……真顔で冗談を言うのはやめて下さい」

「お前の無礼は今のでチャラだ、それでいいだろ」

恨めし気なカトリの視線を受け流し、カタナは勝ち誇つたように
言つた。カトリは思いつきり肩を落として頷く。

元来素直でないカタナなりの気の使い方であるのだが、それに気
付いたのは傍で見ていたサイノメだけだった。

「うんうん、仲直りできたみたいであたしも嬉しい限りだよ」

サイノメは満足げに言つてカトリの背を押した。

「え？」

「ほらカトちゃん、このままだと置いて行かれちゃうよ？」

心中を見破つたかのようなサイノメの行動にカトリは驚くが、そ
れをきっかけにして真剣な顔でカトリも行動に出た。

「あの、隊長。お願いがあります……私も、どうか一緒に行かせて
ください！」

「……」

そのカトリの申し出はそこまで意外なものでは無かったが、カタ
ナは逡巡を見せる。

（もう一人くらいならクーガーも楽々乗せれるが……しかし）

カトリを連れて行く事で僅かでも遅れは出てしまうだろう。それ
以上の見返りがあるのなら良いが、その価値をカトリ・デアトリス
という従騎士に、カタナは見出していない。

だが気になったのが、サイノメがそれを後押しするような行動に
出た事だ。

（サイノメは無意味な事は元より、不利益になる事は絶対にしない
筈だ……）

人情という言葉がこの世で最も似合わない女なのだ。逆に金には

絶対の信頼を置く、現実というか現物主義者である。

そんなサイノメの心中に問いかけるように、カタナは視線をサイノメに送る。

サイノメはそれに気付くと、いつも浮かべている笑みを消して、ほんの僅かだけカタナに向かって頷き掛けた。

サイノメがいつも浮かべている笑みは、ポーカーフェイスを形作るものであり、本当の感情を悟らせない為のものだ。

（笑みを消したという事は……それだけ本気ということか）

意図は知らないが、それによってカタナの腹は決まり、カトリに一つ問いかける。

「お前の覚悟を問いたい」

「覚悟？」

「そうだ、お前にとってゼニスはまだ一週間程度の付き合いしかない街のはずだ。あの場所の為に前はどれほどのものを懸けられる？」

その問い如何によつては、サイノメがどう出ようがカトリを置いていくとカタナは決意していた。

カタナのゼニスに対する思いが強い分、生半可な覚悟で付いてこられるのは邪魔でしかない。許すとすれば、何でもいいから自分と同等以上のものをカトリが持っている事。

カタナが覚悟と言ったのは、それをカトリの口から直接聞くためだった。

そしてカタナの問いに、カトリは迷いなく答えた。

「隊長と同じものを懸けます」

模範解答のようなつまらない答えだが、カトリはそれを考えて答えたというよりは反射的に答えを出したようで、それがカタナの興味を引いた。

「……何故だ？」

「以前に私は私自身に誓ったのです、貴方を超えて見せると……」
続いたその答えを聞いて、カタナは愕然とした。

「その為ならどんな事も覚悟して見せます。貴方に近付くというのなら、どんな事もやり遂げて見せます」

そしてカトリの様子から、それを本気で言っているのが解ると、カタナは大声を上げて笑い出した。衝動にすら駆られた程だった。

(……久しぶりに見た。本物の馬鹿を)

ある意味で敬意すら覚える。

カトリの目にはカタナしか映っていない。魔竜もゼニスも関係なく、カタナの事にしか頭がない。

この大事にあっても、自身の定めた一つの事に執着し、そしてそれを偽らない。

何よりも厄介なのが、そのカトリの覚悟の強さがカタナの定めたものを超えている事。

(こんな奴に目を付けられるとは、俺もつくづく運がないな)

カタナの力を目の当たりにして、カタナの事を知って、その上でなお超えると言い張る。

それを面白いと感じたのは、あるいはサイノメあたりに毒されてしまったからか、

「良いだろう、乗れ」

「はい！」

カタナはカトリを認め、連れて行くことを決めていた。

+++++

クーガーの背に跨ったカタナはカトリの手を取り、自分の後ろに座らせる。

サイノメはその光景を満足そうに眺めた後、最後にもう一つカタナに告げる。

「気を付けてね、アレの準備にはもう少し時間がかかるから、それ

までは我慢する事。終わり次第すぐに知らせるからさ」

「ああ、解っている……頼むぞクーガー、ゼニスまでだ」

サイノメとの二人の間でのみ理解できる言葉を交わした後、カタナは自分の跨る飛竜に声をかけた。

「ピーー」

カタナの言葉が解るかのように、クーガーは鳴き声を上げ、四枚の翼を大きく広げ。それがクーガーの巨体を更に倍以上にまで見せつける。

クーガーがその四枚の翼を交互に羽ばたかせると、まるで突風のような風が吹き荒れた。

それが飛竜種の持つ力であり、クーガーのような巨体でも空へ持ち上げる事ができる秘密である。魔獣として備わっていた力が退化したもののだが、それは人が行使するものと同じように魔法と呼ばれている。

「……凄い」

飛竜を直に見るのが初めてだったカトリは、当然ながら乗るのも初めてであり、地面が遠くなっていく様子に感動を覚えているようだ。

「おい、そんなに離れていたら飛んでいる時に落ちるぞ。もう少し寄って俺に掴まっている」

クーガーの背には鞍が無く、乗り慣れていなければ結構危険な事を知っているカタナは忠告する。

「う、しかし……」

それに対してカトリは少しだけ躊躇するような素振りを見せたが、高度がシャレにならないものになると恐怖が勝ったのか、カタナの背にしがみ付く形になった。

そして最悪のタイミングで、カタナは最悪の一言をカトリに告げた。

「言い忘れていたが。俺は飛竜の搭乗許可証を持っていないし、そういう訓練も受けていないから万一の事があっても恨むなよ」

「え？」

現在カトリが感じているように、飛竜に乗る事には相応の危険が生じる。その為に共和国では、訓練を受けたものだけに飛竜の搭乗許可証を発行して、搭乗者並びに同乗者には最低一人認可された者を乗せるという義務がある。

理由は当然、カタナの言うような万一の事が当たり前に起こるからだ。

「ええ！？」

カトリの頭の中が真っ白になっていくのとは裏腹に。

最高度まで達したクーガーは一際大きな風を起こし、巨体を不安定に揺らしながら。ゼニスに向かって全速力で進みだした。

第二十四話 避難と苦難

「そういえば、聞いておくべき事がまだあったな」

カタナは背中にしがみ付くカトリ・デアトリスに向かってそう言った。

「何でしょうか？」

人生初の高空にいる感覚にも少しだけ慣れて来たのか、一応はカトリにも話す余裕が出来ているようだ。

「魔人と、お前の仇に関する事だ。あの魔人はお前の仇とは違っていたのか？」

かつてとある魔人に家族を殺されたと言っていたカトリ、今回の件にはおそらく関わりはなさそうだとも言っていたが、成行き上ここまで確かめる事無く来てしまっていた。

それを今更ながら思い出したカタナは、改めて聞いておくことにしたのだ。

「はい、死体は確認しておきましたが、私の記憶にある魔人とは別人でした」

「そうか……」

聞いておきながら、それに何と答えればいいのか解らなかったカタナは、とりあえず頷いておいた。

「……もしかして、気にして下さったのですか？」

「いや、少なくとも魔人を討った時には全く気に掛けていなかった」
元々カトリには、その事についてカタナは干渉しない旨を伝えてあった。だからこうして話題に出す事も本来は必要ない事ではある。それが今になって気になってしまったのは、きっとニールと話した事が原因だろう。

ニールは恩人の仇をカタナが討った事に、感謝を示していた。しかし本意では自分の手で打ちたいと願っていたようでもあった。
「気になったとすれば討った後か。お前が復讐の念を抱いている仇

を俺が討ったとして、お前がどう思うのか。それが少しだけ気になった」

独白の様なカタナの言葉に、今度はカトリが答えに困る番だった。「それは……どう、思うのでしょうかね」

それをすんなりと答えられるほど、カトリは人の感情というものを理解していない。仇を討ってくれた事に感謝するのか、あるいは仇を奪われた事に怒りを燃やすのか、あるいは空虚さに満たされ何の感情も抱かないのか、きっとその時になるまで答えは出ないだろう。

「違ったのだから今は気にする事じゃないか……聞かなかった事にしてくれ」

野暮な事だったと、カタナはそれで一旦会話を打ち切った。

しかしもう一つ聞いておきたい事があったのを思い出し、カタナは再びカトリに問いかける。

「なあ、どうしてあの時、俺と山賊達を庇うような真似をしたんだ？」

あの時というのは、魔術陣によって山賊のアジトが黒い炎に包まれた時だ。

カトリが他人の事など放って、自分だけ助かる道を選ばなかった事。それが僅かにカタナの中で引つ掛かっていた。

それに、一方的にした事だが約束でもある。あの場を打破したら教えてもらうと、カタナはカトリに確かに伝えていた。

「……それは」

またも答えに困った様子で口ごもるカトリ。それは言い難いというよりも、さっきと同じ様に、答えが見つからないというように感じられた。

「まさか体が勝手に動いていた、とかいう訳でもないだろ？」

「……実のところ、それがもつとも近い答えではないかと思えます」
理屈ではどう考えても答えが見つからない。だとすれば、後は一時的感情による衝動だったのだと結論付ける以外に、カトリが引き

出せる答えが無かった。

「あの時はとった行動は、本来なら私は間違いだと判断するところです。復讐という目的の為に、私はあの場を生き残る最善の道を選ばねばならなかった。しかし実際には私一人が生き残る道では無く、気が付けばそれを断つてでも他人を守る事を選んでいました」

その感情が何処から来たものなのか、当のカトリ本人にも理解不能であつた。

「あるいは目の前で誰かが死ぬのを、もう見たくないと思つたのかもしれませんね……でもそれも所詮後付けの理屈であつて、あの時にはそんな事を考えている暇もなかったですけど」

「……なるほどな」

それが聞きたかつたと言わんばかりに、カタナは満足げに頷いた。「どうかされました？」

「いや、気にするな。聞きたかつた答えには充分だ」

それで話は終わりという意思を見せるカタナ、カトリとしては改めて自分のとった行動に疑問を抱いて考え込んでしまう結果になつた。

（やはり思つた通りの馬鹿だな、自覚が無いのが拍車をかけてる。もつとも、悪い意味ではないけどな）

衝動的な状況にこそ、その者の本質が現れる。カトリ・デアトリスが普段どういう理屈で動いているとしても、あの時の行動は打算の欠片も無い彼女の本質だつた。

それを理解したカタナは、後ろであれこれ考え込んでいるカトリを放つて、眼下に過ぎ去っていく山々に目を落としていた。

+++++

飛竜のクーガーの背に乗って飛び立つてから二時間弱、西の空が

夕日によつて赤く染まつていた。

途中の休憩を挟まずに、その間延々と飛び続けたクーガーの体力は流石と言える。そして本来、陸路では迂回しなければならぬ山々を超えていく事で、行きの馬車と比べてかなりの速さでゼニスまでの道のりを進んでいた。

「隊長、今はどの程度までゼニスに近付いているのですか？」

土地勘の無いカトリには景色を見渡しても現在地が解らないので、カタナに聞いてみる事にした。

「……さあな、正直俺にもここが何処かは解らん」
「ええ！？」

またしても衝撃的な発言でカトリを驚かすカタナ。また冗談で謀られたのかとカトリは勘ぐるがカタナは本気で言っているようだ。

「俺の行動範囲はそんなに広くない。ゼニスの市内ならともかく、市外は周辺程度までしか把握していないな」

「で、ではここまではどうやって……いえ、そういえば飛竜に乗ったのが初めての事で気に掛けていなかったのですが、飛竜の制御にも馬に乗る時のように手綱が必要なのではないですか？」

そもそもカタナはカトリと同じようにクーガーの背に乗っているだけで、制御するような仕草すら見せていなかった。

「確かに制御するなら手綱は必要だな、だが今言つたように俺に土地勘はないから邪魔なだけだ。代わりにコイツが全部覚えているから問題は無い」

そう言つてカタナはクーガーの背をポンポンと叩く。

「……もしかして飛竜に全部任せていたのですか？」

「それが一番確実だ、クーガーは一度行つた事のある場所はちゃんと全部覚えていくからな」

「そうだとすると、気まぐれで別の場所に行つてしまう事はないのですか？ 第一、言葉がちゃんと通じるのかも怪しい所ですが……」

なんとといっても飛竜は大きく分けて『魔獣』に分類される生き物である。常識として、魔獣は人に害をなす存在であり、対話は不可

能というのが一般的だった。

「ああ、言葉を完全に理解し合うのは無理だろうな。だが簡単な意思疎通の方法はいくらでもある、俺は以前にその点だけはみっちり竜騎長に仕込まれたから問題ない」

「……さっきまでそんな素振りは見せていなかったですが？」

「今回は全てクーガーに任せただからだ。竜騎長の受け売りだが、飛竜に乗る上で一番必要なのは飛竜を信頼する事、そうすればコイツは必ず最大の誠意で応えてくれるからな」

「そういうものですか？」

「そういうものだ」

自信を持って言い切るカタナに、それ以上カトリが言う事は無かった。

カトリが飛竜については無知に等しいという事もあったが、なんとなくクーガーとカタナとの間にはそういう絆のようなものがあるように感じられたからだ。

「ん？」

そこで何かに気付いたカタナが片手を前に突き出した。それに反応するようにクーガーは高度を落として少し減速する。

「どうかしましたか？」

「この先に人の集まりが見えるな、ゼニスから逃れてきた市民達かもしれない」

カトリの目には全く見えないが、カタナは視力においても魔元生命体クルスとして人よりも優れたものを持っている。

「状況を確認するにはちょうどいいか……少し離れたところに降りるぞ」

クーガーはカタナの指示通りにゆっくりと地面に向かって降りていった。

+++++

地面に降り立ったクーガーの背からカタナとカトリが降りると、正面から二頭の馬が走ってくるのがカタナには見えた。

「お迎えか……クーガーは適当な所に身を隠せ。もうひと働きあるかもしれないが、今はゆっくり休んでおけよ」

「ピーーーー」

大きな図体とは裏腹な甲高い声を返事とし、クーガーはカタナの言葉と手の動きにならって、身を隠す為に近く森に入っていた。

「……やはり、言葉通じていませんか？」

「察しが良いからな、クーガーは。それに、完全に理解するのは無理と言ったが、ある程度の音の聞き分けは仕込まれてる。そうじゃなければゼニスに向かえないだろ？」

「それもそうですね」

納得しつつ、カトリは視線を走ってくる二頭の馬に向けた。

カタナには、その馬の背にそれぞれ乗っている人物が誰なのかまで解っている。

白を基調とした制服は協会騎士団の従騎士に与えられるもので、その二人はゼニス市の駐屯部隊の隊員、カタナの部下であった。

「やはり隊長でしたか。遠眼鏡でクーガーの姿を確認した時に、もしやと思いましたか」

カタナの部下の従騎士は馬から降りて、安堵した様子でそう言った。

「何が起こったか、ある程度は聞いている。こんな時に街を離れていて本当にすまなかった」

そう言っ頭を下げたカタナ。それを見て、馬で駆け付けたカタナの部下は大袈裟とも言えるほどの驚きを見せた。

「どうした？」

「い、いえ。隊長が頭を下げるなんて、何と言いますか……」

「……俺だって自分が悪いと思えば頭も下げるさ」

部下達が何を言いたいのかカタナにもよく解っている。普段の平気な顔で仕事サボっているダメ隊長は、自覚あつてのものだからだ。そんなカタナが頭を下げる程、今回の事には大きく責任を感じているのが表れていた。

「市長の計略に乗ってゼニスを離れていたのは完全な俺の失態だ、言い訳するつもりは無い……だが」

カタナは一度言葉を切り、今度はありったけ尊大な態度で言った。「後悔と反省はここまでだ、サボった分のツケは三倍にして返してやる。そのかわり、その分の釣り銭はお前達の働きで返してもらおうぞ」

カタナのその言葉と、満ち溢れる根拠のない自信を目の当たりにし。部下達は表情を明るくして大きく頷いた。

「それでこそ、我らが隊長です。何なりとご命令ください！」

カタナの思いに応えるように部下達の士気が高まる。

傍で見ていたカトリには、初めて見たカタナの隊長らしい所に戸惑いもあつたが。ようやくカタナが、隊長と呼ばれる立場に居られる事を理解した気がした。

+++++

部下の馬に相乗りで移動し、カタナは空の上から確認した人の集まりの中に居た。

カタナの想像通り、それはゼニスから避難していた市民達であつた。空の上から見た時は移動中のものであつたが、現在は休憩中のものである。腰を下ろして談笑したり食事をとっている者も居るが、皆一様に表情に陰りがある。

「以上が現状で報告出来る全てです」

事細かな部下からの報告を聞き終え、カタナは現状が芳しくない事を実感させられた。

まず随行している市民達の移動手段が徒歩である事、当然ながら子供や老人もいる事、そしてその中には怪我人も多く含む事で、思うように避難が進まない状況のようだ。

馬車などの移動手段を持つ者は皆、我先にと逃げて行ってしまうらしい。つまりは現在地がゼニスから避難した市民の最後尾であるという事だった。

それにカタナの部隊の駐屯騎士達は随行し。八名を四つの班に分け、避難している市民の安全の確保、近隣の住民への避難勧告、食料などの物資の調達などに従事していた。

だがここに居る数百人の大所帯に対して、僅か八名では手が足りないのは明白で、特に食料についてはこの先を考えると非常に厳しい。

そういう目に見えて明らかな不安は、避難している市民達の足取りを重くする。更に住む場所を無くして、ただ目的も無く逃れるだけという事に対する目に見えぬ未来の不安も、生き延びるという気持ちに陰りを作り、悪循環となっていた。

「こればかりは自分達の不甲斐なさと、力不足を嘆くばかりですね。彼らを元気づけるどころか、自分達の方が参ってしまっていたのですから」

そう言ってカタナの部下達は自嘲する。無理からぬ事だとカタナが言っても首を横に振って否定した。

「いいえ、自分達がここまで来れたのも、騎士としての務めを最低限放棄しないでいられたのも副隊長がいればこそです。そうでなければ、きつと……ただ途方に暮れていたでしょうから」

カタナが居ない間、部隊を動かしていたのはヤーコフだった。

魔竜が現れた時に無茶をしたようで、現在はその時に負った怪我の治療中のようなが、隊員達に適切な指示を出し、その心の拠り所

として支えていたようだ。

そしてその魔竜についてだが、実は以外にもカタナが部下から受けた報告の中で一番の僥倖といって良いものであった。

魔竜は現在、ゼニス市街の中心に壊した建物で巢を形成し、睡眠によつて活動を停止しているという事だった。

暴れた後は寝るといいういかにも獣のような行動だが、そうじゃなければきつとこれだけの市民が逃げおおせる事は出来なかった事だろう。魔竜は獣というよりは天災に近い規模の災厄なのだから。

そして魔竜にはゼニスの自警団の生き残りが監視についているらしく、異常があればすぐにここに知らせる事になっているそうだ。

自警団にまだそんな骨のあるのが残っていたのが、カタナには驚きだった。

「……ところで、ヤーコフは今どこに居る？」

ヤーコフには、魔竜について色々と話しておかなければいけない事がある。そしてそれ以外にも今回の件で一番の功労者といえるヤーコフに、カタナは言わなければいけない言葉もあるのだ。

「今向かっています……あのテント、あそこに居る筈です」

そういつて部下が指し示す先には簡易テントがあった。駐屯所の代わりとしては質素であるがこの場ではかなり優遇されたものだ。

「解った、ここまででいい。持ち場に戻ってくれ」

カタナが馬から降りると、部下は一礼して去っていった。その後ろを付いて来ていた馬からカトリ・デアトリスが降りてきて、カタナの横に並ぶ。

「副隊長、無事でよかったですね」

ヤーコフの安否についてはカトリも気に掛けていたようだ。サイノメの話では魔竜が現れた後のヤーコフの動向は知れていなかったから、それはカタナも同じだった。

「そうだな……もっとも、手放して喜べる状況じゃないが」

部下からの報告で、魔竜によつてゼニスの街はほぼ壊滅と言つてもいいくらい破壊された事が解った。

当然その破壊の中には死者も含まれる。この場には数百の市民がいるが、ゼニスは元は人口が一万を超える街であるから、先に逃げ延びたものを考えても相当数の犠牲が出たと考えられる。

「確かに……私もこの人達の痛みが理解できる分、その辛さも解ります」

カトリは少し視線を落としながらそう言った。

「……」

家と家族を失った事がある者、カトリはその事で周囲と共感しているようだ。だが次にカトリの口から出た言葉は、それを覆すものだった。

「……ですが、今必要なのは憐憫や同情などではない筈です。隊長がここに居る理由は何の為ですか？」

そう言つてカトリはカタナの目を真つ直ぐ見据える。ここに来る前とは逆に、カトリがカタナに対して覚悟を問い質すかのように。

「俺が俺のやり方でゼニスを守るためだ。お前に問われるまでも無い」

「……解っているのならいいのです、行きましょうか。副隊長も隊長の安否は気に掛けているでしょうから」

「そうだな」

カトリはまだ何か言いたげだったようだが。結局、言葉を飲み込むように押し黙りカタナの後を付いていった。

第二十五話 非難と指南

バチーーーーー！！

平手が頬を打つ音が、大きく響き渡った。

殴られたのはカタナ、そのいきなりのもてなしに抵抗することなく、自分を殴った人物から向けられる怒りに、正面から向き合う。

殴ったのはカタナがよく通っていた喫茶店の、ウェイトレスを勤めていたリーネだった。

「アンタ、今まで何やっていたのよ！！」

物凄い剣幕で睨み付けながら、リーネはありったけの怒りをカタナにぶつけた。

それは言葉だけでなく拳と蹴りをまじえたもので、容赦なくリーネはカタナを殴って蹴って、留まるところの無い怒りを向け続ける。
「痛っ……」

それが一時的に止んだのは、リーネの怒りが発散されたわけでは無く。我を忘れて本気で殴り続けた事で、拳の骨が碎ける一步手前までの怪我を、負ってしまったからだった。

それだけ我慢しきれないものだったのだろう。

実際カタナが抵抗しなかったのは、リーネからどんなに攻撃を受けても平気であるからという事が理由では無く、その怒りを受け止めるべきだと思ったからだった。

「こんの……！！」

それでもまだ、リーネは皮が裂け血の滲んだ拳を握り、それを振りかぶる。

「待って下さい！！ 少し落ち着いて！！」

流石に止めるべきと判断したのか。カタナの横をすり抜けて、カトリ・デアトリスがリーネの腕を掴む。

「誰よアンタ！？ っていうか、放しなさいよ！！」

リーネは掴まれた腕を振り解こうとするが、単純に女性同士でも鍛えられているカトリとでは力に大きな差があるらしくビクともしていない。

そして勢いを削がれた事で気が抜けたのか、リーネはその場にへたり込んでしまった。

「……放してやれ」

カタナが告げると、カトリは少し不安そうにしつつも、掴んだりリーネの腕を放した。

「隊長……」

「解っている」

カタナはへたり込んで俯いたままのリーネの横を通り抜け、眠っている様子のヤーコフの所まで進む。

今カタナがいる簡易テントはそれなりに大きく、二十人くらいは簡単に入るスペースがある協会騎士団御用達のものだが、実際に今その中に居るのはカタナ、カトリ、リーネ、そしてヤーコフの四人のみ。

カタナ達が来るまでは二人しか中に居なかったが、その理由はヤーコフを見た時点ですぐに理解できた。

リーネがカタナに怒りを向けた理由も。

（……負傷したと聞いてはいた。しかし、これは……）

ヤーコフの傍らに膝をつき、カタナは自分の副官の姿をその目に刻む。

ほぼ全身に包帯が巻かれ、おそらく応急処置しか出来てないからか、数ヶ所からは血が滲んでいる。

顔の半分も覆い隠され、特に右目にあてられたガーゼが赤く染まっているのが気になったが、それ以上に目を引く部分があった。

ヤーコフの右足、その膝から下が失われていたのだ。

（こんな状態で、指揮を執っていただつて？ 普通なら、意識を保っているだけでやつの傷だぞ……）

本来ならすぐに医者に掛かり、手術か治癒魔法による手厚い看護

が必要な所だ。この環境では難しくとも、無理に避難している市民に同行せずに、馬で先にある町まで走らせれば何とかなかったかもしれない。

しかしそうすれば、この場を指揮する者が居なくなる。ヤーコフにはそんな誰かを見捨てるような真似は、絶対に出来ない事だろう。「……ヤーコフさんは、見た事もないような大きな黒い竜が現れた時に、街の皆を逃がす為に一人で立ち向かったのよ……」

カタナに背を向けたまま、リーネは涙声で話し出す。

「ヤーコフさんが時間を稼いでくれなければ、きつともつと被害は大きかった。私も……あの時広場に居た人達は、全員死んでいたかもしれない」

カタナはサイノメから聞いていた、魔竜が現れた時の事を思いだす。市長が発現した魔術陣に靈力を吸い取られた事で、広場に居た市民達は一時的な疲労によって動けなくなった者は少なくなった筈だ。

おそらく今この場に居る者のほとんどは、その時に広場に居た者達だろう。

「……ヤーコフさんがいなければ、騎士達も自警団も今のようには機能しなかった。みんなヤーコフさんに勇気を貰って、ヤーコフさんの負った傷に報いる為に今も危険を冒しているの……」

ポタポタと滴が落ちる音がする。

カタナには背中越しに感じるその音が、殴られた時よりも自分に痛みを与えている事を実感した。

「……それなのに、それなのに……アンタは何を……今の、今まで……」

嗚咽交じりに責め立てる言葉は、解っていた事でもカタナの胸に突き刺さる。

カタナは自分の感情の動きが、あまり大きくは無い事を自覚している。それが魔元生命体としてなのか、それともこれまでの生でそういう人格が形成されてしまったのかは、今となっては解らないが。

それでも決して無感情ではない。表に出さない事も多いが、大きく揺るがされる事もあるのだ。

（感情の無いただの木偶であるのと、どちらがいいのだろうか……）
そんな事を思いながらも、消え入りそうなリーネの言葉を一つ一つ胸に刻んでいく。

「やめて下さいっす」

カタナを責め立てていたリーネの言葉が止む、止めさせたのは眠っていた筈のヤーコフの言葉だった。

「ヤーコフさん！？ 起こしてしまいましたか……？」

リーネは驚きつつ、ヤーコフに向かって駆け寄ろうとするが、ヤーコフはそれを言葉で制した。

「大丈夫っす、それで申し訳ないっすけど、リーネちゃんは少し席を外してもらえないっすか？ これから、隊長と話さなければならぬ事があるので」

その言葉にリーネはショックを受けた様だった。

「で、でも……」

「僕は大丈夫っす、それにリーネちゃんも僕の看病で疲れたでしゅうから、少し休んでくださいっす」

気遣うようであったが、その実有無を言わせないものが、ヤーコフの言葉の裏にあるようだった。

「……はい」

結局それに押されてリーネはテントから出て行った。

+++++

「……悪かったな、起こしたみたいで」

初めて自分の副官と、どんな顔をして接すればいいのか解らなくなつたカタナだった。口から出た言葉も、呆れるくらい当たり障り

のない言葉。

「いいえ、充分休ませてもらいました。それより隊長が無事に帰られて嬉しい限りっす」

そんなカタナに、拍子抜けするくらいヤーコフはいつも通りに接した。

「あ、デアトリスさんも無事だったんすね。良かった、二人とも無事で。実は結構心配してたんすよ」

心底ほっとしたように言うヤーコフに、カトリは困った顔で会釈を返す。どう見ても心配されるべきは逆に決まっていた。

「俺達よりも、自分を心配しろ。重症だろうが……」

「はは、ちよつとドジってしまって、面目ないっす……それで隊長に一つ謝らなきゃいけないのが……」

そう言つて誤魔化すように笑みを作りながら、ヤーコフはテントの隅に視線を送った。

「——？」

その視線につられるようにカタナもそちらを見る。そこには何やらボロボロの黒い布切れが置いてあった。

「何だあれは？」

「……隊長の外套の替えっす。ちよつと借りるだけのつもりがあんな姿に」

それは魔術や魔法に最上級の耐性を誇る、三連魔法印・守天導地が刻まれた、カタナが愛用している外套のなれの果てだった。

「別にどうでもいい。保険程度に使っている物だしな」

確かに貴重な品ではあるが、今は心底どうでも良かった。

「え！？ 怒らないんすか？」

「お前の今回の功績を思えば、取るに足らん物だろ。役に立ったのならそれでいい……お前は良くやった」

「……え？」

ヤーコフは何か理解できないような疑問の表情を浮かべ、カタナの顔をじっくりと見た後、カトリの方に視線を送った。

「どうかしましたか副隊長？」

「ああ、あの、隊長が何か変に優しいんですけど、ここにいるのは隊長で間違いないんすよね？」

ヤーコフはカトリに尋ねるが、そうした事でカタナの視線が鋭くなった。

「……どういう意味だ？」

「ひ、いや、だっていつもならそんな労いとか無いし。前に隊長の制服を洗濯した時に破いちゃった時は殴ったじゃないっすか」

確かに以前にそんな事があったのをカタナは思い出した。

「あれはお前の過失……いや、そんな事はどうでもいい。それよりも他に何か話す事があるんじゃないかったのか？」

若干カトリ・デアトリスからの冷ややかな視線を感じたカタナは、話題を変える事にした。

「……ああ、さつきリーネちゃんに言った事っすか？」

「そうだ、あのウェイトレスをわざわざ下がらせただけだから。重要な事なんだろう？」

四人いる内の一人といっても、リーネはヤーコフの恋人であり、さつきの様な強い態度で接するのはまれな事だった。

おそらく部隊の中だけでのみ留めておく話をするのだとカタナは思っていた。

しかし、なぜかヤーコフは言い難そうに言葉を濁している。

「……それは、いや、その」

「早く言え」

「は、はい！ 実は外套をボロボロにしちゃったことで、隊長から鉄拳を貰うと思っていたので、乱闘にならないようにリーネちゃんに下がってもらっただけでありますすいませんでしたー！」

ヤーコフは言いながら、段々とカタナの視線が冷たくなっていくのを感じ取り。流れるようにノーブレスで謝っていた。

「……なるほど、お前が俺を普段からどう見ているのかよく解ったな。つまりは俺が、怪我人を痛めつけるような外道だと思っている

わけだ」

「あ、いえ、そんな事はありませんですよいません」

ヤーコフは魔竜と対峙した時には感じなかった、心底からの震えが体を支配するのを感じとった。

「……隊長」

釘をさすように、カトリが後ろからカタナに声をかける。

「解っている、コイツのせいで調子が狂っただけだ。俺は何もしない」

それだけでカタナからの冷ややかな空気は消え去り、ヤーコフの震えも止んだ。

ヤーコフの目には、その時のカトリが女神のように映った。

「お前から何もないのなら、俺から言っておくことがある」

「え、何すか改まって？」

またしても疑問の表情でカタナを見るヤーコフ。

まずカタナが言うべき事は、ここに来る前から一つ決まっていた。今ではそれが更に重い意味を持っている。

「すまなかった」

そう言ってカタナは頭を下げる。寝ている形のヤーコフと同じくらしい高さの所に、カタナの頭があった。

「な、何故？」

本気で訳が分からずに、ヤーコフは呆然とカタナの頭を見ていた。「市長の企みに気付かずに踊らされ、ゼニスを離れている間にこんな事態になってしまった。お前には特に苦労をかけた……」

その言葉を聞いて、ヤーコフはようやく理解した。そして湧いた感情はカタナに対する怒りだった。

「……隊長。僕は今、初めて本気で隊長に腹が立っています」

「……だろうな」

カタナが頭を上げると、さっきまで普通にしていたヤーコフの表情が、見せた事の無いような鋭いものに変わっていた。

それも当然だとカタナは思った。魔竜が現れた時にカタナは別の場所にいて、ヤーコフは魔竜を相手に右足を失うほどの負傷をした。それ以降もカタナの不在を補うために、満足な治療も受けられないまま指揮を執る羽目になった。

しかし、カタナは気付いていなかった。ヤーコフが怒っている事は全く別の事であると。

「今回の事は、ただの僕の力不足っす」

「何？」

「その場に居て市長を止められなかった事も、現れた魔竜を倒せなかった事も、ゼニスで起こった事は全部、ゼニスに居た僕のせいっす。別の場所に居た隊長が、僕の責任を勝手に取らないで欲しいっす」

そう、ヤーコフが怒っているのは、カタナが全部背負い込むように、全部自分のせいでこうなったとも言っように、頭を下げた事に対してだった。

そしてここに来る前に、カトリがカタナに言いかけた事もそれと同じ事。

「陽動だったとしても、実際に隊長が向かった方には魔人が居たんすよね？」

「ああ、おそらく市長と手を組んでいた者だろうな。待ち伏せされていたようだった」

「隊長はそれを倒してからここに来た、それで間違いないっすよね？」

「……まあな」

まるでそれが当然の結果だというように、断定の疑問でヤーコフはカタナに聞く。

「隊長は隊長にしかできない事をやり遂げてきた。僕が行ってれば返り討ちだったでしょうし、そうなれば結局隊長が動かなければならなくなっていた筈っす。そうになると、市長の企みを止められるのは、結局ゼニスには僕しかいなかった訳っす」

「いや、無理に動かずに、最初から本部に援軍を頼むという手もあった」

「そうすると、時間が空くことで山賊と魔人によって周辺の村に被害が出ていた筈です。まともな援軍が来るとは限りませんし、それの結果は同じ。つまりは、隊長が動かざるを得なかったのは確かですね」

普段はチャラチャラしているのに、こういう大局的な視点での頭の回転は、意外にもヤーコフはとても早い。

かつて本隊の正騎士であったのが伊達では無く、部下をまとめる能力がカタナよりも数段優れていると、サイノメは以前にそう評価していた。

「つまりは隊長が謝るのはお門違い、自分のせいだと感じるのは勘違いも甚だしいって事……痛ああああああああああああああああああああい!?」

今度こそ、カタナの鉄拳がヤーコフを殴りつけてしまっていた。

「……」

「隊長!? 何やってるんですか!! 相手は怪我人ですよ!!」いきなりの事に反応できていなかったカトリが、慌てて止めに入った。このテント内で妙な役回りが定着してしまっている。

「そう慌てるな、いくら俺でも追撃するほど外道じゃない」

「そういう問題では無く!! そもそも何で殴ったんですか!?!」

「……衝動的なものだ、気にするな」

単純にヤーコフが調子に乗りはじめたのが気に入らなかったとか、頭を下げた上司の面目を空気を読まずに潰した事とか、そんな理由

「だ、大丈夫ですよ、デアトリスさん。急所は外れてますから」

「当たり前です!!」

見当違いの事を言い出すカタナやヤーコフに、カトリは本気であきれ返る思いだった。

「それに、隊長はやっぱりこれくらい傍若無人でないと調子が出ないっす」

「……同じような事を、他の部下も言っていた」

それにはカタナも、自分の部下達が被虐的な趣向に目覚めているのではないかと、流石に心配になる。

「僕はそれだけ隊長を頼りにしてるって事っす。その隊長にはどつしり構えてもらっていないと、僕らも不安になっちゃいますからね」

「確かにそうだな」

カタナは自分が考えすぎていたという事に、ようやく気付かされた。

カトリが言った『憐憫や同情は必要ない』という事の本当の意味も、カタナの部下はカタナが思っている以上に強く、カタナはカタナ自身が思っている以上に弱かった。それでも頼られるている限りは、それに答えるだけ。それだけでいい。そんな単純な話だった。

+++++

「では本部からは、早くて二日後に竜騎士隊が到着する予定なんすね」

カタナはサイノメから聞いている通りの結果をヤーコフに伝えた。ヤーコフはサイノメの事をただの秘書官としか思っていないから、サイノメの転移魔法の事は隠す事になったが、ヤーコフは事実だけをすんなりと受け入れた。

（もつとも、サイノメの転移魔法については俺も詳しく聞かされていないがな）

あれが魔法なのかも怪しい。だが実際に長距離を一瞬で移動できるのは事実なので、カタナもそれを事実だけ受け入れている。

それにサイノメのいない所でそれを考えても仕方ない。今は別の

事に集中する時だ。

「一番いいのは援軍が来るまで魔竜から逃げ切る事だが……」
吉報と言えるかは微妙な所だった。

現在は眠っているらしい魔竜の動きがどうなるのかが、まるで読めない。知能が獣そのもので、交渉の通じる相手ではない以上はそうなってしまう。

知能があっても、いきなり燃やそうとしてくる者も居るので同じことかもしれないが。

「ゼニス市街に作っただけの巣で、のんびりしてくる事を願うな」

「そうっすね、でも正直厳しそうっす。じいちゃんが言っていました、魔竜は一日の半分は眠って過ごすけど、もう半分は狩りに費やすそうっす。巨体を維持する為にはそうするしかないみたいなんです、今はゼニス周辺に動物はいないと思いますからここはきっと一番危険でしょう」

ヤーコフは客観的にそう判断した。最悪の事態の時という仮定であるが、その時の事を考えておくのは一番重要だった。

「……そうか、しかしお前の爺さんは魔竜とも戦った事があるのか？ 前に大戦の生き残りだと言っていたが」

魔人や魔竜と戦って生き残った者はそれだけで希少だ、協会騎士団でもそういう経験のある者は要職についている者も多い。

「え？ それはどうなんでしょう？ あんまり詳しく聞いた事は無かったっすけど。それに、結局のところは魔竜に出来る対策は無いから、見かけたら迷わず逃げろって言っていました」

ヤーコフの爺さんは以前に魔人への対処法でも、同じような事を教示していたと言っていた。

「つまりお前は爺さんから言われていた事を、二度も破ってその様だという訳か。年寄りの話は聞くものだな」

「……それは今はいいじゃないっすか、それよりも援軍が間に合わなかった時の魔竜の対処を決めておきましょうか」

「その時は俺が魔竜を引き付ける。お前らは市民を守れ、以上」

「……そんな簡単に」

あっさりと決めるカタナに、カトリが口を挟む。

「クーガーがいるからな、時間稼ぎくらいは出来る筈だ」

「確かに適役ですが……しかし、それではまた副隊長の負担が」

カタナの部下達にはカトリを含め指揮を執る事は無理であるし、そうなれば引き続きヤーコフがそれを負う事になる。

「僕は大丈夫です、出血は止まりましたし、馬に乗れば片足が無くても支障は少ないです」

そう力強く言われれば、カトリとしては代わりが出来ない分否定しかねる事だった。

「適材適所、というには手が足りていないがな。お前はヤーコフの補佐に務める」

「……それは構いませんが」

流石にカタナについてくるとは言わなかった。カトリにも出来る事とやるべき事は見えているようだ。

「決まりでいいな？」

カタナは確認の為にヤーコフに問いかける。

ヤーコフは少し考えた末に頷いた。カタナだけに囀役を担つてもらう事に異論がないわけでは無いが、現在の状況では結局それが一番であるという事に落ち着いたのだ。

「では隊長とデアトリスさんは、出発まで休んでいて下さい」

今日の所は日が落ちてしまったという事もあり、この場でキャンプとなった。

もっともテントが足りていないので、ほとんど野宿に近いが。

「副隊長も休んでください」

「僕はさつき寝たんで平気ですけど、仮眠はちよくちよく取るつもりです」

有事の際に混乱をさせない為に、指揮権はヤーコフが持ったまま。目印として解りやすいこのテントも基本ヤーコフが使う事になった。

「俺は少し出ているぞ」

ヤーコフの補佐をするカトリはテントに残り、カタナは一人だけ出て行った。

第二十六話 残ったものと残らないもの

「おや？ カタナ様ではありませんか」

カタナがある人物を探してブラブラしていると、嘘のような偶然で逆にその人物から声が掛かった。

「マスター、無事だったんだな」

カタナが探していたのは、カタナの行き付けだった喫茶店の店主。名前は知らないのですが皆がそう呼ぶように、カタナはマスターと呼んでいる。

こんな時でも、誰しをも穏やかにさせるような独特の空気と、落ち着いた身のこなしは健在で、周囲の悲壮な雰囲気とは真逆であった。

「ええ、何とか逃げてくることが出来ました。カタナ様も御無事で何よりです、御姿が見えなかったので心配しておりました」

「……少し街を出ていてな、俺は少し前に合流したばかりなんだ」

「そうでしたか、何にせよご無事だったのは嬉しい限りです」

「……そう思うか？」

「ええ、私にとってお客様方は家族のようなものですから。私の様な独り身の爺にはそれが全てでもあります」

笑いかけながらそう言ったマスターには、少しも無理をしている様子が無い。相変わらず言葉使いは堅苦しいが、それすらもマスターらしさを表すような自然体であった。

「家族……か」

そういうフレーズに慣れていないカタナには、少し照れくさい。

「はい、もう店は無くなってしまいました。私はずっとそう思っております」

何故かそれに引け目を感じるように、申し訳なさそうに言うマスター。初めてその顔に陰りがさす。

それを言う事で、カタナがどんな思いをするのかを、案じている

ような様子であった。

「……もう店はやらないのか？」

「どう、でしょうか……もし新たに始めるとしても、それは別の場所の別の店になってしまいますし。ゼニスがああ状況では、同じものは望めないでしょうから」

「そうか……」

このままいけばゼニスは地図から消える運命にある、それはもう誰しもが理解している事なのかもしれない。

しかし、誰しもがそれを納得しているわけではない。街があつて人がいて、でもそれだけではない思いも、あの場所にはあつた筈なのだから。

「なあマスター、前から聞こうと思つていた事があるんだ……」

「何でしょう？ 私に答えられる事なら遠慮なくどうぞ」

カタナは、かつて行き付けだった喫茶店を思い出しながら問いかけた。聞いたかったのはその看板に書かれていた文字の事。

「『コシーロ』ってどういう意味だ？」

変わった響きのある言葉だと思つていた。カタナが知っている言語の中には無い言葉であり、それでいてどこか懐かしいと思つていた。

「ああ、私の店の名前ですね。コシーロは私の故郷の古い言葉で、『居眠り』という意味があります。お客様方に我が家で過ごすようにくつろいで頂けるよう、あの店にそう名付けました」

「居眠り……か」

「特にカタナ様は、あの店の在り方の体現者でありましたね」

「コーヒー一杯で入り浸つて、迷惑だったろ？」

「そんな事は一度も思いませんでしたよ、むしろ嬉しい事です。カタナ様は私の店をそれだけ愛して下さつていた、私にはそれだけで充分なのです」

それを誇りに思うと言つて、マスターは笑う。それが今はもう戻らぬ過去の事だとして、一抹の寂しさを感じながらも。

「……あの店を開いて良かった。今までの御贖、本当にありがとうございました」

それが最後の挨拶であるかのように、マスターは腰を折って頭を下げようとする。

しかし、カタナはマスターの額に手を押し当てそれを阻んだ。

「——！？ ど、どうされましたか？」

予想外の事をされたマスターは、驚きで目を白黒させている。常に落ち着いた雰囲気のマスターが、初めて見せる表情であった。

「いやな、勝手に店じまいにされるのは困るんだ。俺はまだマスターの店に満足はしていないからな」

どこか意地の悪い笑みを浮かべながら、カタナはそう言った。

「あんたのコーヒーは、俺には少し苦い。次に行く時はもう少し甘くしてくれ」

「……次に、ですか？」

「そう、マスターの店で。俺が……いや、皆が愛したあの店でな」
まるで決定事項であるように、カタナは言う。それがもう無理な事であるとは、微塵も思わせないような説得力がその言葉にはあった。

それが幻だったとしても、マスターには否定することができない。
誰よりもマスターの店を、喫茶店コシロを愛していたのは、マスター自身なのだから。

「……ええ、解りました。次こそはカタナ様が望まれるものをお出しできるように、私も精進いたしましょう」

「ああ、約束だ」

そう言ってカタナは手を差し出す。マスターはそれを固く握りしめた。

「……ところで、申し上げにくのですが。カタナ様には、折り入ってお願いしたい事があるのです」

「何だ？ マスターの頼みなら大抵の事は引き受けるぞ」
「ありがとうございます……では遠慮なく」
そうしてマスターからのお願いを聞き終えた後、カタナは安請け
合いをほのめかした事を深く後悔した。

+++++

カタナの目の前には、泣いている女性の姿があつた。
その女性はカタナにとっては既知の人物であつたが、弱々しく泣
いている姿を前にしては、流石のカタナもおいそれと声をかける事
が憚られる。

しかも泣いている原因がカタナにもあると思われる事が、いつそ
う声をかけ難い思いを強くしている。

結果、カタナは泣いている女性を前にして立ち尽くすという、醜
態を晒す事になった。

（マスターめ、こんな無理難題とは聞いてないぞ……）

心中で愚痴を零すが、そのマスターの姿は近くにはない為、恨み
の念を発散させることもできない。

本当なら今すぐにでもこの場を立ち去りたい所なのだが、マスタ
ーとの約束を反故にしない為にもそれだけはできなかった。

「……おい、ウェイトレス」

どうにか決心を固めて、カタナが声をかけると、膝を抱えて泣い
ていたその女性が顔を上げた。

泣きはらした目でぼんやりとカタナを見上げたその女性は、喫茶
店コシーロのウェイトレスを勤めていたリーネ。

マスターのお願いとは、理由も話さず泣き続ける彼女を、元氣付
けて欲しいという事だった。

「ぐす……あんたか……消えてよ」

しかし開口一番に、そう切って捨てる台詞が出てくるあたり、アイドルの高さはとてつもないという事をカタナは実感した。

「本当はそうしたいが、お前の事を頼まれたからな」

「……頼まれたって……ヤークフさんに？」

どこか複雑そうに、それでいて少しだけ嬉しそうな顔で、リーネは訊いた。

「いや、マスターにだが……」

ここは嘘を吐くべきかどうか迷ったが、カタナは真実を伝える。

瞬間、リーネの顔がまた伏せられた。

「ぐす……そうよね……ヤークフさんが、私の事なんて気にする筈ないわよね……」

いじけた様に、ぶつぶつとリーネはネガティブな事を呟く。それにカタナは少しだけ違和感を感じた。

「いや、気にするだろ。一応はあいつの彼女なんだからな」

「……一応って言うな。あー、でもそうかもね……本命の超絶美人がいた訳だし」

「あ？ 何の事だ？」

違和感は更に深まった。ヤークフは確かに数人と同時に付き合うという、健全とはいえない異性交遊を構築している。

しかし、ヤークフは其中で本命というような、特別な相手を決めてはいなかった筈だ。カタナが知っている限りでの話だが。

「……さっきのあの子がそうなんでしょ？ 金髪の女性騎士。ぐす……あんな美人、反則だよ……」

だがその言葉で、カタナは違和感の正体に気付いた。そしてリーネがどうして落ち込んでいるのか、正確に理解した。

カタナはリーネが泣いている理由を勘違いしていた。邂逅した時のように、ヤークフの怪我の事が、ゼニスの今後の事について、その事を考えていると思っていたのだ。

それが全くの見当違いだと分かった時、カタナの腹から笑いが込み上げた。

「くくく……ふはははは……」

カタナが声に出して笑うのは珍しい事。それは本当に久方ぶりの事だった。

「ちょ！？　なに笑ってんのよ！！　私がフラれたのがそんなにかしいわけ！？」

泣き顔だったリーネも、流石にカタナに対して怒りを向けた。

「くはは……　つと、悪い。お前の勘違いがあまりに可笑しかったんでな……」

口元にはまだ笑みの残るカタナは一応弁解する。そして誤解を解くためにリーネに説明を始めた。

「あの女騎士とヤーコフは、そういう関係じゃ無い」

「……　なんであんなにそんな事が言い切れるのよ」

信じられないと言った様子で、怪訝そうにリーネはカタナを半眼で睨む。

「あいつは、俺の女だからな」

「は！？　本当に！？」

「冗談だ」

「最悪……　もう、死んでよ……　むしろ殺したい」

本気で殺気を向けてくるリーネに、冗談が過ぎたと反省し、カタナは説明を続けた。

「今のも悪かった。こういう時に冗談を挟むのが癖なんだ、だが最初に言った事は冗談じゃない」

「……　あの金髪の美人騎士とヤーコフさんは恋人じゃないって事？」

リーネは希望を手繰り寄せるように問う。

「そうだ。どうしてそう思ったのか知らんが、それは絶対にない」

「……　だって今、あのテントに二人つきりでいるし、私を追い出したのだってそういう事じゃないの？」

「全然関係ない。あの女がヤーコフと一緒に居るのは、怪我をしたヤーコフの補佐する為であって、それは俺が決めた事だ。それと、ヤーコフがお前に席を外すように言ったのは、俺達だけで留めてお

きたい話があつたからだ」

カタナは一点だけぼかして言ったが、伝えたいのはカトリとヤーコフが恋仲ではないという事実だけなので、それで充分だ。

もつとも、理由が下らなさすぎるので、言いたくなかったという事もあるが。

「でも、あんたが知らないだけで、そういう可能性も……」

そこから先は言いたくなかったのか、リーネは口を嚙む。しかし、その心配は無いと、カタナは首を横に振った。

「あの女……カトリ・デアトリスにはやるべき事がある、今はその為にしか生きられないと言っていた。それにヤーコフも気が多い奴だが、今はその心配もなさそうだ。お前になら解りそうなものだが」
「……どういう意味よ？」

「ヤーコフの事、ここまで支えてきたんだろ？ 俺達が来るまではあのテントに、お前とヤーコフしかいなかった。つまり、そういう意味だ」

「あ……」

それとカタナは気付いている。ヤーコフに巻かれた包帯が、少し不器用に巻かれていた事を。

あれだけの傷と素人が向き合うのは辛かった筈だ。応急処置はヤーコフが自分でやったのだとしても、血を見るのに慣れていない者が、その場に居る事はそうできる事では無い。

「解ったか？」

「解った……ような気がする。正直あんたの言っている事だから信憑性は薄いけど……でも、なんとなく自信はできた、かな？」

言葉は微妙だが、さっきと比べてリーネは随分持ち直したようだった。カタナとしても、ここまでフォローしたのだから、その労苦が少しでも報われた事に満足感を感じた。

「……しかし、勘違いとはいえ、こんな時に色恋沙汰で悩むとはな」
「こんな時だからよ。こんな時だからこそ、信じているものには……裏切られたくないに決まってるじゃない……」

「……なるほど」

納得できる理屈かもしれないとカタナは思った。そして昔に聞いたある言葉を思い出した。

（『女は一途』……確か帝国に居た時に、風神が言っていた気がするな）

そう考えれば、カトリ・デアトリスもリーネにも当てはまる事だ。自分の決めた道からは外れようとはしない。

だからこそ、さっきのリーネのように、道が無くなったと思った時には進めなくなってしまうのだろう。

（道が無くなれば別の道を探せばいい……そう思うのは、人でなくとも俺が一応は男で、気が多いという証拠なのかもな）

なんでそんな事を思ってしまったのか、なんとなく浮かんできたそんな考えを、カタナは心の奥底に沈める事にした。

「それじゃ私は行くわ、ヤーコフさんの所に」

そう言って、さっきまで塞いでいたリーネは、少しばかりの笑顔を浮かべて立ち上がった。

「さっさと行け、そして絶対にフラれるなよ。こんな面倒は二度とごめんだ」

「……言われなくても、そのつもりよー!!」

捨て台詞を吐いて、リーネは走り去っていった。

何とかマスターからの頼みごとを達成したカタナは、遠くなったリーネの姿を一度確認してから、後ろを振り向く。

「呼ぶまで隠れてるつもりか、マスター？」

「ばれておりましたか、さすがですね」

少し離れたところにあった太い樹の陰から、マスターがひょっこりと顔を出した。

「……マスター、こんな頼み事はこれっきりにしてくれ」

「はは、申し訳ございません。この年になっても、やはり女性の涙というものは苦手なものでして……」

「得意な奴はいないだろ。それに別に俺じゃなくても、ヤーコフに

任せた方が良かったんじゃないのか？」

終わった事を蒸し返すわけでは無いが、その事にカタナは今更氣付いた。

「理由が解らなかつたので何とも言えませんが、きっとカタナ様ならどんな場合でも、リーネちゃんを元氣付けられると思っ
ていましたから」

「……なんだその理由」

「前に言いませんでしたか？　リーネちゃんはカタナ様に対してだけは遠慮がないと……」

そういえば、前に店に行った時にそのような事を言われたと、カタナは思い出した。

「つまり、ストレス発散に使ったと？」

「いえいえ、きつとあれはリーネちゃんなりにカタナ様に甘えたのでしょう。私と同じように、リーネちゃんもカタナ様の事を、家族も同然に思っているのかもしれないね」

「……そういう誤魔化しは……ん？」

言葉の途中で、何かに気付いたようにカタナは周囲を見回した。

「如何されました？」

マスターの問いかけにカタナは曖昧に首を振りながら、やがて方向を見定めて耳を澄ませた。

「これは……」

カタナの耳には僅かに笛の音が届いた。そしてその音が聞こえてくる先には、ゼニスがある。

それは、想定していた最悪の事態が起こった事を意味していた。

+++++

「魔竜がこちらに向かっているぞ！！　早く避難を！！」

警笛を鳴らしながら、自警団員が早馬で急報を知らせる。しかし、数分ほど前に、その急報にいち早く気付いた者が居たおかげで、既に避難の準備は完了していた。

そして逃れていくゼニスの市民達とは別に、周囲には誰もいない森の中。

カタナは魔竜の方に向かうべく、クーガーの背に乗った。

そしてそこにはもう一人、カトリ・デアトリスの姿もあった。

「……お前は連れて行かないと言った筈だぞ」

少し呆れたようにカタナが言うと、カトリは首を横に振った。

「解っています。ここに来たのは隊長に渡す物があったからです」

そう言ってカトリは、腰に帯びた剣を鞘ごと外した。

「魔法剣か。俺が使って良いのか？家宝だつたんだろ？」

「無手では手に余る相手でしょうから。それと、貸すだけです。あしからず」

カトリは『貸す』という部分を強調して、エーデルワイスをカタナに手渡す。

カタナは口元に笑みを作り、カトリの言葉の意味とエーデルワイスを受け取った。

「恩に着る……行くぞ、クーガー」

「――！！」

月が雲に隠れる夜空に、飛竜の甲高い声が響き渡る。

「御武運を」

⌋
⋮
⌋

高く飛び立ったクーガーの背で、カトリの言葉に答えるように、カタナは一度だけ頷いた。

第二十七話 自警団と魔竜

カタナは震える手を握り締めながら、夜空を見渡していた。

月も星も隠された夜闇、カタナが一番嫌いな夜の風景。

（縁起が悪いな、こういう時は少しでも良い事を考えたいところなんだが……）

闇に囲まれていると、嫌でも思い出たくない昔の事を思いだしてしまう。

昼夜を問わず薄暗い部屋、そこで行われた実験。

カタナが魔元生命体^{ホムンクルス}として作られた場所。

狂った研究者達の実験場。

（トラウマってやつか…… もう五年も前の事なのに、情けない）

毎日来る夜の闇は、カタナがかつて居た暗い研究所を想起させる。そして毎日来るからこそ、それをカタナが忘れる事は出来ない。

地獄と言っている日々、ただの物として扱われ、実験台にされた毎日。壊れる事も壊す事も出来なかった五年間。

その記憶はカタナから眠りを奪い取る。安心して瞳を閉じる事が出来るのは、あの時は無かった太陽の陽の下だけであった。

「ピーー？」

カタナの震えが伝わったのか、クーガーが心配そうに声を上げた。「大丈夫、少し寒かっただけだ。俺の事はいいから、お前は飛ぶ事だけに集中してくれ」

本当のところは隠して、カタナはクーガーにそれだけ伝える。

実際に言葉は理解できない筈なのだが、時としてクーガーは言葉の通じる相手以上に、鋭く察してくるから不思議だった。

そしてクーガーのその気遣いによって、カタナは下がり気味だった気分が、いくらか持ち直した事を実感する。

一人じゃない、それはカタナにとって重要な意味を持つ。

（……もしかしたら、それも糞野郎共の計算の内なのかもな）

研究所での地獄の日々も、カタナの支えになってくれる存在が居たからこそ耐えられた。

しかし、あるいはその時に植え付けられたのかもしれない。カタナが自分を支えてくれる者を必要とする弱さを。

そんな事が脳裏によぎり、カタナは大きく一息吐く。

（今は考える必要も無い事だ、それよりも目下の事態に対応しろ）
心の内でそう念じて、カタナは意識を切り替える。

まだ目標まで距離があり、空の上では何もできないカタナには無力な時間。それでも無駄な事を考えている余裕はそれほどない。

研ぎ澄まされたカタナの視界には、数キロ先の魔竜の姿が映っているのだから。

+++++

「くそ！ 何とかならねえのか!？」

ダルトンは八つ当たりをするように、何ともならない事を理解しながらも、そう周囲に怒鳴り散らした。

「なるわけないだろ!!」

案の定、自警団の同僚から返ってくる言葉も、解っている通りの怒鳴り声。

それでもまだ、その同僚は返答する気力があるだけマシだった。あまりの恐怖でダルトンの言葉を聞いている余裕の無い者もいる。

現在、ダルトン達ゼニス自警団は魔竜に追われている。

眠っていた魔竜が目覚め、監視についていたダルトン達は、ゼニスの避難民の方に魔竜が向かわないように注意を引き付ける事に成功した。

それによってある程度の足止めの役目を果たせたのだが、ダルトン達に及んだ危険は代わりに請け負ってくれるものなど居なく、彼ら

の命は全力で走る馬の体力と同時に尽きてしまう。

魔竜の巨体が一步踏みしめる毎に地響きが聞こえ、その咆哮は背筋を震わせる。時折開かれる罅の大きさは、人一人を飲み込むのに十分なもの。

解つてはいたが、辺境の自警団風情がどうにかできるような存在では無いだろう。

「このままじゃ、俺達全員お陀仏だぞ!!」

「魔竜の監視も陽動も、ダルトンが言い出した事だろうが!! 何も策がねえなら格好つけんじゃねえよ!!」

「う……」

不満をぶちまける同僚に、ダルトンは言葉を詰まらせる。後先の事は考えていなかったのは事実なので、それに言い返す事は出来なかった。

「……それじゃ、さつさと逃げ出せば良かったじゃねえか。無理して俺に付きあう必要は無かっただろ?」

「無理はしてねえよ! 俺が言いてえのは、付きあわせた奴が文句ばかり言っくんじゃねえって事だ! 俺はダルトンが正しいと思つたから付いて来た、腹だつてもうくくつてる!」

ダルトンの同僚は力強く言つた。

「市長が死んでゼニスがあんな状態じゃ、もう俺達は自警団でもなんでもないんだよ!! それでも一銭にならねえことに命張るのは、ダルトンと同じ気持ちだつたからだ!!」

市長に踊らされ、知らぬ事とはいえ魔竜召喚の手助けまでさせられた事。それを知った後何もできなかった事。そして反目していた騎士に、多くの借りを作ってしまった事。

ゼニスの事の責任の一端は自分達が担っていると、ダルトン達自警団の面々の誰もが感じている。

そして、それから逃げ出してはいけない事を、誰しも痛感していた。

「あのまま逃げても、クズ扱いでどっちみち生きていく場所はねえ

よ……同じ逃げるでも、こうやって誰かの役に立てれば俺達は英雄だ。そうだろ、ダルトン団長？」

「だ、団長？」

「おうよ、なりたかったんだろ？　もう自警団なんてあつてないよ
うなもんだけど、譲ってやるよ」

そんな同僚の無責任な物言いで、ダルトンはかつて望んでいた団長の地位をあつさりと手に入れた。

「……すげえ虚しいな」

「ハッ、そんなの市長に取り入ってなるのと、対して変わらねえよ。重要なのは、今のダルトンになら任せてもいいって俺が思った事だ」
その言葉はダルトンの身に染みた。ちっばけな野心で失敗し、今もまた自分のせいで仲間が危険にさらされている。それでもそんなふう言ってくれる同僚の言葉に、ダルトンは救われた気分になった。

「団長……か」

呼ばれるまで気付かなかった重みが、その言葉にはあつた。

ただ単純に上の地位であるだけじゃない、請け負うべき責任の重さだ。

（俺がなりたかったのは、団長という同じ呼び名でも、きっと違う別の何かだったんだな……）

ダルトンは気付くと同時に、今までの自分を恥じた。

自分の思うようにならない世の中に文句を言い、自分より恵まれている者には当り散らす。そんな生き方をしてきた事を、そんな生き方しかできなかった事を、許せなくなった。

そして今までの自分が求めたものが、如何にちっばけなものであつたのかを思い知った。

「おい、相棒」

「誰が相棒だよ。お前とは仲が良かったも、これから仲良くなるつもりも無いぞ」

ダルトンの呼びかけに、同僚はつれない返事を返した。

「……なんでもいい、とりあえず聞いてくれ。どうやら魔竜よりも馬の方が若干速いみてえだが、もう馬の方が限界に近い」

ダルトン達を乗せて走る馬は、既にかかりの距離を全力で疾走している。

騎士団で訓練されているような騎馬とは違い、自警団の所持していた馬の練度はそれほど高くない。このまま走り続ければ、もつても後数分で力尽きるだろう。

「そんなのはダルトンに言われなくても解ってるよ。ならあと数分で魔竜を巻きちまえばいい」

「出来ると思うか？」

「無理だな」

キツパリと答える同僚。それこそダルトンが聞くまでも無いようだった。

馬が人を乗せて走れる場所は限られる。山道は元より、森などの障害物の多い場所は無理だ。必然的に見通しの良い平野を走ることになる。

たとえ距離を数百メートル離れたとしても、それではすぐに魔竜に見つかっておしまいだ。

馬を捨てるのは更に論外。森や山に逃げ込んだとしても、人の体力では逃げ延びるのは難しい。

それにダルトン達は、魔竜がゼニスを破壊する様を見ていた。

だから森や山に逃げ込んだとしても、そこが魔竜の力によって平野に変わる事が容易に想像できてしまった。

「まあ、俺達の悪運もここまでだったのさ。しょばい死に場所だが、あの世で先に逝った奴らに言い訳できるくらいの仕事を、最後にできたからいいんじゃないか？」

腹をくくったと言った同僚の言葉の意味が、ようやくダルトンに解った。

「確実に死ぬと解ってたのか？」

「むしろ俺としちゃ、死なねえと思ってる奴がいた事に驚きだな…」

…」

どうりで冷静な訳だった。ダルトンが土壇場で慌てていたのも、他の奴らが恐怖で喋らないのも、誰一人死ぬ覚悟が出来ていなかったからだというのに。

「お前らと違って、俺はゼニス生まれだったんだ。街に対する思い入れも、自警団としての心構えも全然違ったのかもな」

同僚の言うように、ダルトンにはそういう気持ちが出来ていなかった。市長の言いなりになっていたのも、ダルトンは野心を利用されたからだ、きつとこの同僚は、そのゼニスへの思いを利用されてしまったのだろう。

「だから自分が許せない。ゼニスが崩壊した事の一端を、自分が担っていたことがな。だから俺の安い命で、ゼニスの皆が助かるなら本望だ」

そういう言葉を恥ずかしげもなく言ってしまうのだから、ゼニスが余程好きだったのだろう。

ダルトンはその同僚からそういう話を聞くのは初めてだった。思えば今までろくに話した事も無かった相手だったので、名前すら知らない。

「なあ、お前の名前を覚えてくれよ」

ダルトンが尋ねると、同僚は笑って答えた。

「もうすぐ死ぬのに、今更知ったってしょうがないだろ？ どうしても知りたきゃあの世で教えてやるよ」

「……そうか。じゃあ、俺はそうならねえ事を祈るぜ」

「あん？」

同僚はダルトンの様子がおかしい事に気付いた。そして、真横に並んでいた筈のダルトンの乗っている馬が、一馬身程後方にながれていた事も。

ダルトンは握る手綱を引いていた。

「お、おい！ 何やってんだ！？」

走るのを乗り手に妨害されているダルトンの馬は、みるみる速度

を落としていく。

「お前は生き残った方が良く。これは俺なりの落とし前だ……」

ダルトンなりに、この状況をどうにかする方法を考えた末の行動。他の誰かを囷にすれば、自分が助かるのではないかという最低の考えを、逆に自らを囷にする事で行動に移す。

「ば、馬鹿野郎！！ 何を格好つけてる、似合わねえんだよ！！」

ダルトンはこのまま皆死ぬよりも、自分が囷になる事で他の皆が逃げ延びられる可能性に賭けた。

（確かに似合わねえ。今まで誰かの為になんて、考えた事も無かった。誰かを蹴落とす事しか頭になかった）

自分の心境の変化には戸惑うばかりだが、ダルトンはその答えを本当はずっと知っていた。

（そういや昔、騎士になりたいって、思ってたな。協会の勇者の教えが大好きだったから）

やたらとヤーコフに突っかかっていたのも、ダルトンがその夢を捨てていかなかったからかもしれない。

（『我が剣は我が為に非ず』か……騎士じゃなくても、そのぐらい実践できるっての）

どうせなら最後に、あの理想ばかり語る騎士に一言言つてやりたかったと思つたが、それも冥土の土産になるならいいかとダルトンは諦めた。

代わりに、何事か叫んでいる同僚たちに一言残そうと決める。

「あば……！！」

あばよ、と言いかけたダルトンの言葉は、頭上を通り過ぎた飛竜の起こした風で消し飛んだ。

+++++

捉えた魔竜の姿はカタナの予想以上だった。

特にその巨大さ、目算で全長三十メートルくらいはあるだろうか。飛竜にしても大きめのクーガーと比べても、五倍くらいの差は優にあった。

（でかいな、魔界最凶って呼ばれるのもよく解る……）

そして巨体の黒い体表の全てをゴツゴツした鱗……いわゆる『竜鱗』が守っている。更に牙や爪は、一体何がそこまでの発達を促したのか不思議に思えるほど鋭い。

だからといって尻込みするわけにはいかない。それと戦う為にカタナはここに来たのだから。

「クーガー、まずは一発挨拶だ」

軽いジェスチャーを交えてカタナは支持を出す。

クーガーは甲高い鳴き声を上げると、カタナの指示通り滑空して速度を上げながら、魔竜に向かった。

途中で自警団らしき集団とすれ違う、おそらく魔竜から逃げているのだろうが、それに構っている余裕は無かった。

最高速で正面から向かってくるクーガーに魔竜は気付き、大きく罅を開いて鋭い牙を覗かせる。

「今だ、クーガー!!」

カタナの号令で、クーガーは四枚の翼を使って急旋回、掠めるように魔竜の牙を回避する。

同時にカタナはクーガーの背を滑るように降りる。右手にはクーガーの尾がしっかりと掴まれており、空中に宙吊りの体勢。

そしてカタナの左手には魔法剣^{エーデルワイス}、それを容赦なく魔竜の横面に斬りつける。

「……っつ」

キ——ン

耳を劈くのは金属の反響する音。

竜鱗に守られた魔竜の体には、カタナの全力をもつてしても傷一つ付けられなかった。

だがその衝撃は魔竜の体勢を崩す。

相手が生物であるのは変わりない、ならば頭部を攻撃して、僅かでも脳を揺らす事が出来れば効果が出る筈。そのカタナの考えは間違いでは無かった。

「――！？ クーガー――！」

しかし、魔竜が体勢を崩したのは一瞬。次の瞬間には魔竜の前足の鋭い爪がカタナに迫る。

クーガーが尻尾を振り上げ、カタナを逃がしていなければ切り裂かれていた。

そのままカタナはクーガーの背に戻り、一旦魔竜との距離を離すためにクーガーは高空に飛び上がる。

魔竜は完全にカタナとクーガーを敵と判断したのか、睨みあげるように竜眼を細めた。

動きを止めた魔竜は、カタナ達の出方を窺っているようだった。

その背にある翼を開こうともせず、地上から見上げている。

（どうやら、完全に敵だと認識されたようだな……）

獲物では無く、敵。食べる物では無く、殺す相手。

つまりは、それだけ本気にさせてしまったという事だ。

（さて、どうする。正直こんな鈍一本じゃ全く倒せる気がしない）

借り物にケチをつけるわけではないが、魔竜は魔法剣では荷が重い相手だ。
エーデルワイス

そもそも魔竜を相手にする事を許容する武器を、人の手で作るのは無理なのだろう。そんな物が作れるのなら、カタナのような存在は作られなかった筈だ。

（今はとにかく、時間を稼ぐことが先決か……場合によっては本当に逃げ回る事になりそうだ）

そう考えた矢先の事、カタナは視界の端に信じられないものを捉えた。

「——馬鹿が！」

逃げていた筈の自警団の数人が、離れた場所で馬の足を止めていた。

第二十七話 自警団と魔竜（後書き）

デユナミス15をやっていたら、あっという間に一週間経っていました。

ゲームはほどほどにしないといけませんね。

本当は今回もつと長くする筈でしたのに……。

第二十八話 魔竜との戦い

急旋回、急上昇、一撃離脱のヒットアンドアウェイ。

今現在のカタナが討てる手はそれだけしかなかった。

「ちっ、クーガー!!」

「ピ、ピッ、ピ——」

カタナの号令で身を翻すクーガー、魔竜の爪が何度目かの空を切り裂いた。

魔竜にしても、四枚の翼を巧みに使い、空中を自在に動き回るクーガーを捉えるのは困難な事らしく、まだ唯一の一撃も受けていない（……この体格差だと、受けたらその時点で終わりだな）

一旦空に逃げ延びるクーガーとその背に乗るカタナ、魔竜は相変わらずその背にある翼を開こうともせずに、地の上で待ち受ける。

カタナとしては、いっそのこと空中戦に持ち込めれば楽になると踏んでいた。

魔竜も他の飛竜も持ち得ない四枚の翼、突然変異により天から授かったその力でクーガーの空中での運動性は随一である。

四枚の翼を個別に動かす事で可能になる急制動、そして瞬時の上昇力。最大全速は体格の問題で他の飛竜に及ばないが、接近時の小回りは追従を許さない。

もし魔竜が空中戦を挑んでくれば、障害の無い空中で上下からの攻撃手段も取りやすくなる為、今以上に翻弄できるはずだった。

（これだけついても地上で構えているって事は、それに気づいているって事か。魔竜に^{けたもの}しちや考えてやがる……いや、本能ってやつか）

厄介な、と毒づきながらカタナは再度の攻撃のタイミングを計る。本来なら仕掛けるよりも迎え撃ちたいところなのだが、そうしなければならぬ理由があるからだ。

（自警団の連中に、意外な根性があったのが大きな誤算だ……）

視界の端にはまだ自警団の姿がある。離れたところからカタナ達と魔竜の戦いを見守っている様子だ。

さっさと逃げ帰ってくれたら、カタナとしてもかなり動きやすくなるのだが。そういう動きは全く見せない事から、当初の魔竜の監視という目的と、あるいはいざとなれば参戦して、カタナを援護するという気構えがあるのかもしれない。

どちらにしてもカタナには迷惑な事だが。

（……まあ、いきなり現れた見知らぬ奴に任せて、逃げ帰る事に抵抗があるのは解るが）

だが離れているとはいえ、位置的には充分危険な場所。よって魔竜の意識が自警団に向かないように、カタナが引き付ける必要が出てしまっていた。

（俺はまだいいが、問題はクーガーか……）

ここまで何度か無理な動きを要求せざるを得なかった。戦闘中の息つく間もない状態で蓄積する疲労は、ただ飛行する時の比ではない筈だ。

そしてもう一つ、クーガーについて心配な事がある。

それは相手が魔竜であるという事。同じ竜族であるがゆえに、クーガーも相手が上位の存在であると解っているだろう。

敵わない存在と対峙している恐怖、それにクーガーが堪えている事を、カタナはその背で感じ取っていた。

（これは、もう手段を選んではいられないか……）

魔竜を打ち倒す手段は、今は無い。それでもクーガーはカタナを信用して共に戦ってくれている。

それに応える為に、カタナは覚悟を決めた。

「次は、これでいく」

簡単な手の動きでクーガーに意志を伝えるカタナ。

その手の示す先には自警団の姿があった。

+++++

「す、すげえ」

いきなり現れた飛竜と、その背に乗る謎の人物。それらと魔竜が互角のように戦っているのを見て、ダルトンは息を漏らした。

「協会騎士団の竜騎士か？ いや、救援にしても早すぎる……何より一騎つてのがおかしい」

ダルトンの横では、自警団の同僚が思考を巡らせていた。

この状況をどう見るか、自警団の内でも答えの出ぬ議論が交わっている。

「ダルトンはどう思う？ 魔竜と戦っている以上は、あれを味方と判断するべきだろうが。そうした場合、俺達は何をするべきだ？」

「そ、そりゃ加勢するべきじゃねえか？」

言ってみるも、ダルトンが自信なさげであるのは、それがどれだけ絶望的な事か、見ただけで解っているからだろう。

「あの中に俺達が行っても、魔竜に踏み殺されて即終了だろうな」
ダルトンがそれを解っているのは同僚も理解していたが、明確な考えを得る為に否定した。

「……だったらこのまま逃げ帰るってのか？ また誰かに任せて何もしねえまま？」

それはできねえ、とダルトンは力強く言った。

「俺達にだって出来る事があるかもしれねえ、やっとそう気付いたってのに。ここで逃げて本当にいいのか？」

ダルトンはその場に居る自警団の仲間全員に問いかけた。

「……」

返答は沈黙、だがそれは否定ではないのだろう。皆がダルトンのいう事に反感は覚えなかった。

しかし、だからといって肯定するべき手段も提示できない。だからこそその沈黙。

正解の無い禅問答をしている気分であった。

誰しもが、その状況の行き詰まりを実感した時、魔竜と交戦していた謎の飛竜に動きがあった。

「おい、あの飛竜こっちに来るぞ!!」

「何？」

魔竜を引き離し、空の上から滑るように降りてくる謎の飛竜。

飛竜が目の前で止まった時、その背に乗っている人物に見覚えがある事を、ダルトンはようやく気付いた。

「お、お前はボンクラ騎士隊長!？」

ダルトンの第一声は、ボンクラ騎士隊長ことカタナの溜息を呼び起こすのに、十分な威力であった。

+++++

「……何でもいいが、こちらも余裕がないから手短に言っぞ。さつさと失せろ」

手短というか、遠慮のないカタナの一言が自警団の面々に浴びせかけられた。

「待つてくれ!! 俺達にも……」

「さつさと失せろ。俺は『ハイ』か『解りました』しか聞く気は無い」

食い下がろうとした誰かの声に、カタナは取り付く島の無い様子で言い捨てた。

だが、誰もカタナの言う通りに動こうとはしない。そしてよく見ると自警団の誰しもが、その中の体格の良い男に視線を向けていた。

「お前がリーダーか？」

それはカタナをボンクラ呼ばわりした男だったが、それはこの際どうでも良く（むしろ言われても仕方ない）。知りたかったのは、

何かが震える音、唸り声。

その音が何処からくるのかはすぐに解った。

「おい！？ 魔竜が！！ 様子が変だぞ！！」

誰かが叫ぶ、だが皆が言うまでも無く気付いていた。だがその現象が何であるのか知っていたのはその場に一人、カタナだけであった。

「……『竜言語魔術』！！ 追ってこないと思っただらこれか！！」

魔竜が『魔』竜と呼ばれる所以は実に単純。体内に魔力を宿し、そして魔術を発現する事が出来るから。

魔竜の発現する魔術は『竜言語魔術』。前兆として唸り声のような音が聞こえる事からそう呼ばれる。

魔竜と交戦経験の無いカタナがそれを知っていたのは、カタナが魔元生命体ホムンクルスとして作り出される時、研究者達が古今東西の戦闘に関する記録を、カタナの脳に刻みつけたから。

普段は意識していないので役に立たない知識だが、必要な時にはしっかりと必要な分思い起こされる辺り、一応は意味があるものだったとカタナは実感した。

（とはいえ、対処法……。『不明』。馬鹿にしてんのか！？）

自分の記憶の中にある記録を、思いつきり心の中で投げ捨て。カタナはクーガーから降りて飛び出していた。

自警団の中にそれだけ咄嗟に動けた者はいない。クーガーも、魔竜が何をしようとしているかを、知ってか知らずか動かない。

魔竜は大きく口を開く。

どうやら魔竜が発現しようとしているのは、ある意味でオーソドックスと言える竜言語魔術のようだ。

それならば対処できるかもしれないと、カタナは意を決した。

「——魔元心臓起動ダークマター」

何かの信号が体を駆け巡るような感覚と共に、カタナの心臓から溢れんばかりの魔力が供給される。

耳鳴りが聞こえ、妙に息苦しくなるその感覚も慣れたものとし、

右手を魔竜に向けて止めた。

一切の静寂、カタナは他の感覚を全てカットして、体内で蠢く黒い力を御する事にのみ集中する。

（耐えろ。相手は竜、並みの魔力では足りない……俺の身体の限界を以って余りあるものを……）

経験の無い事態、不完全な自身の力、それでも充分可能性は見出せる。

（糞野郎共の夢見た『無限の魔力』、たとえ失敗だったとしても竜の一匹くらいは超えて見せろよ！！）

既に自分で引いていた、限界を超える量の魔力を留めている。これ以上は今まで必要なかった、だが今はそれ以上を求められている。

オオオオオオオオガアアアアアアアアアアアアア……

唸り声から、咆哮に、そしてそれ以上の轟音。

魔竜が発現したのは漆黒の業炎球、先の魔人が発現したものは魔力の密度も規模も桁違いの熱量。

夜闇よりも更に暗い漆黒の炎は、その先にあるものすべてを焼き尽くすように進む。

「……消し飛べー！！」

カタナは業炎球に向かって魔力を解き放つ。

黒き力の奔流は世界を捻じ曲げる力、自然の理を塗りつぶす力。

しかし、カタナが望むのは平定。

世界を捻じ曲げる力を、逆に捻じ曲げる事によって霧消させる。

それがカタナの最も望む魔元心臓ダイクマターの使い方。

（……！！）

黒炎に吞まれながら、叫びだしたい衝動を抑えながら、カタナはただ一つの事を求める。

（消え失せる、お前らは、この力は、この世界にあっていいものじゃない……）

魔力には意思が宿る、その意思を複雑に組み合わせれば魔術となる。だがカタナにとっては一つの意味だけあれば充分だ。

（そう、この炎が消えればそれでいい――！）

真正面から受け止め、真正面から捻じ曲げ返した。

魔竜の力を、カタナは真正面から捻じ伏せた。

+++++

獲物である内は、魔竜の真の脅威を体感したとは言えない。敵と認識されて初めてその脅威を存分に理解する。

竜言語魔術は獲物には使わない。これから食べる物をわざわざ灰にするほど、魔竜は雑食では無いのだから。

その点で自警団の面々は魔竜の認識を違えていた。

「……これで解ったか」

そこに居る全ての者にカタナは言った。短い一言であるが、多くの事をそれだけで物語っていた。

「あんたは、一体……」

当然の疑問であろうが、それについてはカタナは説明する気はない。

「良いからさっさと退け、アンタらの命を懸ける場所はここじゃない。ここは命を捨てる場所だ」

先程言いそびれた言葉をとりあえず伝えておく、今度こそ伝わってくれないと流石に面倒で殴り倒してしまうかもしれない。

「解った。ここは任せる、俺達は避難した市民の護衛に回る」

返事をしたのはリーダー格の、体格の良い男とは別の人物だったが、求めた返事が返ってきた事にカタナは安堵を憶えた。

カタナがさっさと行けと言う前に、号令によって自警団は去っていった。そうと決めた時の逃げ足は中々である。

「クーガー、お前もあいつらと一緒に行け」

「……ピ……ピ」

クーガーはカタナのその指示に頭を振った。気持ちは嬉しいが、クーガーがもう戦えない事をカタナは気付いていた。

竜言語魔術によって魔竜の真の脅威を悟ったのは自警団だけでは無い、クーガーもまた元々堪えていたものを、堪えきれなくなっているのが目に見えて分かった。

「充分だ、お前は良くやった」

「……ピー」

「いいから行け」

最終的に少し強い口調で命令を下す。こういう所でクーガーは扱にくいとカタナは思った。

本来ならもう少し嫌な口調で突き放すのだが、どうしてかクーガーにだけはそういう態度が取れない。

（俺の周りで唯一純粹でいい奴だからか？ …… かもな、思い返せば汚い奴らばかりだ）

何がどう汚いのかは、心の内の事でも割愛すべきだと思ったのでそうしておく。

なお躊躇するクーガーだったが、地響きが聞こえると同時に飛び去って行った。

「無粋な奴だ、別れくらいゆつくりさせろよ」

地響きとともに向かってくる魔竜、竜言語魔術を破られた事がプライドに障ったのか、カタナしか目に入っていない。

（そっいえば初めてだな、勝てない戦いをするのは……）

思い至ったカタナは、借り物の魔法剣エーデルワイスを構える。

今までに感じた事の無い高揚感が、口の端を引き攣らせた。

第二十八話（裏） 帝国特務とカトリ・デアトリス

カトリ・デアトリスは暗い森の中を進む。

ヤーコフの補佐をするという役目を放り、ゼニスの避難民の所を離れ、ただ一人で見知らぬ場所を目指す。

（……申し訳ありません、副隊長）

これはカタナにもヤーコフにも許可を取っていない、勝手な行動。人出が足りない状況で、それがどれだけ隊に迷惑をかけるのかカトリは理解している。

しかし、誰にでも優先順位というものがある。

今カトリを動かしているものは、他のどんな事態にも優先しなければならぬ事だ。

五メートル先を右に曲がれ

まるで空気を凍らせるような、威厳に満ちた女性の声がかトリの耳に届く。

カトリはその指示通りに、入り組んだ森の闇の中を只々進む事に従事する。

逆らう事はしない。それをする事の無謀さも無意味さもカトリには解っている。

どうかしたか？ 少し歩みが遅れているぞ

「いえ、何でもありません」

目ざとい事を言われたが、カトリの周囲には誰もいない。しかし声だけは耳打ちするような距離で聞こえてくる。何も知らなければ不気味な現象だが、カトリは声の主を良く知っている為、気にする事は無い。

何せ声の主は『風神』とまで言われる、空間魔法のエキスパート。彼女が操る風の魔法は、周囲の状況を事細かに把握したり、音の振動を調節するといった事を難なく行える。

霊力や入ってくる膨大な情報による、脳の負担さえ度外視にすれ

ば、風の届く場所全てが彼女の領域となるのだ。

あとはまっすぐ進めばいい、その先で待っている

その言葉を最後に支持が止まった。後はその場で話すという事なのだろう。

カトリが言われた通りにまっすぐ進むと、僅かに開けた場所に出た。

そしてその場には、銀髪の女性と赤髪の男性の二人の姿。カトリをここまで誘導した銀髪の女性――風神は、カトリの姿を認めると同時に声をかけた。

「久しぶりだなカトリ・デアトリス。その名で呼ぶのは更に久しぶりだが」

「お久しぶりです風神。また会えた事を嬉しく思います」

簡単な挨拶を交わし合うカトリと風神。気安さはないが、再会を喜んでいるのは二人共に共通している。

境遇に共感するものがあつたからか、帝国に居た時にはカトリと風神は接する機会が多かつた。

帝国特務の『名無し』として一度名前を奪われたカトリ・デアトリスと、帝国特務で『風神』と呼ばれるまで名前が無かつた風神。

風神の方が年齢も階級も上の為、友人の様な付き合いでは無かつたが。カトリは様々な事を風神から学び、ある意味で師弟の関係ともいえる。

そんな二人の再会を赤髪の男が横から割って入り、水を差した。

「おわー、美人が二人並ぶと絵になるさ。これはたまりませんわ」

「……馬鹿な事を言っている暇があつたら貴様も自己紹介くらいしろ」

鋭い風神の眼光に射すくめられ、しゅしゅ赤髪の男はカトリに向かって挨拶する。

「どうも、会うのは二回目だけど、話すのは初めましての『鋼』さ。

どうぞよろしく」

そう言って片手を差し出す鋼、カトリは一度見かけただけのその人物の事を良く覚えていた。

（確か、副隊長にゼニスを案内してもらっていた時……自警団のダルトンという方と揉めた際に、割って入ってきた……）

肌の露出した部分のほぼ全てに刻まれた刺青は、特徴としては充分なほどカトリの記憶に残っていた。それだけで見間違うはずもないと断言できる程だ。

「ありや？ 握手してくれないさ。ひょっとして、嫌われちゃってる？」

「当然だろう、喧嘩の事しか頭がない野蛮人と、関わり合いたいと思うような物好きは、そうそういない。当たり前前に落ち込む必要は無いぞ」

「いや、風神……自己紹介しろって言うといて、それは酷いさ」

風神のフロアに見せかけた追撃で、二倍凹んだ様子の鋼。カトリは戸惑っていたただったのだが、鋼が手を引っ込めてしまったので握手はできなかった。

「それよりカトリ・デアトリス、キミに聞きたいことがある」

頂垂れる鋼を放っておいて、風神はカトリに向き直る。

「何でしょうか？」

「まずは現状について、キミの知る限りを聞きたい。こちらでも把握できていない事が多くてな」

「……それはいいのですが、風神でも把握できない事とは何事でしょうか？」

情報収集は風神が最も得意とする分野だ、人々の話を風で捉え、人の動きを風で知る、帝国特務でも風神のもたらす情報はとても重要視されている。

正直なところ、カタナに付いて回っていただけのカトリでは、それ以上のものを求められても微妙な所だった。

「……それは」

風神はカトリの疑問に、困ったように表情を曇らせた。風神が口ごもるのは珍しい事で、カトリの疑問はさらに増した。

「実は、風神はちよつと前にドジ踏んでさ、さっきまで毒で寝込んでいたのさ」

風神の代わりに口を開いたのは鋼。ひどい扱いを受けた腹いせか、風神の失敗を少しだけ嬉しそうに話した。

「毒！？ 何事ですか？」

「……キミが案じる事は無い。弱い麻痺毒で、この通り既に回復している。それはいいとして……つまりはそのせいで、鋼の持つべきた荒い情報しかこちらに無いわけだ」

言われるまで気付かなかったが、風神の体調は少し悪そうに見える。それでも風神本人が回復しているといっているので、カトリもそれ以上の追及はしない事にした。

（風神が誰からどうやって毒を受けたのかも、聞かない方がよさそうですね……）

風神の様子は、単純に失敗したのを指摘されるのが嫌というより、それはカトリに話せない領分の事であると、判断しているようだった。

風神がゼニスに来ている事をカトリが知ったのは、ここに来る前のつい先ほどの事であり、その理由もカトリは知らない。

風神があえて話さないという事は、漏らしてはいけない事だとなるだろう。気にならない訳でもないが、聞き出す権限の無いカトリはそれを気にするべきではないと判断した。

「成る程……ゼニスの事に風神達が介入しなかったのは、そういう理由で介入できなかったという訳でしたか」

帝国特務として静観を決めたのかとカトリは思っていたが、そうではないと知って僅かにホツとする。

「そう言う事だ、だからキミの知っている事を話してくれ。その上で、我々帝国特務がどう動くべきか判断しよう」

「……解りました、お話しします」

（『我々』。そうです、私は帝国特務としてここに居る、それが私の選んだ事）

共和国に來たのは帝国の指示、協会騎士団に入っただのもそうだ。今でもカトリ・デアトリスの祖国は帝国であり、共和国も協会騎士団も目的を達する為の通過点でしかない。その筈だ。

（……この国にも、この立場にも私は何の感情も抱かない。そう、決めている……その筈）

しかし何かカトリの胸の奥に引っ掛かっていた。まるで自分の意思を否定するように、痛みに近い感覚が心を揺らす。

それが何からくるものか、カトリは考え付かぬままだった。

+++++

「……という訳です」

カトリは風神の要望通り、この件について自身を知る限るの全てを話して聞かせた。

それを聞いている間の風神の表情は、最初は複雑なものであったが、後半になるにつれて段々と険しいものになっていった。話す方からすればかなりやりにくい。

その横で聞いていた鋼は終始喜々としていて、それはそれで何か無気味であった。

「理解した、報告感謝する……それにしても、あの人は相変わらずか」

（あの人？）

風神が何気なく言った一言、小声だったが周囲が静かなせいで聞こえてしまった。

しかしそれを指摘するかどうかカトリが検討する間に、横から鋼が割って入った。

「なあなあ、それで俺達はどうするのさ？」

うずうずした様子で鋼が尋ねると、風神も結論は出ていたのか、すぐに答えた。

「帝国に戻る。現場の判断で動くべき事態を超えているし、何よりもこれからの事態に備えなくてはならない」

「これからって何さ？ 魔竜が帝国に攻めてくるって事か？」

「……いいや。魔竜も脅威だが、それ以上に脅威なのは魔竜が魔界から召喚された事だ。この五十年で一度も無かったこの事は、きつとこの世界のバランスを崩す。最悪の事態に備える為に、まずはいち早く帝国に伝えなければならぬだろう」

風神の視野は広がった。目先の問題だけでなく、これから起こる問題まで見据えている。現在の魔竜の問題は、あくまで他国の事として、介入しない意志を固めているようだった。

「駄目だろうさ、それは。誰かに任せて逃げ帰るみたいな事、俺はしたくないさ」

冷静な風神の意見に、鋼はそう反発する。

「……貴様の感情などはどうでもいい。考えるべきは、何が帝国にとって最もプラスになるかだ」

「プラス？ 魔竜を放っておいたら大変な事になるさ、そのどこが帝国のプラスになるのさ？」

納得のいかない鋼の表情が険しくなる。元々険しい風神の表情と相まって、両者が睨み合うような形になっていた。

「少なくとも上層部はこう考えるだろう……魔竜によって共和国は消耗する。それによって皇帝陛下の望みである、領土の返還の交渉に進展が及ぶかもしれないと」

仮定の話であるがまず間違いない。現在の帝国政府は、かつての共和国の建国時に奪われた領土を、どうやってうまく取り返せるしか考えていない。

「何を言うかと思えば小さい事さ。そんな卑怯な考え方で覇権を取り戻そうなんて男らしくないさ」

「……それ以前に、この場の戦力だけで貴様は魔竜を倒せると思うのか？」

「さあ？ やったことないから解んないさ。でもやるべきだと思うし、やってみたいとも思うのさ」

「話にならないな。要は貴様が戦ってみたいというだけだろう？」

そんな個人の理屈と都合で動いて良いと思うほど、組織というのは甘いものではない」

風神と鋼の意見は、何処までいっても平行線を進むようだった。

本来は性格が真逆の二人なので、こうなってしまうと妥協点も見つからない。

「キミはどう思うカトリ？」

一向に意見が交わらない事をまずいと思った風神が、カトリに意見を求める。カトリならば冷静な判断で、鋼を支持はしない筈だと踏んでの事だった。

しかし、それは間違いであつた。

「……私は、風神の意見には反対です」

キツパリと否定の意思を見せるカトリ。風神は鋭い視線のまま理由を問う。

「どうしてか聞かせてくれるか？」

言葉尻は穏やかなようでも、風神の迫力は相当であつた。面と向かつただけで、カトリの額から一滴、汗が流れる。

「今この時、戦っている人達を、私は知っているからです。どんな思いでいるのか、どんな覚悟でいるのかも。ですから、その人達を犠牲にする事を肯定するやり方に、私は賛成できません」

「……ではキミも魔竜と戦うべきだと、そう言うのか？」

「はい」

「馬鹿な事を、無駄死にするだけだ」

「確かに自分でも馬鹿な選択だと思いますが、それが私の偽りの無い気持ちです。そう気付きました」

カトリの胸に引っ掛かっていたものは消えていた。それもきつと

理屈では表せない事だったのだろう。何の痛みだったのか解らぬまま、カトリの言葉と共に消えていた。

「それに、風神も本当は戦うべきだと……いえ、戦いたいと思っているのでしょうか？」

「……」

「さつき口にした『あの人』という言葉。あれは隊長の——『魔剣』の事ではないのですか？」

その言葉に風神は忌々しげに目を伏せる。鋼はその横で驚いていた。

「……やはり知っていたのか。誰に聞いたのかは大体想像がつくが」

「サイノメという不思議な女性に聞きました。隊長がかつて帝国特務に居た事を。私はその時の事は存じてませんが、風神は知り合いだったのですね？」

「ああ、良く知っている」

その一言に込められた思いは、それだけで風神の本音を垣間見せた。

カトリがこれまでの事を話している時も、風神はカタナの事を聞くと反応してしまっていた。普段は不機嫌さの滲む無表情な分、少しの差でもカトリは感じ取れた。

「本当は助けに行きたいのではないのですか？」

「……あの人に私の助けなど必要ない。勝てない戦いはしない筈だし、危なくなれば逃げる事も厭わない。そういう人だ」

それは返答というよりも、風神が自分自身に言い聞かせるような言葉だった。

「確かに隊長はそう言っていました。しかし私の目には、まるで死地に赴くような純然たる覚悟が見て取れました」

飛竜を駆って飛んで行ったその背は、もう戻ってこない事を決意したように一度も振り向かなかった。カトリが剣を貸し渡した時も、それを返すとは言わなかった。

「隊長は強い、それを充分に私は知っています。しかしそのせいで、

たった一人で多くのものを背負っている。他の誰も背負えないものまで背負わされています」

サイノメがカトリに対して言った言葉、『カタナの味方でいて欲しい』と言った理由はそれだった。

「そんな状態で助けが必要ないわけない。私はそう思います」
「……」

挑むように言ったカトリの言葉に、風神は何も答えない。あるいは答えられないのか、ただただ無言。

「どうすんのさ風神。一応これで多数決的には二対一だけど？」

鋼の問いに、風神はため息交じりに口を開いた。

「……そうだな、ならば貴様達の好きにしろ。命令違反にはしないでおいでやる」

「風神は……」

どうするのかと言い終える前に、風神は首を横に振る。

「私は私の正しいと思う道を選ぶ」

「そうかい、本当に頑固な事で……じゃあ行こうさ」

頑なな風神を放っておくことにした鋼はカトリに声をかけ、カトリはそれに頷いた。

「待て」

「——っと、風神。いきなり出足を挫かないで欲しいさ」

「……魔竜が何処にいるのか解るのか？」

「「あ」「」

出足を挫く以前の問題として、カトリも鋼も魔竜の現在地を知らない。それどころか今いる森からちゃんと出られるのかも心配である。

そんな勢いだけの二人を風神は呆れた目で見ていた。

「貴様達は本当に……いや、やめておこう。それより、魔竜の現在地は私にも解らないが、どうするつもりなんだ？」

「風神の力で探せませんか？」

「それも難しい、現在も五百メートル四方は私の風の領域だが、そ

れ以上になると正確な方角を知る必要がある」

「そうですか……」

決めた台詞を言ってしまったカトリだが、現実的な問題は多かった。

星も月も出ていないので方角も解らないし、ここまで徒歩出来たので移動手段も無い。何事も勢いだけでどうにかなる事は少ない。

「はは、格好悪いさ」

「……貴方もですよ」

そんな鋼とカトリを見て、風神はやれやれと頭を振った。

「……なあカトリ・デアトリス、この辺で飛竜はよく見かけられるのか？」

風神が急に真面目な顔でカトリに問いかける。

「え？ いえ、私が見たのは、隊長の乗っていたクーガーだけでしたか？」

飛竜の繁殖地は共和国のもつと東側であり、ゼニス周辺では全く見かけなかった。聞いた話では近村に竜舎があるらしいが、利用者は少ないのかもしれない。

「そうか、少し待っている。私の風でここに誘導してみる」

「——？」

風神の言っている事の意味は解らなかったが、カトリはとりあえず言う通りに待っていた。

+++++

「貴方はクーガー！？」

「ピー」

空から降りてくる飛竜の見覚えのある姿、特に普通はない四枚の翼を見て、カトリは驚きの声を上げた。

「どうしてここに？ 隊長は一緒では無いのですか？」

「ピ、ピー」

カトリの問いかけに、飛竜のクーガーは弱々しい鳴き声を上げた。当然ながら、飛竜と意思疎通など取れないカトリは困惑するばかり。「どうしたのでしょうか……」

クーガーの背にはカタナの姿が無い。退却してきたのならば、一緒に居なければおかしい筈だ。

クーガーは何か伝えようとしているようだが、一向にカトリには伝わらない。

両者がジレンマを感じている最中、鋼が進み出て徐にクーガーの背に飛び乗った。

「ピギイツー!!」

「お、悪い、驚かせちゃったようさ」

鋼は全然悪びれる様子も無く、クーガーの背をぴしぴしと叩いた。「な、何を？」

「いや、どうせ言葉が伝わらないのなら。コイツに連れてってもらうのが、早いと思ったのさ」

「ああ……確かにそうですね」

至極単純だが、その通り。クーガーの様子からカタナに何かあったのは確実なので、言葉で伝わらないのならば、行動で示してもらえばいいだけの事。

「クーガー、隊長の元に連れて行って下さい。お願いできますか？」

「ピーー」

クーガーは鳴き声を上げると、姿勢を低くして顎を背中に向けた。『乗れ』と言っているような仕草は、まさにその通りなのだろう。

ようやく初めて、カトリとクーガーは正しい意思の疎通が取れた。鋼とカトリがクーガーの背に乗ったが、そこにもう一人続くことはやはり無い。

「……風神」

「言っただろう。私は行かない、私は私のすべきことをする」

あくまで強固な意志で跳ね返す風神、カトリはその言い草が誰かに似ているように感じてしまった。

「んじゃ、帰ったら俺の武勇伝を聞かせてやるから、皆に宜しくさ」
鋼は淡白にそれだけ言って、後は気にしない様子だ。

カトリも風神のその意思を自分では覆せないと悟り、クーガーに号令をかけた。

「……行きましょう」

それに合わせて、風神をその場に残し、二人を乗せたクーガーは夜空に飛び立った。

+++++

「貴様という奴は、本当にどうしようもないな」

一人残った風神は、背後の茂みに隠れている人影に向かって声をかけた。

「お！？ おおう……流石は風ちゃんだ、このあたしの気配に気付くとは」

そこに居たのはサイノメ、風神にとっては仇とも言っている相手。そして何を言っても、何をしても飄々としている不気味な存在。

先立つては行動不能にされながらも見逃され、積み上げたプライドを傷つけられた相手でもある。

「ちょうどいい、貴様には訊きたいことがあったのだ」

「へえ、風ちゃんがあたしに話なんて嬉しいね。何でも聞いてよ」

サイノメの口調も笑顔も何もかもが気に食わないが、今はその気持を抑えながら風神は問いかける。

「貴様は魔剣を使って何をするつもりだ？」

「ははは、何を馬鹿な。あたしはシャチョーに使われる側であって、使った事は一度も無いよ」

「……嘘を吐くな。この状況を作りあげたのは貴様だ、カトリ・デアトリスから聞いた話で私はそう確信した」

「……面白い事を言うね。じゃあ風ちゃんは、ゼニスで起こった一連の事は、全て私のせいだとも言うのかな？」

「そうは言っていない、だが魔剣の元に飛竜を向かわせて、魔竜と戦う事になるきっかけは貴様が作った」

「それだけ？ お話になんないじゃん。あたしはあたしの最善を尽くしただけで、それを選んだのはシャチョーだよ？」

「まだある、私を行動不能にしてゼニスで起こる事に介入できなかった事。そして、殺さなかったのは、今この時に魔剣の助力が出来るように、そう考えていたのではないのか？」

まるで偶然のような一連の出来事、しかしサイノメの不可解な行動は、風神にその考察を浮かび上がらせるには充分だった。

「ここに来たのも私の様子を探る為。まだ私の毒が抜けてなければ解毒剤でも盛るつもりだったのではないのか？」

「解毒剤を盛るって使い方は合ってるけど、その言い方だと何か嫌な感じに聞こえるね」

「話を逸らそうとするな」

ただでさえサイノメの表情は読みにくい、常に笑顔の仮面を張り付けて本心を悟らせない。その上で話のペースまで変えられては、風神にサイノメの事を見抜くのは不可能になる。

「そんな睨まないでよ、怖いわあ。それと、風ちゃんの言い分は面白いけど、やっぱりそれだけであたしを悪者扱いするのは、無理があると思うよ」

「……」

「確たる証拠がない以上、それは推論でしかないね。しかもそれを押し付けようなんて暴論に等しい、そんなのに真面目に答えるのなんて、馬鹿馬鹿しくてやってられないよ」

「……証拠か、情報屋の貴様からそれを見つけるのは困難な事だ」

「ありゃ、風ちゃんの中では確定しちゃってるわけね。別にいいけ

どさ」

噛み合わない、サイノメと話す事は風神にとって、まるで別の生き物と話しているような感覚に陥る。

それでも無視してはいけない相手であるのだから、厄介な事だった。

「私の言葉を否定するのなら、貴様はここに何をしに来た？」

「ああ、そうそう。風ちゃんにシャチョーを助けてもらえるように、頼みに来たんだった。やったね風ちゃん、一個大当たりじゃない！」

「貴様……！！」

完全に馬鹿にしたような言い方のサイノメに、風神は我慢するのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

殺気立つ風神を前にして尚、サイノメは笑みを深くした。

「冗談だよ、別に風ちゃんの助けは要らない。だって今のシャチョーにはカトリ・デアトリスがいるからね」

「——何だと？」

サイノメの口から予想外の名前が出てきたことに、風神は戸惑いを隠せなかった。

「あの子はシャチョーの事をよく理解してくれているよ、風ちゃんなんかよりずっとね。風ちゃんがシャチョーの一番近くに居た時に見えてなかったものが、あの子には見えている」

「私が見えてなかったもの？」

「そうだよ、シャチョーは超人でも、完璧でも、英雄でも、勇者でもない。間違えるし、失敗するし、助けだって必要だし、それに死ぬ事だってある、極々平凡な一個の生命」

「……そんな事は私にだって解っている」

「それならどうして、シャチョーを助けに行かないの？ どうでもいいって事？ 死んだって構わないって思ってるの？」

「魔剣は帝国特務を裏切ったのだ、それこそ抹殺の対象にもなっているのに、私が心配する理由がない」

いつの間にかサイノメの顔から笑みが消えていた。何処か少し悲

しげな、風神が見た事も無い表情。人間味がまったく無いと思っていたサイノメが初めて見せた、人間らしい表情。

「風ちゃんにとって、帝国特務にある自分の椅子はそんなに大事なもののなの？」

「……貴様に居場所の無い人間の気持ち解るのか？」

サイノメに矮小な自分を見透かされ、それに対して腹を立てるでもなく、本心を吐露してしまう。

きつといつものふざけた顔で言われていれば流す事も出来た筈なのに、よりによってサイノメに対してのそれは大きな失敗だったと、風神は言った事を後悔した。

「……そう、今更だけど帝国特務からシャチョーを連れ出した時に、風ちゃんも一緒に連れ出しておくべきだったと、あたしは本気で後悔しているよ」

「その必要は無い、私は間違っても貴様には付いて行かなかっただろうからな」

「はは、嫌われたもんだ」

そう言って笑みを作ったサイノメからは既に人間味が失せていた。「……無駄口を叩く以外に用がないなら消える。今日だけは見逃してやる」

風神は任務の遂行よりも、サイノメの不快な笑顔を視界から消す事を優先した。元よりこの場で、サイノメを捕らえられるとも思っていない。

「そうだね、お言葉に甘えようか。でも最後に一つだけ言わせてもらうよ」

「……聞く気はない」

「じゃあ、あたしの独り言でいいや。あたしはシャチョーの命令でさ、今でも帝国特務の事には探りを入れているんだけど……」

「……」

「シャチョーが言うには、その中で風神とかいう人物の情報だけは最優先で仕入れろってうるさいんだ。どんな任務に就いているのか、

危険な目に合っていないか、怪我をしていないか、そんな商品価値の無い情報ばっか気に掛けるんだよね。父親かつての」

「何……!？」

「それだけ、じゃあね」

それだけ言つて、サイノメは風神の前から姿を消した。残つたのは手を前に出していた風神と木々のざわめき。

「……最悪な奴だ」

言いたいことだけ言つて、聞くべきでは無かつた事を言い残して、最悪な気分だけ残してサイノメは去つて行つた。

追えば消える、しかし会いたくない時には現れる。サイノメとはそういう勝手な存在なのかもしれない。

「馬鹿馬鹿しい……くそ!!」

風神は苛立ちのままに、近くの木を殴りつける。すると風が巻き起こり、周囲の木々が周りの枝を巻き込みながら倒れていく。八つ当たりにも魔法が発現してしまうほど、風神は冷静さを欠いていた。

「……私は、何をしているんだ」

その言葉に応える者はいなかった。

第二十八話（裏） 帝国特務とカトリ・デアトリス（後書き）

話数に裏をつけるかつかないかで結構悩みました。
そついでつでもいい裏話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7951t/>

魔剣カタナとそのセカイ

2011年11月4日22時42分発行